1996-2000 LAYZNER

あれから15年。グラドス星人を太陽系から“排除”することに成功した我々の星は、ようやく本格的復興を果たしつつある。

地球とグラドスは最後まで戦いという手段でのみ、お互いと交わり合った。そこに平和的なやり取りの余地がなかったのかといえば、確かに難しかったとはいえ、まったく芽はなかったわけではない。グラドス人が我々に行った暴挙に対し、未だに怒りを持ち続けている人も多かろう。それも無理からぬことではあるが、かつて争いの中でこれを憂い、相互理解への道を探った者たちがいたことも忘れてはならない。

我が出版社は、かつてグラドス軍の占領下で“レジスタンス”などと呼ばれた地下抵抗組織のひとつとして、書籍など文献の保護を主たる目的として活動していた者たちを中心に設立された。だが、後に合流したメンバーの中には、武力抵抗組織に属していた者も少なからずいる。今回上梓するこの書籍では、彼らが持ち寄った、あるいはその仲間だった者たちから間接的に得た情報などを総合し、あの時代になにがあったのかを振り返りたい。中心となるのは、反攻の旗頭となった“蒼き流星”と呼ばれたSPTである。

文化的に重要な文献の復刊を優先すべきだという声は編集部内にもむろんあった。だが、関係者の記憶の薄れないうちに取材をしておくことも、我々の重要な使命であると信じる。あの一連の戦いは我々になにを教えたのか。なにによって救われたのか。本書がそれを知る手がかりになれば幸いである。

2015年9月1日　ニューヨークにて

ナンシー・ステッペン

Nancy Steppen

CONTENTS



■グラドス人が地球侵攻のために持ち込んだSPTは、人型でありながら高い機動性を示し、携行レーザー武装の火力は戦闘機など既存のあらゆる戦術兵器を圧倒した。SPTは彼らとの戦いの後、地球の兵器体系を一変させるに足る計り知れないほどの衝撃を人類に与えたのだ。



■現在、地球上の人類が保持している〈レイズナー〉関連の写真は、ほとんどが地球製の後継機〈ニューレイズナー〉のものである。これは、初めに〈レイズナー〉が地球に姿を現した際にはまだ民間人の目に触れる段階になかったことが大きい。1999年に〈ニューレイズナー〉がニューヨークで活動を開始して以降、ようやくレジスタンスたちを中心に記録写真が撮影されるようになった。







■SPTは、地球上にそれまで存在したあらゆる戦術兵器を凌駕する戦闘力を見せつけた。電磁的に空力を制御するSPTは一見すると形状的に不利のように感じられるが、航空機に引けを取らない高い機動性を有する。



■SPT(スーパー・パワード・トレーサー)は中枢コンピュータによる操縦者の支援システムが充実しており、まったく訓練を受けていない人間でも機体を動かす程度なら容易に行える。操縦者と言語によるコミュニケーションを行うインターフェースが最前面に設けられている点は、地球上の既存の戦闘ユニットには見られない特徴であるといえよう。



■空を翔る〈レイズナー〉の姿をあるいは詩的に表現する異名が“蒼き流星”である。エイジ・アスカに縁のある日本において流行した呼称であるが(一説には、個体名の〈レイズナー〉が一般市民に浸透していなかったためともいわれる)、英語圏では“彗星(Comet)”になぞらえられてもいたようである。

EIJI AND LAYZNER

エイジとレイズナー～地球を救った蒼き流星～

"BLUE COMET" WHO SAVED THE EARTH

西暦1996年、我々地球人類は地球外生命体グラドス星人との武力衝突に至り、それまでに築き上げていた文明は致命的な打撃を蒙った。現在、その復興がようやく本格的に進み始めているが、失ったものは多く、完全にかつての姿を取り戻すことは難しいだろう。

一般市民の中には、この二星系の人類が不幸な出会いをした詳細な経緯を知らないまま、事態に巻き込まれた者も多い。それはかつての我々が二大大国を中心とした"冷戦"と呼ばれる状況にあったから、ということも大きく作用している。当時は情報統制以前に、時の為政者たちですら正確な情報を把握し切れない状況にあったのだ。情報不足が疑心暗鬼を生み、冷静な判断が不可能だった。我々は、第二次世界大戦後の長い時間をいがみ合ううち、自分たちに対する不利益がすべて敵国の陰謀であると自然に考えるようになっていたのである。むろんこうした誤った判断を引き起こした原因は、すべてではないにしろ"敵"であるグラドスが意図的に仕掛けた情報戦にもあった。我々はなるべくして、あのような悲劇へと落ちていったのだ。

もっとも、事前に正確な情報があったとしても、はるかに進んだ科学力を持ったグラドス軍に対抗することは難しかったに違いない。彼らはSPTという未知の兵器を操り、かつ人類が体験したことのないような大量殺戮用の衛星兵器まで投入してきた。他星系にこれほどの戦力を投入できる軍隊に勝つ術などまったくなかったろう。地球はまたたく間に占領され、約3年の間グラドスの施政が続いたのである。

ここでは、グラドスと地球との接触の過程について追いながら、反攻のキーとなった人物、アルバトロ・ナル・エイジ・アスカ※とその乗機SPT〈レイズナー〉がいかにして地球へと至ったのかを解説する。併せて、〈レイズナー〉という機体がいかなる位置づけにあったのかについても考察していく。

本項は、地球の旧国連宇宙局職員や、地球侵攻作戦に伴い艦隊とともに来て、やがて地球へ取り残されることになったグラドス内の反体制派に属する人物たち、あるいはレジスタンスとして〈レイズナー〉修復や〈ニューレイズナー〉開発に携わった技術者の証言などを基に構成した。むろんのこと不確定情報や推測も多く混じっているが、了承の上読み進めていただきたい。

※アルバトロ・ナル・エイジ・アスカ
地球人であるケン・アスカ(明日香健)と、グラドス人女性アイラの間に生まれた長男。グラドス軍による地球侵攻の危機を、地球側に報せるために父によって送り込まれた彼は、地球侵攻艦隊からキャリアごとSPT-LZ-00X〈レイズナー〉を奪取。艦隊への妨害を図ると同時に、グラドス占領後も地球側のレジスタンスに合流して戦い続けた。

人類の宇宙進出とグラドス

そもそもグラドスが地球侵攻を目指した目的とはなんであろう。判っている範囲では、すでにほかの星系へと征服の手を伸ばしている最中であり、地球侵攻もあくまでもその一環に過ぎなかった、ということになっている。恐らく、グラドス本星の一般市民は今でもそのように信じているのではないか。しかし、SPT〈レイズナー〉に隠されていた「グラドス創世の秘密」への地球人類の深い関わりを考えれば、理由がそれだけであったとは考えにくい。結論からいえば、グラドス為政者たちの思惑は謎であり、かの星と地球が隔絶した今となっては確かめようはないが、少なくとも地球がほかの星と同様に制圧する対象として国家プロジェクトの俎上に載せられたことは間違いなく、あるいは選民思想の行き着いた先に、創世の秘密ごと地球そのものを葬り去ろうとする意志があったのかもしれない。

グラドスは宇宙進出以来、先史文明の遺産である神聖マザーコンピュータに蓄積された膨大な知識と科学を基盤として繁栄し、ついには他星系への進出に至った。この意図も明確ではなく、少なくとも市民や末端の兵士が認識している範囲においては、銀河広域におけるグラドスの支配圏拡大であり、そうした思想が増大した背景にはやはりグラドス本星の人口過密、環境破壊など地球と似たり寄ったりの原因があったようである。グラドスがそれまでに築き上げていた文明は、ほかの多くの知的生命体が持つそれよりも高度であり、侵略行為は難しくない事業であった。簡単に征服できない場合は、他星系への示威行為という意味合いも含めて、オゾン層破壊兵器などを使用して完膚なきまでに焼き尽くす。制圧をスムーズに進めるために、SPTの開発も進んだ。だが、そのような自らの行為に異を唱える内部の声が日増しに高まるのは当然の結果だったろう。地球が次の侵略対象となったのはそんな矢先のことである。

もっとも、地球歴でいう1940年代にはすでに監視のための部隊を月の裏側に派遣する段階に達していた。地球人類の宇宙開発が本格化する61年以降には、宇宙艦が約半年交替のスパンで駐留し、二大大国の宇宙開発競争を注視し続けていたのである。

事件が起こったのは、1960年代半ばである。アポロX-0計画によって打ち上げられたイーグル3が、月軌道で遭難した。月の裏側で消息を絶ったイーグル3には、日本人ケン・アスカを含む3名の乗員が乗っていたが、そのうちケン・アスカだけは一命を取り留め、グラドスの月駐留監視船に救助されたのである。当時、月の裏側を観測する術を持たなかったアメリカをはじめとする各国は、このイーグル3が月面に不時着、乗員は全員絶望と結論づけた。なお、イーグル3はもともと月周回軌道への投入のみを目的としたものであり、着陸船を持たないモジュールである。この飛行の失敗そのものは、ソ連や第三国にも観測されていたことから秘匿することは不可能で、当然打ち上げ計画自体も一般に公表されている。アメリカは実験の目的は果たした、として3人を公式に追悼した。なお、この飛行の際にミッション・ディレクターを務めたのが、後に地球製SPT開発の陣頭指揮を執り、反攻組織(以下、レジスタンス)のリーダー的存在となるジョン・ギルバート博士である。

その後、人類とグラドス人との直接接触は、現在我々が把握している限りにおいては1996年まで皆無である。その間、アポロ11号による初の月面着陸やスペースシャトルによる数々のミッションを経て月面基地設営、そして火星への進出と、二大大国の競争は留まるところを知らず、その一挙手一投足を、グラドスは見ていたのであった。

地球侵攻作戦とSPT

グラドスの地球侵攻作戦は、地球歴でいう1995年11月の段階でグラドス皇帝の名において裁可されている。準備には約1年を要し、その間に派遣する艦艇や部隊の選抜・訓練、SPTの増産などが行われている。派遣艦隊の司令官は計画段階からグレスコ提督に決定しており、艦隊準備の指揮も彼が執った。

侵攻の名目や真の目的については、前述のようにすべてが想像の域を出ない。当初は地球人の殲滅を前提とした作戦であったが、後にグレスコ提督によって"統治"の方針へと変わった、という見方もできるが、殲滅と占領とでは必要な軍備がそもそも異なる。そのような曖昧な作戦立案が許されるとは考えにくいことから、殲滅は兵士の士気を鼓舞するお題目に過ぎず、あくまでも当初より地球人の制圧と統治を最終目標としていたであろうと考えられる。グレスコ提督の統治は、確かに多

くの人類虐殺や地球文化の弾圧などを含んでいたものではあるが、地球人が隷属を受け入れるならば、種族根絶まではしない、という明確な意志が見える。

そもそも、グラドス人が地球になにを求めてやって来たのか、というところを考えても、グラドスは内部で掲げていた名目通りの行動を取った、といえるのだ。「好戦的な地球人類の宇宙進出」に対する懸念が直接のきっかけであるといわれているが、武力によって大国同士の冷戦を強制的に停止させ、地球人類のイデオロギーや価値観といったものを根底から改革することがグレスコ提督の目的であったと考えること自体は、様々な事実に照らし合わせても矛盾しない。第一に、彼らは地球に資源を求めてやって来たわけではない。かつて海外に植民地を求めて進出した地球の列強各国が持っていた行動原理とはまるで異なるのだ。統治のみを目的として他星系へ軍事力を派遣することは、コストの面からいってナンセンスきわまりないが、それをグラドスは実行した。むろん、たかだか数万の軍で数十億に達していた人類の統治が可能であるわけもなく、一定数までの人口“削減”は許可されており、オゾン破壊衛星などの大量殺戮兵器の搬入も行われた。

ただし、もしかすると、その後に地球への入植を画策していた可能性はある。この点に関しては、グラドスの内情が我々の知り得るところではないため、断定はむろんできない。地球人とグラドス人が同根であるという事実を知っていた彼らの為政者たちは、入植と同時に2つの星系を再び交わらせ、同一種族へと帰結させようと考えていたのか？　――グラドス側の隠れた事情について、新たな情報が得られなくなった現在では、これ以上の考察は無意味であるし、必要もあるまい。本項で述べるべきは、SPT〈レイズナー〉とエイジ·アスカの果たした役割についてだ。では、彼はいかなる経緯で地球へやって来たのだろうか。

地球に派遣された侵攻艦隊が他星系へのそれと異なっている点は、SPTという戦力の全面投入の側面を持っていたことにある。地球侵攻艦隊が太陽系に持ち込んだSPTは延べにして数千機ともいわれ、疑いなく大規模であるといえる。種類も多く、細かな形式違いを入れれば数十に達した可能性もあった。これは、SPT自体が発展段階にある兵器である、ということもあるが、その多くが実験的に実戦投入されたからにほかならない。地球侵攻の任に就いたグレスコ艦隊は、もうひとつの目的として数多くのSPTについて運用評価を行うべく、試験部隊を含め比較的新しい実戦部隊を多数随伴させていたと考えられている（地球でもそうだが、機種転換部隊や試験部隊が実戦に参加することはそれほど特殊なことではない）。

このことは、艦隊に付随して連れて来られ、後に地球側のレジスタンスに協力した技術者、整備員らの証言からも裏付けられている。グラドスは、今後も他星系への侵攻作戦を展開するにあたって重要な侵略用戦術兵器としてSPTを有望視しており、SPTそのものの性能評価に加え、運用部隊の搭乗員や整備員に対する実戦経験の蓄積を優先事項としていた。統一性のない様々な機体が実戦投入され、実際の運用の中で問題点を洗い出していったと考えられる。開発各社による競争もむろんあったろう。中には、SPT-BV-15C〈ブレイバー〉のように、役目を終えたと判断され、作戦展開半ばでほとんどの部隊が本星に引き上げられた旧型機体もある。そして現在では、SPT〈レイズナー〉もまた、そのような試験目的で搬入された機体のうちのひとつであったのではないかと考えられている。

※APORO X-0計画
一日も早い月面着陸の成功を目指し、アメリカ航空宇宙局（NASA）主導による米国企業による宇宙船やロケットだけではなく、協力関係にあった欧州ロケット開発機構（ELDO）、その主導国フランスのマトラとイギリスのホーカー・シドレー・エアクラフトとによる合弁企業が開発・保有するロケット“ヨーロッパA0”を使用する計画があった。サターンICでの呼称が与えられている。

※オゾン層破壊兵器
地球侵攻作戦より遡ること7年、惑星ネメイン攻略にて運用された惑星軌道兵器である。衛星軌道からの攻撃、という点については従来から行われていた“宇宙戦艦からの超高々度艦砲射撃”を例にとっても、特に際立ったものではないが、生態系へ与える影響は計り知れず、後にグラドス本星にも使用を制限すべき、との声を生んだ。

エイジ・アスカの脱走

〈レイズナー〉はエイジ・アスカとともにグレスコ艦隊に密航してきたとされてきた。だが、現実には、宇宙艦への密航は困難であり、少なくともエイジはなんらかの名目を与えられて艦隊の正規の乗組員として随行してきたようだ。あるいは、若いSPT搭乗員を集めた後方支援部隊などに所属していたのかもしれない。密航は、むしろ〈レイズナー〉の方であった。とはいえ、前述のように、侵攻艦隊は地球をSPT運用の大実験場と考えていた節があり、支援装備や予備部品の扱いで〈レイズナー〉とその付随機器などを搬入することは比較的容易だったと考えられる。

エイジと〈レイズナー〉を地球に送り込んだのは、彼の父親であるケン・アスカであるが、これも誤解のないよう補足すれば、グラドス内に存在する反体制派の総意である。年若いエイジが選ばれた理由については別項で詳述しているが、グラドスと地球との間に生まれた者として「刻印」の発動に大きく関わるためであった。エイジは恐らく地球でいう士官候補生、あるいは准士官の身分で艦隊に乗り込んだが、そのこと自体は正規の手続きを経たもので、なんら怪しまれるものではなかった。彼は機会を窺い、地球人類にこれから起こるであろう事態を事前に知らせること、さらには持参したSPT〈レイズナー〉を用いて地球人による抵抗の足がかりを作ることなどを任務として言い含められていた。実行されるのは、火星の米ソの基地への襲撃が開始される、まさにその瞬間である。

エイジは〈レイズナー〉とその予備機であるバルディとベイブルを載せたトライポッドキャリアごと、これを奪取。一気に艦隊から離れて火星軌道へ降下した。彼単独ではなく、艦に同乗していた反体制派の整備員による陰からの手引きがあったことはいうまでもないだろう。また、追尾・観測を撹乱するため、同じタイプのトライポッドキャリアがほかに2隻、分散して艦から離脱している。

艦隊離脱と同時に、〈レイズナー〉を載せたトライポッドキャリアの単独行動は艦隊司令部の知るところとなり、すぐさま追撃隊が編成された。この編成は臨時のもので、本来は火星のアメリカ軍基地への攻撃隊の一翼であったようだ。囮の役割を果たしたトライポッドキャリアは恐らく無人操作であったと考えられるが、この2隻はいずれも追撃隊に「警告無視」としてエンジンを破壊されて火星に墜とされ、調査を受けたが空振りに終わった。エイジはその間に追撃の目をくらませてトライポッドキャリアを火星表面上の渓谷に隠し、〈レイズナー〉を起動することができたのであった。

この時点で同時に月への侵攻も開始されており、エイジたちの到着に48時間程度先行して制圧が行われていたが、残念ながらエイジはそのことを知らなかった。地球側は太陽風の嵐に重ねた強力なジャミングにより火星、及び月との通信が途絶し、事態の把握が遅れている。

なお、エイジの脱出をカムフラージュする作戦の一環として、グレスコ提督座乗の旗艦において、通常の乗組員やSPT搭乗員として潜り込んでいた反体制派が一斉にサボタージュを開始する。これはすぐに鎮圧されたが、反体制派乗員をあぶり出す調査のために艦隊全体の行動は一時的に停止することとなった。グレスコ提督は地球侵攻の本格作戦発動時に再度サボタージュが発生することを憂慮したのであるが、ここで大きな騒ぎにしては侵攻作戦そのものの進行が危ぶまれる。この調査はあくまでも水面下で行われたが、情報部、監査部、艦隊司令部などが動いて数人が密かに逮捕され、後に病気などを理由として本国に送還されている。それでも、反体制派またはその協力者は艦隊に数十名単位で潜んでおり、ついに発見されることなく地球の地に無事降り立っている。SPTの運用実験のために多くの科学者や技術者が同道していたが、反体制派はこれをうまく利用したということだ（彼らの存在があればこそ、我々人類が知り得なかったグラドス艦隊の内部事情がある程度まで判るようになった。別項で詳述する軌道上艦隊戦についても同様である）。調査は4日ほどを要し、これが結果として〈レイズナー〉地球到着までの時間的猶予を稼ぐことに繋がった。

後に正式な〈レイズナー〉追撃のための部隊が編成されたが、その任務を命じられたのは皮肉にもエイジ・アスカの知己、アーマス・ゲイル中尉※であったという。

エイジは本来であれば、艦隊を離れて地球へ直接渡航することを考えていたようだ。艦隊の行動そのものが臨機応変を旨としており、「まず火星基地の制圧から」といった変更に対応したものであったか、経緯の詳細は不明だが、いずれにしろ彼

の艦隊脱出はイレギュラーだった。あるいは、彼自身が火星基地への攻撃を知った時点で、いてもたってもいられなくなったのかもしれない。そもそも、彼は人類に「地球が狙われている」と予告するために来たわけであり、事が起こってからでは遅いのだ。だが、トライポッドキャリアの足では火星から地球まで到達するにはわずかに能力不足で、本来はこの時点で艦隊を離れることは得策ではなかった。事実、このことは後の火星脱出の際に彼とその仲間を悩ませる原因にもなっている。

エイジ・アスカはこのように、半分はやむを得ずといった形で艦隊から脱出を敢行した。彼はグラドス軍からは当然のごとく脱走者として扱われた。侵略者にとっても苦労の多い遠征の地で、まだなにも始まっていない段階から脱走者を出すのは、士気や軍秩序の面からいっても好ましくない。グラドス軍は最初そのように考え、エイジの目的は知らずに追撃隊を送っていたものと考えられる。この段階では、ゲイル中尉が勧告したようにエイジを敵前逃亡罪により銃殺といった通常の対応には処せられず、比較的穏便に取りはからうこともできたかもしれない。

だが、事態は彼らの思いもかけない方向へと転がっていくのである。

※アーマス・ゲイル中尉
士官学校におけるエイジ・アスカの先輩に当たり、任官後の実戦経験もある生粋のSPTパイロットであったとの情報がある。彼は〈レイズナー〉追撃中に死亡したが、その経緯はグラドス軍も正確に掴んでいなかったか、あるいは軍機として伏せられていたため、一般のグラドス人兵士や技術者たちには単なる「逃亡者の反撃による戦死」として伝わっていた。エイジはゲイル中尉が死に至るような攻撃ができる人物ではなかったといい、危機に陥った際に〈フォロン〉が自己判断でV-MAXを発動したのではないかとする説が一般に信じられている。



グラドスからの怪電波

反体制派の意志を代表する形で実行されたエイジ・アスカによる地球人類とのコンタクトであるが、むろんのことそれよりも以前から危機を知らせるための試みはなされていた。だが、地球に渡った技術者の証言によれば、かつて計画され実行された複数のプランがいずれも芳しい成果を挙げられなかったことが示されている。

まず第一に、彼らは地球圏に送り込まれた監視船に乗員として潜り込むことを考えた。正規の訓練を経て監視船に乗り組み、機を見てハイジャックを敢行、監視船ごと地球のいずれかの国に投降し、目的を果たすという計画である。あるいは、そこまでしなくても監視船から通信を送れば地球人に警告を送ることくらいは可能だ。

この計画は、1996年までの間に何度も試みられたが、一度だけ反体制派のメンバーを交替要員として乗務させることに成功したという。ハイジャックは未然に防がれたものの、通信を送ることには成功したようである。基本的に監視船は月の裏側にいるが、地球を監視する任務を帯びている以上、表側にプローブなどなんらかの監視装置は置いていたであろう。それらを利用していくつかのメッセージを数回に分けて送ったのである。

この反体制派メンバーの行動は、直後に発覚し、その場で拘束されて本国に送還された。以後、同様の試みは成功していない。彼のその後はおよそ想像通りである。

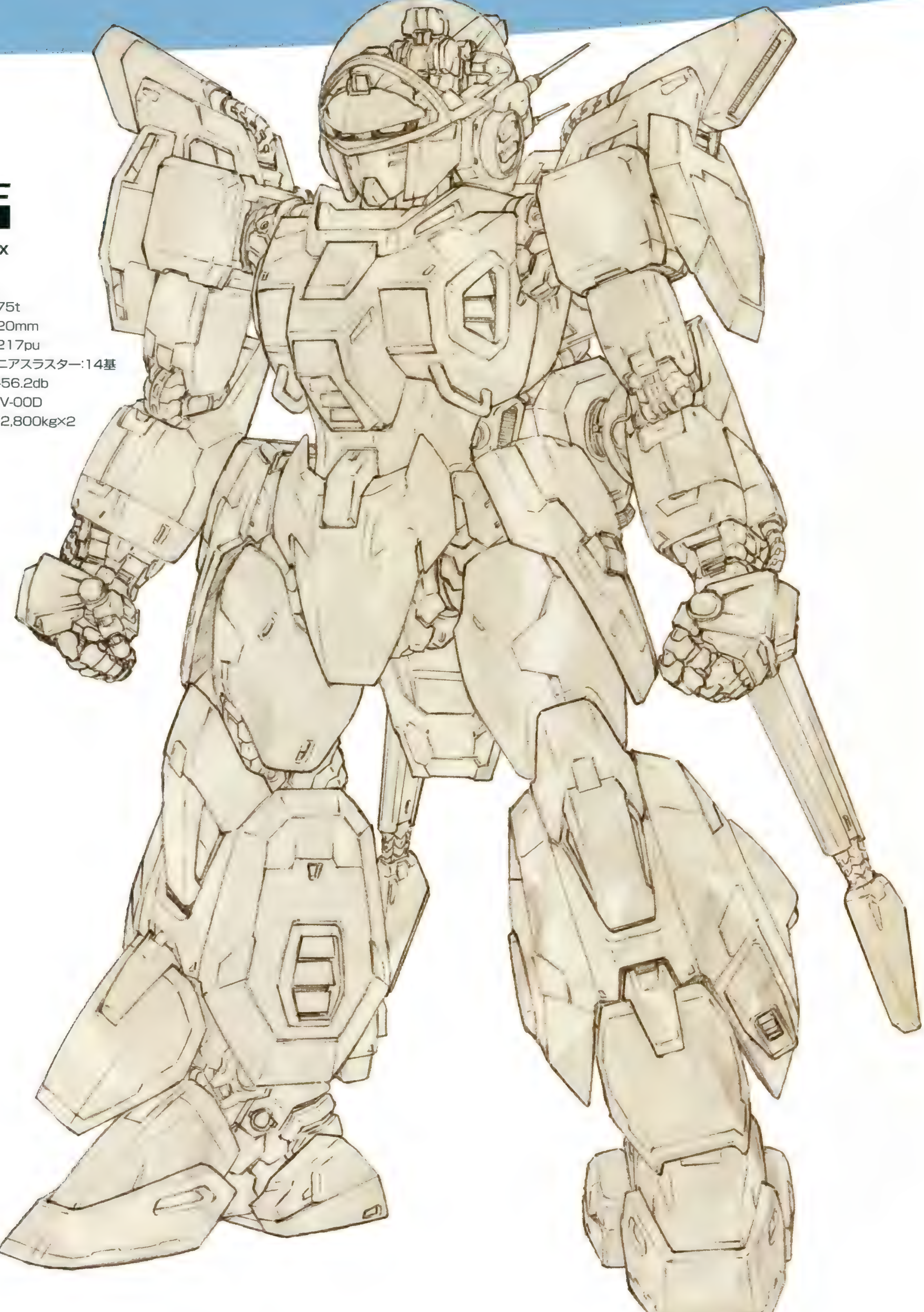
送られたメッセージの詳細な内容は、「地球人類の軍事的宇宙進出への懸念」「グラドス星による地球侵攻の予告及び警告」を中心としたものであったが、結論からいえば、このメッセージは地球人に対してそれほど大きな影響は及ぼさなかった。いわゆる「WoW!シグナル※」のようなセンセーショナルな前例が公開された後のことでもあったし、さらには発信源が地球近傍で、なおかつ解りやすい英語という言語による直接通信であったことも逆の結果に作用した。このメッセージを受け取った大国は揃って、今まさに地球外へ進出しようとしている自分たちに対する、ライバル国による牽制であると解釈したのである。

読者の中にも、1980年代半ばに世間を賑わせたこの"怪電波"騒動を思い出す人がいるだろう。一部には、地球外生命体の存在する証拠だ、と声を上げる科学者やミステリー愛好家もいたにはいたが、当時そうした出版物はほとんどすべてが今でいう「トンデモ本」の扱いを受けており、この怪電波も結局はそのような他愛もない事象の中に埋もれてしまった。1996年の地球侵攻艦隊出現の時に、かつてのあの警告が本当に異星からのものであったと思い出し、結びつけることができた人がどれだけいたことか。だが、エイジ・アスカが直接に姿を見せてもなお、地球人たちは自分たち以外の知的生命体の存在をすぐには信じようとはしなかった。ある意味では自然な成り行きだったのかもしれない。

蒼き流星SPT〈レイズナー〉

SPT-LZ-00X〈レイズナー〉は、地球侵攻艦隊とともに太陽系へやって来たエイジ・アスカが最初に乗って現れた機体である。1996年10月、火星において人類と初の接触を果たし、後に月を経て地球へ降り立つ。グレスコ提督の地球侵攻艦隊との軌道上戦闘を戦い、損傷して大気圏へ逃れた〈レイズナー〉は、後に修復されてエイジとともにレジスタンス活動に加わった。1999年、新総督ル・カインとの勝負で修復不能のダメージを受けた同機は、搭載AI〈レイ／フォロン〉を除いて放棄された。なお、〈レイ／フォロン〉はレジスタンスが開発した新機体である通

※WoW!シグナル
1977年にオハイオ・ウェスリアン大学パーキンズ天文台の電波望遠鏡が捉えた、地球外生命体の存在を示す証拠となり得る太陽系外からの信号様電波を指す。発見したジェリー・R・エーマンが発見時、驚きのあまりデータシートに思わず「Wow!」とメモを書き込んだことからその名が付けられた。



spec
諸元

SPT-LZ-00X
〈レイズナー〉
全高:9.52m
全備重量:13.75t
胸部装甲厚:120mm
エンジン出力:217pu
姿勢制御バーニアスラスター:14基
センサー感度:-56.2db
バックパック:UV-00D
ロケット推力:12,800kg×2

SPT-LZ-00X レイズナー
SPT-LZ-00X LAYZNER

称〈ニューレイズナー〉へ換装され、いわば2代目の〈レイズナー〉となった（これらの経緯は別項で詳述しているので参照されたし）。この2機の"〈レイズナー〉"はいずれも鮮やかな青をベースとした機体色を持ち、V-MAXを発動して空間を自在に機動する姿を見た人々は誰からともなく、これを"蒼き流星"と呼んだという。

本機は、これまでの定説では試作型のSPTということになっていた。この表現は決して誤っているわけではないが、本項ではこれを補足する新事実、新考察について述べる。

〈レイズナー〉は試作型であることは間違いないが、エイジ·アスカの艦隊離脱以降、これを追撃した部隊の対応などから見ても、彼らがこの機体についての詳細な情報、諸元といったものを正確に把握していたかは疑わしい。例えば、V-MAXひとつとってみても、もしその搭載を知っていたのであれば、わずかな小編成のSPT部隊では対処し切れないことは事前に判ったはずだからだ。〈レイズナー〉は密航したというが、それは実体を隠したままで運ばれたという意味であって、あるいは前述の通りSPTの大実験場として認識されていた太陽系への遠征という状況の中では、艦の格納庫に堂々とその姿を晒していてもまったく違和感のない存在だった可能性は高い。

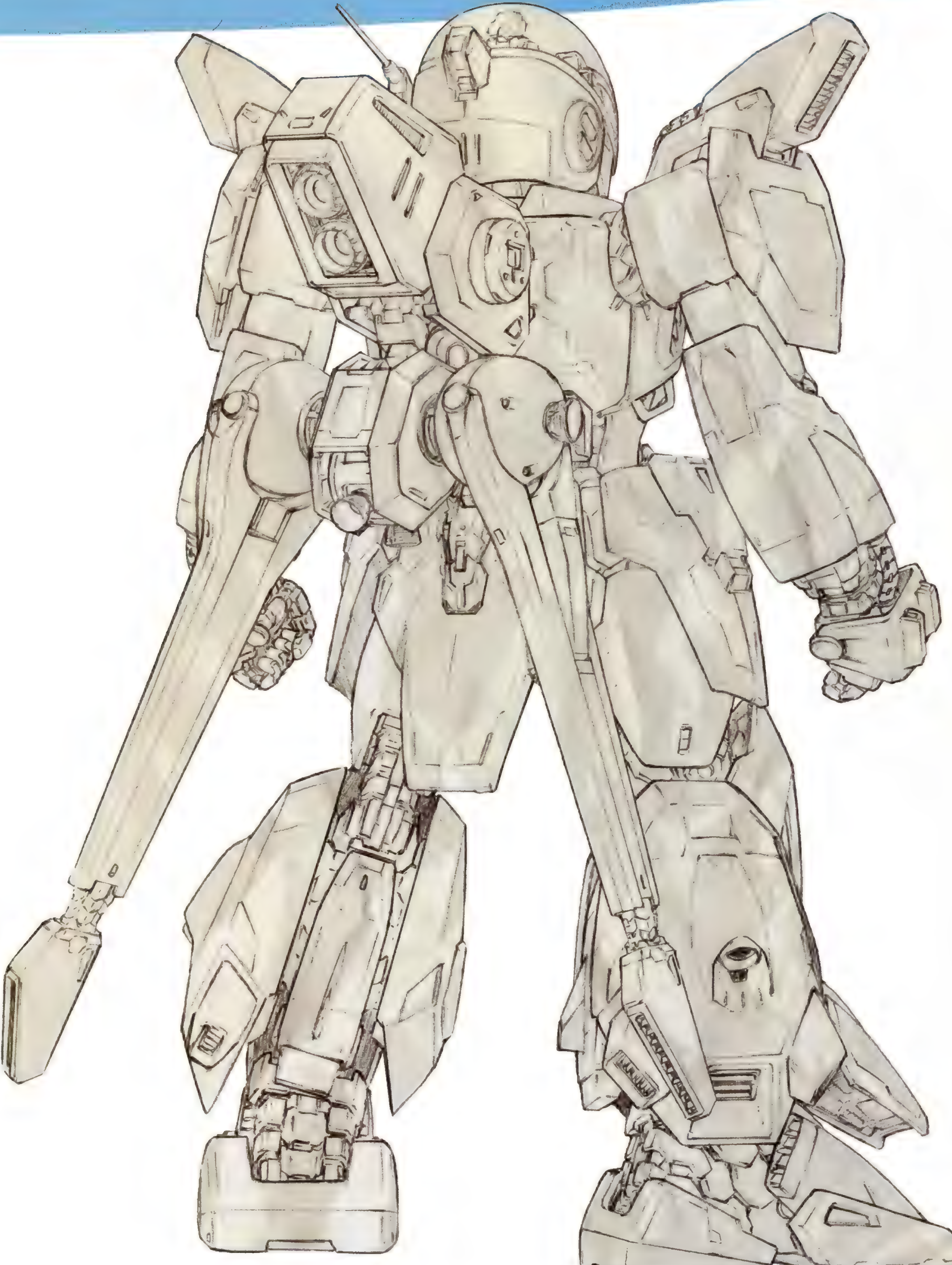
事実、〈レイズナー〉追撃に参加したSPTパイロットたちは、特に「〈レイズナー〉の機体を回収するように」あるいは「特殊な機体であるため戦闘の際は注意を要す」といった伝達は受けていなかったようである。見た目にも特殊な機体ではなく、警戒心もほとんどなかった。脱走兵がたまたま奪取し、乗り込んだ機体、という程度の認識だったのだ。このことは、〈レイズナー〉が少なくともそのシルエットについて、ありふれた外観であったことを示唆している。

機載AI〈レイ／フォロン〉を有していたという点で、〈レイズナー〉はエイジ·アスカの脱出計画に必要欠くべからざる要素であり、唯一無二の前提条件であったことは間違いない。しかし、エイジ自身が〈レイズナー〉をあくまでも普通のSPTと認識していたことも裏付けられている。彼は決定的な危機に陥った際にV-MAXが発動するまで、〈レイ〉を通常のパイロット支援コンピュータだと信じていたのである。

また、〈レイズナー〉にはほとんど同タイプといっていい、設計の基礎を同じくする系列機が存在した。このベイブルとバルディの2機については別項でも触れているが、試験用の装備で固められており、また機体の構造や頭部など主要構造も過渡期のものと推定できる要素が多分にあった。したがって、〈レイズナー〉もまた同様の扱いで搬入されていた可能性は高い。これは想像でしかないが、少なくとも外観について〈レイズナー〉に類似した機体はすでに多数が製造されており、同機は単なるバリエーションであったのではないか。反体制派が〈レイズナー〉を密かに太陽系まで運ぼうと考えた場合、あくまでも目立たない外観を選択する、というのは理に適っているし、恐らくは、ほかの2機と同様に頭部のデザインのみまったくの新規であったのではないだろうか。あるいは、グラドス本星には〈レイズナー〉によく似た従来型SPTが多数存在する（した）かもしれないのである。

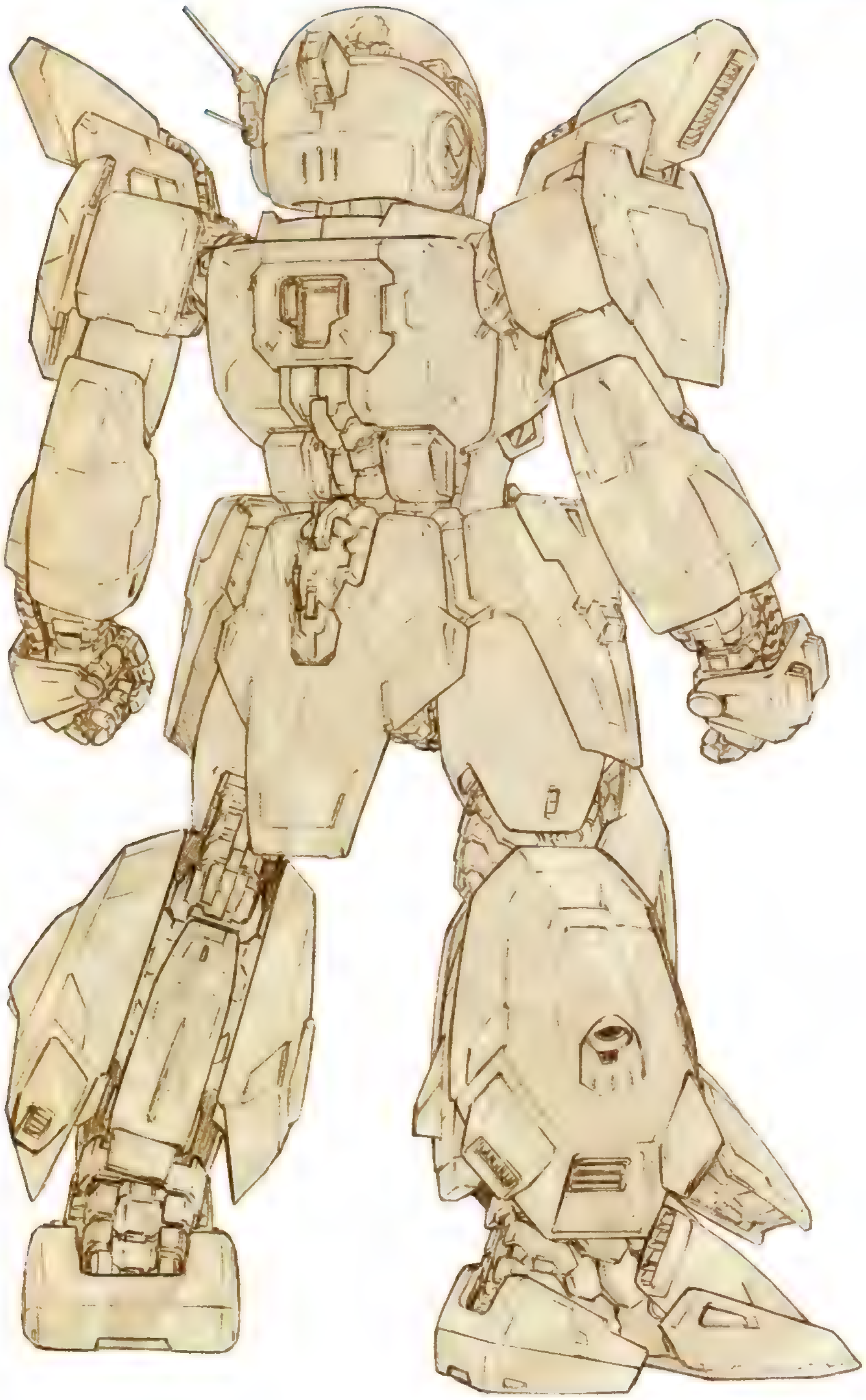
より詳細にいえば、〈レイズナー〉は新装備の試験のために従来型SPTのひとつをベースとして開発された機体であるといえる。この場合の新装備にはV-MAXも含まれるかもしれないし、ほかの多くの太陽系に送り込まれたSPT同様、地球環境下で運用するため採用された機器の適応試験を想定していたのかもしれない。むろん、ベース機はあるにしても、装備品などは新規の設計であったろう。根拠としては、ある程度は信頼性の保証された機体でなければ、エイジ·アスカに課せられた極秘ミッションに供することはできないと考えられるからだ。まったく新規の設計機体を困難な任務にいきなり実戦に使用するのは（しかも異星系で）リスクがあまりにも高すぎる。

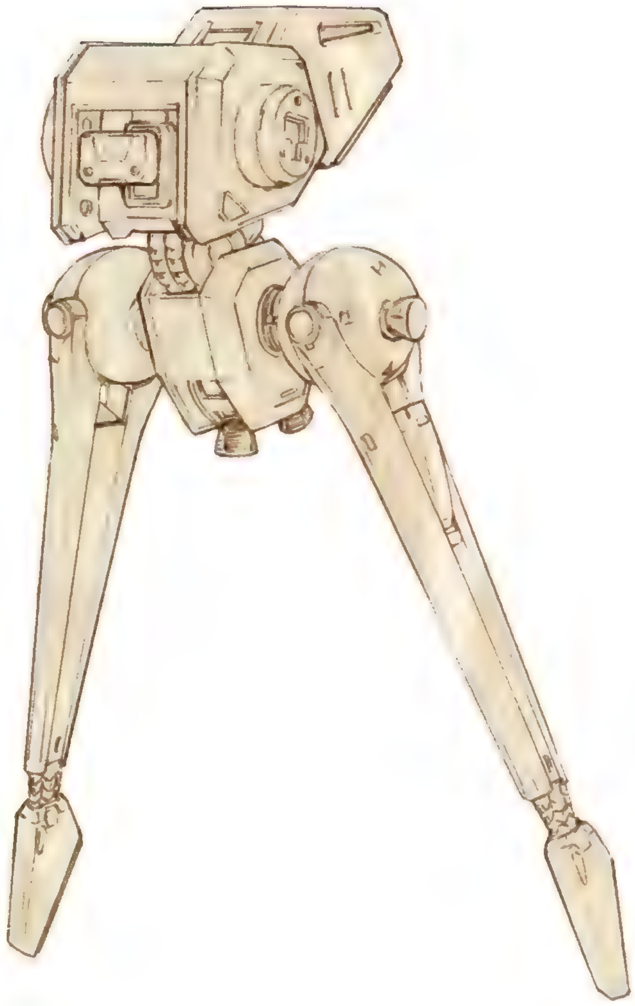
別項で詳述するが、この〈レイズナー〉は地球人が独自のSPT開発を行う際、参考とされるべきサンプルでもあった。むろん、このほかにも鹵獲したグラドス軍SPTを研究に利用することは考えられる。その際、〈レイズナー〉とそれ以外の機体に技術的な開きや大きな差違があれば地球人は混乱したであろう。V-MAX運用のために新開発の設計や素材を一部に導入した可能性は高いが、ほかの装甲や機材についてはあえて"枯れた技術"のものを採用していた。このことは、後に地球側で〈レイズナー〉を参考に開発した〈ニューレイズナー〉に関わった技術者たちの証言からも明らかである。



SPT-LZ-00X レイズナー

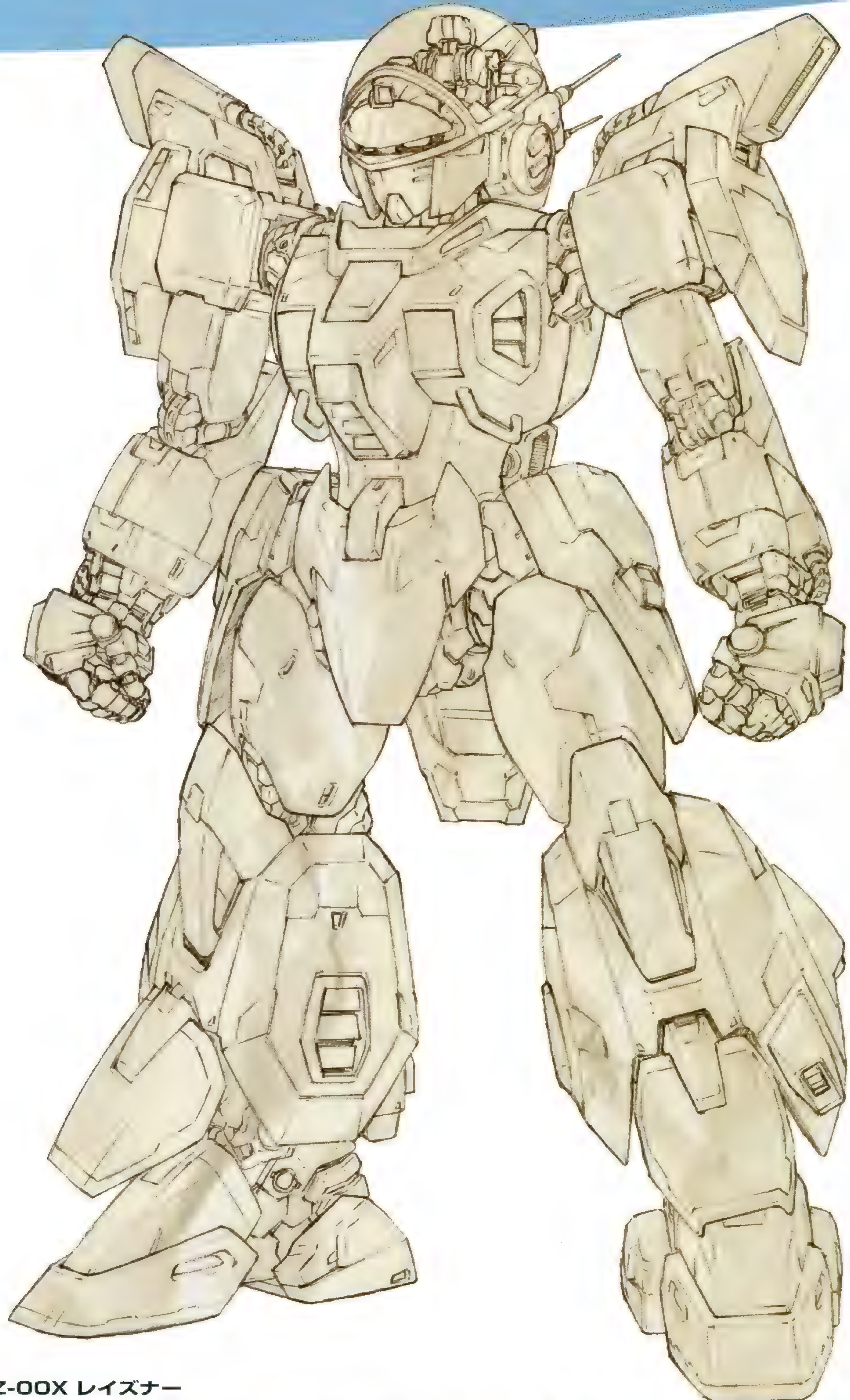
SPT-LZ-00X LAYZNER





矛盾するかもしれないが、SPT部隊では対処し切れないことは少なくとも戦闘力について大きなアドバンテージを有していなければならなかった。それは、追い詰められるであろう地球人類に対して、〈レイズナー〉がまず救いの旗頭とならねばならない、という宿命による。地球側が独自のSPTを完成させることができるかどうかは判らないが、それまでの間、ほとんど〈レイズナー〉1機でグラドス軍の圧倒的な軍事力に対抗しなければならないからだ。むろん、それが現実的なプランではないことは反体制側も重々承知であり、〈レイズナー〉をサンプルとして地球側に届けることが最低限の目標と考えられていたようである。それでも、窮地を脱するための絶対的な性能（=V-MAX）は必要だった。だが、そのほかの点については、なるべく既存のSPTに準じた設計としておくことが望ましい。

〈レイズナー〉を詳細に調査する中でレジスタンスの技術者たちは、この機体を設計したグラドス本星の同類たちの思想とその苦労を感じ取ったという。兵器というものは、徹底的に機能を追求するがゆえに、経験豊富な技術者が見ればその設計思想や意図が読み取れるという。このことは他星系の産物である〈レイズナー〉とて例外ではなかった。むろん、開発に地球人であるケン・アスカという人物が関わっていたから、と説明することはできる。だが恐らくそれだけではなかったに違いない。この点からも、〈レイズナー〉の存在そのものが地球人とグラドス人が同根であることを裏付ける証拠を示しているといえなくもなく、興味深い。蒼き流星は、何重もの意味で地球とグラドスを繋ぐ架け橋であったといえるだろう。



SPT-LZ-00X レイズナー

SPT-LZ-00X LAYZNER



new layzner development history
ニューレイズナー開発経緯

1999年、地球人類はグラドス文明の産物であるスーパー・パワード・トレーサー(以下、SPT)の技術を基に開発した地球製SPTの量産にこぎつけた。同年12月、南米ペルーのクスコにおいて地球解放戦線機構、及びグラドス地球占領軍両陣営の抗争にとり転機となった戦闘が行われたが、地球占領軍ル・カイン総督の失踪を伴うこの時の戦いを境に、両者の軍事バランスは逆転していったのである。

この時、地球解放戦線機構の先鋒を担ったのは、かのアルバトロ・ナル・エイジ・アスカが搭乗するSPT〈レイズナー〉であるが、この機体は地球来訪時に彼とともに現れた〈レイズナー〉とは似て非なるものであった。E·SPT-LZ-00X-B〈V-MAX強化型レイズナー〉、

■SPTはスラスターの噴射による反動で推進するとともに、内蔵する豊富な電気を利用し機体表面の気流を放電によるプラズマによって制御するという技術(同様の技術は地球でも研究されていたが、戦術機では実用化されていなかった)を[illegible]



通称〈ニューレイズナー〉は、地球側が独自に開発した当時のSPTの中では唯一のV-MAXシステム装備機であり、同じ時期にグラドス地球占領軍が保有していた最高性能を持つ〈ザカール〉と対等に渡り合うことのできたSPTである。むしろ、地球解放戦線機構にしてみれば、当機あるいはそれと同等のSPTを少なくとも1機以上保有していることは、グラドス側に対抗するためにどうしても必要とされる重要事であったといえよう。このことは、2つの観点から述べることができる。

まず第一に、直接的に戦力となる高性能SPTが必須であったことが挙げられる。当時、V-MAXシステムは発展段階にあったが、それだけにその装備機の他に対するアドバンテージは計り知れないものがあり、グラドス側に〈ザカール〉が1機あるだけでも、地球側にとっては絶望的なほどの脅威となった。通常、圧倒的な高性能を持つ1つのユニットが戦場に投入されたところで、数で対抗すれば充分にこれを撃退することが可能と考えられる。しかし、SPTの量産に多大な困難を伴う占領下の地球では、用意した戦力を敵側のV-MAX搭載機によって、文字通り一瞬で殲滅される危険が常に想定された。開発、量産に加え搭乗員の訓練などといった抵抗のための準備を整えるためには、〈レイズナー〉による牽制や陽動、あるいは敵側のV-MAX搭載機の排除といった計画補助が必要であったということだ。

もうひとつの理由は、グラドスの持つSPT技術を解析することに

よって地球側で独自の機体を用意するためのサンプルとして〈レイズナー〉が必要であった、というものだ。

1996年に〈レイズナー〉ほか2機のSPTが地球に降り立った際、これを確保した米軍は技術者たちに命じて調査・分析を行わせている(空・陸軍の双方から嘱託のメーカー技術者が参加したという)。この時の解析ではいわゆる中身についてほとんど重要なことは判らなかったが、詳細な外形データの保存は行われていて、これが後に専門家による解析を経て構造などの把握に役立ったことはあまり知られていない。〈レイズナー〉の解析や地球製SPTの開発過程については後述するが、直後に行われたグラドス地球侵攻艦隊との戦闘後、エイジ・アスカと〈レイズナー〉を地球側が回収し、グラドス側に知られないよう保護下に置くことができたことは僥倖であった。以後の地球は占領軍の制圧作戦による混乱に覆われ、その混沌の中で彼と当機の所在は杳として掴めなくなる。水面下で、〈レイズナー〉の再戦力化と解析・コピーのための技術蓄積は開始された。

地球解放戦線機構では、当初この〈レイズナー〉を主力として抵抗運動の旗頭とし、敵勢力の排除のための実質的な中心戦力として運用することも想定したという。いずれにしても〈レイズナー〉の支援のためにSPTは必要であったし、当機を修理・維持するための予備部品の調達や技術力の蓄積もまた必須であったことはいうまでもない。

〈レイズナー〉の回収に成功していなければ、現在のこの歴史には繋がっていなかったであろう。あるいはグラドスの治世があのまま続き、地球人は彼らへの隷属を強制されて今に至ることになっていたかもしれない。そうでなくとも、鹵獲したSPTを元にしてどれだけの時間をかければ実用に足る地球製SPTが製造できたか。反



攻計画のことごとくは芽のうちに摘み取られていた可能性も少なくない。〈レイズナー〉という機体は、流星のように地球圏に現れて以後、地球とグラドスの軍事、文化、精神の関係性について少なからぬ影響を及ぼしたといえる。

そこで本項では、オリジナルの〈レイズナー〉から地球製コピー機体であるところのSPT〈ニューレイズナー〉が誕生するまでの経緯を中心とし、いかに地球人がSPT技術をものにしていったかを明らかにする。

今回、〈ニューレイズナー〉の開発経緯をまとめるにあたって、開発に協力した技術者の数人から多くの証言を得た。これは直接本人にインタビューができたものもあれば、又聞きのものもある。直接でないものに関しては複数のルートからの証言を得てなるべく確度が高いと思われるものについて採用しているが、事実と異なる内容もあるだろうことは注意しておく必要がある。当時、エイジ·アスカの消息については地球人の間でも取り沙汰される機会が多く、当然グラドス軍もそうした情報に耳をそばだてていた。地球人たちに悪意はなかったとしても、エイジや地球解放戦線機構のメンバーにとってはたとえ噂であってそれが広がることは生命の危険に直結したし、注意深く対抗手段を講じる必要があった。すなわち、1996年のあの日から諜報戦は始まっていたのだ。したがって、関係者が「本当だ」と信じて疑わない内容であっても、意図的に仕掛けられた偽情報の可能性は否定できないのだ。ついでにいえば、現在出版されているエイジ·アスカの辿った軌跡について記したいくつかの書籍などについても、それらが必ずしも真実を語っているとは限らない場合があることを念頭に置いておく必要があるだろう。



■地球製戦術兵器と圧倒的に性能差があったSPTであるが、既存の武装でまったく対抗できないということはなく、戦闘機の空対空ミサイルなどが命中すれば破壊することも可能だった。もっともその機動性の高さによりミサイルの命中率は決して良いとはいえなかった。

レイズナーの帰還

1996年、地球の衛星軌道においてSPT〈レイズナー〉とグラドス地球侵攻艦隊との戦闘が行われた。この戦いは、結果からいえば地球側の完全敗北であった。明確な形で地球外生命体からの軍事的外圧を受けるのが初めてだった地球人類は、組織だって抵抗を示す前にあっけなく制圧されることとなった。当時、〈レイズナー〉は地球側に鹵獲される形で米軍の拠点の1つであるエドワーズ空軍基地に収容されていたが、エイジ·アスカは地球側の要請に応えて艦隊を要撃することを了承。〈レイズナー〉を運んできた降下用シャトル、及び同機に搭載されていた2機のSPTを伴って大気圏を離脱していった。

地球側の軌道上における戦闘能力は、グラドス側からしてみれば矮小なものに過ぎなかった。当時、軌道上に曲がりなりにも戦闘力を有する機動ユニット(宇宙戦闘機、戦闘艇など)を展開できていたのはアメリカとソ連くらいのもので、それも互いの国家が万が一戦闘状態に入った場合に自国の宇宙開発関連施設やそれに付随する人員を護る名目で武装を施された機体がわずかにあるばかりだった。また、いざ軌道上で戦争が勃発したからといって、増援の戦闘機を次々と追加するだけの力があるわけもなく、グラドス側の機動力に対してはほとんど為す術がなかったといってよかった。前述の軌道上戦闘の際も、護衛の戦闘機群は早々に全滅させられ、その後は状況の詳細を把握することすら困難という有様であった。

したがって、少なくとも地球側にはこの戦闘の詳報は残されていない。後に関係者へ行った取材の中で、〈レイズナー〉の搭載コンピュータである〈レイ〉内部に記録されたデータがロードされ解析にかけられたことが明らかになっているが、本誌ではその内容までを掴むには至らなかった。記録がなんらかの形で現存しているのかどうかも不明である。だが、当時グラドス艦隊内部にいた複数の人物からの聴取が叶い、ある程度は戦闘の概要について把握できている。判っているのは、エイジ·アスカの〈レイズナー〉が損傷を受けて地球に不時着したこと、そしてグラドス艦隊の旗艦を撃沈するには至らなかったこと、〈レイズナー〉の随伴2機は地球に帰還後、やはりいずこかに不時着した後、グラドス軍に回収されたこと、などである。

エイジ·アスカがあの戦闘で目指した目標はグレスコ提督であった。彼を説得できればよし、できなくとも身柄を確保することで艦隊の機能を停止させ、あわよくば地球からの一時撤退を促す。とても作戦とはいえないような、無謀ともいうべき行動であったが、SPT〈レイズナー〉の戦闘力があればあながち不可能だとも断定できない。少なくとも、数少ない“友軍”である地球人の乗るSPTベイブル、及び同バルディをそれ以上の戦闘に巻き込まないためには、そうするほかなかったのである。ともかく、〈レイズナー〉はグレスコ提督との駆け引きに臨み、対等以上の結果を引き出す。そのことは、提督の座乗する地球侵攻艦隊旗艦が重篤な損傷を受け、結果として地球への降下を断念せざるを得なかったことからも判っている。艦隊旗艦による地球制圧作戦が当初の予定通り実行されていた場合、地球上に存在した各国の軍事拠点のことごとくはより早期に制圧され、後の反攻へと繋がる設備や人材の





退避が間に合わなかったことは充分に考えられる。その意味でも〈レイズナー〉のささやかな抵抗は、仮にグラドス側が"蚊が刺す"程度にしか感じていなかったとしても、大きく功を奏したものだといえる。

以下は、艦隊に乗り組み、後に占領軍の一員としてそれぞれ地球に降りた技術者や整備員たちから得た情報を総合したものである。

〈レイズナー〉が艦隊旗艦に突入した際、当然ながらグラドス側のSPT部隊の激しい応戦に遭った。グレスコ提督はこの時、〈レイズナー〉の殲滅を最優先として自らの旗艦を自爆させることさえ辞さなかったとされる。提督はエイジ·アスカの目的が自分との交渉であることを知っており、自分の身を囮として〈レイズナー〉を呼び寄せて、旗艦ごと確実に殲滅するつもりであったようだ。しかし、この命令は中途半端に実施され、旗艦は中央の機関部から艦橋までの一部を破壊されるだけに留まった。これにグラドス内部に入り込んでいた反体制派(=反政府戦線)による密かな操作が絡んでいたかは明らかではないが、〈レイズナー〉はこの爆発からV-MAXを用いて逃れた。旗艦は中枢機能にダメージを受けて半漂流状態となり、散らばった破片はやがて2日後、大気圏へ飛び込んで時ならぬ流星雨を降らせたのである。一部は火球と呼ばれるほどの大きな流星となり、世界の各地で一晩にわたって観測されたという。

旗艦からからくも脱出した〈レイズナー〉のその後の行方であるが、グラドス側は追跡することができなかった。中枢部にダメージを受けた旗艦はレーダーによる情報収集がストップし、また周辺にいたほかのグラドス軍艦艇にしても、爆発し四散する破片と〈レイズナー〉の機影を区別することは困難だったからだ。そもそも〈レイズナー〉は旗艦の爆発の中で破壊されたものと考えられており、それを疑う者は少なかった。反体制派のグラドス人でなくとも、グレスコ提督の「旗艦を犠牲にしてでも〈レイズナー〉を破壊する」という意思に対して疑問を呈する者がいなかったわけではないが、艦隊司令である提督の決定が実行に移された段階で、目の前で起こっている現象としては〈レイズナー〉の破壊が確実なものであると認識するのにいささかの問題もなかったのである。

グレスコ提督はむろんのこと〈レイズナー〉を破壊したという確たる証拠を得ること望んだ。旗艦としての能力を失った自艦から退避した提督は、まず艦内部に〈レイズナー〉の機体が残されていないかどうかを早急に確認するよう命じた。この調査は艦の応急修理と並行して不眠不休で行われたが、成果は得られなかった。同時にSPTを動員して旗艦から飛散した破片群を追跡調査させ、〈レイズナー〉の機体を探させてもいる。

その間、エイジ·アスカは傷ついた〈レイズナー〉を破片の陰に潜ませ、文字通り息を殺して漂流するに身を任せた。〈レイズナー〉の搭載コンピュータ〈レイ〉の軌道計算により、やがて地球へ降下することは判っていた。仲間の地球人たちがベイブルとバルディによる抵抗を諦めて地球へ帰還していくのを、彼はどうすることもできずに眺めるしかなかった。いつの日か彼らと再会できる日が来ることを信じ、エイジ·アスカは〈レイズナー〉に身を委ねたのだった。



■地上で撮影された、エイジ・アスカの乗るオリジナル〈レイズナー〉の貴重な写真。〈ニューレイズナー〉と比べると機体色が鮮やかだが、これは両者にそれぞれ採用された塗装の違いによるもの。〈ニューレイズナー〉の地球製塗料はプラズマをまとって飛翔するSPTの過酷な運用に耐えられない、ということのようだ。ただし、〈レイズナー〉も地球で修復されたため、部分的に地球製塗料を使用している箇所がある。

レイズナーの回収

エイジ·アスカは〈レイズナー〉のコックピットの中で50時間近くを耐えたという（以下、地球解放戦線機構に参加していたレジスタンスたちの情報をまとめたものを記す）。爆発のエネルギーによって減速された破片はやがて大気の上辺に触れ、赤熱化を始めた。〈レイズナー〉は単体での大気圏突入能力を持つが、機体は戦闘によって激しい損傷を受けており、プラズマ化した大気の高温に晒されて脚部の駆動機構などの一部は完全に機能を失った。エイジは軌道上を漂流していた間、不時着した後のことについて思案を巡らしており、なんとかして〈レイズナー〉をグラドス軍に知られないよう隠匿する手段を講じるとともに、地球の協力者とコンタクトを取らなければならないと考えていた。

そこで、通信以外の意思伝達手段として、〈レイズナー〉が身を潜めている破片を“揺らす”ことで地上の人間たちにサインを送った。具体的には、〈レイズナー〉の生き残った駆動系とスラスターを使い、手の平をひらひらとさせるようにわずかに破片全体を振ったのだった。微かな動作ではあったが、人工的なテンポによる光量変化と、ほかの破片群からほんの少し逸れた突入軌道によって、それは地上の人間たちの知るところとなった。世界中の天文台や観測所が軌道上に目を向けていたが、〈レイズナー〉の戦闘が終了して丸2日が経過しているため、エイジにとってもこれは賭けだった。リスボンの天文台がこれに気がつき、情報はただちに国連を通じてジョン·ギルバート博士のもとへ届けられた。ギルバート博士らは詳細なデータの分析を経て落下地点を特定。〈レイズナー〉が日本近海、対馬の東約200kmの海上に墜落したことを確認した。

ギルバート博士はただちに日本政府へ協力を要請し、海洋調査船をはじめ自衛隊の潜水艦救難船などあらゆる手段を投じて〈レイズナー〉を回収したとされる。設備や技術においても深海調査の経験が豊富な日本に落ちたのは幸いであったといっていいだろう。あるいはエイジ·アスカが父親ケン·アスカの生地である日本をあえて墜落地点に選んだ可能性もあるが、いずれにしてもその選択は正しかった。回収作業が終わる頃、地球上へと侵攻を開始したグラドス地球占領軍との戦闘が全世界規模で勃発し、制圧完了の宣言が出されるまでの数ヶ月の間に、恐らく〈レイズナー〉は日本のどこかに隠匿され、エイジともども機を窺うこととなったのである。

グラドス側でも〈レイズナー〉が原形を留めたまま地球に落下した可能性は当然考えた。グレスコ提督は占領軍の地球降下と同時に、破片の落下地点を中心に広範囲にわたる捜索を行わせたが、提督の熱心さとは裏腹に捜索部隊の士気は上がらず、活動は早々に形



■グラドス地球侵攻艦隊との軌道上戦闘に赴く際、米宇宙軍機から撮影された写真。肩のパネルが開き、強制排熱装置が作動していることが判る。V-MAX発動時に限らず、機体に溜まった熱を適宜排出しているようだ。

骸化し、やがて半年で打ち切られたという。

なお、〈レイズナー〉の墜落地点、及びエイジ·アスカの潜伏場所については現在でも様々な異論が存在する。アメリカ大陸、南米、あるいは南極などといった情報が錯綜しているが、これはどれほど隠そうとも時折グラドス制圧下に置かれた人類の間で噂としてのぼる“彼が生きている”という情報を、レジスタンス勢力が偽の情報などをばら撒くことによって撹乱していた結果による。時期によっては実際にエイジが世界各地に出没していたらしいことも明らかになっており(これについては後述する)、これらが混じって複数の説に変わったものと考えられる。

結論からいえば、〈レイズナー〉はやがてアメリカへと移送されることになる。しかし、それが実行に移されたのは1997年も半ばになってからのことだといわれている。地球は完全にグラドス軍の支配下に置かれ、食料品や工業製品など物資の流通も大きく制限された。もとより、制圧作戦初期に用いられたオゾン層破壊兵器によって生態系さえも打撃を受け、その後の文字通り死力を尽くした抵抗によって犠牲者は膨大な数に上っていた。正確な統計は得られていないが、地球人類のうち約20億以上が直接、あるいは間接的にこの時の戦いで死滅したといわれる。そのような混乱した情勢の中で、〈レイズナー〉の移送や改修を実行することは困難を極めた。

その間のエイジの行動について、その詳細を伝える記録はほとんど残っていないが、地球解放戦線機構に合流し、まずは生き残った兵士や有力な技術者たちを世界各地から集める仕事に従事したのではないかといわれている。当時、彼の立場は微妙なもので、侵略者であるグラドス星人に深い恨みを抱く者も少なくなく、これに抵抗して戦ってみせた彼を認める者がいる一方で、半分グラドス人の血を引く彼をも敵視する者が存在したことも事実である。だが、エイジはそうしたわだかまりを持つ者たちに対しても、臆することなく真正面から相対したという。最終的に〈ニューレイズナー〉の開発に携わった技術者のひとりは、フランスで彼に初めて会ったが、真っ直ぐな瞳に見つめられ「〈レイズナー〉を直すために力を貸してほしい」との彼の言葉に、一瞬ですべての負の感情を氷解させたと語っている。

地球人たちは反抗精神を失ってはいなかった。確かに大多数の弱者が強制された境遇を甘んじて受け入れていたが、一部の志を持った者たちは“地球解放”を掲げて再び心に火を燃やした。エイジ·アスカの存在は密かな希望の象徴であり、その名前と存在の実感がじわじわと人類の間に浸透していくことを、誰にも止めることはできなかったのである。

レジスタンスの誕生

本格的に〈レイズナー〉の復元及び改修がスタートしたのは、前述の通り1997年半ば以降のことである。旧国連宇宙軍職員やアメリカ五軍（陸、海、空、海兵隊、及び宇宙軍）の生き残りは、ギルバート博士を中心としたレジスタンス勢力、地球解放戦線機構にまとまりつつあり、エイジ・アスカ及び〈レイズナー〉と合流しての今後の活動計画を練っていた。

レジスタンスと一口にいっても、その実態を明確に示すことは不可能である。国家という枠組みも崩壊した占領下の地球には各地に似たような大小の組織が点在しており、どれだけの人間がグラドス地球占領軍に無謀な戦いを挑み、そして殺されていったのか今もって判然としない。その中でも、横の繋がりを早期に確保し、曲がりなりにも組織だった行動を取れるようになったのが、北米の勢力だった。これが地球解放戦線機構である（通常は組織名で呼ばれず、単にレジスタンスといわれていた）。ソ連を中心とするユーラシア大陸はオゾン層破壊兵器によって占領後、すぐに食糧難に陥ったが、北米はグラドス軍の意向によって土地そのものは比較的被害を免れた。逆にいえば、北米の穀倉地帯は全世界の食糧事情を一手に引き受けることになっていたのである。要するに、占領政策の一環としてアメリカは占領軍の拠点とされるべく、最小限の破壊のみで済まされたということだ。

全米に点在する軍事拠点はそれなりに連携しつつ、かなり後までSPTを擁するグラドス軍の攻撃に対し抵抗を見せていたが、ギルバート博士は五軍の司令官たちを説得して、戦力や設備の温存を画策した。建設中や計画中であった基地、あるいは核戦争用に整備されたシェルターを利用して密かに設備を移し、〈レイズナー〉を迎える準備を整えた。既存の基地はグラドス軍によって虱潰しにされつつあったため、急ぐ必要があった。博士は1997年初頭に、拠点と定めたうちの1つ、コロラド・スプリングスのシェルターで指揮を執り始める。

博士らが調達した資材の中には、エイジ・アスカが最初に地球に降り立った際、地上に持ち込んだSPTのパーツ群があった。エドワーズ空軍基地で降下用シャトルから降ろされた物資は、分散していくつかの米軍基地に運び込まれていたとされる。これは、当時の米大統領と基地司令の判断によるもので、最大の敵国と見なされていたソ連からの横やりを躱すための処置であったと考えられる。具体的にいえば、敵国の強硬手段による奪取、あるいは破壊工作から貴重な異星人の資料を保護するためである。

これらの物資には〈レイズナー〉の予備部品が含まれていたとされる。一部は〈ニューレイズナー〉開発時にそのまま流用されたが、システムとして完全なものが揃っていたわけではなく、多くは解析の手がかりに利用されたのみであった。しかし、当初はこれらを収めたコンテナ群がいずこへ運ばれたのか、ギルバート博士ら自身把握することができないでいた。防諜の意味もあり、貨物は当然のように場所を数回にわたって移されていたからだ。また、輸送中に占領軍の攻撃が開始されて急遽搬入先を変更されたケースもある。占領軍との戦闘が開始された後は基地の破壊などに伴うデータバンクの損失によってますます捜索は難航し、あまつさえテキサス州キーリーンにあるアメリカ陸軍フォート・フッドに安置されていた一部の機材は、偶然ではあったがグラドス軍の文化矯正隊の検閲に発見されて接収されてしまった。この機材を足がかりにギルバート博士らの計画が露見する危険が高まったが、幸い前線への補給物資が強奪されたものと判断されて事なきを得た。むろん、占領軍内部の地球人たちが情報操作によって隠蔽・欺瞞工作を行った可能性もある。

ともかく、苦心の末にギルバート博士はエイジ・アスカの降下用シャトルから得た資材や機材の研究にとりかかった。それにはまず、ハード、ソフト両面でこの異星人の産物に対し理解を深めるための分析が可能な人材を確保しなければならない。前述の通り、全世界的に貴重な人的財産が失われていた戦いのさなかである。探すにも、占領軍の目を盗んでの活動であり、困難を極めたことはいうまでもない。冷戦が続いていた当時、ワールドワイドなネットワークシステムはまだ民間には開放されておらず、いわば秘匿されていた情報網を介してめぼしい人材に当たりをつけることは辛うじて可能ではあった。だが、占領が進むにつれその手段も次第に維持することが困難となり、また人材そのものの物理的な移動も大きく制限されることになっていった。

とはいえ、占領軍は地球の地理的規模からいえば圧倒的に人員不足でもあった。確かに、兵器同士の戦闘になれば、はるかに優位に立つSPTが地球に存在するあらゆる武装を無力化した。だが、いざ地球を支配下に置いてみると、治安維持のためのいわゆる末端の“兵”の数は不足しがちで、これを現地で徴用した地球人で賄うといった対応がごく普通に行われていたのだ。占領軍もむろんそれを見越して地球人の数を統制可能な限界まで減らしたつもりではあったのだが、監督や監視の目が隅々まで及んでいたかといえば、決してそうではなかった。ギルバート博士らは極秘の計画を進めるにあたって、慎重にその隙を突く態勢を作り上げていった。そして、拠点間の通信手段を確立、また連絡路の確保も進めていく中で、日本に隠されている〈レイズナー〉の再戦力化を成功させるための具体案を練ったのである。



■グラドス地球侵攻艦隊との軌道上戦闘に臨む〈レイズナー〉。恐らく、グラドス側のSPTの機載センサーが捉えた映像が残っており、後に反体制派技術者の誰かが地上に持ち込んだものと考えられる。グラドス侵攻時の混乱もあり、地球に現存する〈レイズナー〉の写真は極めて少ない。

〈レイズナー〉の復元

課題は山積していた。〈レイズナー〉の修理には、まず内部構造を正しく理解しなければならない。理解するだけでなく、交換用の部品を調達、あるいは自力で製造する必要もあろう。さらに、〈レイズナー〉をどこで修理するかも問題だ。そのまま日本で実施する場合、物資や人材を彼の地に送り込まねばならないが、アメリカと日本は太平洋を隔てて遠く離れすぎている。飛行機や船をおいそれと輸送の手段に使うわけにはいかない。そこで、博士は人間が住むには決して適しているとはいえない地域を進むルートを選んだ。すなわち、アラスカから北極圏を経てカムチャツカ半島、そして日本へと至る極北ルートである。逆に〈レイズナー〉をアメリカへ運んでくる場合にも使用が想定されるルートであるが、最終的に改修は日本の地で行われた。したがって、この極北ルートは主として人材や物資の行き来に使われ、1997年秋から1998年暮れまで続いた。冬の時期、北方の極地方は太陽が昇らないため隠密行動には最適であったが、その代わりにこの時期特有の厳しい気象条件が輸送隊の行く手を阻んだ。まさに命懸けの道行きであり、遭難した隊も1つや2つではなかったのだ。

その頃、〈レイズナー〉は瀬戸内海に浮かぶ島の1つに移送され、修理の時を待っていた（この場所についても諸説あり、中国山地の奥深くや富士山麓など、いくつかの推定候補がある）。この島は当時の日本が持つ軍事的拠点（自衛隊施設）ではなく、古い地下施設があったという。ここは先の世界大戦にあたって旧軍が設営した、司令部施設を備えた防空壕のようなもので、当時すでに遺跡と呼んで差し支えない扱いの建造物となっていた。そのため占領軍の攻撃リストに含まれておらず、隠すには絶好のロケーションだったのだ。そもそも、ギルバート博士が〈レイズナー〉を日本に留め置いたのは、日本が占領軍にあまり重要視されていなかったから、という理由も大きい。経済や技術の面では世界的にも誇るものがあったが、異星人にとってみれば地勢的にも軍事的にも“取るに足りない”小国と認識されていたのである。

エイジ·アスカはその間、自らの足で日本中を巡り、協力者を集めたという。彼がとある道場の師範と出会い、格闘技を身に着けたのもこの時期のことといわれる。むろん、彼の行脚がいうほど楽なものではなかったことは想像に難くない。地球の敵と認識されるグラドスの血を引いているエイジはそれを隠そうとはしなかったし、だからこそ石を持って追われることも多々あったことだろう。やがて米国から旧知であったエリザベス·クレブリー女史（火星でエイジ·アスカと最初に邂逅した地球人のひとり）が連絡員として極北ルートを経て日本に到着、エイジは彼女と再会し、その協力を得ながら雌伏の時を耐えた。彼の胸の内にある願いは地球とグラドスの相互理解であり、決して戦って占領軍を排除することではなかったが、一方で戦闘力の必要性も充分に理解しており、その葛藤は長く彼を苦しめたという。

〈レイズナー〉は地球に不時着した段階で、飛行や歩行を含め、自力での行動がほぼ不可能な状態まで損傷していた。〈レイズナー〉の搭載コンピュータである〈レイ〉によれば「損傷度67%」で



フレームやコックピット、メインジェネレーターなどの主要部分はほぼ無事であったものの、装甲や補機、駆動系は末端に至るまでおよそなんらかの問題を抱えていた。

機体の損傷ももちろんのことだが、主力兵装であるレーザードライフルをはじめ、エネルギーパックやミサイルなどのすべての武装も喪失していた。固定武装であるナックルショットについては、左腕を残すのみであり、右腕部は肩の基部からそっくり脱落しているという有様であったようだ。

〈レイズナー〉の損傷度合いを正確に把握するのが、これもまた困難な作業であったことも付記しておくべきであろう。機能を十全に保った〈レイ〉は自機の周辺環境について、センサーなどを通じてこれを把握しており、エイジ以外の地球人が近づくことにさえ拒否反応を示した。この過剰ともいえる防衛反応は、〈レイズナー〉のデータバンクの奥深くに収められた「グラドス創世の秘密」と呼ばれる最重要機密事項を保護するためのものであったといわれるが、同時に彼(彼女)は自らの機体機能が自己防衛のための戦闘行動を実行できる状態にないことも理解しており、やがてエイジの説得によってコックピット以外に限って触れることを許すに至った。外装の一時的な撤去、損傷部品の確定と分解作業は、まず工具類がそのまま適用できるか否か、といった問題から解決を図らねばならなかったという。

というのも、ネジやボルトといった機械部品の固定に用いられる基本概念はほぼ地球のそれと共通であったものの、工具の規格は合わないものがほとんどだった。ボルトについては、多少形や幅が異なってもどうにでもなるが、ネジや一種の“留め具”に分類される特殊な形状のものは専用の工具が必要になる。あらゆるデータを集めながら、技術者たちは異星人のメカニズムについての理解を深めていった。およそ1ヶ月で、工具類の調達が完了し、次第に〈レイズナー〉の機体構成が把握されるに至る。

ギルバート博士らがまとめた〈レイズナー〉修復計画の概要は以下の通りであった。主要部の修理はアメリカで確保した交換部品が届きさえすれば比較的速やかに完了できる。〈レイズナー〉は各構成部位がブロック単位で分割されていることが幸いした。したがって主要部については100%の復元が可能であろうとの目算が立った。むろん、交換部品が無事に到着すれば、との条件は付く。



■SPTは主たる推進装置としてスラスターを使用する。この噴射にはプロペラントとして重水を用い、豊富な電力によって水素・酸素に分解した後に燃焼させるという地球のロケットエンジンとはまったく異なる原理で動くシステムである。

そのほかの部位については、不足しているパーツを新造しなければならない箇所が多数あり、この製造の目処は現状ではつかなかった。形状の復元はさほど問題ではないが、材料の分析、調達と機能性の再現、加工といった作業が占領下でどこまでできるか。だが、ここでも日本という国特有の条件が彼らを助ける。たとえ軍事用の部品であっても、日本は工場とも呼べない規模の小さな民間町工場が受け持つ場合があり、しかもそれらは市街のあちこちに点在しているのだ。さすがにそこまでは占領軍の目も及ばない。問題は、占領軍の“文化矯正”施策が末端の製造業に及んでくるまでの間に計画を完了できるかどうかであった。

2000年代に入って関係者への取材の際に入手した情報のひとつに、〈レイズナー〉が日本にあった事実を間接的に示すエピソードがある。広島県の呉に小さな工場を構える職人のもとを、ある日エイジ・アスカが訪れたという。職人は〈レイズナー〉修復のために必要な機材の製造に欠かせない部品を造ることができるこの国で唯一といっていい高度な技術を有していたが、持ち込まれた設計図を前にしても首を縦に振ろうとしなかった。レジスタンスへの協力行為でグラドス軍に目を付けられたくなかったからだ。エイジ・アスカはそんな彼のもとに日参し、気が変わるのを辛抱強く待ったのである。やがて気心を通じた彼らは信頼関係を築き、ついに職人の手で仕上げられた数々のパーツは〈レイズナー〉を甦らせ、さらには〈ニューレイズナー〉にも用いられることになった。老人の家で暖かい家庭料理を振る舞われたエイジは、父親の故郷の味を体験し大いに感激したと伝えられている。

〈レイズナー〉の修復には、あの軌道上の戦いから実に2年半以上の時間を必要とした。すべてが水面下で実行できたことは、今から考えても奇跡であったというほかはないが、関係者たちの不断の努力と強い意志に支えられてのことであったことはいうまでもないだろう。それでも、一度でも計画に関わったことのある関係者で、修復までの間に占領軍に検挙されたり、なんらかの理由で国外に移動させられたりした者の数は半数にも及ぶ。むろん、高度な部品加工技術を持ちながら、強制労働や収監の後に事故死、あるいは病死といった例も数限りない。

1999年、〈レイズナー〉は地球文化の最後の砦にして、グラドス地球占領軍の本拠でもあるニューヨークに現れた。その復活は文字通り、高々と上がった反攻の狼煙そのものであったのである。

〈ニューレイズナー〉開発

ギルバート博士は〈レイズナー〉の構造やパーツの分析結果から、SPT技術の蓄積にも腐心していた。博士を中心とするアメリカのレジスタンス勢力、地球解放戦線機構は、〈レイズナー〉修復の体制を整えた後も、これを主目的として活動を続けている。

〈レイズナー〉の修復が仮に成功したとしても、1機のみで占領軍と戦うことは難しい。前述の通り、V-MAXシステムを有する〈レイズナー〉はほかのSPTに対して多大なアドバンテージを持つが、それは相手が少数の部隊であった場合に限ってのことで、先の軌道上戦闘の例を持ち出すまでもなく、占領軍全体を相手に大勢を覆すほどの戦いは望むべくもない。したがって、博士は充分な〈レイズナー〉用修理パーツの調達に加え、予備機の製造、さらにはエイジ以外のパイロットが乗るまったく別の機体を開発・量産することを視野に入れた研究が必要と考えた。そこで、文化矯正隊に先んじて、まずはNASAの技術者とコンタクトを図っている。

NASAの中には、宇宙開発に関して先進的な知識を持ち、かつ天才的な頭脳を駆使して“新しいもの”を生み出す才能に溢れた人材がいる。軍事技術と重なる部分もあるが、発想の方向性が異なっている、という点が重要だった。1996年当時のNASAは、旧体制から大幅な変革が実施されて、ほとんど人材の半分は米宇宙軍創設時に移籍してしまっている。しかし、宇宙開発の実質的な活動こそ宇宙軍に譲ったものの、その分、先進技術分野に特化した研究機関となっており、ギルバート博士はその専門性に期待を寄せたのである。むろん、旧NASAが主導していたアポロX-0計画に参加した経験のある博士とこの組織との繋がりは深く、内部事情に明るかったということも大きい。

ギルバート博士は彼らの陣頭に立ち、地球製SPTの開発計画に着手する。極北ルートを介し、レジスタンスのメンバーが命懸けで続々と持ち帰ってくる〈レイズナー〉のデータを詳細に分析し、まずは材料の調達、製造加工の研究を進めた。制御系などの電子機器はグラドス産技術によるアナログ・コンピュータの複製を目指したが、それが不可能と判断された場合のことを鑑み、地球産のデジタル・コンピュータに置き換えることも想定し、ハードとソフト両面の開発を行った。構造材はいわゆる傾斜機能性素材が多用されていたが、地球では稀少な金属が使用されている部位もあり、その特性の把握と再現、及び置換は相応の時間を要した。やがてグラドス本星内の反体制派のバックアップが得られるようになっても、この材料不足が根本から解決することはなかったといわれる（グラドス反体制派との協力体制については本書「地球解放計画」で詳述）。どうしても再現が不可能なものは、精度の低い代替品を造るしかないが、それでも2年以上の研究の末、オリジナル〈レイズナー〉の80%近い性能を与えることはできるだろうとの着地点を見出した（拡散接合による複合素材の研究により、部分的にオリジナルを上回る性能を示すパーツも得られたが、全体的に〈ニューレイズナー〉の外殻構造の耐久性は低下している）。

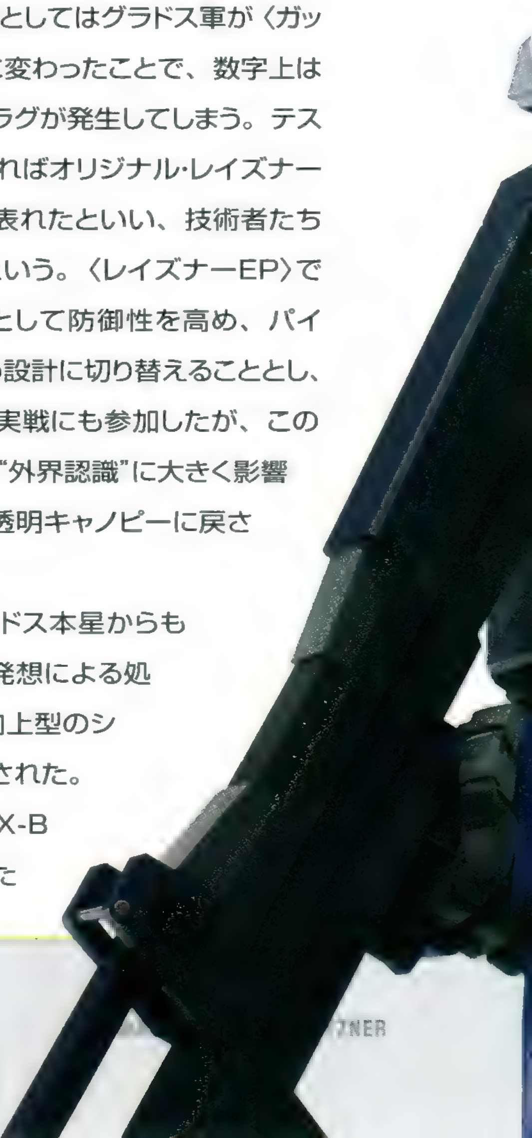
また、フレームの素材も完全再現はできなかったことから、強度を確保するためにこの部分だけで重量が8%ほど増加した。したがって、わずかに内部容積に差違が発生しており、航続性などに影響があった。結局のところ、オリジナル・レイズナーとのパーツの互換性はほとんどなきに等しい。

機動性や反応速度、環境探査能力は同等だが、耐久性や航続力には劣る、といった弱点をいかに克服するか。それだけでも量産さえ可能ならば占領軍のSPT部隊と渡り合うことは可能だろう。だが、〈レイズナー〉と同等の機体を製造するためのコスト、及び製造にかかる時間が致命的であることが明らかとなった。そのため、1機の試作機を予備機として辛うじて戦力化する程度のことしかできなかった。

計画は、やがてSPT技術の吸収、及びその立証のための試作機開発と、量産仕様を突き詰めた新型SPTの設計に分化していくことになる。試作機はいつの頃からか開発コード“ニューレイズナー”の名で呼ばれることとなったが、それが地球産であることを示す「E」の頭文字を冠するE・SPT-LZ-00X-A〈レイズナーE型プロトタイプ〉（以下、〈レイズナーEP〉）へと結びつくこととなる。

V-MAXシステムに関しては、初め、ほとんどグラドス製のパッケージのままで〈レイズナーEP〉に搭載されたが、ほかの地球産電子システムとデータのやり取りをする関係上、いったん中枢制御システムの翻訳パートを介して連結されている。このため、システム自体は内蔵であるものの、実態としてはグラドス軍が〈ガッシュラン〉で試用したような“後付け”に変わったことで、数字上はほとんど問題にならない程度のタイムラグが発生してしまう。テストでこれを使用したエイジ・アスカによればオリジナル・レイズナーとの操縦感覚の違いとしてはっきりと表れたといい、技術者たちはその調整にさらなる時間を要したという。〈レイズナーEP〉ではキャノピーを完全に不透過の素材として防御性を高め、パイロットはモニターにより外界認識を行う設計に切り替えることとし、ロールアウト直後にはそうした装備で実戦にも参加したが、このV-MAX発動時のタイムラグが問題の“外界認識”に大きく影響することが判って、オリジナルと同じ透明キャノピーに戻されている。

後に、このV-MAXシステムはグラドス本星からもたらされた新技術、及び地球独自の発想による処理技術と融合して発展を遂げ、性能向上型のシステムとして〈レイズナーEP〉に搭載された。これが、現在でいうE・SPT-LZ-00X-B〈V-MAX強化型レイズナー〉となった



のである。なお、この〈ニューレイズナー〉は〈レイズナーEP〉の機体を使用して機器や装備の交換を経て完成したものであり、単純に時期によって仕様と呼称に加え若干の外観が変わったに過ぎず、両者はしばしば同一視される。

さらに、量産のために設計された地球製SPTは、開発コードを“ドール”とされ、当初はギルバート博士らが本拠としたコロラド･スプリングスで研究が進められていた。その後、ニューヨーク郊外の同じく核シェルターとして用意された施設に移ったが、現在ではそのほかにも開発拠点は複数存在したことが明らかとなっている。万が一占領軍に発見された場合の保険として、拠点を分散しておくことは当然であるが、ニューヨーク郊外の拠点を含め、そのうちのいくつかは占領軍のSPT部隊による攻撃で壊滅したところもある。

やがて“ドール”は1999年に試作機が突如として占領軍の前に姿を現し、その後ほぼ同じ仕様で量産された。E-SPT-DL-X〈ロードテイラー〉は各拠点によって少しずつ仕様が異なり、またカラーリングも一様ではなかった。V-MAXこそ搭載しなかったが、それは占領軍の大多数のSPTも同様であり、レジスタンス勢力の戦闘力を担う中心的存在として運用されたのである。



STRUCTURE & SYSTEM OF NEW LAYZNER

ニューレイズナーの構造とシステム

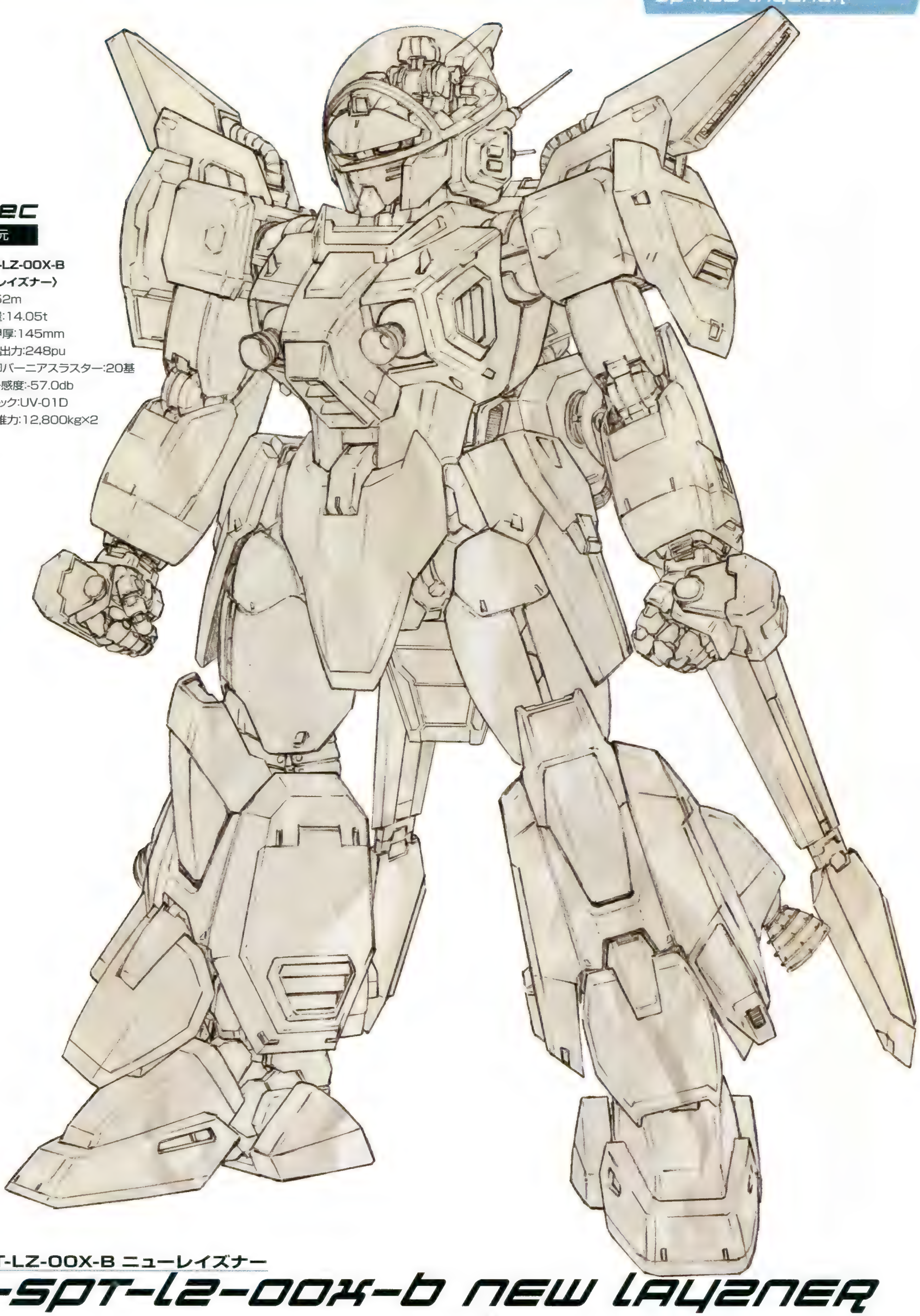
1996年のグラドス地球侵攻の際、地球各国の軍隊は自分たちの所有する既存兵器がグラドス軍兵器に対しほとんど無力なことに愕然とした。特に主力の人型機動兵器SPTには敵ながら目を見張るものがあった。その後地球奪還を目指して地下に潜った各国の軍隊や各機関などの残存勢力が集結し立ち上げた地球解放戦線機構（=レジスタンス）が自分たちにもSPTが必要との思考に至ったのは当然のことだろう。グラドスの地球侵攻が一段落した時点で地球側には数は不明ながらグラドス軍SPTが鹵獲されていたといわれている。このうちほぼ無傷で稼動する機体も相当数あったとされるが、むろんグラドスに対抗するにはまったく足りなかった。そこで地球の抵抗勢力もSPTを開発、地球製SPTを量産しようとする機運が生まれたのもまた当然のことといえよう。

地球側にとって幸運だったのはあの〈レイズナー〉を入手できたことだ。グラドスで開発された試作SPT、グラドスコードSPT-LZ-00X、通称〈レイズナー〉はグラドスの捕虜となった地球人ケン・アスカが開発に関わっている。それゆえ機体は地球的な思考で設計されている部分があり、地球側にとってコピーしやすいと考えられた。一説にはケン・アスカが息子エイジ・アスカとともに〈レイズナー〉を送り込んだのは、地球で〈レイズナー〉をコピー、量産させるためでもあったといわれている。もちろんケン・アスカがグラドスにおける〈レイズナー〉開発を指揮・統括していたわけではないので、彼が関わり地球人的思考で作られた部位は限られていたが、〈レイズナー〉に使われているグラドスの技術を解析、リバースエンジニアリングを行うにあたってはこれらが取っ掛かりとなったことは事実である。また、どうしても再現できないものは地球の技術で補うためのヒントにもなった。

最終的に完成した〈レイズナー〉のコピー機はある程度のスペックダウンは免れなかったものの、大破したオリジナル〈レイズナー〉に代わり再びエイジ・アスカが乗り込んで地球解放のための大きな戦力となったのは周知の通りである。

本項では、その“地球製レイズナー”の構造とシステムを解説する。なお、本機は〈レイズナー2号機〉と呼称されることもあるが、ここではE-SPT-LZ-00X-B〈ニューレイズナー〉とする。

本項においても、採録しているすべての情報はレジスタンスに参加して〈ニューレイズナー〉開発に携わった技術者などからの証言を基に構成している。彼らの情報ソースには、〈レイズナー〉の記憶バンクに隠されていたグラドス技術者の用意した技術解説マニュアルなども含まれており、信憑性についてはある程度保証されているものの、一部不正確な解釈、推測などが含まれることを付記しておく。

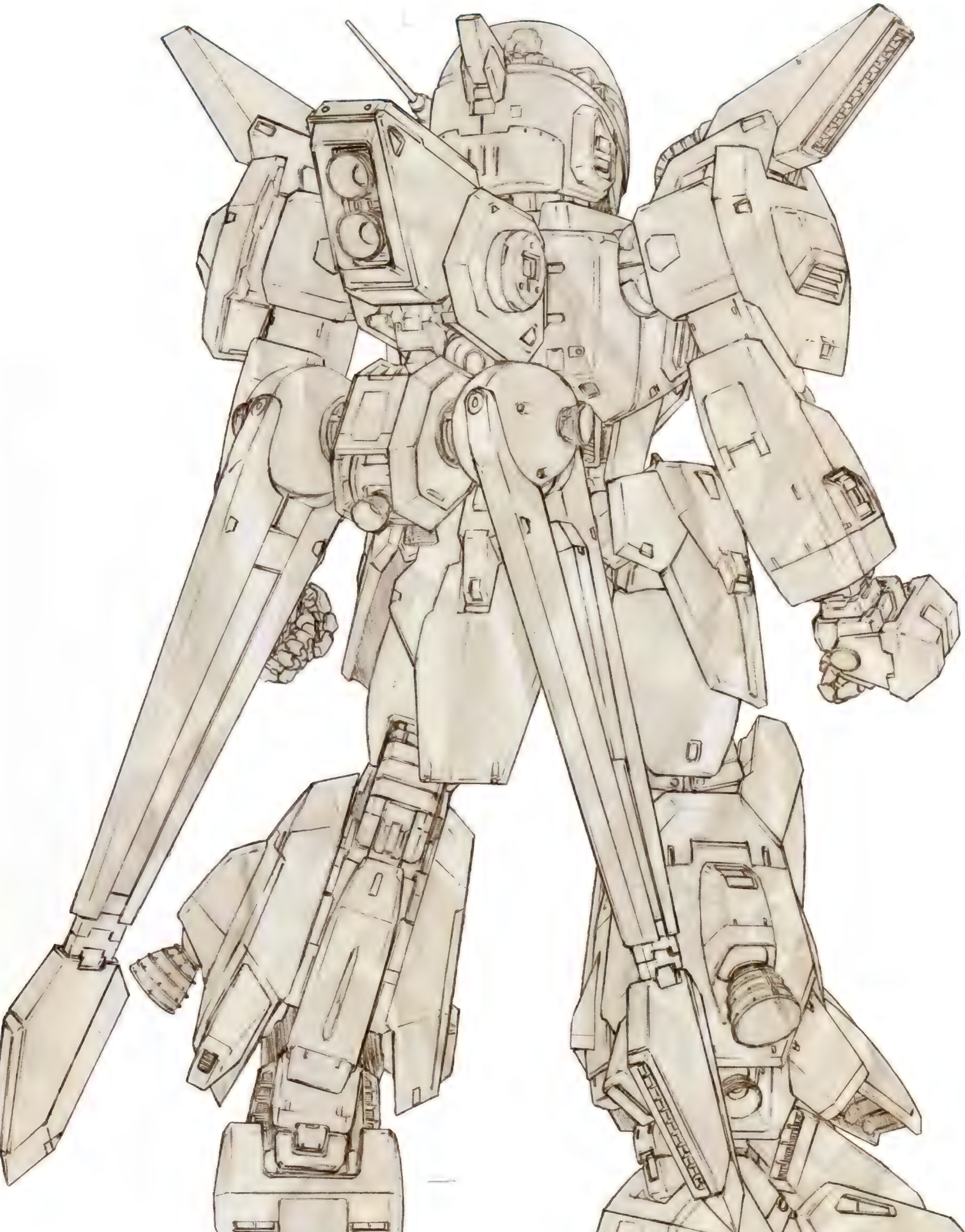


spec
諸元

E・SPT-LZ-00X-B
〈ニューレイズナー〉
全高:9.52m
全備重量:14.05t
胸部装甲厚:145mm
エンジン出力:248pu
姿勢制御バーニアスラスター:20基
センサー感度:-57.0db
バックパック:UV-01D
ロケット推力:12,800kg×2

E・SPT-LZ-00X-B ニューレイズナー

E-SPT-LZ-00X-B NEW LAYZNER



E・SPT-LZ-00X-B ニューレイズナー

E-SPT-LZ-00X-B NEW LAYZNER





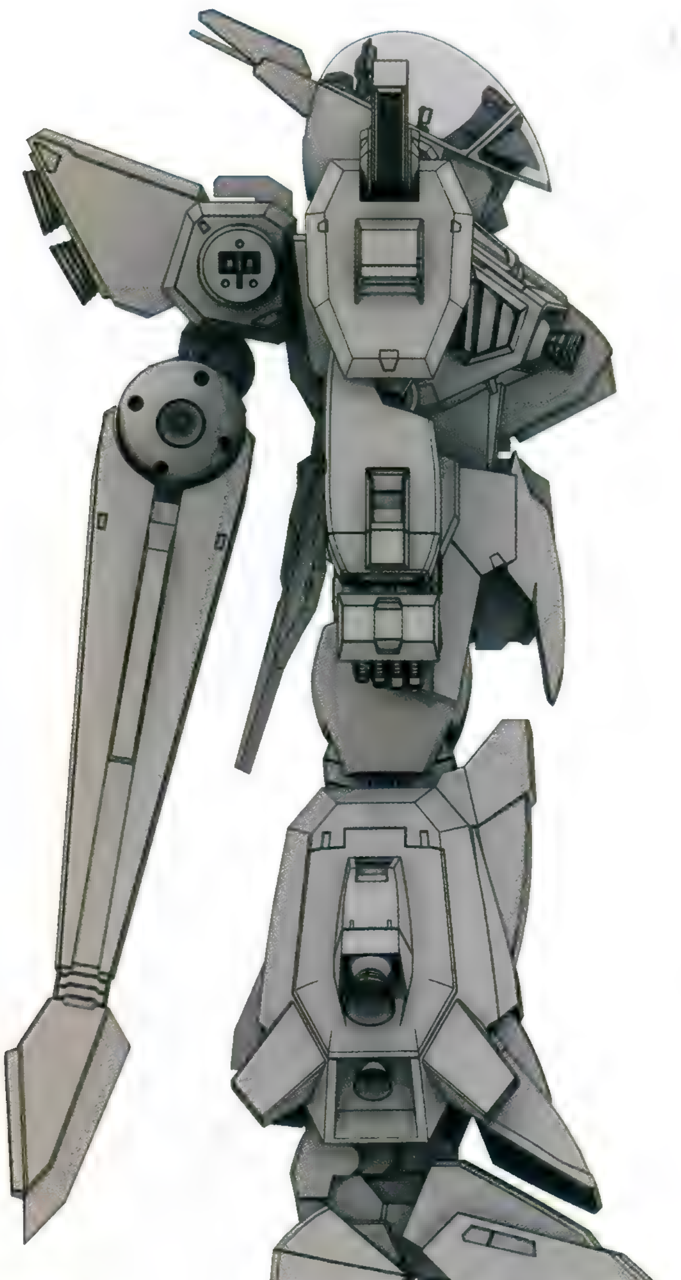
概要

E·SPT-LZ-00X-B〈ニューレイズナー〉は最初の地球製SPTであるが、元にしたSPT-LZ-00X〈レイズナー〉が試作機ということもあって量産に向かなかったため、ただ1機しか作られず、グラドスの技術を地球で再現できるかどうかの技術立証機といった面が強い。グラドスの技術の80%は地球技術で再現できたが残りの20%は再現できず、地球の技術で代替しなければならなかった。ただ、地球の技術に置き換えた方が性能が良くなった部分もあり〈レイズナー〉に比べ、大きな性能差はなかったとされる。

基本構造は〈レイズナー〉にならい、従来の地球製二足歩行兵器のような関節などの駆動部が組み込まれた構造体に装甲板などの外殻を取り付ける方法ではなく、強固な外装構造体（シェル）に駆動部や各種艤装を取り付ける方式となっている。ただ、この方式では地球側で整備がしにくいと不評だったため量産機であるE·SPT-DL-X〈ドール〉は地球型の構造に戻している。

動力源もグラドスSPTと同じ電力で燃料電池により供給される。各部の駆動は地球で作られたグラドス型モーター、いわゆるG-モーター（後述）で、内蔵の燃料電池による水素と酸素の供給を受け発電し作動する。制御系は〈レイズナー〉に搭載されていたコンピュータと同等の性能を持つ地球型演算装置を設計·開発して搭載している。ただし、〈レイ／フォロン〉に関してはハードごと〈レイズナー〉から〈ニューレイズナー〉へ移植された。

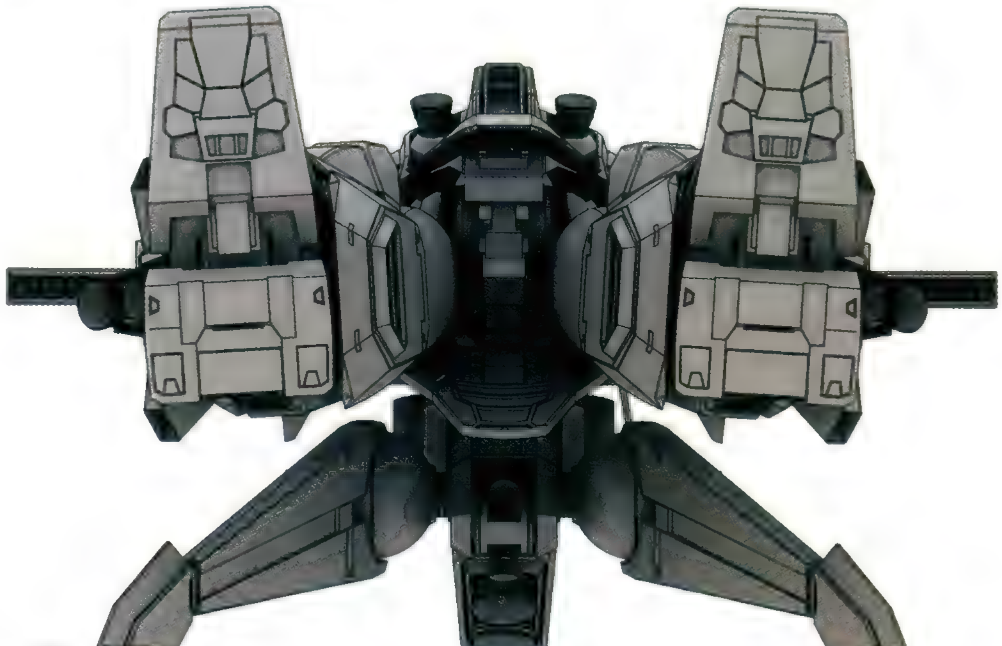
大気圏外及び大気圏内での空中機動用として機体各所とバックパックに搭載しているスラスターは、重水を燃料とするグラドス型ロケットエンジン（通称、G-エンジン。これも後述）である。このエンジンの開発も難航し、一時は地球型ロケットエンジンへの換装も計画されたが飛行性能が15%以上も低下することが判ったため、ぎりぎりまでテストを続け、安定した推力が出せるようになったのはロールアウトのわずか3週間前であったという。



■右側面



■背面



■下面

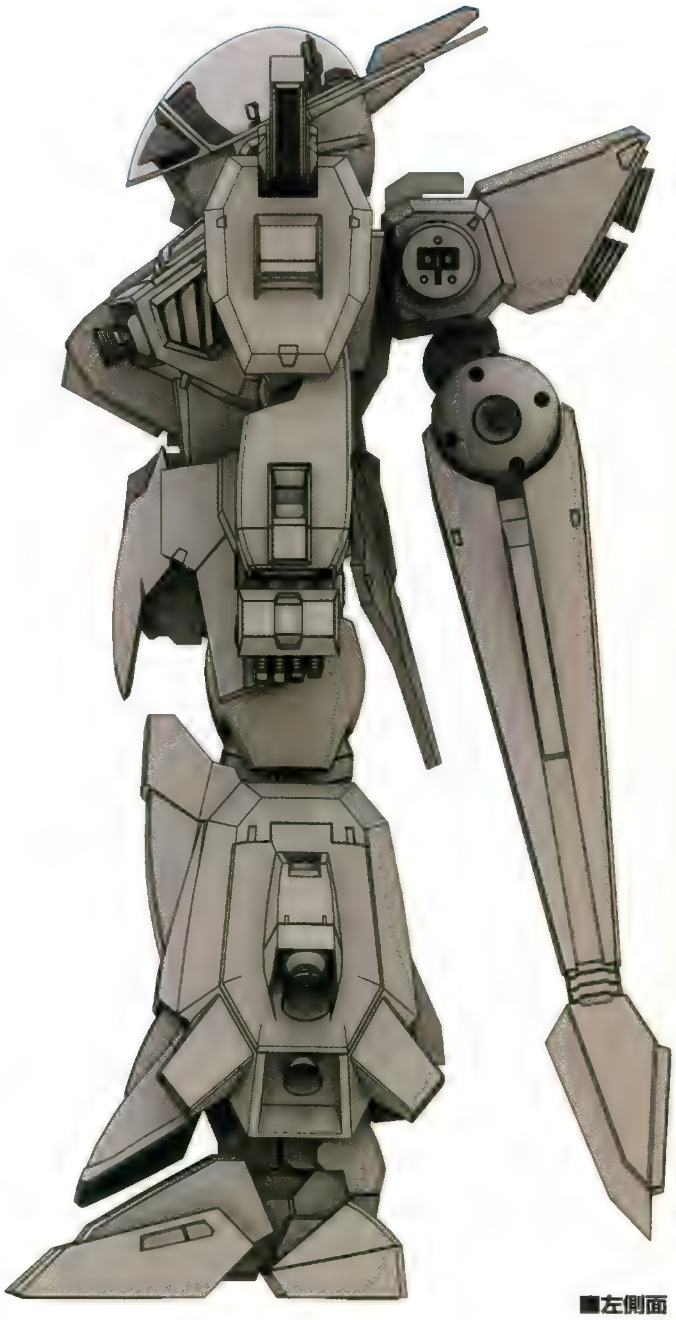
グラドス独自の技術

地球人類と同じ祖を持つといわれるグラドス人類だが、科学技術の発達は地球とグラドスの惑星生成の歴史の違いから進歩の過程が異なる。その最も大きな相違点であるが、グラドスでは地球でいう石炭紀が非常に短かったことから、地殻に含まれる化石燃料が極端に少ないことが判っている。もちろん、現生グラドス人類の文明の目覚めも火、つまり燃焼のエネルギー利用がきっかけであるが、膨大なエネルギー量を内在する化石燃料が稀少なため、大きな力を生み出す動力源にはならなかった。それを補う形で発展したのが、電気と磁力を利用する技術であり、発電、蓄電技術である。

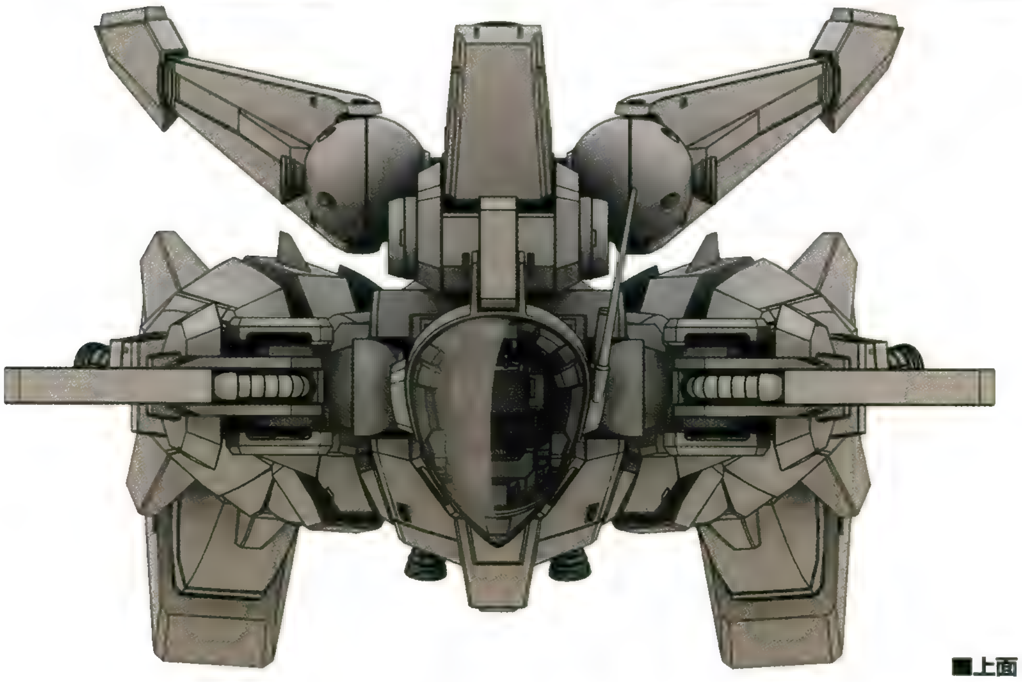
当初は動物や植物の強酸、強アルカリの電解質体液からの発電技術を発達させていったが、これは動物の脂肪や乾燥した植物を燃やしてエネルギー源としていた地球人類とは対照的である。また雷、静電気を貯める技術なども徐々に発達し、最終的には太



■前面



■左側面

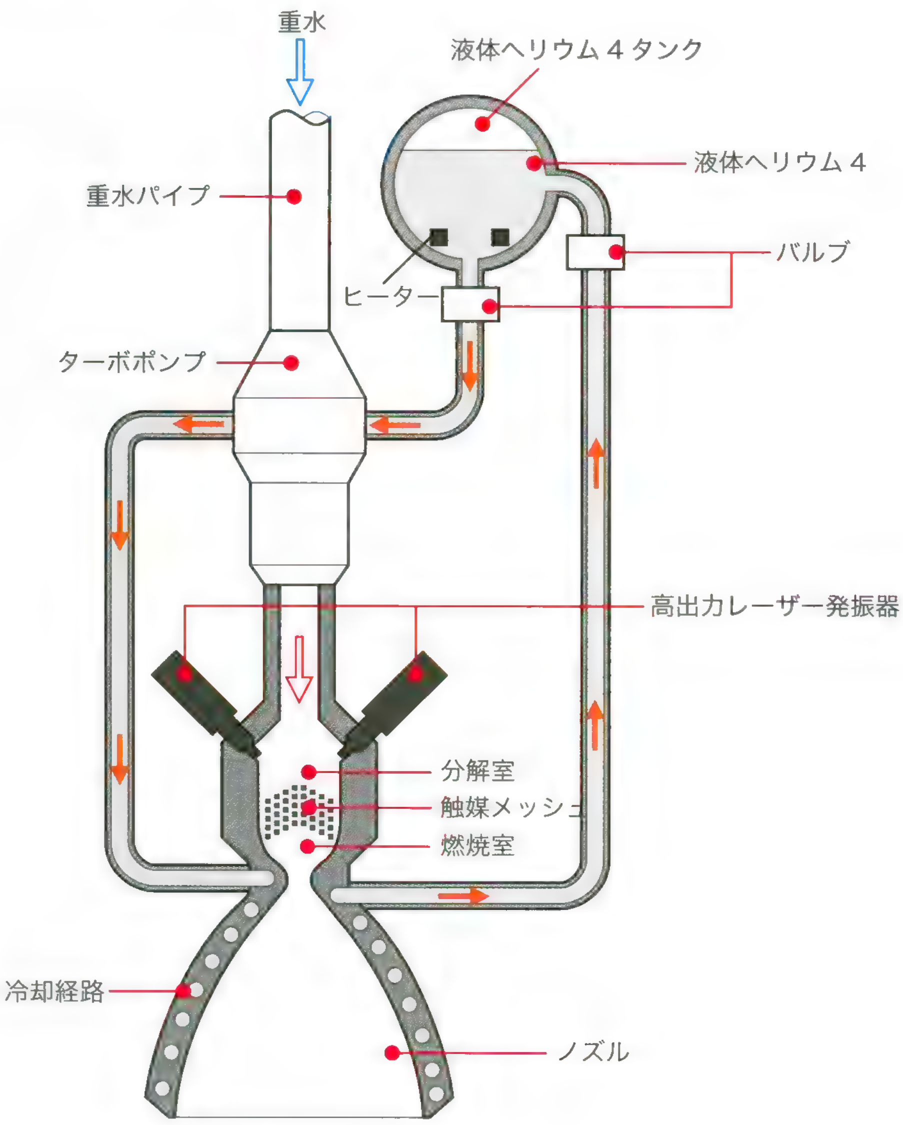


■上面

陽光や水力、風力といった自然エネルギーを利用しての大規模発電システムが構築され、神聖マザーコンピュータの本格起動に繋がった。この時点で現生グラドス人は神聖マザーコンピュータに収められている先住グラドス人の技術を理解できる最初の入り口に立ったといえる。

しかし、以降の現生グラドス人類は神聖マザーコンピュータから得られるノウハウをただ消費するだけの存在になってしまったといえる。そして神聖マザーコンピュータ由来の技術もまた電気と磁力エネルギーを利用するものが大半であった。これももちろん、化石燃料が少ない惑星グラドスで先住グラドス人が進化させていったものである。その中でもすべての電力供給源となる燃料電池技術、電気エネルギーを高い熱エネルギーに変換するレーザー技術、そして動力源となる電磁石利用技術が優先的に立証、実用化されていった。

G-エンジン（グラドス・エンジン）



ノーマル　G-エンジン作動順

1. 液体ヘリウム４タンク内を加熱、内圧上昇
2. 液体ヘリウム4タンク、バルブ開放
3. 液体ヘリウム4が重水用ターボポンプを駆動
4. 重水圧送
5. 重水が分解室に流入
6. 分解室内触媒メッシュに高出力レーザー照射
7. 触媒メッシュとレーザー光により重水が分解
8. 燃焼室でレーザー光が収束、酸素と水素に点火
9. スロートを通り燃焼ガスが超音速まで加速、ノズルから噴出
10. ターボポンプを駆動した液体ヘリウム4がノズルを冷却、液体ヘリウム4タンクに戻る

燃料電池

天然の電解質利用から始まる、グラドスでは古くから確立された技術であり、基本原理は地球のものと同じであるが、膨大な時間をかけて様々な素材が試されている。それでも神聖マザーコンピュータからの情報による大きなブレイクスルーがあり、より大きな電力が得られるようになると同時に小型化も進んだ。そのため、現在のグラドスではSPTをはじめとする各種の兵器のみならず一般の輸送機械、工作機械、建設機械などほとんどすべての機械類の動力源として内蔵されている。

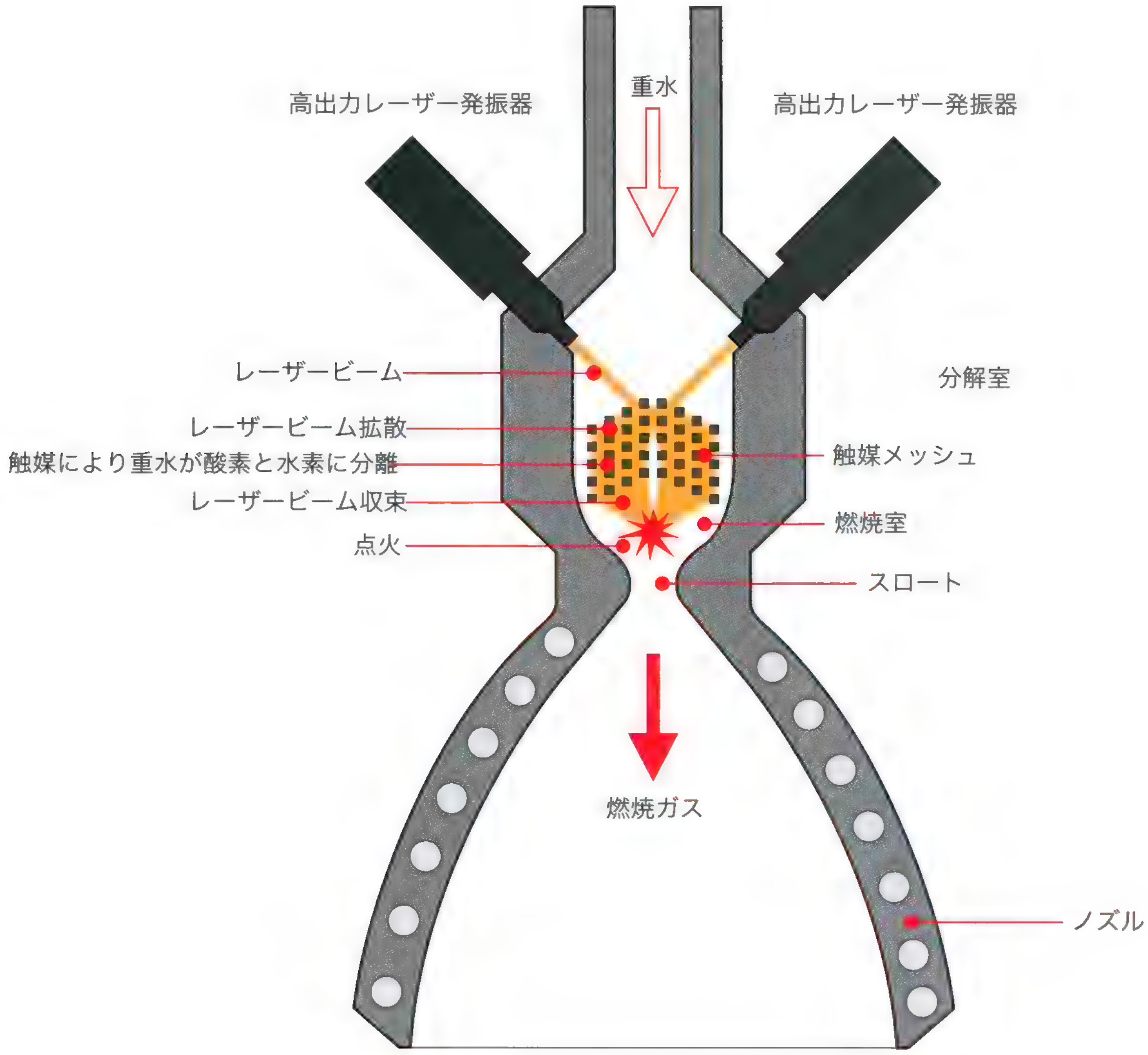
現在SPTに搭載されている燃料電池は、異なる性質を持った複数のセラミック電解質多層構造体と電極金属板を機能傾斜結合したコアを使う固体型で、電極と電解質が傾斜機能結合されているためイオンが移動しやすく、発電効率に優れる。またセラミック電解質は多孔質で内部は常に触媒金属イオンを含有する水で満たされており、通常作動温度200℃で電解質のイオン透過率が最大効率となり出力が最大となるが、常温（15℃）でも酸素と水素を供給するだけで約20%の出力が可能である。SPTのメインシステム用主燃料電池であればこの20%だけでも完全停止状態のSPTを再起動させるに充分な電力量を供給可能といわれる。

G-エンジン（グラドス・エンジン）

グラドス独自の燃焼システムによるロケットエンジンで、ベル型ノズルを持つ。外観は地球のロケットエンジンとあまり変わらない。しかし燃料は重水を使っており、光触媒と高出力レーザーで重水を瞬時に酸素と水素に分解、燃焼させる方式で、使用されている技術はまったく異質である。見た目には重水がそのまま燃焼しているようにも見える。

G-エンジンは液体酸素、液体水素を燃料とする地球型ロケットエンジンに比べ、燃料系配管が1系統で済むが常時高出力のレーザーを発振させておかねばならず、電力の消費が大きい。電気技術を発達させてきたグラドスならではのエンジンといえるだろう。その歴史背景から燃焼エネルギー利用には比較的積極的ではなかった現生グラドス人であったが、神聖マザーコンピュータ本格起動で起こったいわば技術パンデミックで燃焼エネルギーも初めて注目され、特に高速移動や大きな駆動力を得るために徐々にだが利用されていったようである。この爆発的な燃焼力の利用は、V-MAXシステムへの応用に見ることができる。

また水の電気分解によって得られる水素は、環境への配慮から特に積極的に利用されるようになったもので、水素を燃料とする内



燃機関やガスタービンエンジンなども製作されたという。G-エンジンはグラドス人が宇宙へ進出する際に開発が進められたもので、レーザー発振技術も含めすべてが神聖マザーコンピュータの情報から生み出されたとされる。ちなみに「G-エンジン」という名称は地球人のみが使用しており、従来は「グラドス·エンジン」と称していたのが、「グラドス」という名称を使うことに抵抗がある人々がG-エンジンという名称を使い始めたとされる。地球人技術者によっていくつかの新たな名称が提唱されたこともあるが、これらはほとんど定着しなかった。「G方式」「G型(タイプ)エンジン」などとするメモも見つかっている。

G-モーター(グラドス·モーター)

電気と磁力で駆動するいわゆる電気モーターであり、地球のものと原理的には変わらないが、これも長い時間をかけて素材や構成が最適化されおり、地球のものと比べ同じ消費電力でも5倍からものによっては10倍以上の力を発生させることができるといわれる。

〈レイズナー〉に搭載されているG-モーターはコイルの中を駆動子が移動するもので、駆動子は燃料電池を内蔵しており自ら電力を発生させて作動する。そのため、外部からは水素と酸素を供給するだけとなっている。またコントロール信号はセントラルコンピュータからの指令を電波に変換し、酸素と水素の供給管内を通って各モーターに伝えられるため、コントロール用信号ケーブルも不要である。このため、ケーブルによる電力ロスがほとんどなく、レスポンスも早い。

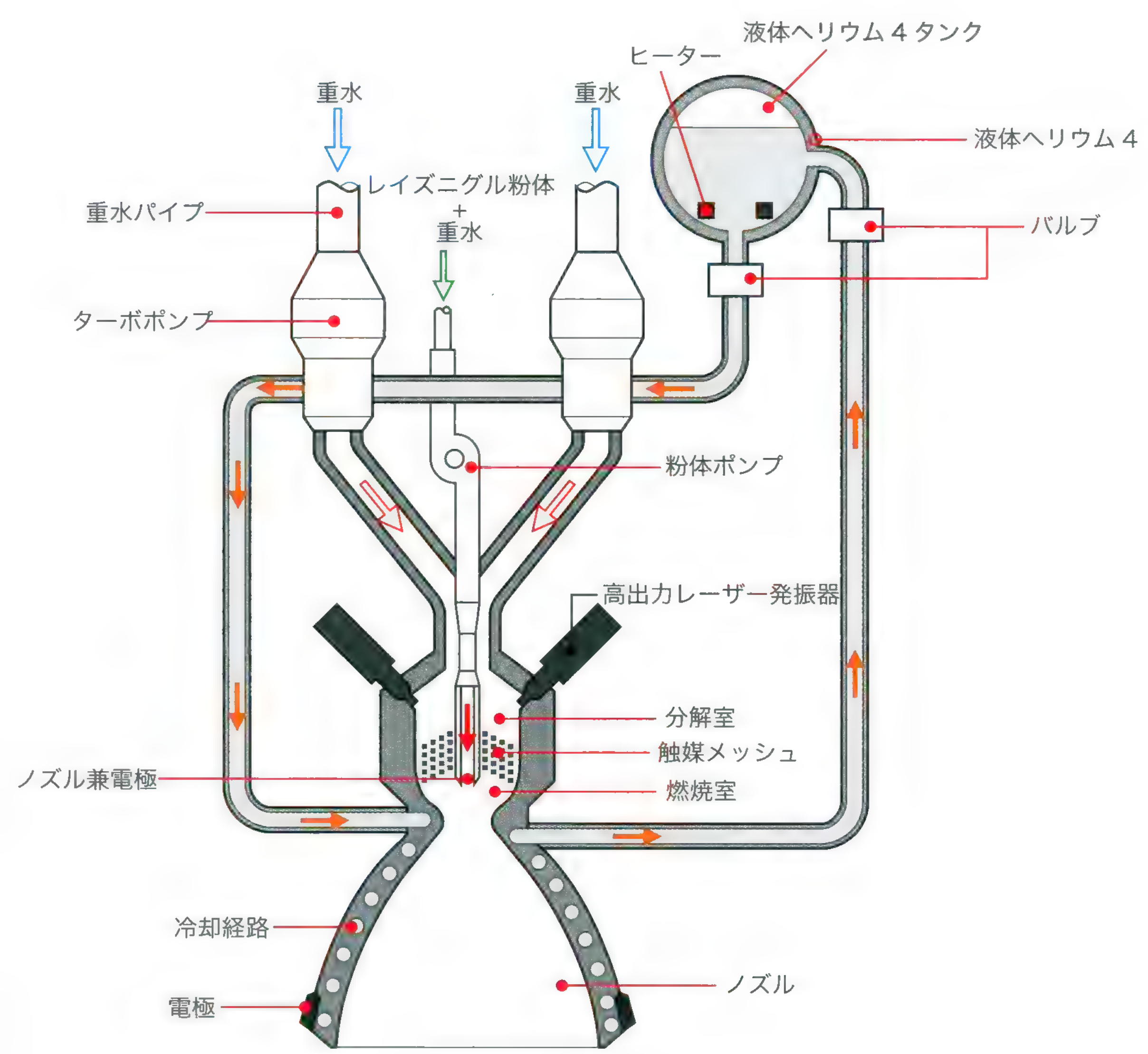
ラウンド型とリニア型があり、文字通りラウンド型は回転運動を、リニア型は直線往復運動を行う。欠点としては地球製の電動モーター、リニア·アクチュエーターなどと比べ発熱量が多いことが挙げられるが、グラドス製SPTは廃熱リサイクルシステムがうまく設計されており、通常使用ではほとんど問題は発生しない。ただし、出力を増大させるV-MAX発動時はあらゆる放熱·冷却手段を取る必要がある。

名称については、G-エンジンと同様の経緯で定着したが、SPTに用いられる駆動系は基本的にすべてがこのG-モーターであることから、特に地球方式のものとは区別されずに単にモーターとのみ呼ばれることも多い。

グラドス型コンピュータ

グラドス型コンピュータは地球のものと同じ構成で、入出力装置、演算装置、記憶装置に分かれ、プログラムを内蔵して必要に応じて呼び出し演算を行ういわゆるノイマン型コンピュータであるが、デ

V-Maxシステム付G-エンジン



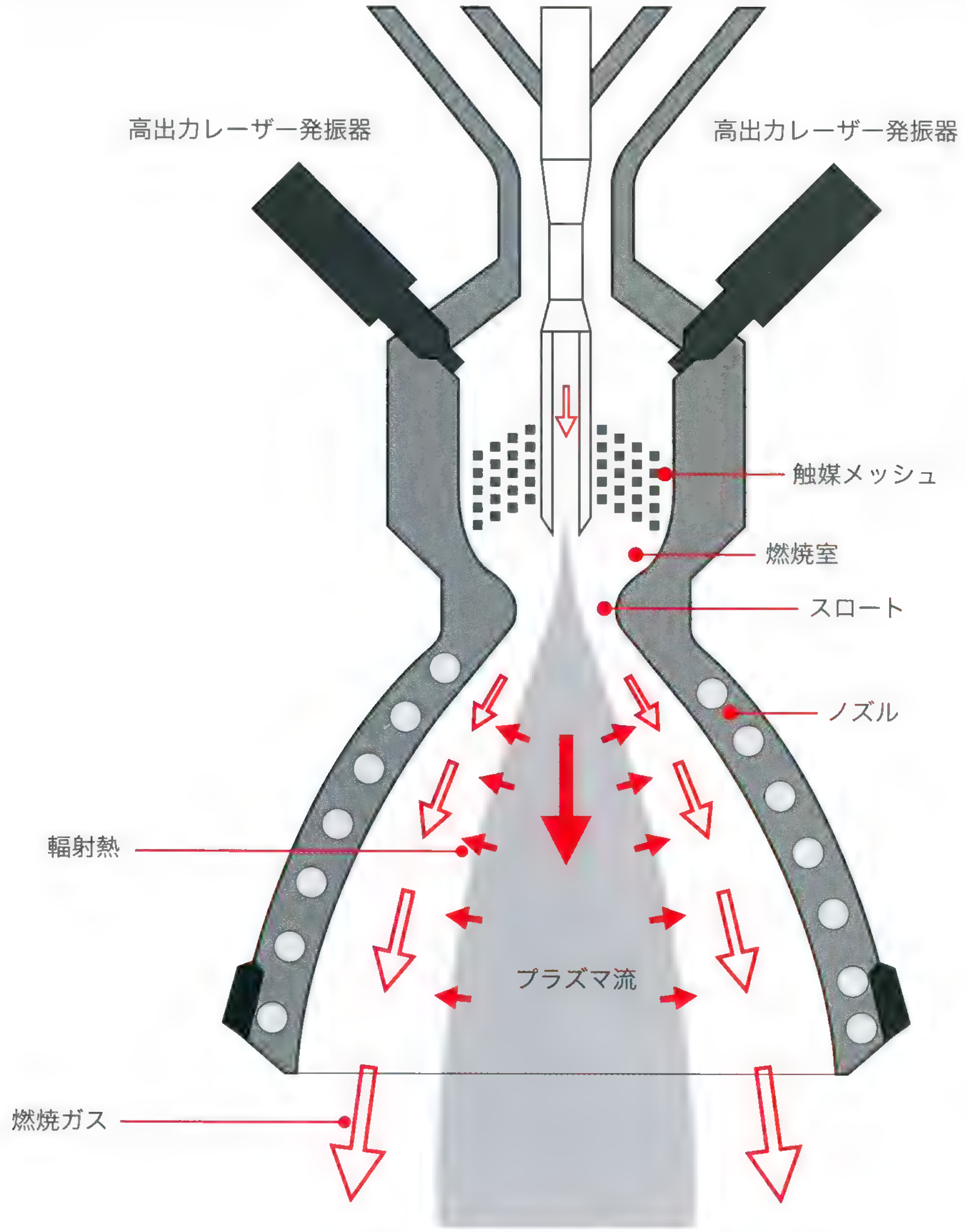
ジタル·コンピュータではなく、データはアナログのまま扱われるといった違いがある。

この方式では膨大な量のデータ量を扱うことになるが、複数の同じプログラムが並列処理を行うため演算は非常に高速なものとなるという結果が出ている。プログラムは地球製デジタル·コンピュータのような記憶装置に記録されたプログラムコードではなく、地球製アナログ·コンピュータのような電子回路そのもので構成され、地球のブロック玩具程度の大きさを持つ統一規格の直方体(プログラム·キューブ)内に構築されている。ひとつのプログラムに対しプログラム·キューブは数百あり、それが同一規格のコネクターで立体的に組まれ、同時に作動する。回路はキューブの中で3次元的に構築されており、非常に複雑だが3次元的に組まれている分、衝撃や加速度に強く壊れにくいという。このグラドス型コンピュータは非常に優秀だが構造が複雑で、地球では〈レイズナー〉に搭載されていたコンピュータをそのまま複製することがやっとで、長い時間かけて作り上げたものの正常に稼動するまでの調整にさらに長い時間がかかった。地球人技術者でこのグラドス型コンピュータの仕組みを完全に理解している者は極めて少なく、5人にも満たないといわれている。

機体構造、材質

もともとグラドス製SPTの基本的な構造は地球でいうモノコックに近く、高強度の素材で成型されたシェル内に駆動装置などが取り付けられる。「戦車の動力入りプラスチックモデルのようだ」と表現する技術者もいる。

シェルは各種の荷重を受け持つほか、装甲板も兼ねている。〈レイズナー〉の場合はV-MAX発動後の放熱や余剰水素のパージのため各ブロックのシェルには大きめの開口部が設けられ、普段は同材質の装甲板で塞がれている。この開口部のため、捩れなどに対する剛性は落ちているのだが開口部の形状や装甲板での塞ぎ方、さらに内部に補強材を加えるなどの対策により、全体的な強度は開口部がない場合の同じ形状のシェルとほぼ変わらないという。この開口部を持つシェルは〈レイズナー〉より前のV-MAX非搭載SPTには見られないもので、内部の補強材の入れ方などは地球のものに似ているといわれる。これにはV-MAX後の大きすぎる余剰熱の処理方法に苦慮していた設計チームにケン·アスカがアドバイスしたのではないかとする説もあるが、ケン·アスカは構造力学の専門家ではないため、彼とともにグラドスに持ち去られた地球製の宇宙船を参考にしたとも考えられている。



V-Max 発動時

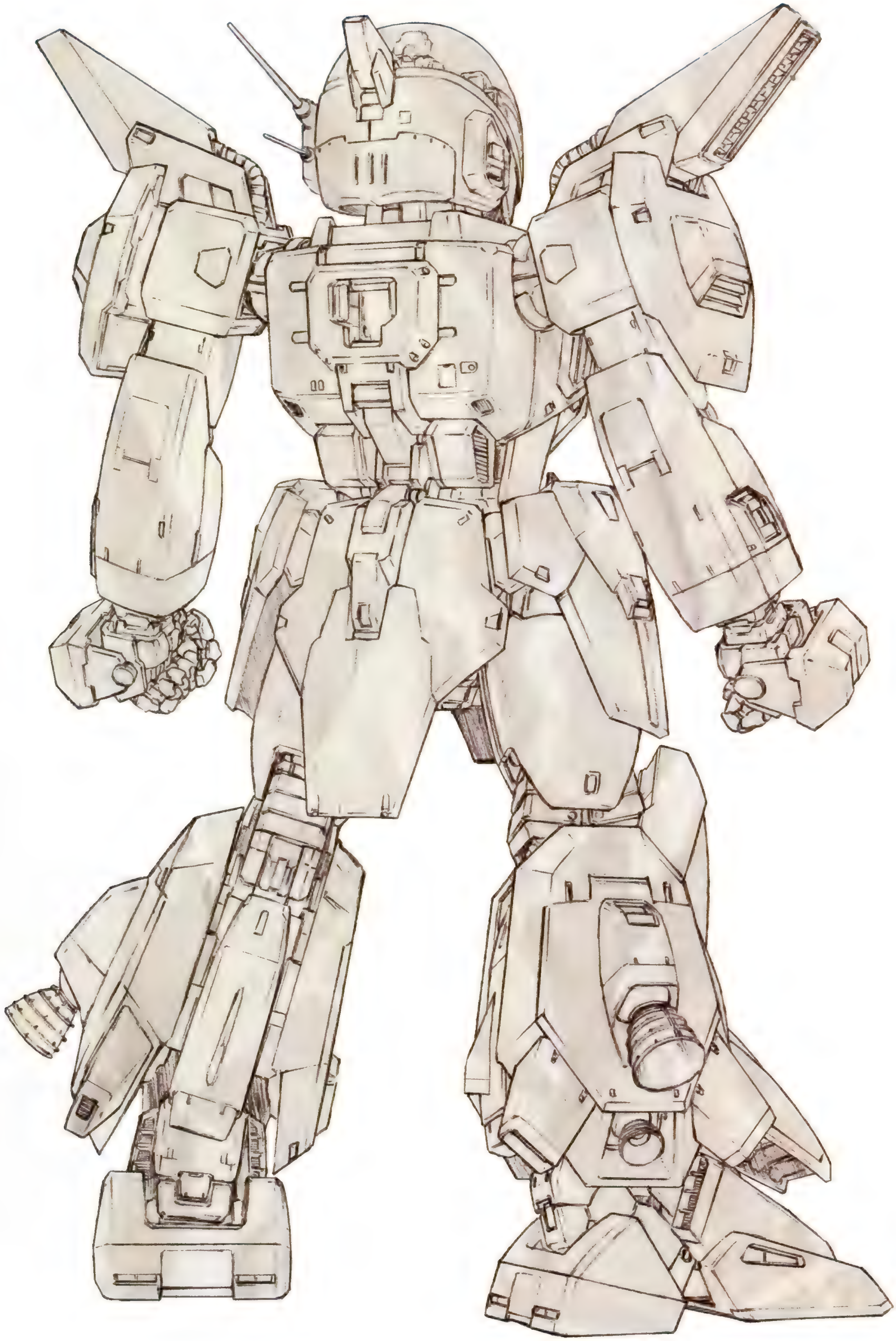
1. 液燃焼室内にレイズニグル粉体と重水の混合物を投入しプラズマ化させる。
2. プラズマからの輻射熱が燃焼ガスにエネルギーを与え推力が上昇する。
3. 粉体ノズルに正の電圧を書けプラズマ内の電子を引き寄せ、プラズマ流自体をプラスにする。
4. ノズル開口部に負電圧をかけ、プラズマ流をノズル外へ誘導。

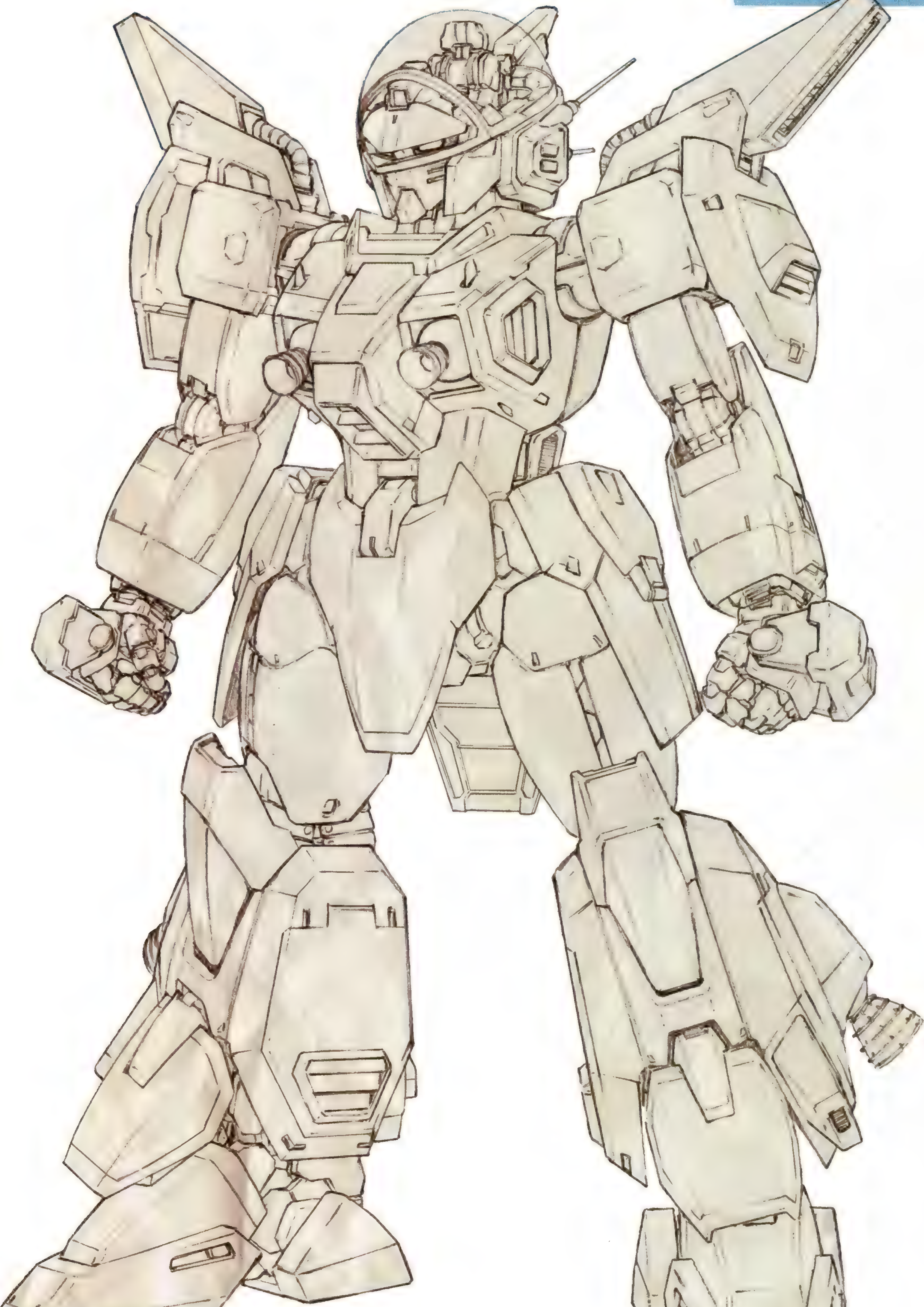
〈ニューレイズナー〉も形状を含めほぼこの〈レイズナー〉のシェルをコピーしている。シェルの材質はミクロン単位のファイン·セラミックとチタン合金の薄層を交互に重ねた、各層の境界が分子レベルで互いに融合する傾斜機能材料であり、セラミックの耐熱性、高剛性と金属の高張力、柔軟性を兼ね備えている。特に耐熱性に優れ、その高い熱伝導性能とあいまって破壊を目的とした高出力のレーザービームに対してはセラミックのみ、金属のみ、あるいはそれらを重ねたハイブリッド材よりはるかに高い耐性を持つ。そのため、構造材と装甲板を兼ねた使い方ができた。

この素材は各々の層を薄くし積層するほど単位厚あたりの強度が増すが、地球ではグラドス製ほど各層を薄く（100μ前後）できなかったことから、全体の厚みを増すことで強度を確保している。無理してグラドス製と同じ積層を再現するよりも許容範囲内で厚みを増すことで同等の性能が出せるなら、コストや開発時間の節約になるとの判断もあったようだ。

このシェルは二重構造になっており、隙間が駆動装置用の水素と酸素の流路となっている。関節のカバーなども同じ構造をしており通常は約10気圧の圧力がかけられマニピュレータの先まで酸素と水素を送る。流路は酸素と水素で分けられ、巧みな設計により互いが必要以上に近づかないようになっている。また、流路の内側には液化した窒素を含有したジェルが塗布してあり被弾やデブリなどでシェルに穴が開いた場合、圧力の低下とともにジェル内の窒素が気化しジェルが膨らんで穴を塞ぐ。

駆動用のモーター、アクチュエーター、スラスターなどはメカニズム的にはグラドスのものだが、構成しているパーツの材質はほとんどが地球製である。地球製材料への置き換えはケン·アスカが〈レイズナー〉のセントラルコンピュータの記憶領域に極秘裏に忍ばせておいた各パーツ及び材質のデータシートが役に立ったという。ただ、地球製よりはるかに効率よく発電できる燃料電池用電解セラミックや水／重水分解用装置に使われる金属触媒であるが、当初地球で作られたものはグラドス製の70%ほどの能力しかなく、〈ニューレイズナー〉には〈レイズナー〉の予備や、グラドスの反体制派からグラドス政府及び軍の目をかいくぐって送られてくる供給物資を使用した。グラドスからの物資供給は不安定で、それが〈ニューレイズナー〉を量産しなかった理由のひとつになっている。〈ドール〉においては地球製電解セラミックと触媒の性能が技術者の血のにじむような努力により90%程度まで近づけることに成功したため、地球製に切り替えている。





E•SPT-LZ-00X-B ニューレイズナー

E-SPT-LZ-00X-B NEW LAYZNER



head
頭部

頭部は他のSPTと同じく、上部にパイロットが搭乗し機体を操作する操縦席があり、下部には各種センサーとその処理装置とセントラルコンピュータが集中的に搭載されている。若干の違いはあるものの基本形状・構造は〈レイズナー〉と変わらない。また、頭部自体が脱出ポッドとなっている。他のブロックのシェルと同素材だが厚みは足されており、胴体が爆発しても破壊されずに内部を守り、またそのまま大気圏に再突入が可能である。

操縦席を覆うキャノピーは材質がチタン・リチウム系の透明金属。グラドスの技術供与があったのだが地球でこの大きさのものが製造できなかったため、グラドスの反体制派が技術サンプルとして送ってきた、〈レイズナー〉製作時にいくつか作ったキャノピーのうち寸法の誤差が大きく頭部に装着できなかったものを、頭部をキャノピーに合わせて設計し直して取り付けている。

もともと他のグラドスSPTと比べて大きく、視界はかなり良好であった〈レイズナー〉のキャノピーだが、透明金属は金属とはいっても強化されたハイパー・アクリルよりは確かに強度があるが、せいぜいがカーボン・スチール製の装甲板程度である。裏を返せば他の部分より強度が低い脆弱部分が増えるということでもある。そこで他のグラドス製SPTのキャノピーに施されているオレンジあるいは赤い耐レーザーコーティングではなく、耐レーザー光、耐電磁波に加え耐衝撃に優れるといわれるグリーンの蒸着セラミック・コーティングが施され、少しでも強度を上げる工夫が施されている。

キャノピーは前後で二分割されており、前部は頭部に固定され、後部は後端1箇所にヒンジが取り付けられてパイロットの昇降の際に上方に開く。後部キャノピーの前部及び頭部との接触面には金属のフレームとシーリング材が取り付けられ、また計6箇所にロック機構がある。接触面のパイプ状のシーリング材には窒素を送り込んで膨らませて隙間を完全になくすので大気圏外でもヘルメット、酸素マスクなしで搭乗が可能である。ただし規定ではコックピット内が与圧されていてもヘルメット、マスクの着用は義務付けられている。

前部キャノピー内に見える操縦席の前方コンソールの前面には目のような2つの光学センサーが並んで取り付けられており、〈ニューレイズナー〉が大きなヘルメットをかぶっているようにも見え、これも〈レイズナー〉とデザイン、機能的に同じである。その下には前方レーダー、温度や磁気、放射線、気流、などの各種の環境分析用センサーが集中して配置されている。レーダーは頭部の左右と後頭部にも配置されて合成開口レーダーとなっており、データは合成され一気にリアルタイムで360°全周囲の探索が可能である。このレーダーシステムは地球製であり、グラドスのシステムを地球製に置き換えた数少ない部分のひとつである。また、頭部左側側方レーダーの後部には通信用のアンテナが取り付けられている。無線通信システムはグラドスと地球の両方の周波数帯に対応している。

1 MB-SPT-001射出シート
簡易式の生命維持装置、救命キット、パラシュートを内蔵した装置で、下部には個体燃料式ロケットモーターを搭載する地球製SPT専用シート。高度ゼロ、速度ゼロ、大気圏内、宇宙空間のいずれにおいてもパイロットを安全に機外へと脱出させることができる。基本デザインはグラドス製のものを踏襲しているが、万全を期すためヘッドレスト上端にはキャノピーブレーカーを装備した。アームレストには操作用デバイスを集中させているが、これも同様である。

2 サイドコンソール
操作系や機体駆動機能のモニタリングのために設置されたサブシステムであるが、通常、機体の操作には関与せず、あくまでもスタンバイ機材で、シートに装備された入力デバイスに何らかのトラブルが生じた場合にのみ使用される。また、メンテナンス時に、駆動部位ごとにセパレートしながら機能確認する際などは、このコンソールからアクセス、モニターする。

3 ターゲッティングセンサー
照準用の専用センサーで、赤外、可視光の視覚情報収集装置である。光学センサーと重複する装備だが、照準専用とすることで、主光学センサーが機能不全に陥った場合にも戦闘行動が可能となるうえ、視覚情報収集のバックアップデバイスとして用いることが可能である。

4 光学センサー収納部
近赤外から紫外手前までのおもに可視光域の光学情報を収集するカメラが設置される。左右で同じものが搭載され視差による測距が可能。片側の基本セットは「望遠」「中・近焦点ズーム」で、これに加え赤外、紫外のカメラ(これは左右に単式で搭載)を装備する。

5 リアビューミラー
航空機的発想から地球で追加された装備。非機械・非電子式であるがゆえに意外と効果的な装備といえた。

6 キャノピー(固定部)
開閉フードとは透明金属積層間機能層の組成が異なり可視光域電磁波の選択透過性が高い。もちろんこれは、内部に光学センサーが設置されているためである。

7 前方監視レーダー用ドーム
機体前方に頂角80度の円錐を描く範囲内を探知するアレイレーダーが内蔵される。頭部の運動に連動して、制限はあるもののレドーム全体が上下左右にスイングし、探知域の維持を行う。

8 環境センサー
スリット内にバイオセンサーが内蔵され、周辺環境の有害、有毒物質を検知する。

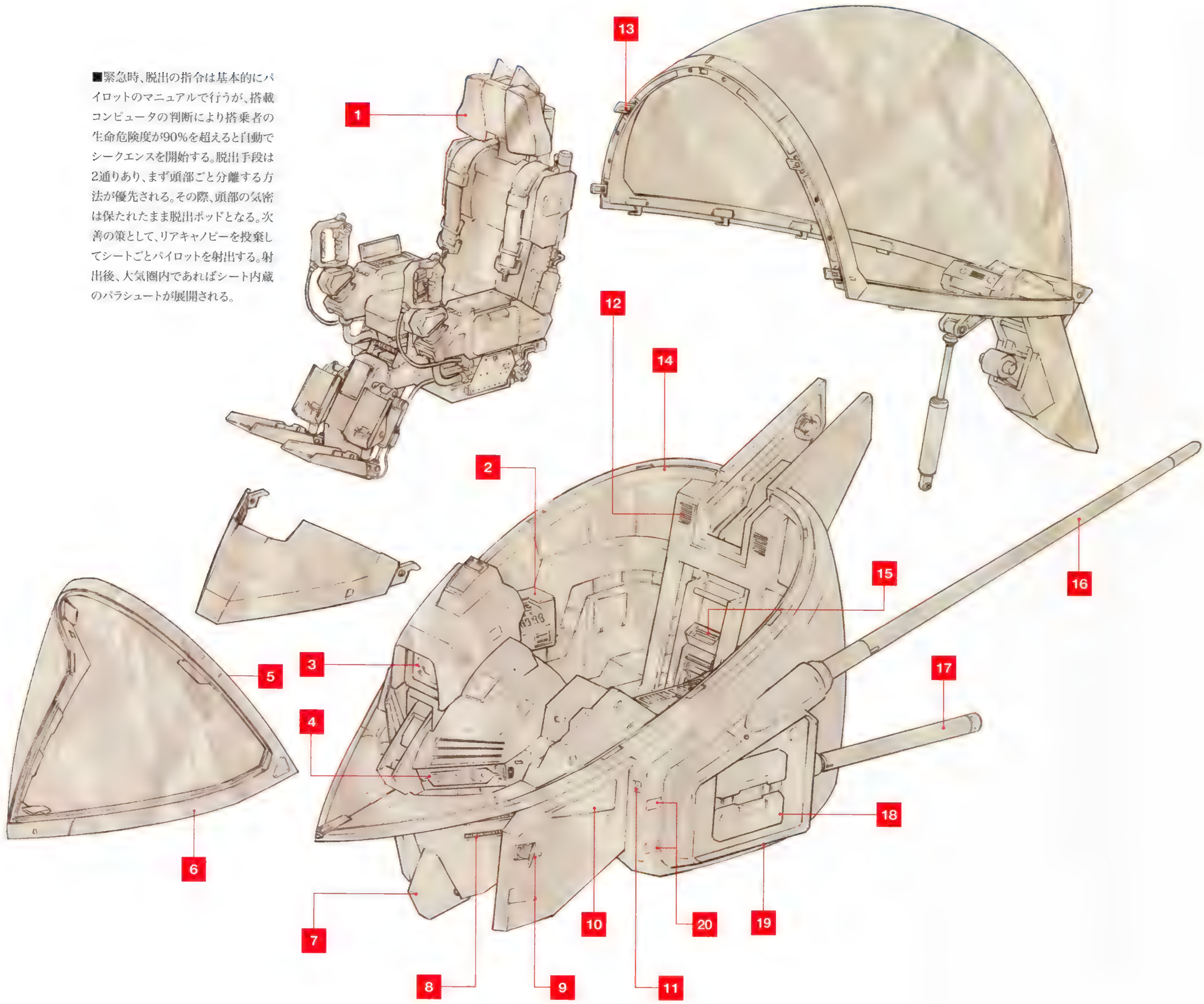
9 予備光学センサー(リトラクタブル)
メイン光学センサーが機能不全となった場合や、視覚情報の補助が必要な状況で使用するもの。左右に2基ずつ設置され、通常は収納ベイ内部に格納されている。

10 側方監視レーダー
機体側方を探知するアレイレーダーが内蔵される。

11 キャノピー開閉スイッチ
通常の搭乗に際しては、昇降用ロッドを操作した時点でキャノピーは自動的に開くが、この手続きを踏まず乗り込む必要が生じた場合にこのスイッチを用いる。セキュリティが必要な場合は指紋認証により、パイロットを含め10名に制限する事前登録が可能なシステムとなっている。

12 エアダクト
浄化された空気の吹き出し口。

■緊急時、脱出の指令は基本的にパイロットのマニュアルで行うが、搭載コンピュータの判断により搭乗者の生命危険度が90%を超えると自動でシークエンスを開始する。脱出手段は2通りあり、まず頭部ごと分離する方法が優先される。その際、頭部の気密は保たれたまま脱出ポッドとなる。次善の策として、リアキャノピーを投棄してシートごとパイロットを射出する。射出後、大気圏内であればシート内蔵のパラシュートが展開される。



13 キャノピー・ロック
鉤状のロックピンは地球製航空機の技術を流用したものといえるが、前部固定キャノピーやコックピット外殻との接触面には完全な気密性を確保するための装備が内蔵される。通常、大気のある環境ではロックピンによる締結のみだが、宇宙空間においては、接触面に貼られたインフレーション・コードと呼ばれる細いパイプ状の特殊ゴム構造物内に窒素を送り込み、これを膨張させることで気密性を確保する。

14 コックピット内送受信用アンテナ
パイロットと機体搭載AIとの意思疎通のためヘルメットやヘッドセットに内蔵される通信システムとリンクし双方向の意思伝達が可能となる。機上コンピュータの得た情報をパイロットに伝達する以外に、外部からパイロットへの電子的攻撃を遮断する「電磁気的防壁」も形成している。

15 エアコンディショナー
コックピット内環境を維持する。特に二酸化炭素など有害物質の濾過を行う

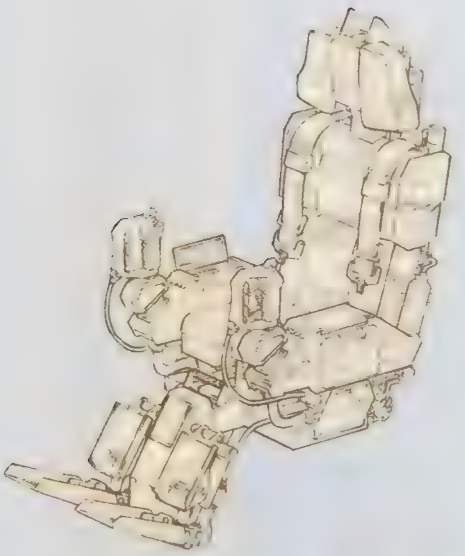
16 通信用送受信アンテナ
長波、中波、短波域の遠距離通信送受信用複合アンテナ。デフォルトでは5120チャンネルでのアナログ、デジタル双方向通信に対応する。

17 通信用送受信アンテナ
主として地上の施設、車両、ならびに他のSPTとの近距離通信の波長域に対応するアンテナ。

18 拡張装備接続アダプター
おもに宇宙における運用でコックピットの気密性向上やキャノピーの装甲強化をはかるため、外装式の"ヘルメット"様装甲を取り付ける目的で装備されたアダプター。通信装備、探知装備の接続も可能。

19 レーダードーム
側方から上方にかけての探知を行うアレイレーダーが内蔵される(反対側も同様)。

20 レーダー機器アクセスハッチ
頭部に配置されたレーダーの点検、テストの際にモニターなどを接続するためのポートが内蔵される。



MANEUVERING SYSTEM

操縦席及び操縦システム

〈レイズナー〉と〈ニューレイズナー〉の操縦席の配置はグラドス製SPTと同様で、パイロットが着座するシートを中心に前方に大型ディスプレイと各種の操作コンソール、左右にも同様のコンソールが配置されている。後方は生命維持システムと緊急時の救命キットなどを収納しているコンテナが配置されている。この配置は地球の戦闘機などと極めて似ていることに驚愕を禁じ得ないが、人間型の生物が搭乗、操作する操縦席であるため生物工学的に見て類似したものに帰結するのは当然と指摘する専門家もいる。

操縦席コンソールのディスプレイやスイッチ、レバー、表示灯などの細かいパーツは、配置や機能こそ〈レイズナー〉に準拠しているが、パーツ自体はすべて地球製に置き換えられている。機体の基本操作はシート左右のアームレスト先端に取り付けられたレバーとシート下部から延びるペダル及びパイロットの指示音声で行われる。索敵システムや通信、火器コントロール装置などは中央と左右コンソールで操作するが、音声でも操作が可能である。

〈レイズナー〉も〈ニューレイズナー〉も、ともに大気圏内外での運用が可能であるが、機体の操作はどの環境でも同様で、パイロットは外部環境による機体の挙動の違いを意識する必要はない。例えば左右のレバーを同時に前に出し、「前進」の操作をすると、大気圏外では背部などに配置されたスラスターが作動し、地上にいる時は脚が左右交互に移動して歩く、という具合である。

〈ニューレイズナー〉には〈レイズナー〉に搭載されていたオペレートシステムがそのまま移植された。このシステムは操縦支援システムとして擬似AIとなっておりパイロットであるエイジ·アスカにより〈レイ〉と名づけられた。〈レイ〉は会話型の支援システムでパイロットの指示通りに機体を操作する一方、パイロットに質問して判断を仰ぐことが可能である。どのような状況でもパイロットの判断が優先され、その範囲でレイは機体とパイロットを護るために最大限の機体操作を行う。しかし〈レイズナー〉には〈フォロン〉と呼ばれるもうひとつの人格ともいえるAIが隠されていた。詳細については、別項でも詳細に考察しているので参照のこと。この〈フォロン〉は、〈レイズナー〉が戦闘により破壊され再起不能になった際、エイジ·アスカが“彼（あるいは彼女）”を説得し〈ニューレイズナー〉へハードごと移植された。

1 キャノピー（開閉フード）
チタン·リチウム系の透明金属製。地球では同材料による大型成型物の加工ができなかったことから、レイズナー用に製造されたキャノピーの規格外品を流用していたとされる。透明部はラミネート構造で透明金属間に宇宙線遮蔽、断熱、輻射などの機能層が挟み込まれている。また最内層は電圧をかけることで透過光の調整が無段階で可能となり、いわゆるスモークガラス状に維持することも、完全に遮光することもできた。レーザーによるプロジェクションによって、モニターに表示する映像をキャノピー内面に映す機能もあるが、キャノピー内面の曲率に応じた補正が行われるため、画像、映像の歪みは感じない。ラミネート構造は一種の強化ガラスとしての機能も持つが、緊急脱出時には透明金属間機能層に規定電圧を超える負荷をかければキャノピー全体が破砕される。

2 IFF専用ブレードアンテナ
地球側がSPTを導入するに至り外観的特徴による敵味方識別が困難になったため設置された。上方への識別信号を発信する。

3 フラップドア付きインテーク
大気のある環境下では外気を取り込んでの熱交換も積極的に行われた。通常はドアで閉じているが、必要に応じてスリットが開き、一定の流速で空気を吸入、胴体内機器の冷却に用いられる。

4 制動用スラスター
背部スラスターユニットのカウンター推力供給装備として機能する地球製SPTで導入された装備。レイズナーのバックパックは外観こそ大きく変化していないが、機動性向上のため徐々に推力強化が図られており、これに応じた急制動システムも機能強化が必要であった。機体の潜在能力では臨界点にあった制動システムを単純かつ効果的に得る手段が、胸部へのG-エンジン追加であった。このため、試作機体ながら洗練されたデザインで完成されたオリジナルのレイズナーの外観を損ねることを承知で付加された。胸部への搭載は、機体構造上、かなりの無理を強いることになったが機体回転、旋回運動の機敏さや複雑さは従来のレイズナーをはるかに上回るものとなり、運動性に関する性能向上に大きく寄与することとなっている。

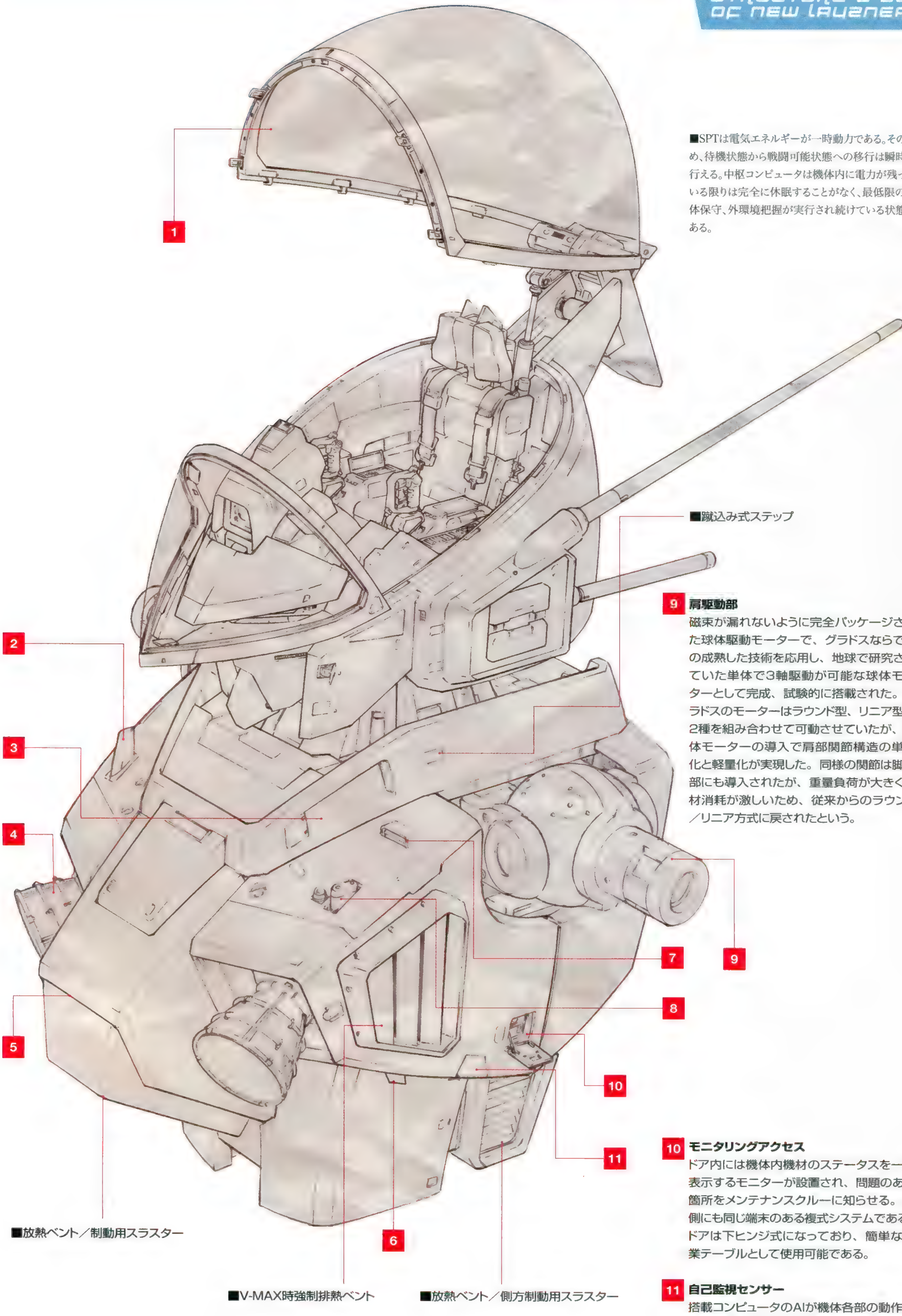
5 エアインテーク
制動用、姿勢制御用のスラスターとしても機能する排熱ベントは、グラドス独自の設計思想で機体を閉じた系として熱収支を勘案した結果、生み出された構造であるが、完全な地球製として製造された機体では、外気を取り込んで熱交換を行うオープンシステムとしての機能も付加された。レイズナーで設置された放熱ベントのすぐ近くに、外殻装甲の重ね合わせ部分を利用したスリット式インテークが多数導入されているが、胸部ベントの周囲にもインテークが付加されている。

6 IFF専用ブレードアンテナ
地上部隊に対する敵味方識別信号を送受信する。

7 レーザートレーサー／デジグネーター
地上にある敵性目標を追跡、照準するための補助機材で、自機カーフ·ミサイルや友軍が発射したミサイルの精密誘導に使用する

8 環境モニター
頭部の環境モニターとは独立した系として設置されたもので、特に有毒物質の検知に特化したセンサー。運用環境が広がる可能性を見据えて増設されたもので、攻撃によって破壊された工業施設などで発生する致死性ガス、あるいは火山性ガスなどの検出に寄与する。

■SPTは電気エネルギーが一時動力である。そのため、待機状態から戦闘可能状態への移行は瞬時に行える。中枢コンピュータは機体内に電力が残っている限りは完全に休眠することがなく、最低限の機体保守、外環境把握が実行され続けている状態にある。



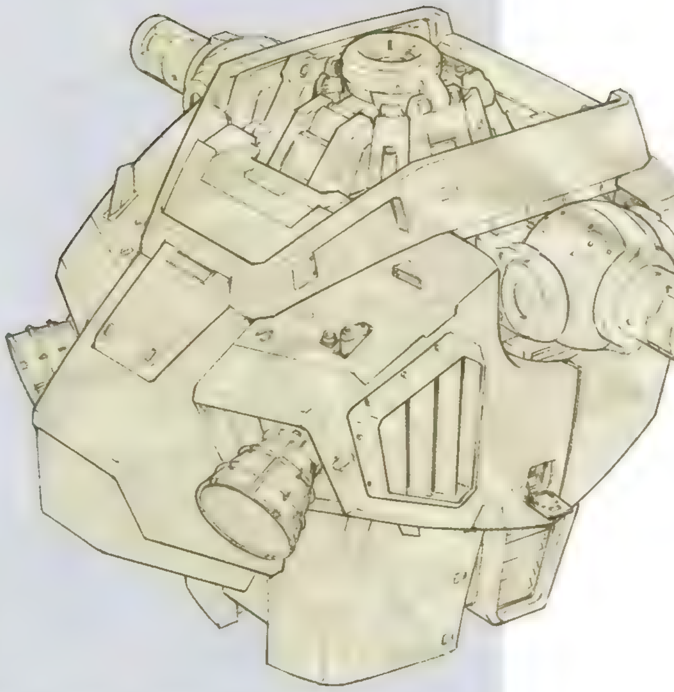
9 肩駆動部
磁束が漏れないように完全パッケージされた球体駆動モーターで、グラドスならではの成熟した技術を応用し、地球で研究されていた単体で3軸駆動が可能な球体モーターとして完成、試験的に搭載された。グラドスのモーターはラウンド型、リニア型の2種を組み合わせて可動させていたが、球体モーターの導入で肩部関節構造の単純化と軽量化が実現した。同様の関節は脚基部にも導入されたが、重量負荷が大きく機材消耗が激しいため、従来からのラウンド／リニア方式に戻されたという。

10 モニタリングアクセス
ドア内には機体内機材のステータスを一括表示するモニターが設置され、問題のある箇所をメンテナンスクルーに知らせる。右側にも同じ端末のある複式システムである。ドアは下ヒンジ式になっており、簡単な作業テーブルとして使用可能である。

11 自己監視センサー
搭載コンピュータのAIが機体各部の動作確認や異常（過熱など）を検知するための埋め込み式しセンサー。機体各部、特に四肢端部やスラスター周辺に設置されている。

body

胴体



SPTの胴体は操縦席がある頭部や武器を持つ腕部、地上での移動用と無重量空間での姿勢制御用バーニアスラスターユニットとしての脚部、それに背部のスラスターユニットを繋ぐブロックで、いわば航空機の胴体と同じ目的を持つ。〈レイズナー〉と〈ニューレイズナー〉では胴体の基本形状、内部レイアウトなどはほぼ同一で、胴体ブロックはさらに頭部と腕部をマウントする人間でいう胸部と、脚部をマウントする腰部、その2つを繋ぐ腹部の3つで構成されている。またそれぞれが自由度の大きなジョイントで結合されており、人間と同じような姿勢を取ることも可能である。

胸部は主燃料電池と蓄電、廃熱リサイクルなどの主システムで占められている。また〈ニューレイズナー〉になって胸部前面左右に制動用スラスターが追加されており、それに伴い胸部前面左側に内蔵されていた重力下で使用する操縦席昇降用ホイストの位置が若干移動された。胸部の前面には大型の熱処理システムが配置されており、機体各所で生じた熱を導き、燃料電池やスラスターの予熱に使用する。グラドスではこの熱を処理するシステムが非常に発達しており、地球製に比べ数倍の発熱量があるグラドス製のモーターなどの駆動装置でも問題は生じない。そもそも駆動装置が発熱しているということはエネルギーの変換効率が悪いということだが、グラドスでは個々の装置の効率を別々に上げるよりシステム全体の収支でつじつまを合わせる考え方で設計されているという。そのため胸部前面と側面の大型の排熱器も、本来の排熱のほか、空中や大気圏外での機体の姿勢制御や方向転換などを行うためのバーニアスラスター代わりにも使われる。また通常の使用ではこの熱処理システムでこと足りるが、V-MAXが発動すると各駆動モーターの発熱量がさらに大きくなりこのシステムだけでは処理し切れなくなるため、モーター近くのシェルのパネルを開いて排熱を行う。V-MAXだけはやはり効率無視の緊急モードである。

胸部の背面側には主燃料電池と重水分解装置が配置されているが、これは電力のほとんどは頭部とバックパックで使われるためである。腹部はほぼ燃料電池及びスラスター用の重水タンクと重水の分解装置、さらに酸素と水素の一時貯蔵タンクとその配送システムで占められており、ここから四肢やスラスターユニットへ重水及び酸素と水素を供給している。そのため、頭部と並ぶ重要な部位として特に強固に、かつ胸部と腰部の装甲が覆いかぶさるような配置となっている。腰部は脚部のマウントとしての役目しかないが、特に重力下では最も荷重がかかる部分でもあるので特に強固に作られている。また、機体動作の基準部位でもあるため被弾して破壊されないまでも歪みが生ずれば正確な動きができなくなり機動性も落ちてしまうため、前後左右を独立可動する装甲で覆っている。この装甲は重水タンクとして、また左右の装甲はレーザードライフルの予備パワーパック・ホルダーにもなっている。

1 外部装備アダプター・ハウジング
主にスラスターユニット(通称バックパック)を装備するためのマウント機構を納めた装置。緊急時にはハウジングごと切り離すことができる爆発ボルトが内蔵される。アダプターの規格はグラドス星のユニットシステムを基準にしているが、これをSI単位系に換算して製造されている。グラドスから持ち込まれた機材との互換性を考慮してのことで、機体全体に関して加工寸法規格はグラドス規格で行われている。

2 上部胴体接合部
胸装甲は前後に分割されるが、その接合部は可撓性の高い素材でつながれている。これはわずかではあるが上体の前後屈伸を可能にするための構造で、屈伸時の応力や歪みをこの接続部で受け止め、エネルギーを解放し、装甲本体への負荷を軽減する。

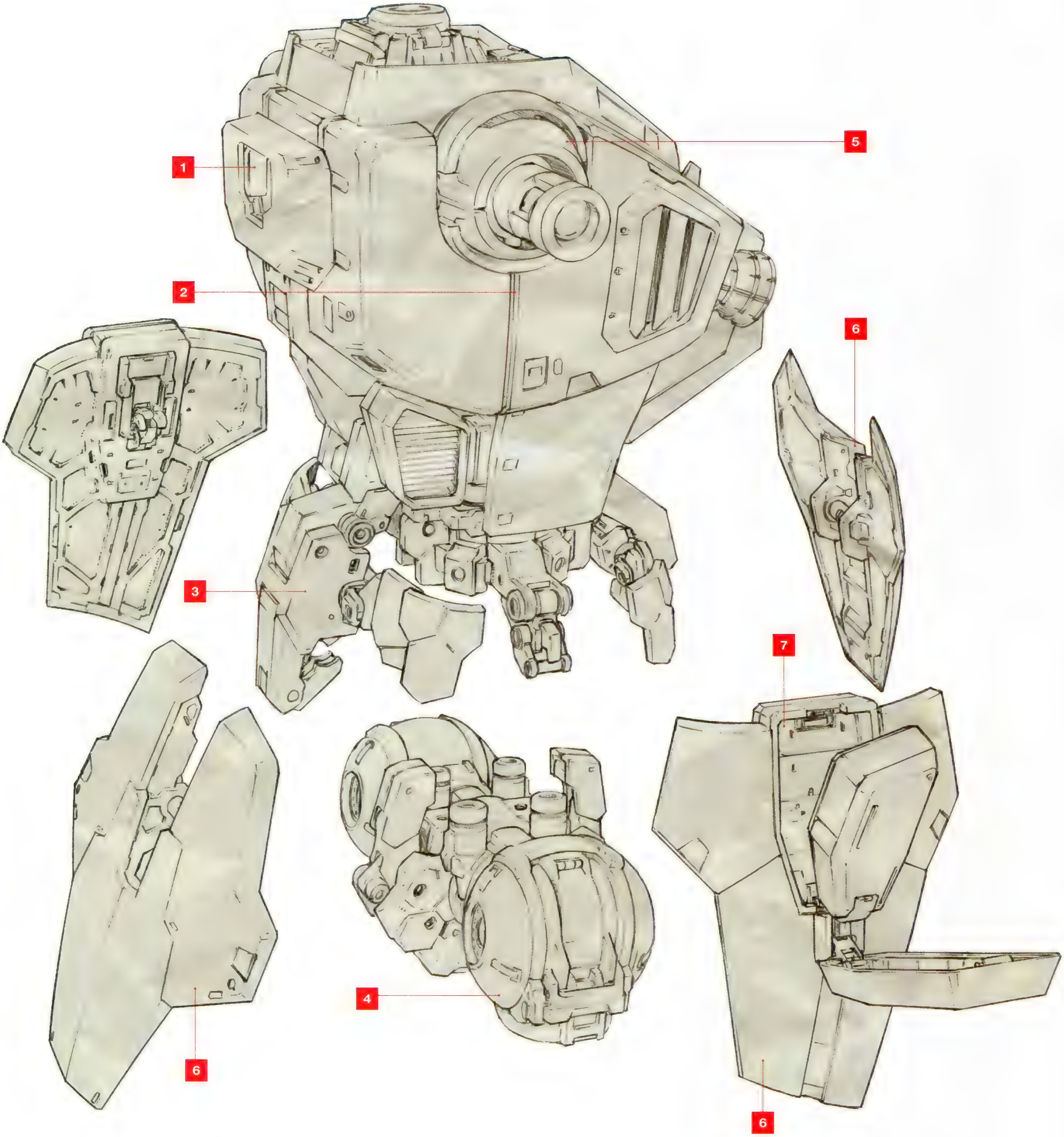
3 アーマーフランジ
腰部装甲を懸架するための機構だが、G-モーターが内蔵されており、脚部の駆動に応じて適切なクリアランスを維持するようになっている。このフランジと可動軸は非常に堅牢な材質で製造され、機体のリフティングや拘束のポイントとなっている。

4 脚基部関節機構
ラウンド/リニア型G-モーターの組み合わせによる関節駆動機構で、グラドス製SPTの標準的かつもっとも完成度の高いメカニズムといえる。地球製の球体G-モーターへの置換を試みたものの、モーターそのものへの過負荷が原因で、最終的には従来型構造へと戻されていることからも、その完成度がわかろうというものだ。

5 装甲カバー
オリジナルのレイズナーではエビ殻状に複雑に重なり合った装甲で関節部が保護されているが、地球製ではより単純化した構造に変更された。これは量産化における生産性の向上が目的であったとされる。

6 腰部サスペンディッドアーマー
オリジナルのレイズナーに準拠した形状で固定方法もオリジナル機体のスペア部品と互換性を持たせるために共通化されているが、地球製のものは強度向上のため、重量増加を覚悟の上でインナーアーマー(二次装甲)を装備するようになっている。

7 マガジンホルダー
SPTの主要火器であるレーザードガン、レーザードライフル専用のマガジン式バッテリーパックを収納する。従来型レイズナーでは単なる装甲ホルダーだったが、新型では機体の余剰電力を利用してチャージすることも可能となった。


1
2
3
4
5
6
6
6
7

ARM

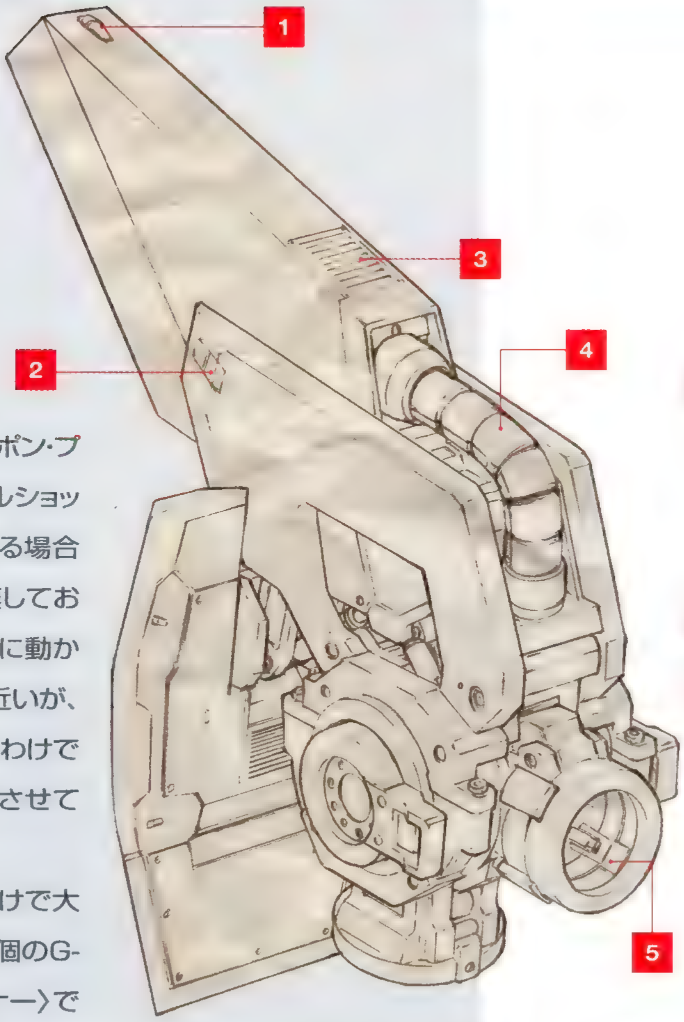
腕部

腕部はライフルなどをマウントするウェポン・プラットフォームとして機能するが、ナックルショットなどを使い、腕部そのものを武器とする場合もある。腕部全体の構成は人間の腕を模しており肩、肘、手首といった人間の腕と同様に動かせる関節を持つ。動きそのものも人間に近いが、パイロットのモーションをトレースしているわけではなく、状況に合わせプログラムで動作させている。

人間の動きを再現させるため、片腕だけで大小のラウンド型及びリニア型を合わせ30個のG-モーターが組み込まれている。〈レイズナー〉では腕部の駆動メカニズムは胴体側になく、基部はジョイントだけで、モーターは肩の中に収められている。〈レイズナー〉をコピーした〈ニューレイズナー〉もむろん同様だが、グラドスではこの動かす側に駆動装置を組み込むことが一般的なようで、グラドス軍の車両もホイールにモーターが組み込まれている場合がほとんどである。

〈レイズナー〉では肩のブロックに姿勢制御用のバーニアスラスターが取り付けられているが、〈ニューレイズナー〉では大型化され、出力も〈レイズナー〉の1.8倍まで高められた。このため、ロールレートが高くなり機動性能は増したが、より大きなGがかかることになりパイロットの負担は大きくなったという。肩ブロックと前腕部を覆うように装甲が取り付けられているが、これは主に頭部を敵弾から護るシールドの目的のほか、肩バーニアスラスターの高温ガスから前腕部を護る役目も持っている。また〈レイズナー〉ではこの装甲の中央にV-MAX発動後の冷却用放熱ハッチがあるが、V-MAX発動直後は能力が30%にまで落ちるため肩装甲のハッチを開くと頭部を護るのに不利で危険と判断されたため、〈ニューレイズナー〉ではあらかじめ装甲に大型の排熱装置が取り付けられることになった。この改修により、装甲の開口部を小さくできるようになったため、装甲全体の強度が上がった。前腕部も同様で、〈レイズナー〉では後方が大きく開くようになっていたが、ここもあらかじめ排熱装置が取り付けられるようになり全体的な強度が上がっている。

手首は〈ニューレイズナー〉で完全に地球製と置き換わったパーツである。〈レイズナー〉のグラドス製手首に比べ保持力が大きくなり、動作の解像度も上がっている。このため、レーザードライフルの連射時の命中精度も上がったといわれている。この手首はケン・アスカの故郷である日本で開発された。もともとは原子力発電所内の放射線量の高い区域で遠隔操作されるロボットに使う予定であったものといわれ、放射線や高熱にも強く耐久性も高い。もちろん〈ニューレイズナー〉にぴったりの大きさではなかったためリサイズし、指の駆動モーターもG-モーターに替えられている。また唯一の固定武装ともいえるナックルショットも内蔵しているコンデンサーの容量が大きくなり連続使用回数が大幅に増えている。



1 端部位置表示灯
グラドスにおける運用では航空機の航法灯に類するものは装備されなかったが、地球製の機体では機体幅と高さがわかるような表示灯の設置が標準化された。これは運用する基幹基地設備が整ったことの証左でもあった。

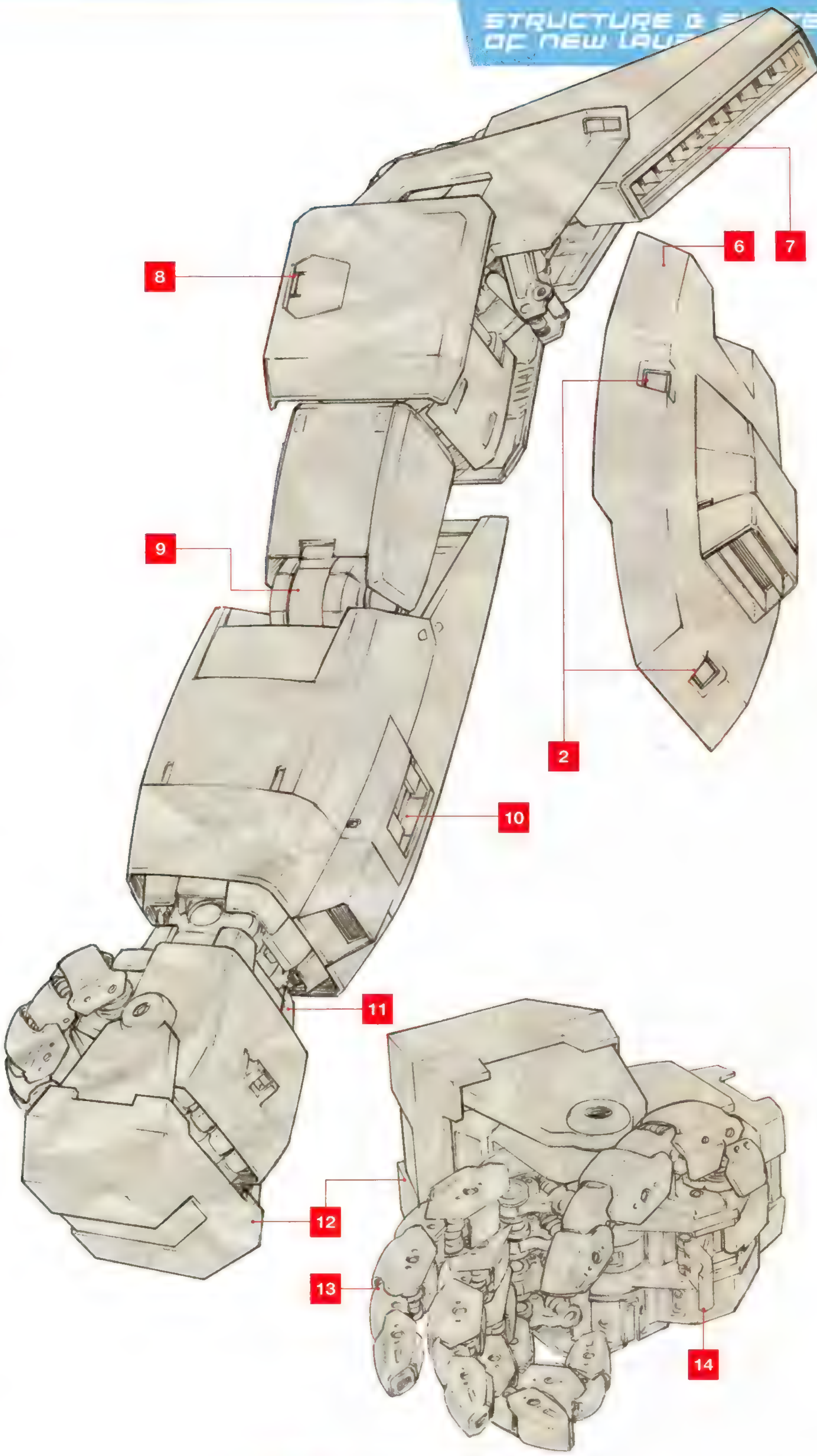
2 自己監視センサー（前述の解説に準ずる。）

3 吸排気スリット
大気圏内での運用が多くなることを視野に入れ、放熱ベント関連機器そのものの冷却を補助するため、外気を積極的に利用する試みが行われている。この外気吸入スリットは、機械的に強制的な空気流入を促すものではなく、外殻装甲と放熱機器の間に設けられた空間に外気が自由に入り込めるようにしたものである。通常は過熱が進むにしたがって、放熱ベントのユニット下部に設けられた開口部から自然吸気された外気が暖まり、対流によって上方に移動、このスリットから自然放出されるが、スラスターとして使用する場合には放熱装置の高温噴流が噴射される際に、このスリットから外気を引き込むように働くデバイスが、内部に追加装備されている。

4 高圧力パイプ
オリジナルの機体に装備されたものよりも、より地球的なデザインのフレキシブルパイプだが、耐圧性能はオリジナルよりも高く設定されていた。この部分に装甲外殻を被せるという本来の設計はそのまま受け継がれており、実際に装甲カバーも製造されているが、なぜか装備しての運用記録は残っていない。

5 肩接合部
航空機などを長距離搬送する場合、分解梱包して輸送するのが一般的であるが、SPTも例外ではなく、またこれはグラドスも地球も同様であった。基本的に左右腕、左右脚、頭部、胴体、腰部装甲といったところである。これらの最少基準分割点は、戦闘後整備や部品交換時の分解基準でもあった。接合部は完成体の可動部に設けられることが通常であり、肩接合部もそのひとつであるが、対SPT格闘戦における戦訓からレイズナー開発時に腕を“自切”可能なメカニズムを導入することが決定された。自機が不利な状況に陥った場合に、腕で相手を押しとどめながら切り離し、本体は離脱行動に移行するというもので、この場合、ナックルショットの制御を外し暴走状態とする。腕の接合は機械的なロッククローと、これを電磁的に接合する磁力の複合固定機構によるが、切り離しには磁力を逆転することでロッククローはリリースされ電磁的な反発により腕と胴体側肩基部は容易に分離する。この機構は地球製機体でも残されているが構造はより洗練され、接合時の締結強度が向上している。

6 肩部サスペンディッドアーマー
シルエットはレイズナーと変化はないが、装甲躯体全体が厚み方向に“嵩”が減じられている。これはV-MAXの強制放熱装置を完全内蔵式から半埋め込み式に変更したことが大きな要因である。地球製の装甲材は、グラドス製のものに比して“荒削り”なものであった。装甲としての性能は一定の許容範囲内にあり、けっして低性能というわけではないが、同体積の素材の重量がやや大きいものに仕上がっていたため、同じ形状、寸法、強度のユニットをコピーして作った場合には、総重量が8パーセントほど増加してしまったのである。やむを得ない部分は重量増加を受け入れたが、可能なパーツに関しては、構造の見直しを含めた地球独自の設計へと変更が加えられた。肩部装甲のハッチ開閉機構はこうした理由からオミットされたわけであるが、開閉に関係する機材を廃



したことで、基本重量はオリジナルよりも1割近く低く抑えることができた。なお、内部に収納されている強制放熱装置はオリジナルをそのままトレースしたものではなく、排熱ベントの形状に合わせて、多面体噴射デバイスの形状、並べ方なども変更されている。

7 肩部放熱ベント／スラスター

排出口ルーバーの断面形状を見直し、非常に密な配置からやや間隔を設けた並びに変更、開口部分の面積を増大させることで排熱効率を向上させている。一方でスラスターとしての推力は3割ほど減じることになっているが、機動に大きな影響はないと判断された。

8 肩装甲リリースアクセス

ラウンド型モーターを組み合わせた肩駆動部はメンテナンスの簡便性のため前後の装甲を容易に外せるよう工夫され、大型の点検用ハッチドアなどが設置されることはなかった。ハッチ内にある装甲リリースレバーの操作によって、肩装甲は外れるが、落下防止ワイヤが内蔵されており、装甲が落ちる心配のないよう配慮されている。

9 肘関節駆動部

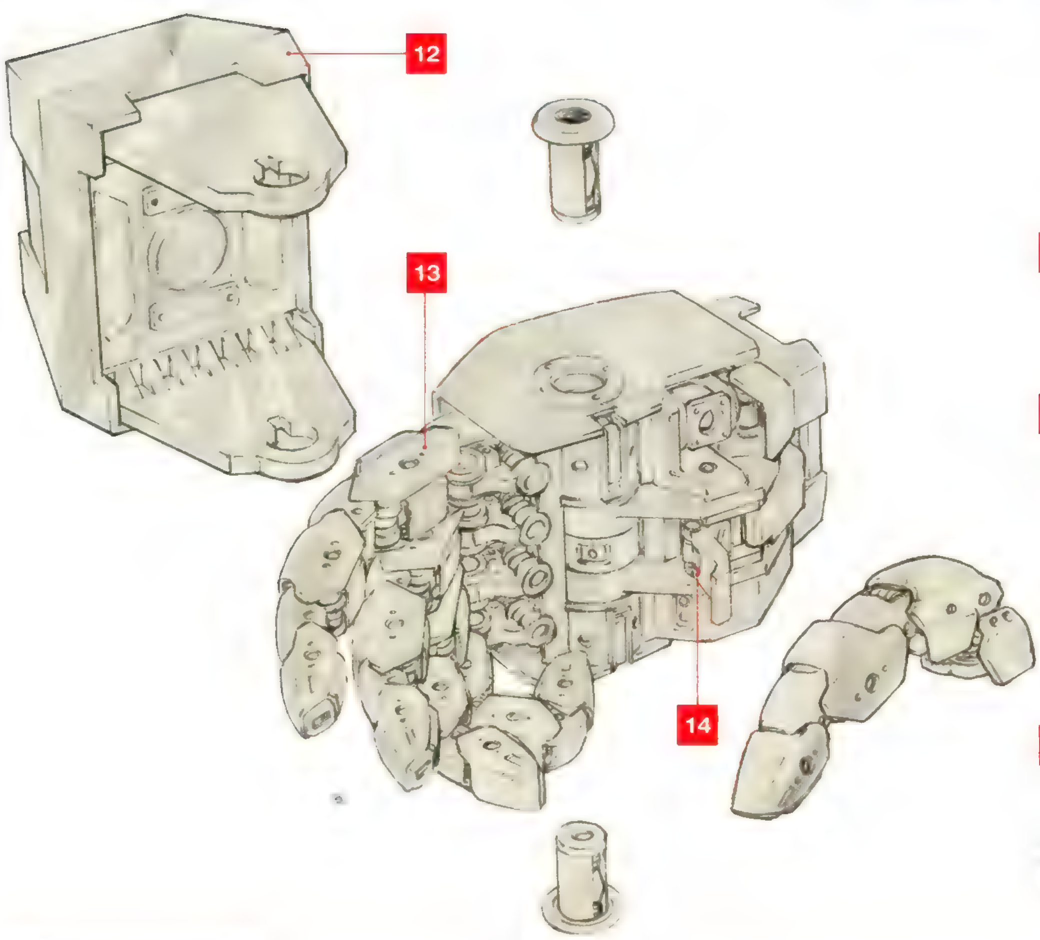
オリジナルよりも高出力化を図るため駆動部には全体に大型のG-モーターが適用された。肘関節は周囲外殻装甲とのクリアランスや重心位置の兼ね合いもあり、G-モーターを覆う装甲はオミットされモーターの強化ケーシングのみで使用された。

10 外部装備取り付け部

自衛、防御用装備（シールドなど）等をオプション装備可能なように新設されたユーティリティーアダプター。

11 手首関節駆動部

エビ殻状にオーバーラップした駆動部保護装甲の形状を見直し、上下から挟み込む形に変更され、下腕下端の裾を延長して、可動部の空隙を減らしている。



12 改良型ナックルショット

オリジナルよりも高出力化し、連続使用可能なようにコンデンサを強化、また手首の動きを制限することになる電力供給の給電ケーブルを手首装甲内側に移動している。

13 マニピュレーター

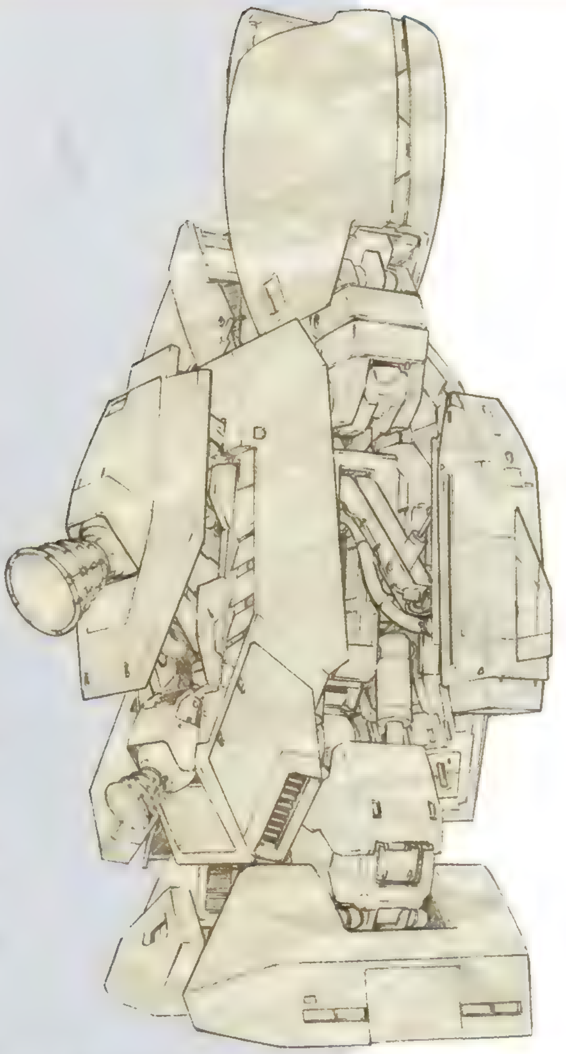
基本的に人間の手の機能を模しているが、グラドスの技術開発陣がレイズナー用に製造したものとは異なり、基本設計から完全な地球製に置き換えられている。保持力の強化としなやかな動きを両立させるために採用されたのが各指の多関節化であった。ハイパーファランジ・マニピュレーターと呼ばれる手は、もともとの設計では小型のモーターと流体の圧力によって駆動するものであったが、新型レイズナーの寸法に合わせてリサイズし、各関節にG-モーターを配置したことで駆動のなめらかさはもとより、物を握った状態での固定状態も堅固になっている。

14 グラスピングフィンガー

手のひらには"第6指"に相当するグラスピングフィンガーが設置され、武器の握り込みを確実にしている。

Leg

脚部



脚部はSPTにとって、惑星の地表上などの重力下でも無重力の宇宙空間でも移動のために使用される装置である。脚部も腕部と同じように人間の脚の構造や動きを真似て作られている。しかし重力下と無重力化ではその動きは大きく異なる。重力下においては前進のための操作をパイロットが行えば左右の脚を交互に前後移動させ、人間と同じように「歩く」。さらに左右のフットペダルを同時に踏み込めば左右の脚の移動速度が速くなり「走る」ようになる。また左右への移動やジャンプなども人間と同じように脚部を動かすことにより可能となっている。無重力環境下では、脚の移動の代わりにバックパックのスラスターが作動し脚部はほとんど動かなくなる。無重力環境下において脚部はバーニアスラスターのマウントユニットであり推力線の調整のため動くだけで、この時の動作量は重力下に比べはるかに小さい。それでもスラスターの推力を受け止め、ぶれないだけの強度も必要であり、結局は無重力下でも重力下で自重を支え、走るのと同じだけの強度は必要なのである。したがって宇宙用、地上用とSPTのタイプに異なったものがあったとしても、脚部の構造に大きな変化は見られない。

〈ニューレイズナー〉の脚部は〈レイズナー〉と基本構造、システムは同じだがスラスターが強化されている。脚部のスラスターは腕部のスラスターと対の関係にあり、カウンターの役目もあるため、一方のスラスターを強化すればもう一方のスラスターも強化せざるを得ない。脚部のスラスターは脛部外側の足首近くに外側に4基集中しており、特に中央の1基は軌道変更が可能なほどに出力強化されている。脚部スラスター用の重水タンクは大腿部にあり、大腿部内はほぼ重水タンクで占められている。また重水の供給口は足首かかと部分に1箇所だけあり、ここから大腿部だけでなく腹部のタンクにまで供給する一点集中型となっている。

またこの下腿部後方の人間でいう脛部（ふくらはぎ）には、〈レイズナー〉タイプにしか見られないカーフミサイルが搭載されている。これは有翼の大型巡航ミサイルで文字通り〈レイズナー〉のカーフ（ふくらはぎ）左右に各1基ずつ、計2基搭載されている。このミサイルがもともとなにを目的に搭載されているのかは解らないが少なくとも戦術的に有用と見なされ、〈ニューレイズナー〉にも搭載が継承されている。

足首は他のSPTとさほど変わらず、下腿部下端と繋がる中央基部の前後につま先部とかかと部が取り付けられている。足首中央基部には2基ずつのリニア型、ラウンド型のG-モーターを搭載、つま先とかかとにも1基づつリニア型G-モーターを搭載しており、人間の脚の動きをほぼそのまま再現できる。また足首部には先に挙げた重水の供給口のほか、機体各所の状態を表示する整備用モニターや起動スイッチ、〈レイ〉との通信機などが集中し、整備員がコックピットまで上らなくともいくつかの操作が可能となっている。

1 胴体への接続部
胴体脚基部駆動モーターへの接続は、腕の接続部同様のシステムを強化した締結装置を置き、簡単に接続解除が行えるようになっている（ただし自切ユニットとしての運用は想定されてはいない）。

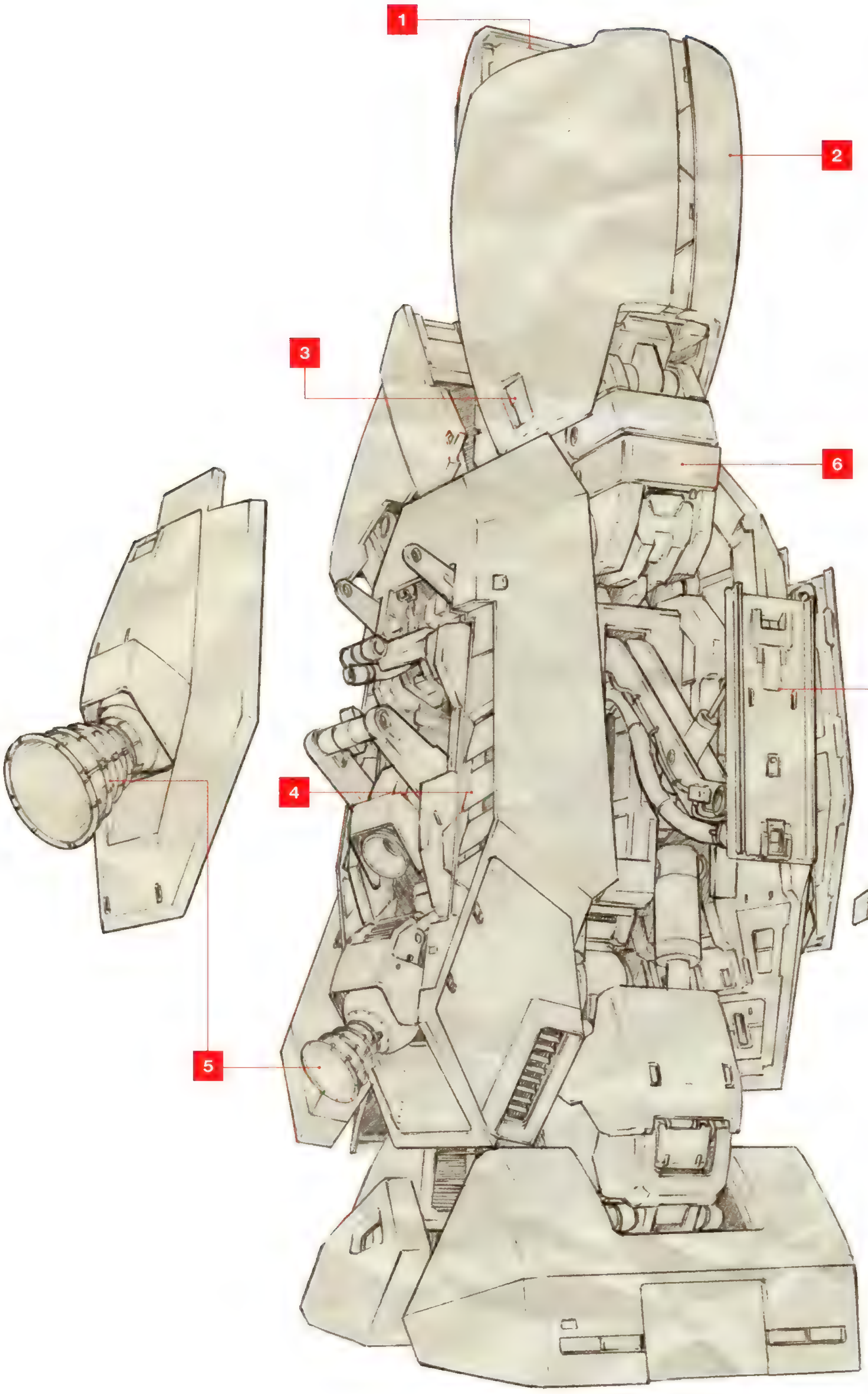
2 大腿部
内部の大部分が重水用のタンクで占められている。もともと揮発性・爆発性のある物質ではないので、重水タンクそのものの構造は単純だが、内容物の消費に伴う重心・重量の変化に対応しながら駆動に影響を与えないように構築された運動プログラム、重力下・無重量下でも確実に送水できるような加圧システムがレイズナーでは採用されており、地球製でもこのテクノロジーをそのまま導入している。

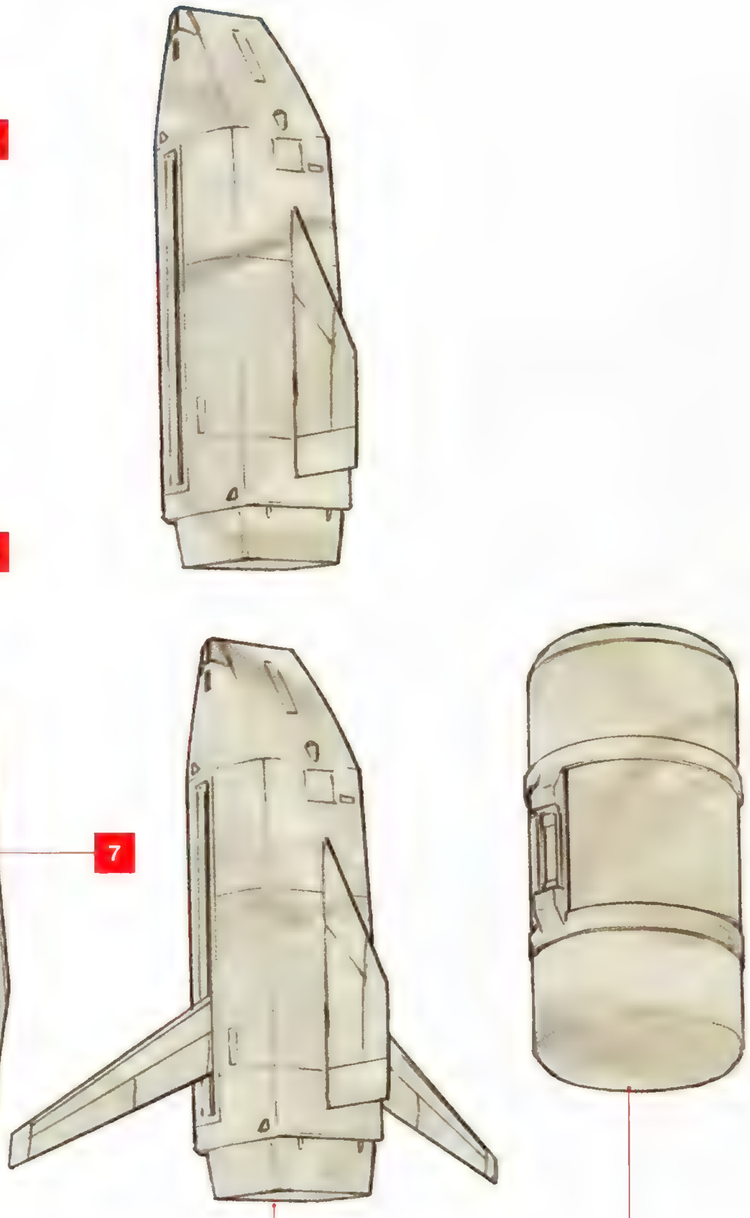
3 自己監視センサー（前述の解説に準ずる。）

4 強制排熱装置
仕様変更の著しい脚部スラスター搭載によって、脚内部容積の大部分がこれにさかれることになる。そのためV-MAX発動時の強制排熱装置は、大幅な形状と構造の変更がなされた。常用する機材ではないこともあり、排熱効率は従来のものより若干劣ることは承知のうえで、単純化された機材の採用が決定された。

5 脚部スラスター
高機動、長距離航行用のメインスラスターで、グラドスのシステムを地球流にアレンジしたメカニズムの中でも、もっとも完成度の高い成果のひとつである。きわめてシンプルなベル型ノズル形状をしているが、これは地球においても完成した技術で、その利得と損失が十分に理解されていたこともあり、出力の強化は容易に行えた。メインとサブのノズルをタンデムに配置、その左右脇には非燃焼型の排熱ベント／スラスターが配置されるが、この方式はレイズナーのそれを踏襲する。

6 膝関節駆動部
オリジナルのレイズナーよりも出力強化されたモーターを使用している。肘関節同様にグラドススタイルの複雑な保護装甲は廃され、より単純化したモーターケーシングを肥厚させた仕様の装甲に切り替えられた。この内部には足首後方にある燃料供給口から腿のタンクに重水を吸い上げるための給水管なども通ることから、見た目以上に複雑な内部構造をしていた。



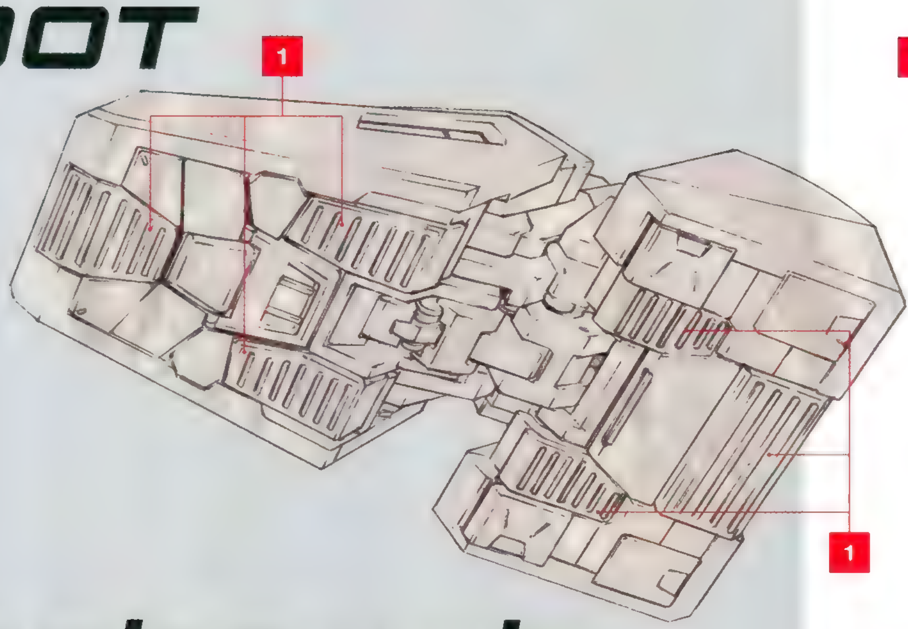


■カーフミサイル　■増加重水タンク

7 カーフパレット

他のSPTには未装備の、レイズナー独自の機材である。従来からのSPTが有する戦術を拡張する目的で実験的に搭載、運用されたと思われるが、地球製のニューレイズナーも継続して使用されたところを見ると、その戦術的な価値が評価されていたということになる。主な搭載兵器は専用の巡航ミサイルで、レイズナーの脚部シルエットにマッチするようデザインされた。これ以外にも専用のランチャーレールを取り付ければ地球製の空対空ミサイルが運用可能なように、パレットにはマウントポイントが設けられている。また、機単独での中距離フェリーもできるように増加重水タンク搭載が行え、スラスターエンジンへの配管が設置されている。

FOOT
足底



1 コンタクトパッド <ニューレイズナー>
ニューレイズナーもオリジナルのレイズナー同様な機能を有するコンタクトパッドを装備しているが、地球環境での運用を前提に改良されている。機体の基本構造は変わらないものの、スラスターの搭載基数や位置が変化したことで、機体運動の重心も変化していることから、歩行時の運動も変化せざるを得ない。その結果、爪先接地のスタイルに通常の歩行挙動は変更され、それに応じた配置の再検討も行われ、そのレイアウトは大きく変わることになった。またコンタクトパッドの設置面には補強用のビードが設けられ、これが滑り止めの役割を担うことになり、高摩擦係数のオーバーコートは施されていない。

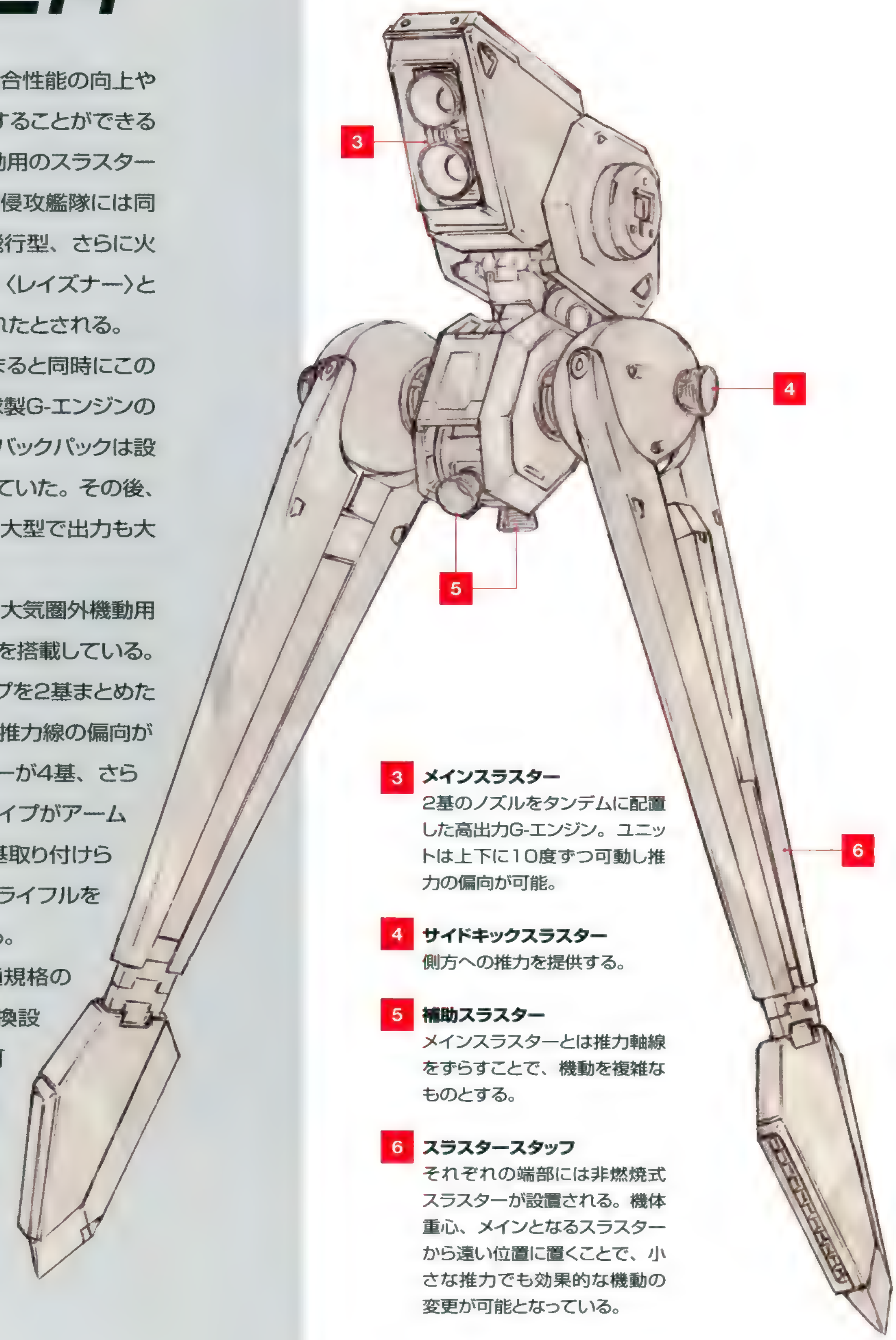
backpack
バックパック

SPTは背面にバックパックを背負うことにより総合性能の向上や特定能力の強化が行え、様々なミッションに対応することができるようになる。〈レイズナー〉タイプでは大気圏外機動用のスラスター強化パックの運用のみが確認されているが、地球侵攻艦隊には同機用のグレネードランチャー搭載パックや、空力飛行型、さらに火炎放射器なども搬入されており、エイジ·アスカが〈レイズナー〉とともに持ち出していたが、火星脱出の際に放棄されたとされる。

地球において〈ニューレイズナー〉の開発が始まると同時にこのバックパックも製作が開始されたが、搭載する地球製G-エンジンの完成が遅れたため、〈ニューレイズナー〉完成後もバックパックは設計時の想定性能が出せない未完成のものを搭載していた。その後、やっと完成した地球製G-エンジンはグラドス製より大型で出力も大きくなり、それは外観にも表れている。

この〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉用の大気圏外機動用バックパックは基本構造が同様で8基のスラスターを搭載している。後方に向けた2基は軌道変更も可能な高出力タイプを2基まとめたユニットになっており、ユニットは上下に10度ずつ推力線の偏向が可能。またその下に姿勢制御用バーニアスラスターが4基、さらに〈レイズナー〉の肩に搭載しているものと同じタイプがアームの先端に取り付けられた高機動用スラスターも2基取り付けられている。また、バックパック側面にはレーザードライフルを取り付けることができるジョイントが設けられている。

バックパックは基本的にSPTの背面にある共通規格のジョイントで装着する。基地施設や母船にこの交換設備が整っていればほんの数分で交換することが可能。まったく新しいバックパックを搭載する場合は対応するプログラム·キューブをメインコンピュータに組み込む必要が出てくる。SPT本体のバックパックに対する初期設定や各部の設定の変更は、このプログラム·キューブの情報を元にメインコンピュータが自動で行う。



3 メインスラスター
2基のノズルをタンデムに配置した高出力G-エンジン。ユニットは上下に10度ずつ可動し推力の偏向が可能。

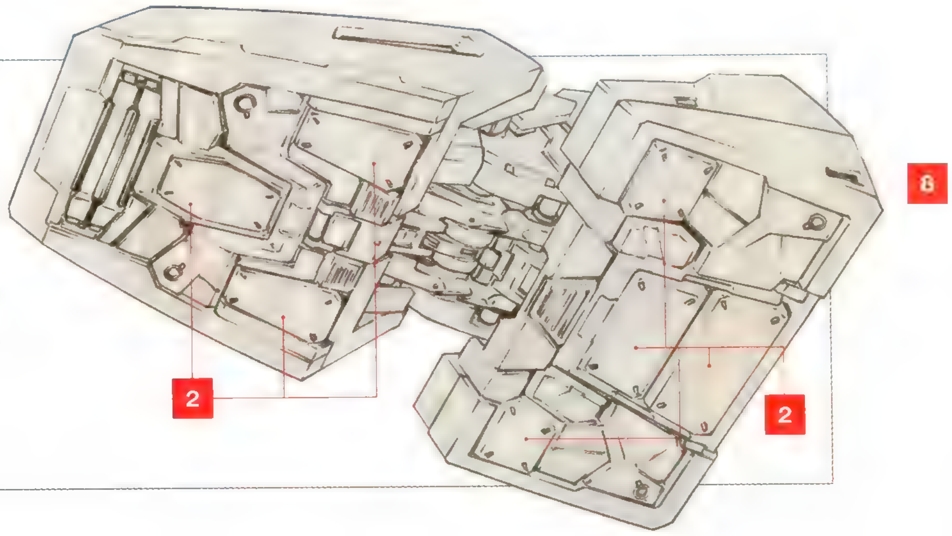
4 サイドキックスラスター
側方への推力を提供する。

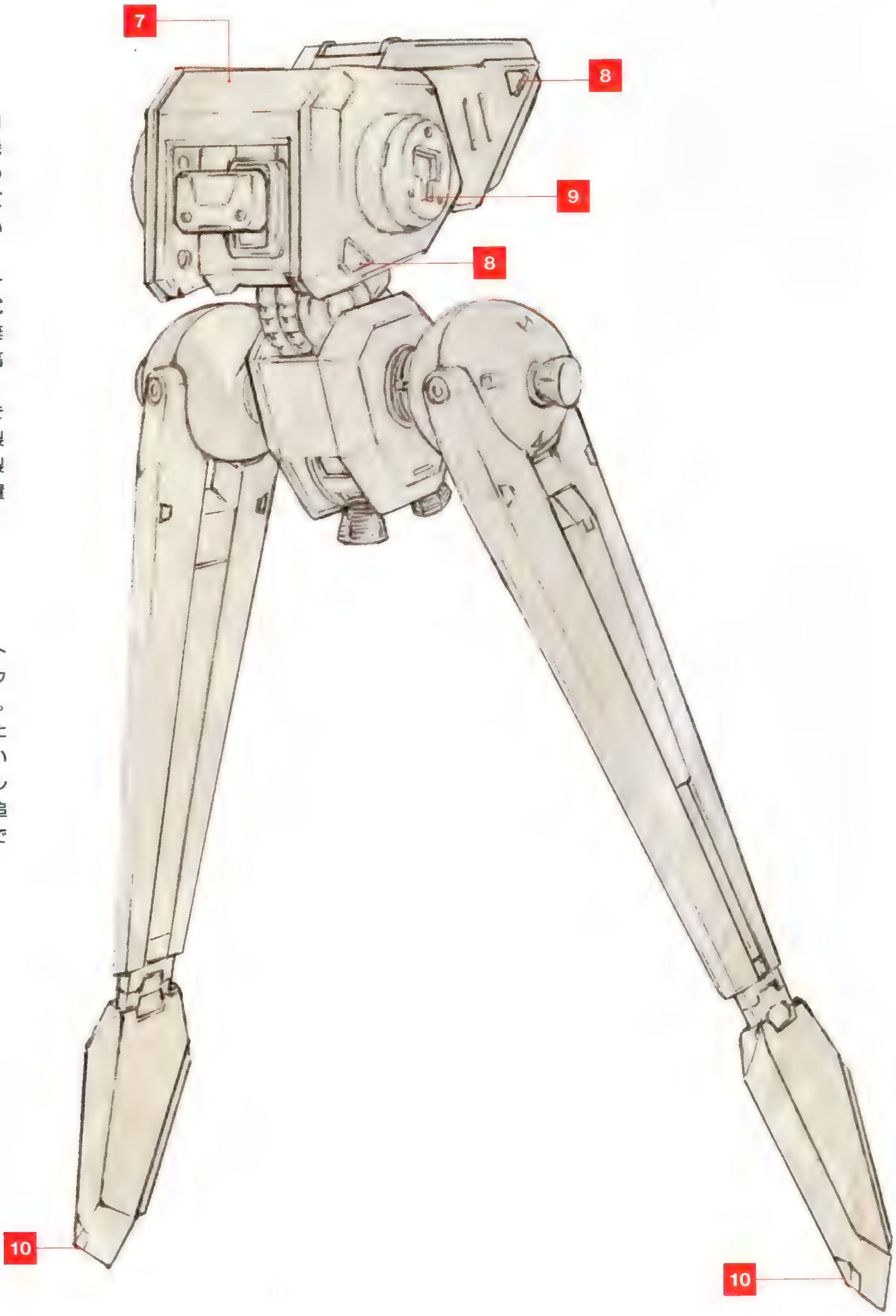
5 補助スラスター
メインスラスターとは推力軸線をずらすことで、機動を複雑なものとする。

6 スラスタースタッフ
それぞれの端部には非燃焼式スラスターが設置される。機体重心、メインとなるスラスターから遠い位置に置くことで、小さな推力でも効果的な機動の変更が可能となっている。

2 コンタクトパッド <レイズナー>

足裏には接地の瞬間を感知するため、圧力センサーを内蔵したコンタクトパッドが配される。レイズナーでは爪先に3基、踵部に4基が置かれ、うち2基は接地面積の大きいパッドとなっている。これはレイズナーの機体バランス、特に歩行時の重心移動に由来するものであり、踵から接地するような運動によって歩行するようにプログラムされた結果であろう。グラドス星の環境要因も大きく関係していたとも考えられている。蹴り出しのために爪先には足の駆動に連動するバースパイクが設けられ、地面を噛むようになっている。なお足裏には、摩擦係数の高いコーティング剤が塗布されており、平滑な床面でもスリップすることがないようになっている。





7 機能拡張モジュール

通称バックパックと呼ばれる装備は、SPTの総合性能向上、特定性能の強化を行うことを目的に開発された機材で、グラドスがSPTを設計開発した当初から機体の重要な基本機能として位置づけていたもので、レイズナーでは機能拡張をより先鋭化することを目的としていたようである。レイズナーが単独行に移った時点では、大気圏外用高機動パック以外に、グレネードランチャー搭載パック、空力飛行型、火炎放射器装備パックなど試験用機材も持ち出されたというが、火星脱出時に遺棄され、機体とともに実物が地球にもたらされたのは、高機動用パックのみである。

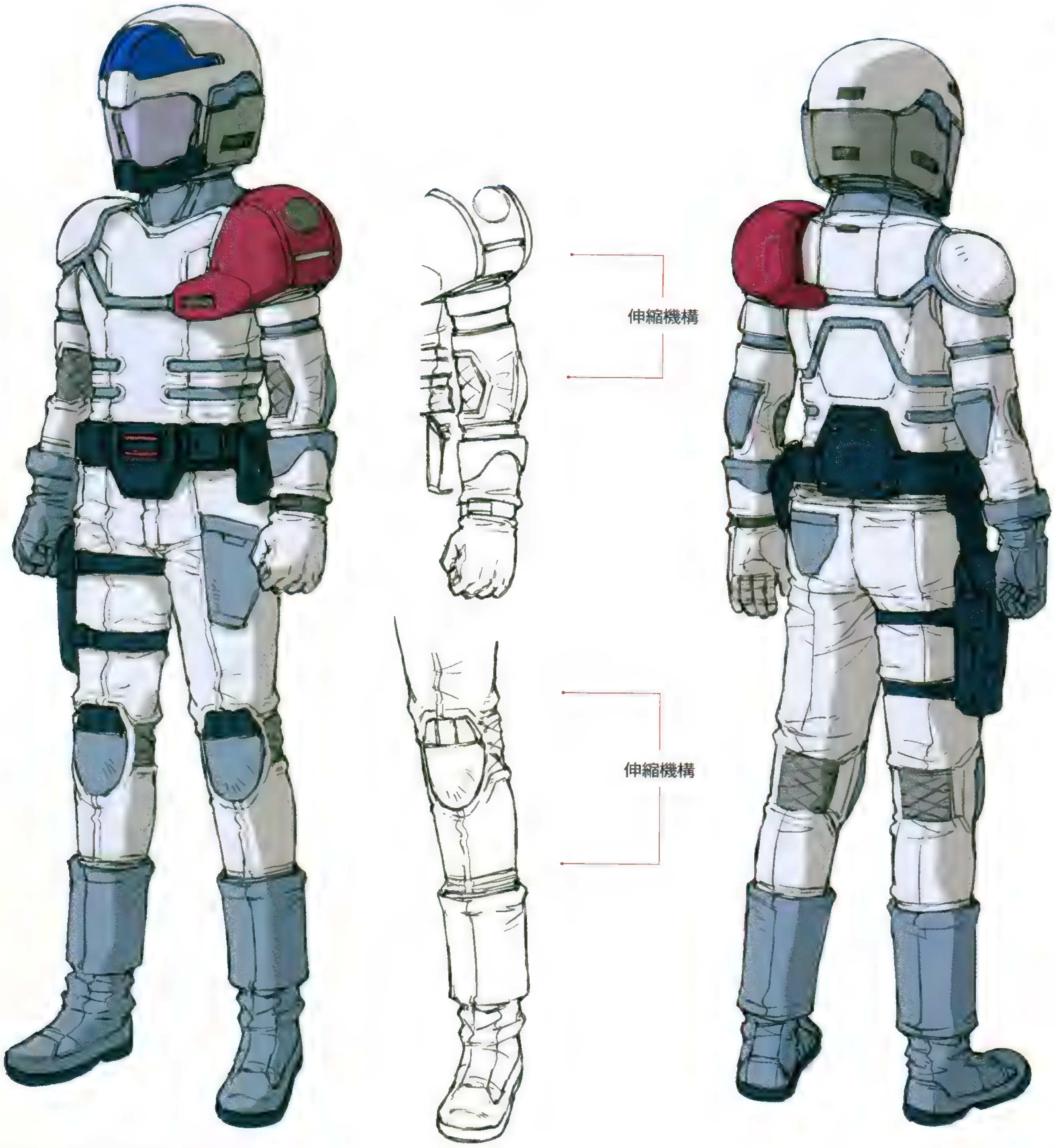
高機動用パックはSPTのもつ潜在能力を遺憾なく引き出すためには必須のオプション装備と判断され、地球製SPT製造の際、標準機能拡張モジュールとして地球製のものが生産されているが、構造やスラスターの配置はオリジナルに準拠する設計となっていた。

8 自己監視センサー（前述の解説に準ずる。）

9 兵装マウント

オリジナルではレーザードライフル携行専用のマウントとされ、地球製でもそのように作られているが、マウントのアダプターが規格品であれば締結は可能である。このためオプションの装備が多数計画されている。また地球製ではレーザードライフルをマウントしたまま、いわゆる車載機銃としての使用が可能なように、ライフルの発射管制、マウントの回転·ロックといった操作系が追加され、パックにライフルを装着したままでの使用ができるようになっている。

10 端部位置表示灯（前述の解説に準ずる。）



エイジ・アスカのパイロットスーツ

グラドス軍が制式採用しているSPT搭乗者用のパイロットスーツ（宇宙服兼用戦闘服）は数種類の異なるタイプが確認されている。中でも〈レイズナー〉に搭乗したエイジ・アスカが着用したものは、少なくとも地上に降りてきた地球占領軍の部隊員の中に類似のタイプが確認されておらず、あるいはV-MAX搭載機として当時特殊な位置づけにあった〈レイズナー〉用に開発される途上のものが持ち込まれたと考えられる。

地球人とは人種的に近似のグラドス人が着用する本スーツは、機能的に地球製の宇宙服と大差ない。しかし、本スーツの場合はV-MAX発動時の耐G対策など、特殊な機能が内蔵されていた可能性はある。エイジ・アスカがレジスタンスに身を寄せていた際に、このスーツについても調査の機会があったようであるが、記録が発見されておらず、詳細は不明なままだ。数人の技術者を介して伝わっている断片的な情報によれば、少なくとも最表面の素材に関しては地球でいう繊維のような質感が感じられなかったといい、ポリマーまたは柔金属でできた柔軟かつ強靭なシートを裁断した上で分子レベルの結合により立体的に仕上げているのかもしれない。

1999年にエイジ・アスカが再び現れ、戦闘エリアが宇宙に及んだ際、本スーツを着用して〈ニューレイズナー〉に搭乗したことが確認されているが、本スーツを元にして新たに開発した地球製のものであったのか、オリジナルであったのかは判然としない。オリジナルであった場合、3年を経て成長した彼の体格にフィットしたことから、ある程度のサイズ調整が可能であったと考えられる。左肩に見られる肩パッドはオプションで、内容物はプロペラントやエアボンベなど諸説あるが、同様のものを右肩にも取り付けることが可能であるようだ。

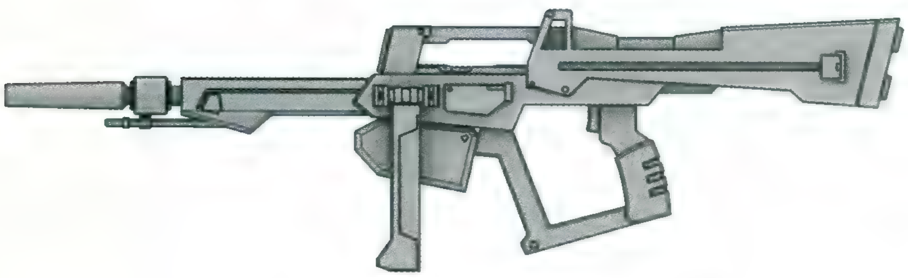
ヘルメットは同時期のほかのグラドス製SPT搭乗者用ヘルメットと同様、設定された固有のSPTと無線により接続され（電波を利用した通信と思われるが、詳細は不明）、ある程度離れた場所でもSPTと各種情報をやり取りできる。中枢制御を〈フォロン〉が担う〈レイズナー／ニューレイズナー〉の場合、遠隔における命令を柔軟に解釈し、SPTが攻撃を含め独自の行動を取ることも可能と考えられるが、ほかのSPTでは高度な判断を要するこうした遠隔操作は基本的にできない。

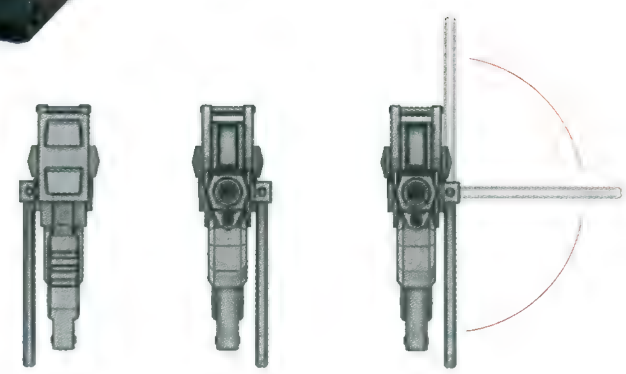


ldr-00r lasered rifle

ARMAMENTS
ニューレイズナーの武装







LDR-00R lasered rifle
LDR-00Rレーザードライフル

　次期主力SPT用に開発された試作連射型レーザー砲。試験運用の目的で〈レイズナー〉に装備され、後にそのまま〈ニューレイズナー〉が使用した。

　レーザーの集束率、またパルス周波は真空、大気中、湿度などの環境によりそれぞれ数段階の調整機能を持ち、パイロットが任意にモードを選ぶことができるが、基本的には自動で調整が行われる。レーザーは1秒間に10～30パルス程度に可変でき、条件が揃えばSPTの胴体を装甲ごと貫通できるという。

　従来のSPT用レーザードライフルでは、ライフル本体に内蔵されたバッテリーによるものと機体からの直接供給によるエネルギーを併用していたが、レイズナー系列機ではエネルギーカートリッジ式となり、機体本体に負担をかけずに安定した連射を実現している。

　LDR-00Rはあくまで試験運用中の試作ライフルのため、様々なテストに対応するための機構が残されたままのデザインであることが特徴となっている。センサー直後には増加ユニットをマウントするための開口部などがある。またバレルに当たる加速器部分は交換が可能で、これを延長し、遠距離攻撃用のライフルとして運用することも可能なように設計されている。

　ストック状の後部構造物の側面にはハードポイントへの接続装置がある。LDR-00RはバックパックであるUV-00Dへ接続された状態でも射撃が可能で、その場合はライフルのセンサー情報をコンソールパネルのモニターに呼び出して制御する。〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉では搭載コンピュータ〈レイ／フォロン〉による自動追尾、自動攻撃も可能である。

　スライドレールによるマウント部分の可動機構などから、オプション装備の架装が計画されていた可能性が高いと推定される。だが、エイジ･アスカが地球侵攻艦隊から奪取した機材の中にそれらは確認できず、また地球圏で本体以外の装備品が使用されたという記録も見つかっていない。地球製のSPT開発にあたっては、構造などに無駄が多いと判断されたためかレーザードライフルはコピーされず、原理を応用した二連装レーザードライフルが新たに開発された。





CARLF MISSILE

カーフミサイル

空対空、空対地ミサイルとして運用できる大型の誘導式ミサイル。SPTには珍しい独立した誘導兵器である。撃ち尽くしてしまえば母艦に帰投することでしか補給が行えない物理兵器は、レーザー兵器と異なり侵攻作戦向きの武装ではないとされ、少なくとも地球侵攻艦隊が持ち込んだほかのSPTでは標準採用されていなかったものである。〈レイズナー〉の場合は不測の事態に備え、一撃での破壊力の高いこの武装が搭載されていたと考えられる。〈ニューレイズナー〉でもこの武装は踏襲されているが、搭載したミサイルは地球産のミサイル技術を応用して新規に設計したタイプとなっており、補給も問題なく行えたようだ。また、この兵装に限っていえば、オリジナルのグラドス製のものに比べて若干の性能向上が果たされていたとされる。

弾頭にアクティブセンサーを搭載しており、完全な“撃ちっぱなし”能力を持つ。センサーユニットは1種類だが、接触起爆モードのほか、近接信管モードを備える。射撃時にパイロットがどちらかのモードを選択して射撃するが、〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉の場合は搭載コンピュータ〈レイ／フォロン〉による高度な状況判断が可能であるため、どちらかのモードが適切に自動選択されるほか、射出後でもコントロールが及ぶ状況であれば変更も可能であったようだ。

近接信管モードで起爆した場合、ミサイルの外装は爆発によって散弾状にばらまかれ、目標にダメージを与える。地上施設などを破壊する場合、ミサイルはそのまま目標に突入し、運動エネルギーをも利用して目標深部に到達し、これを破壊する。その際、充分な速度を稼ぐために目標へ向かって直線飛行せず、いったん大きく上空へ迂回するコースを取る場合もある。

大気圏内では主翼を展開し揚力を利用することで航続距離を延伸する。最大射程距離は5,000mとされるが、高々度から対地攻撃する場合など、この主翼による効果でそれ以上の距離にある目標に到達するケースもしばしばある。さらに、慣性航行が利用できる大気圏外でも航続距離の目安は意味をなさないことから、使用の可否は〈レイ／フォロン〉の助言にしたがって行うことが望ましい。主翼の採用は構造の複雑化を招き、量産性を損なう上に宇宙空間では不必要なウェイトとなる欠点があるが、



SPT脚部の限られたスペースに搭載することが前提である以上、ミサイルの大型化が困難であり、プロペラントタンクの容量が制限されることで実用性能に影響が出ることから採用せざるを得なかったという事情がある。特に〈レイズナー〉の場合は単独での大気圏離脱／突入能力を有するため、装備や武装を大気圏内外共用としておくことが求められたためでもある。

脚部にそれぞれ1基（合計2基）のカーフミサイルを搭載可能で、機体側に用意されたパレットに乗せる形で懸架し、射出時はこのパレットがミサイルごと機体外に押し出し、噴射と同時に切り離される。

ミサイルは個別に運用するほか、左右の脚に装備された計2発を同時に発射、同一目標に対し、それぞれ別の方向から連携して敵機を攻撃するなど様々な自律攻撃プログラムを持つ。また、〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉では〈レイ／フォロン〉による誘導により、より戦略性の高い攻撃も可能であった。

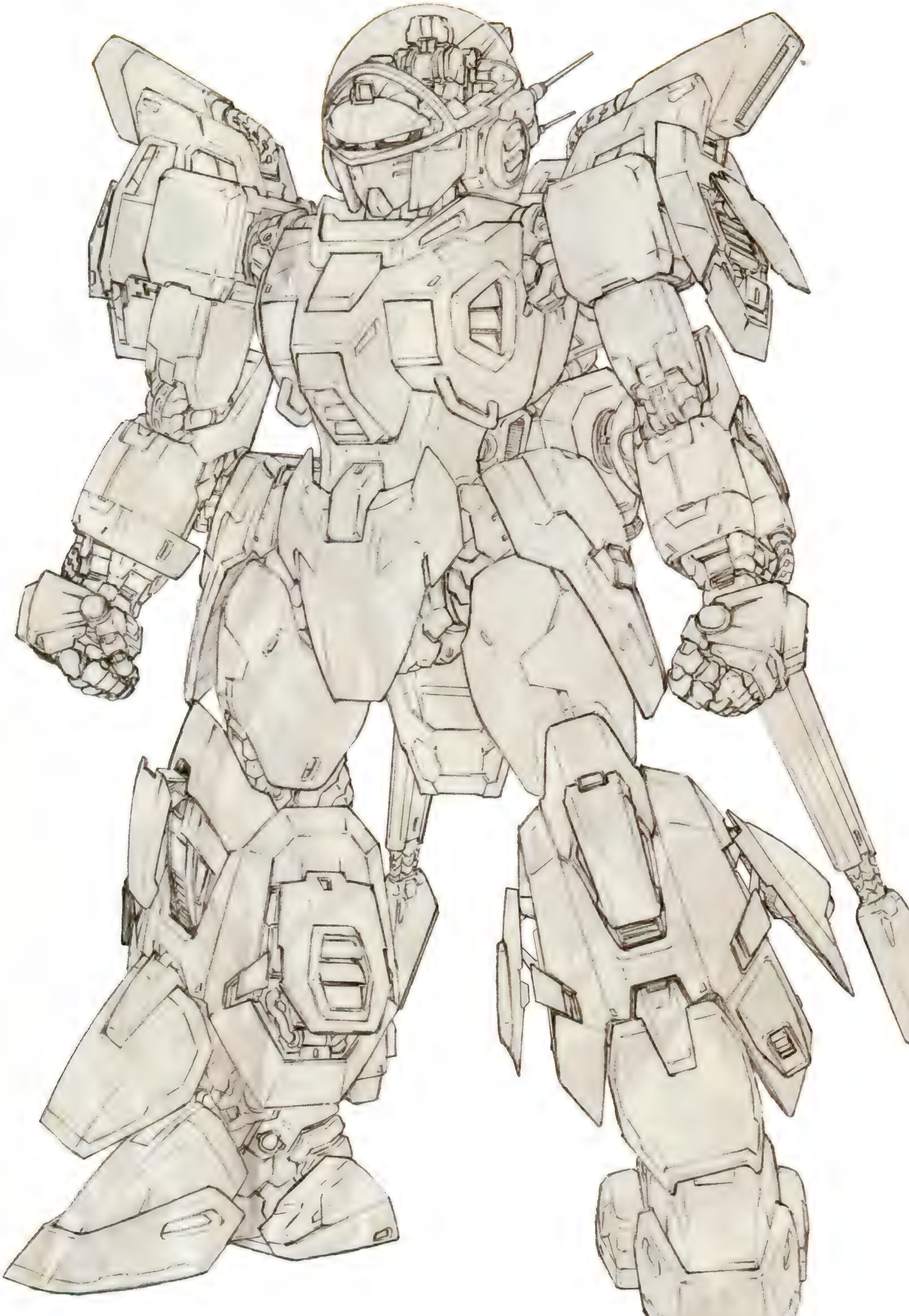
knuckle shot
ナックルショット

SPTが標準装備する格闘専用装備。ナックルショットはシステムの名称であるが、SPTによって繰り出される本装備による攻撃そのものをそのように呼ぶこともある。

原理としては、地球で溶接や放電加工に使用されている技術に近似のもので、グラドス技術による豊富な供給電力を用いて、並列に多数並べられた電極から放電させ、打撃によるインパクトと同時に目標物を瞬間的に溶融していく。インパクトの瞬間に電流量は最大となり、その溶融に要する時間は、人間の目ではもはや“破壊”としか認識できないほどである。

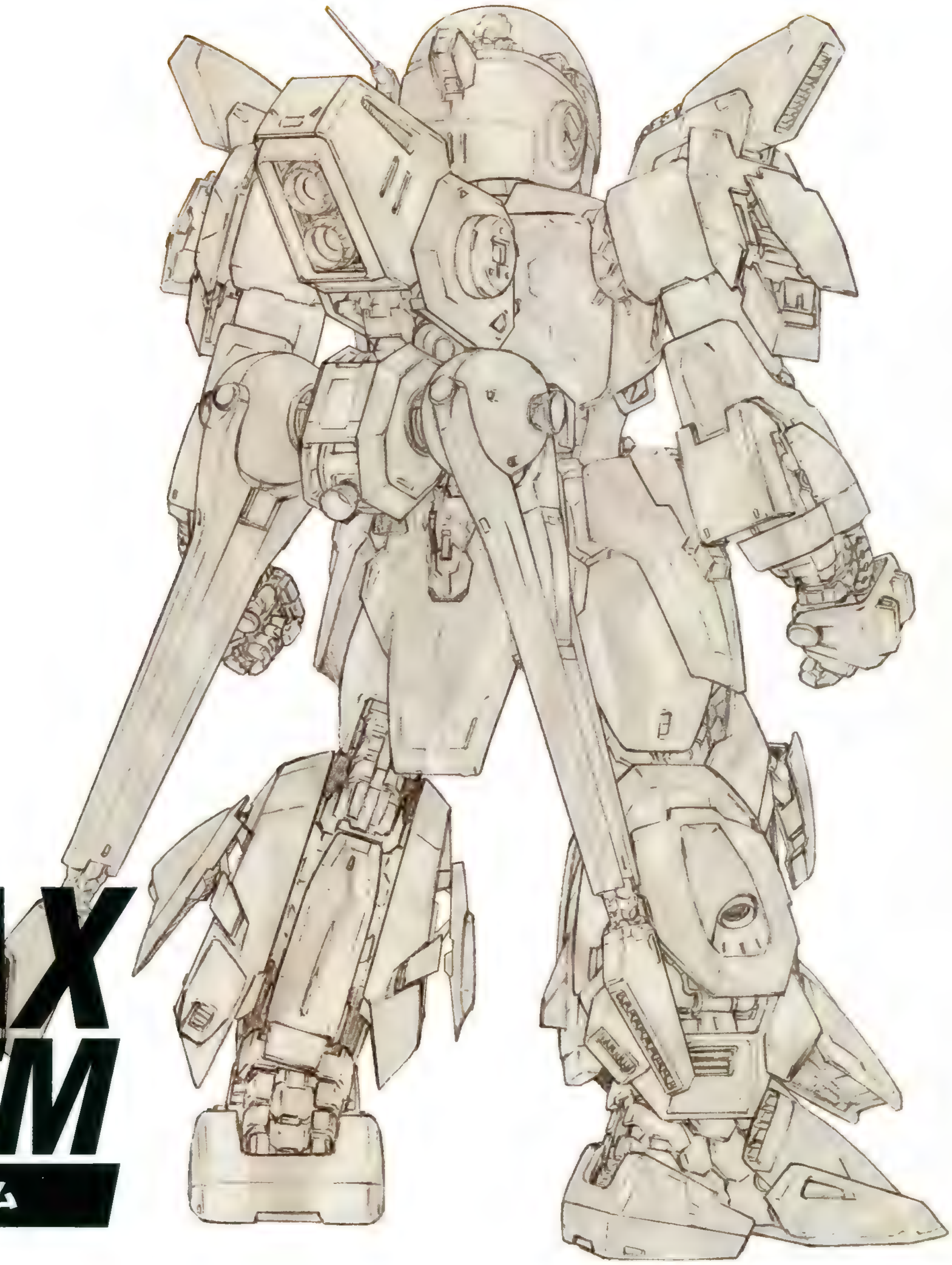
ナックルショットは直接“拳”を対象に打ち付けているように見えて、実は接触するかしないかのわずかな隙間（数mmから数cm）を空けているため、拳に物理的なダメージは生じない。

このシステムの開発段階では、電流のタイミング制御技術の確立に相当の苦心があったといい、逆に拳側が溶けてしまうなどの現象が頻発したようである。機械製作の現場などではこの制御を微細に行うことによってミクロン以下の溶融を用い高精度な切削加工を実現するが、SPTの格闘においては出力をできる限り大きくして破壊力を増す方向性が必要とされる。だが、むやみにパワーを大きくするだけでは先にシステム自体が耐えられず、自壊に至る。見かけ以上に繊細なコントロールが必要なのだ。なお、2機のSPTの間で作動中のナックルショットがぶつかり合う状況となった場合、そのままでは過大な放電が起こって両者が大きなダメージを負ってしまう。そのため、制御システムのプログラムには瞬間的に出力を絞る処理が組み込まれた。この場合は拳の構造体同士による直接の物理的接触となり、放電現象によらず打撃による小規模の破壊が発生することがある。



■レイズナー V-MAX終熄状態

SPT-LZ-00X LAYZNER V-MAX



V-MAX SYSTEM

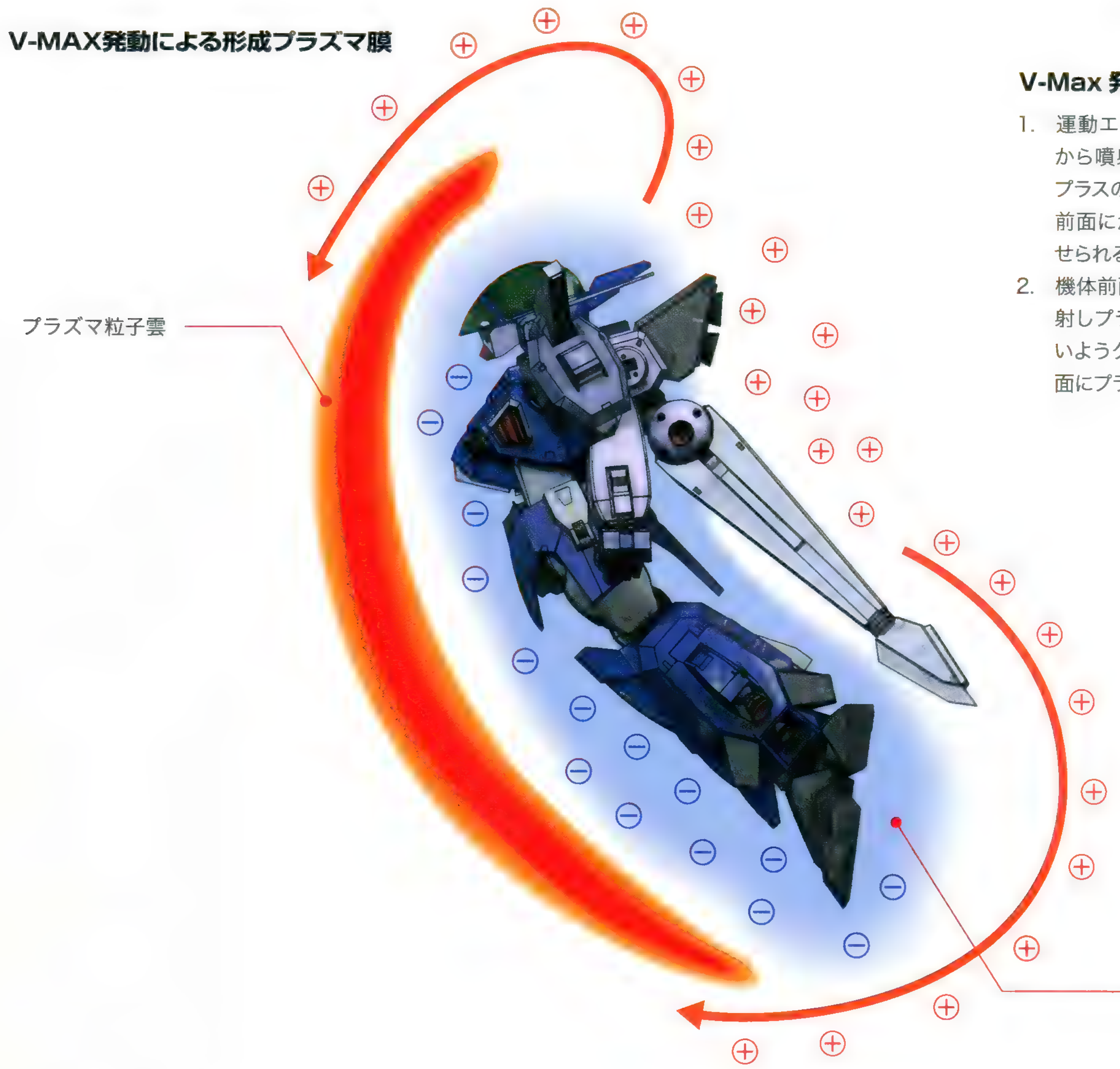
V-MAXシステム

グラドスによる第一次地球侵攻終了時、地球側はグラドスのSPTを十数機から数十機程度鹵獲し、一部はそのまま反攻に使用した。しかしそれはグラドス側にとっては想定内のことで、むしろ鹵獲された数が少ないと本星に報告していたようだ。また、地球人ケン・アスカから得られていた地球における技術レベルの情報から、鹵獲されたSPTがいずれコピーされ、大量生産されることも、可能性は低いながら予想していたと考えられる。そこで、従来SPTの性能を著しく向上させ、鹵獲あるいはコピーSPTとの性能差を広げるための追加装備として考え出されたのがV-MAXである。

V-MAXは地球侵攻計画以降に開発されるSPTへの搭載を想定したSPTの緊急出力モードで、G-エンジン出力を最大200%上げ、同時に機体をプラズマと不活性ガス（ヘリウム4）で覆い、総合的な戦闘機動力を一時的に375%上げるシステムである。鹵獲あるいはコピーSPTとの個々の戦闘において、より優位な戦闘を行う一方、不利な戦局からの離脱にも使われる。戦略的には圧倒的な戦力差を見せつけ地球側の戦意を喪失させる狙いもあるとされる。

ただし、V-MAXは発動すると機体全体のシステムにオーバーワークを強いるため、最大でも5分程度しか持続せず、終了後は各部の機能が著しく低下するため、発動の可否判断が非常に難しい。V-MAXを発動させ一時的に有利になったとしても、終了後の戦闘力低下状態を敵につけこまれないとも限らないからだ。したがって、〈レイズナー〉の場合は当初、V-MAX発動の判断がメインシステムである〈レイ〉とは別の人工知能〈フォロン〉に委ねられた。これは〈レイズナー〉が初めてV-MAXを搭載したSPTであること、並びに同機がグラドス側に不利な情報（いわゆる「グラドス創世の秘密」）を持っていたことから、グラドスへも捕獲されるわけにはいかなかったからである。

V-MAXシステムがSPTにとってまだ一般的な装備ではなかった1996年から99年にかけての地球上では、この装備は少なくとも局地的な戦闘状況において、極めて有利に働いたのだった。



V-Max 発動時

1. 運動エネルギーを失ったノズルから噴射されたプラズマ粒子はプラスの電荷を帯びており、機体前面にかけた負の電圧に引き寄せられる。
2. 機体前面からヘリウム4ガスを噴射しプラズマが機体に付着しないようクッションとする。機体前面にプラズマ膜が形成される。

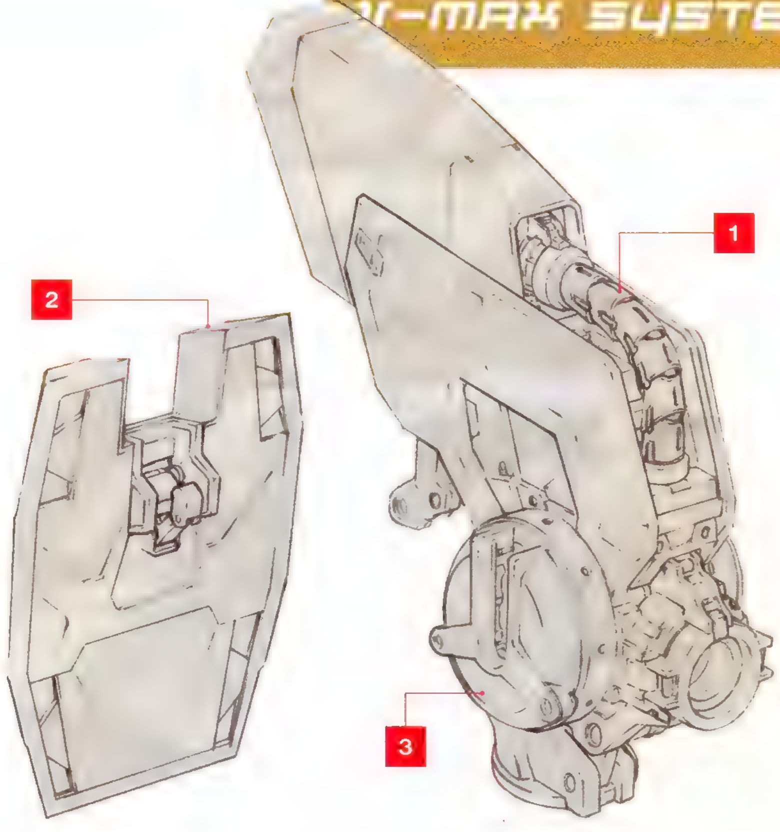
システム概要

G-エンジンの出力アップにはグラドス特有の金属レイズニグルの粉末を燃焼室内に投入することで行われる。レイズニグルは地球のマグネシウムと似た性質を持っており、高温環境下では酸素と爆発的に結びついて高温ガス化する。レイズニグルの燃焼ガスは2800℃を超え推力を約2倍に押し上げる。しかしレイズニグルは燃焼室の中央に投入されるため、高温ガスの周囲を通常の水素と酸素の燃焼ガスが取り巻くためにノズル内壁に触れることはない。それでもV-MAXの発動後はノズルは高温による強度低下が著しく、短いサイクルでの全交換が必要である。

レイズニグルは〈レイズナー〉の名称の由来になったとされる合金の名称であるが、後に地球のレジスタンスたちがV-MAXシステムをコピーして〈ニューレイズナー〉に搭載した際、この代替となる物質の開発が必要となった。〈レイズナー〉にV-MAXを搭載したグラドスの反体制派技術者たちは、むろんその補充に関しても考慮しており、技術情報とともに精製のノウハウを持たせた同志を送り込み、〈レイズナー〉が修復されて戦線に復帰する1999年には地球側で生産できるような体制を築くことに成功した。この金属粉生産には大規模なプラントは必要なく、地球占領軍制圧下の地球でも材料さえあれば充分に精製が可能だった。

なお、V-MAXシステムを搭載したSPTは地球上でも〈レイズナー〉系列以外に複数が確認されているが、いずれも原理は同様のものである。発動時は飛行特性に加えて機体制御もまったく通常と変化するため、既存の機体にシステムを追加する場合には内部プログラムを書き換えて調整を施し、いわば再構築することが望ましい。しかし制御系をリレーして外付けの専用演算コンピュータにデータを渡して計算させた後に機体各部へ命令を送る、といったいわゆる“後付け”も不可能ではなく、実際にそのように実装されたMF-MC-73U〈ガッシュラン〉といった機体も存在する。むろんのことタイムラグなど後付けでは解決しない問題もあり、極めて近い性能を持つ機体との戦いとなった場合には不利になるだろうと思われる。

少なくともグラドス陣営で運用された機体は、前述のようにV-MAX発動によるノズルの消耗が激しいが、実装機体が少なかったこと、中でも〈ザカール〉はル・カイン総督の専用機として使用されたことからコストに関しては度外視されていたことから、運用上大きな問題とはならなかった。なお、〈レイズナー〉の場合はグラドス施政下でのメンテナンスが困難であったことからノズル内壁に機体外装のプラズマ層制御(後述)を応用した境界層制御装置が追加され、飛躍的に交換サイクルを伸ばす対策が施されている。

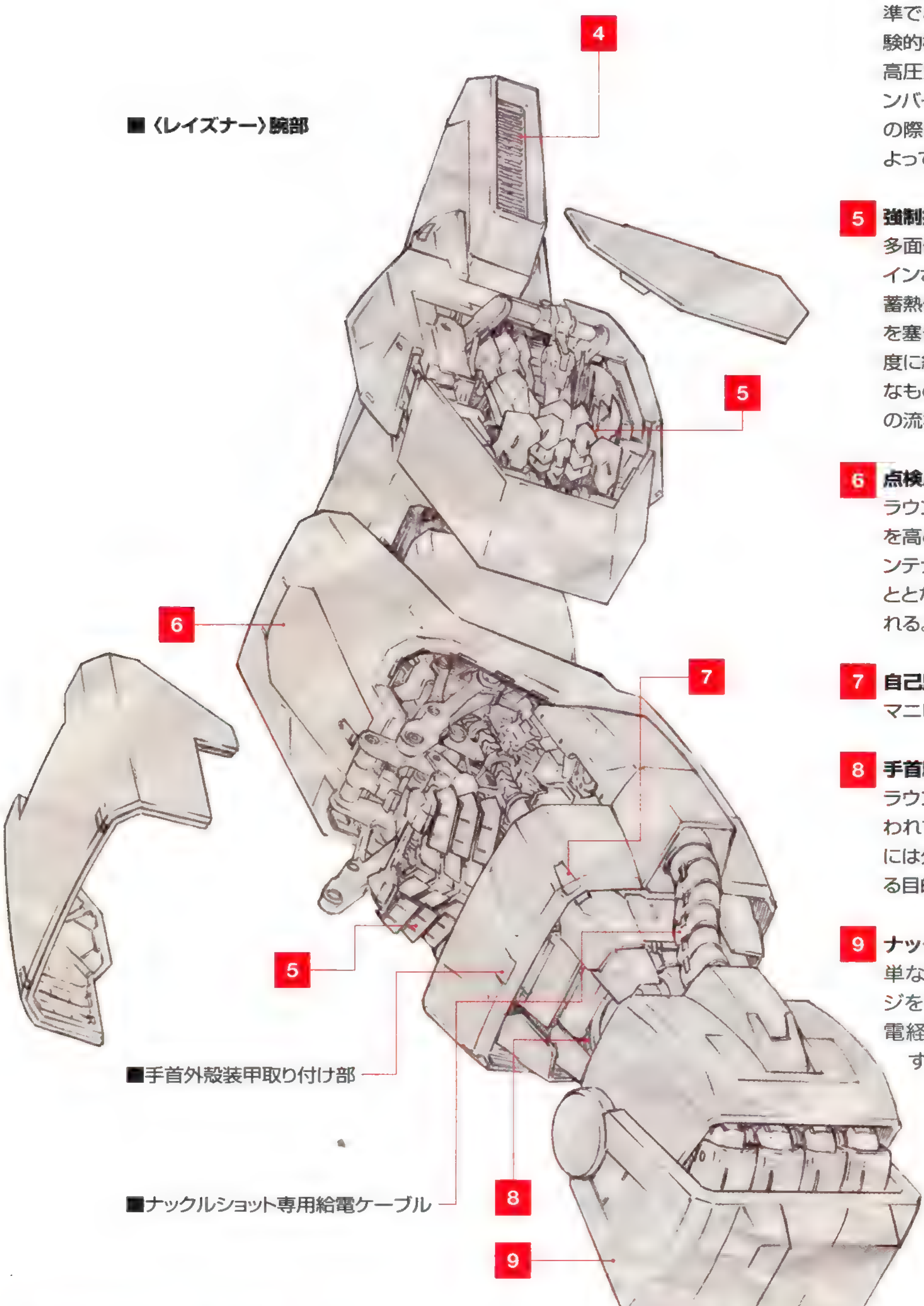


1 高圧力パイプ
各冷却系から集められた蓄熱体が気化して高圧状態で通るうえ可動部でもあるため、フレキシブルパイプも装甲化されている。大気圏内、宇宙空間いずれで運用しても内部気体に環境の影響が出ないように、断熱機能も十分に考慮される。被弾により傷などを受けると爆発的な破壊が起きる危険性もあるため、本来は装甲外殻で覆うが、レイズナーでは外した状態のまま使用されていた。

2 肩部サスペンディッドアーマー
V-MAX発動時に肩部放熱ベントからバイパスされた蓄熱体を一気に放出する排熱装置が内蔵される。外側に向いた外殻、ドア、内蔵される放熱デバイスも含めて、複合装甲と認識されており、扱いとしては交換可能な消耗品であった。本来の装甲は内側の外板であるとの解釈も可能であろう。

3 上腕駆動部
グラドス製機体に標準的なラウンド型モーターの組み合わせによる可動構造である。関節の駆動はモーターのスムーズな連動が重要であるため、個々のモーターの起動・制動タイミングと動きのシンクロナイズ、ハーモナイズを常時調整する必要があった。他の関節も含めて各モーターの調整は機上搭載AIが自律的に不断で行っているが、一定の稼働時間を経た時点で、整備調整の必要が生じる。放熱ベント／スラスターの支持フレームに開口部が設けられているのは、モーターの外部調整が容易に行えるようにするためのもので、本来は装甲ハッチで塞がれるものであるが、試験機体の利便性を考慮して、開放したままの状態で運用されていた。

■〈レイズナー〉腕部



4 肩部放熱ベント／スラスター
グラドス・モーターが発する熱を冷却するため、機体各所に熱交換機材が配置されるが、主に上半身の熱を集中的に排出するために設けられたのが、肩部放熱ベントである。他のベント同様に、姿勢制御用スラスターとしての役目も果たすもので、特に斜め側方への推力ベクトルを担う。排出口のルーバーが非常に密な配置となっているが、これは高圧力パイプから送られてくる気化した蓄熱体（主成分は燃料電池発電時に二次的に生成された水）をより高速で噴出させ、高利得で推力を得るためである。燃焼をともなわない推力発生補助機関として、グラドス製SPTでは少なからず使用されているが、肩部スラスターは燃焼式スラスターが標準であった。レイズナーでは非燃焼式スラスターの性能を先鋭化させる目的の実験的機材として、この肩部ベントが導入され、ベイブルにも試験搭載されている。高圧力パイプを通って本体内に送り込まれた高温高圧の機体は、内蔵されるチェンバー内で減圧される。気化水は一気に凝集し一部は冷却系に回収されるが、その際に解放される潜熱を利用してヒートポンプ機能が働き発電も行われ、これによって気体を再圧縮するシステムが作動、ルーバーから放出される。

5 強制排熱装置
多面体構造の排熱装置は蓄熱体を噴流にして一気に機外へと放出するためにデザインされたもので、宇宙空間での使用を第一義に考案されたものである。高温の蓄熱体であっても機外に出たとたんに凍結するため、噴出の流速が遅いと排出口を塞ぎかねないため、高速噴流を維持できる形状と、さらに各フィンが一定の温度に維持可能なように作られた。V-MAX作動後の放熱時、機体が白い噴射のようなもので取り巻かれるのは、高速で機外に排出され瞬時に凍結した微細な蓄熱体の流れである。

6 点検用ハッチドア
ラウンド型モーターを使用する肘関節部は、エビ殻状の装甲外殻で覆い耐弾性能を高めており、なおかつ後部は大きく伸びた下腕装甲で守られていた。しかしメンテナンスの簡便性は低くなることから、大型の点検用ハッチドアが設置されることとなった。通常の点検や起動・制動タイミングの調整はこのハッチを介して行われる。

7 自己監視センサー
マニピュレーターの動きのほか、ナックルショットの機能を監視する。

8 手首駆動部
ラウンド型モーターを使用し、保護装甲としてエビ殻状の可動式装甲カバーで覆われているのは、他の駆動部同様である。本来はベイブルなどのように下腕下端には外殻の延長装甲を接続し保護強化するが、レイズナーでは可動域を大きくとる目的から、この延長装甲は未装備のままで運用されていた。

9 ナックルショット
単なる打撃のための強化装甲ではなく、放電プラズマによって大きなダメージを与えることのできる攻撃用装備である。高電圧が必要なため専用の給電経路が確保される。このデバイスは攻撃対象が金属である場合のみならず、セラミック、炭素系複合材料であっても瞬時に溶融蒸発させてえぐり取ることが可能で、接近戦ではきわめて有効な兵装といえる。しかし、消費電力が大きいため、無駄打ち、空打ちを無くす目的で打撃のインパクトの瞬間にプラズマが発生するようになっている。また自損の可能性もないわけではないので、手首に設置された機上AI用のセンサーで監視、制御されている。



■レイズナー V-MAX終熄状態

V-MAX発動

レイズニグルの投入と同時に燃焼室周囲とノズルの開口部周囲、さらに機体各所の電極に高周波の高電流が流され、レイズニグルの燃焼ガスはプラズマ化し機体周囲を取り巻くが、機体の各所から不活性ガスのヘリウム4を排出して機体に直接触れないようにして、いわばプラズマの膜を形成する。このプラズマ膜はエネルギー量が大きく、温度も高いため大気圏内においては空気の圧力に屈することがなく、空気に対してはほとんど固体のように振る舞う。したがってプラズマ膜の形状を機体各所の電極から生じる磁力を用いて制御することにより、大気圏内においては空気抵抗を極端に減少させ、さらに揚力を発生させせつつ左右で形状を変え、地球の最新式戦闘機のような、あるいはそれ以上の機動を行うことも可能になる。特に大気圏内における戦闘機動力がノーマル時より著しく向上するが、これはグラドス側がやはり最終的には地球の大気圏内での戦闘が主になると想定したからで、G-エンジンの出力アップだけでなく空気抵抗の減少にも神経を割いた結果である。

大気圏外においては同様にプラズマ膜の形成が行われるが、当然のことながら機動力に関しては大気圏内ほどの向上は見られない。ただし、このプラズマ膜はレーザーや荷電粒子流をある程度無効化することが可能であるため、大気の影響でこれらが減衰しない大気圏外においては、防御の面でより有効になる。

V-MAX発動時にはG-エンジンの推力アップやプラズマ膜の形成のため、通常より電力量が約3倍必要となる。そのため、まず燃料電池の発電量を大きくするために排熱システムの経路を

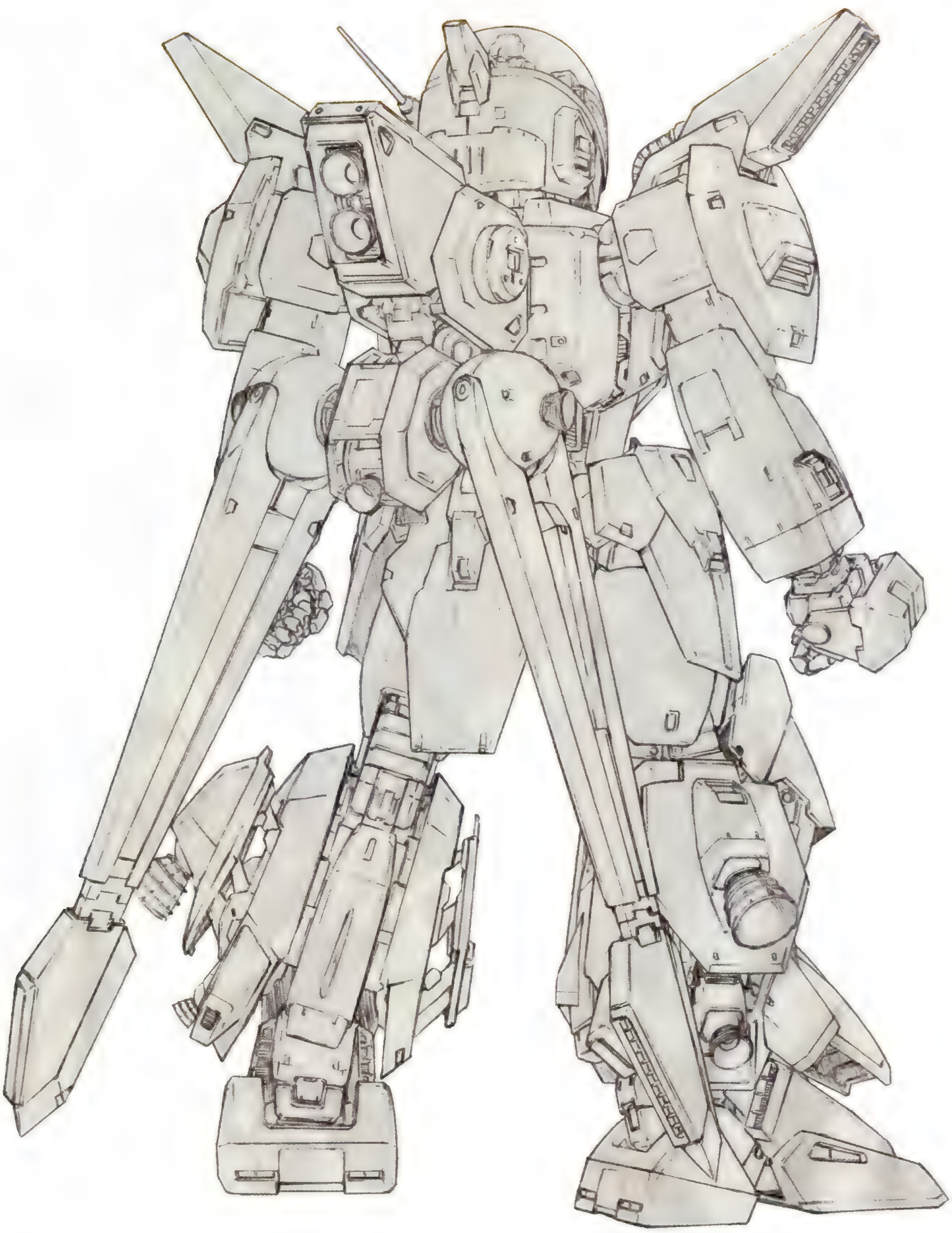


■ニューレイズナー V-MAX終熄状態

変え、排熱を燃料電池へと送り込み、作動温度を高くする。ただ、発電効率が落ちるために触媒金属の供給量も増やす必要がある。また各部のG-モーターの出力アップのために機体各所への酸素と水素の供給量を増やし圧力も10気圧から100気圧へと引き上げる。これにより燃料電池の電力量を増やすと同時に、各部のG-モーターの出力も約2倍に引き上げることが可能となっている。

V-MAXが発動すると加速性能が向上するために、機体にかかる加速度が非常に大きくなる。瞬間最大30～40Gがかかるといわれており、機動戦闘中は常時15G程度はかかるといわれている。この加速度では機体の強度に問題がなくても操縦するパイロットの身体がもたず、最悪の場合は命を落とすレベルである。

パイロットに対する耐Gシステムとしては、磁力によって血流操作を行いブラックアウト、レッドアウトを防ぐABROS（Anti Black and Red Out system）が採用されている。これはシートに内蔵されたデバイスを介し、強力な磁力によりパイロットの血管中の血液の流れを意図的に操作しブラックアウト、レッドアウトを防ぐものだ。正確には血液中のヘモグロビンに多く含まれる鉄分を磁力で操作する。またスーツに内蔵された電極にパルス状の電気を流すことにより、筋肉などの体の組織を一時的に強化して加速度に押しつぶされない体にするシステムも搭載している。この強引ともいえる血流操作は、システム的にもまだ開発途上で完全とはいえず、急激な環境変化に対して認識力や記憶の混乱といった症状が見られる場合があったという。

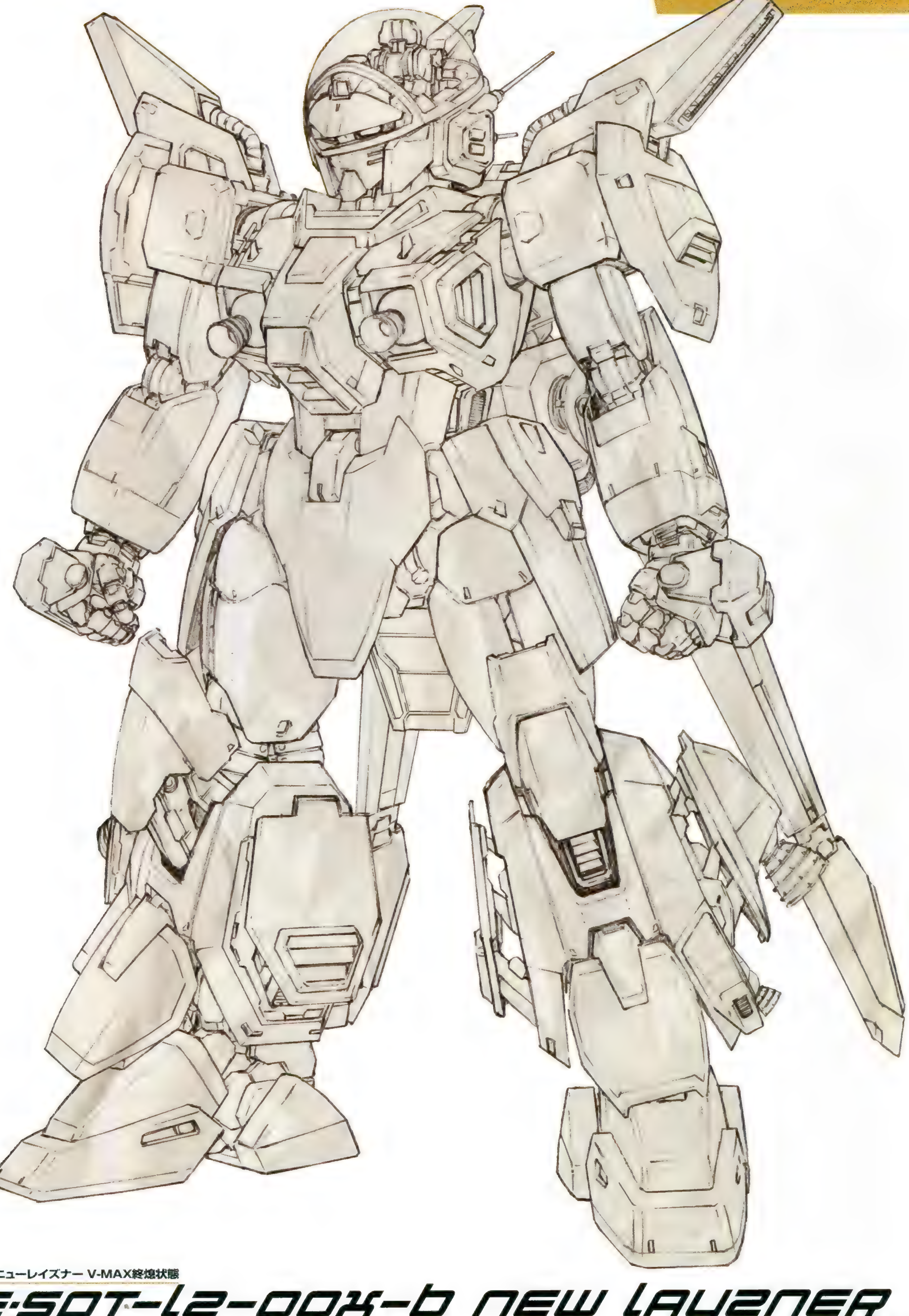


ニューレイズナーのV-MAX

〈レイズナー〉の後継機体として地球で開発された〈ニューレイズナー〉は、性能そのものは初代のそれに準じていると考えてよい。細部の違いによって、作動の感触や消耗部品交換サイクルなど違いはあったが、総合的な性能に関してはほぼ同等である。違いがあるとすれば、V-MAX発動時における機動性能であろう。したがって、〈ニューレイズナー〉は俗に「V-MAX強化型レイズナー」との呼称を持つ。

地球側の未熟なSPT技術では、最新鋭の〈ザカール〉を基礎的性能で上回る機体を開発することは困難であった。そのため、ある程度パイロットへの負荷が増大することと引き替えに機動性を向上させるプランが採用された。具体的には、スラスターの増設や出力強化、またプラズマ制御プログラムの見直しなどによる機動効率化などである。これらの開発には、地球側技術者が戦闘機やロケット開発で培った、グラドスにはない視点が反映されていたといわれ、これにより急激な軌道変更や細かなストップ&ゴーなどが可能となっていた。

パイロットへの負荷については、〈フォロン〉のAIとしての柔軟な演算性能をより積極的に利用する試みが採用され、ABROSの性能向上が図られている。この効果は予想以上であったようで、〈ニューレイズナー〉に乗ったエイジ・アスカは、以前に比べてより明晰な意識を持続したまま操縦に専念できるようになり、結果として〈レイズナー〉はレッドモード発動時の〈ザカール〉に伍する性能を手に入れたのである。



■ニューレイズナー V-MAX終熄状態

E·SPT-LZ-00X-B NEW LAYZNER V-MAX

BAYBULL & BULDY
ベイブル&バルディ

SPT-BD-03U〈バルディ〉、及びSPT-BB-02U〈ベイブル〉は、〈レイズナー〉と同時期に試作されたSPTである。両機は〈レイズナー〉に極めて近縁の試作機であり、搭載機器や処理装置など多くの部分が共通していたほか、整備用の機材も互換性が高い。ここでは、エドワーズ空軍基地で地球人によって調査された結果、及び〈レイズナー〉系列機の開発に関与し地球侵攻艦隊とともに来訪したグラドス人技術者たちなどから得た証言を基に、両機について判明した事柄について解説する。

両機は〈レイズナー〉同様、実戦により近い環境下での試験を行うべく、グレスコ提督率いる地球侵攻艦隊の航宙母艦に搭載されて太陽系へ運ばれた。艦隊からはアルバトロ・ナル・エイジ・アスカによって〈レイズナー〉及び〈ベイブル〉〈バルディ〉の3機が持ち出されたが、このほかに同型機または類似機が同艦あるいは本国に存在したかは不明である。

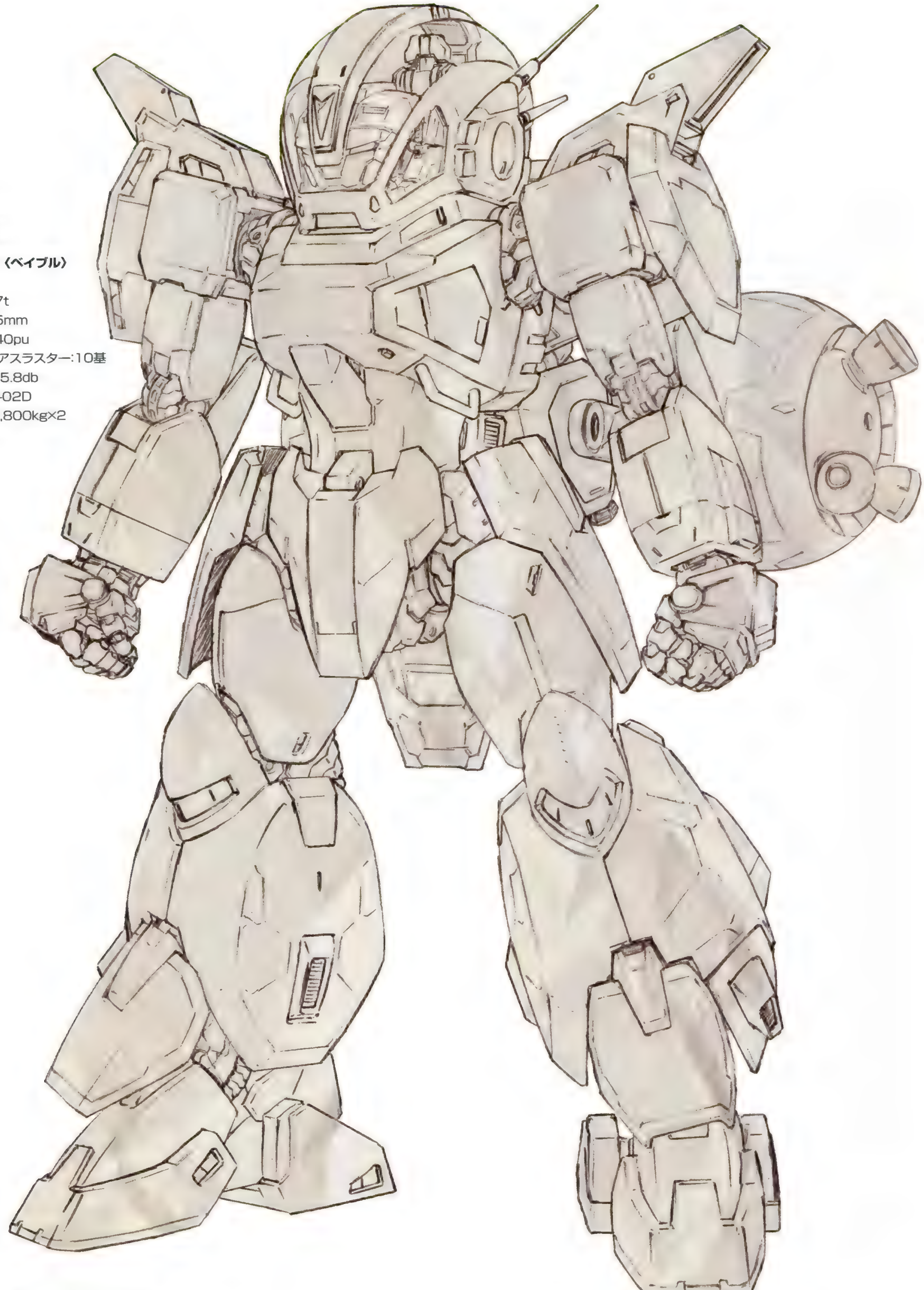
エイジ・アスカによる地球侵攻艦隊への抵抗の際、〈ベイブル〉と〈バルディ〉は地球人の手によっても運用された。〈レイズナー〉は地球人との接触が想定されていたため、搭載コンピュータは地球の公用言語に近い立場の英語が翻訳可能なようインターフェースに追加言語データベースを与えられていたが（エイジ・アスカは英語を理解したが、SPTの搭載コンピュータとはグラドス星の言語でコミュニケートしていた）、〈ベイブル〉と〈バルディ〉については確かなことは判っていない。

この2機に搭乗した地球人はデビッド・ラザフォード、ロアン・デミトリッヒの2名であるが、彼らが搭載コンピュータの助言を理解しつつ操縦していたかについては諸説ある。充分な訓練もなしにこの2人が両機を扱えたのは、搭載コンピュータの陰の支援があったからであるのはむろんだが、音声によるサポートは切っていた可能性もある。SPTの行動のほとんどはコンピュータによって制御されており、素人でも方向指示や動作の最初のきっかけを与える、照準や射撃の命令を下す、といった操作である程度の戦闘機動を行うことができるが、当然のことながら正規の訓練を受けたパイロットにはとうてい及ぶものではなく、そのため両機はグラドス地球侵攻艦隊との軌道上における戦闘において、〈レイズナー〉との本来期待される連携行動が取れなかったのではないかと考えられている。なお、後に地球で生産されたSPTについては、インターフェースが完全に英語に置き換わっている。

〈ベイブル〉と〈バルディ〉はこの戦闘において損傷し、GTC-DN-03トライポッドキャリアとともに地球へ降下した。その後、基地がグラドス軍によって制圧されると同時に2機は接収され、再戦力化のために修理されたことが判っている。この時、反体制派に属する在地球グラドス人技術者によって本星から取り寄せられた修理部材の一部は、地球解放戦線機構（=レジスタンス）に横流しされて〈レイズナー〉修復に充てられたという。占領軍内で両機の修理に関する稟議が通った裏には、彼らの密かな活動があったともいわれる。しかし、結局は部隊配備されることなく保存のみされていたようである。〈レイズナー〉とその系列機は試作段階にあり、グラドス軍にとっても未知の部分の多い機体であったことから性能や運用方法の把握に手間がかかり、最終的にほかのSPTと同様に扱うにはコストや労力の面で折り合わない、と判断されたのであろう。

グラドス地球占領軍では当初、再び現れた〈レイズナー〉に対抗するための研究材料として、〈ベイブル〉と〈バルディ〉が役立つのではと期待をかけたようであるが、開発からすでに3年が経過して技術的な新鮮さが失われていたこと、かつ〈レイズナー〉が持っていた絶対的なアドバンテージであるV-MAXシステムを両機が搭載していなかったことなどから、すぐにその価値なしと判断。そのため、ル・カイン総督発案の対レジスタンス作戦に〈ベイブル〉を投入すること、さらにそれに伴う同機の破棄が容認されたと考えられる。

一方の〈バルディ〉の所在、及び最終的な処遇についての情報はない。ル・カイン総督の失踪までの間、彼の指揮下にあった〈バルディ〉のかつての搭乗者、ロアン・デミトリッヒがその所在について把握していた可能性は充分にあるが、その後〈バルディ〉がレジスタンスの手に渡ったという事実は確認できておらず、あるいは前述のような〈レイズナー〉研究に供されたあげく、解体されてしまったと考えるのが妥当かもしれない。

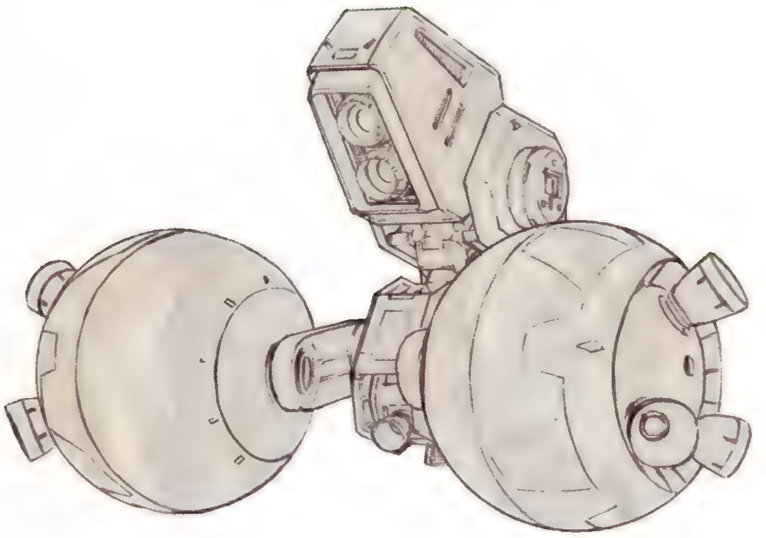


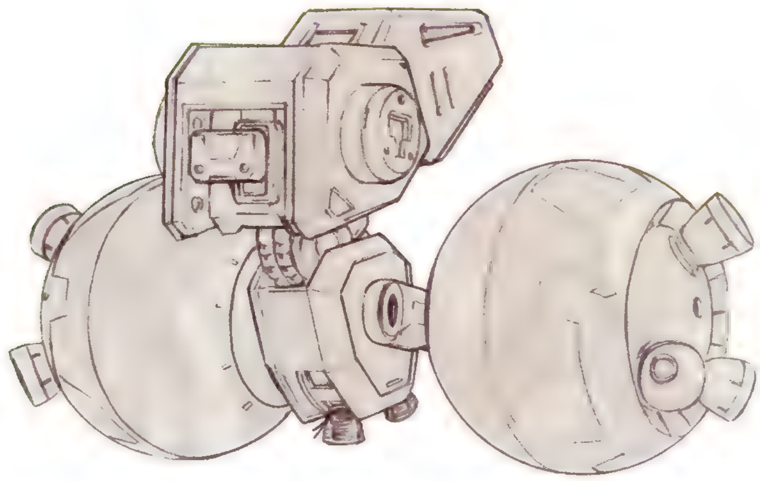
spec
諸元

SPT-BB-02U〈ベイブル〉
全高:9.74m
全備重量:15.07t
胸部装甲厚:135mm
エンジン出力:240pu
姿勢制御バーニアスラスター:10基
センサー感度:-55.8db
バックパック:SP-02D
ロケット推力:12,800kg×2

SPT-BB-02U ベイブル

SPT-BB-02U BAYBULL





■SPT-BB-02U〈ベイブル〉

〈レイズナー〉の系列機に分類される3機のうち、太陽系に持ち込まれた際に近接格闘戦を想定した仕様とされていた機体が〈ベイブル〉である。設計上の特徴としては、格闘戦を想定して頭部が専用の高耐久性外殻を備えたデザインとされている点であろう。

格闘戦仕様としての装備を持つが、格闘戦に特化した機体である、との表現は誤解を招く。あくまでも、装備や仕様の試験のために用意された装備を与えられたに過ぎず、例えばバックパックを系列機の〈バルディ〉が使用したBPP-10Cショルダーキャノンに換装すれば、支援機として運用が可能である。ただし、本機の設計が重装甲をコンセプトとしていることは確かで、本機の試験運用の結果を反映して"格闘戦用機"の仕様が策定された可能性はもちろんある。

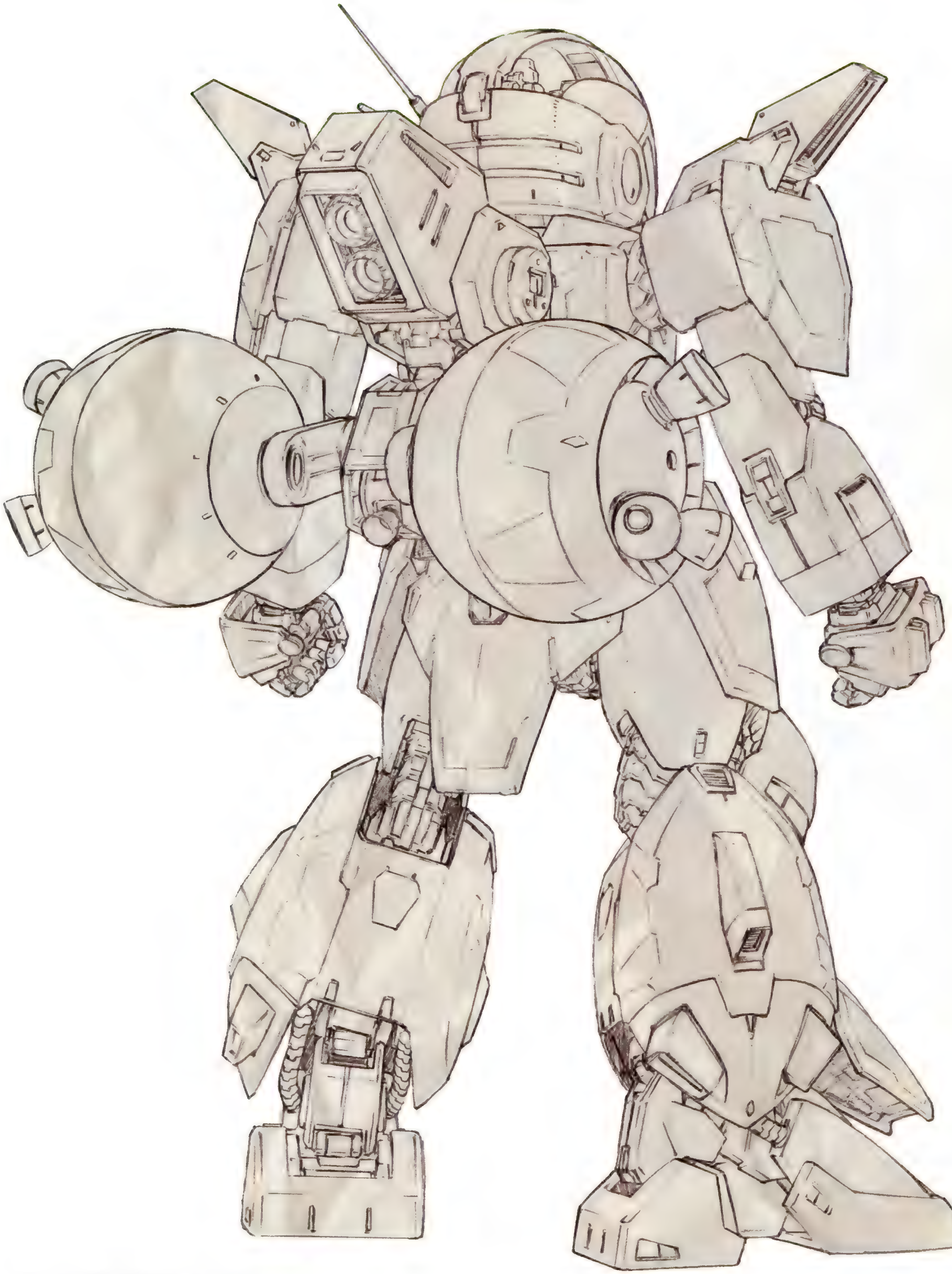
〈ベイブル〉は1999年、グラドス地球占領軍によって対レジスタンスの作戦に囮として活用されることになるが、その際、ニューヨーク近郊におけるレジスタンスのリーダー的存在となっていたかつての搭乗者、デビッド・ラザフォードもろとも爆破しようと機体内に爆弾を仕掛けられた。この作戦で、地球占領軍は所期の目的を果たせず〈ベイブル〉の機体のみを喪失している。

頭部

ほかの多くのSPTと異なり、フロントキャノピー中央に装甲が施されるという特異な形状を持つ。これは近接格闘戦を想定した本機の独自仕様といえ、コックピットを保護し、頭部の強度を上げるために採用された構造である。これによって正面視界が阻害されることは外観からも察せられ、非常に視界が悪いと想像されているが、それは誤解であることが判っている。装甲裏面、つまりパイロット正面に当たる部分はモニターとなっており、外界の視界を投影することでほかのSPTと同程度の視界を確保していたようである。中央左右にキャノピーの透明部分が残されているのは、万が一、このモニターがシステムダウンするような最悪の事態に備えるためといわれ、中途半端な印象を与えるが、実験機であると考えればそれもうなずけよう。

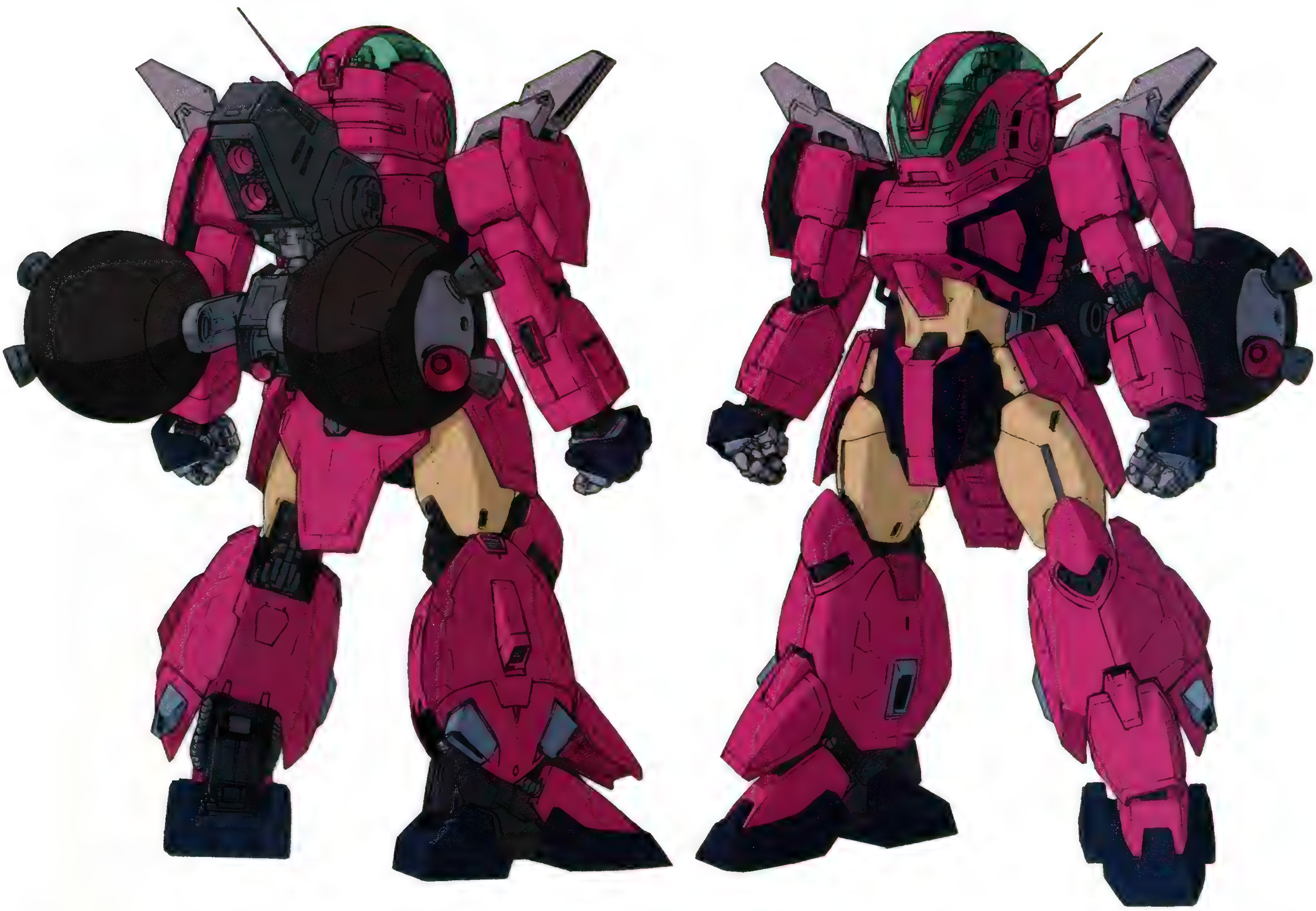
開発初期の〈ベイブル〉は、複数の頭部が用意されて、これを適宜換装しながら初期の実働テストを行ったという。当初はほかのSPT同様に視野角の広い大型キャノピーを持つ頭部を搭載したが、格闘戦時におけるパイロットの心理的不安を解決するため、完全密閉型のものも試作された。地球侵攻艦隊によって太陽系に搬入された機体は、これらの折衷タイプとなっていたが、外観を含めてまだ改良の余地はあったものと推測される。

ザカールなどに採用されたキャノピー・ディスプレイ方式は、この装甲内投影式を採用した〈ベイブル〉の技術を延長する思想の下、開発されたものである。当時、完全密閉型キャノピーの有効性は証明されていたものの、実際にSPTを運用する軍やパイロットたちからは透明キャノピーを望む声が根強く、そのため映像投影と有視界を任意に切り替えできるキャノピー・ディスプレイ方式が一部のカスタム機に採用されたのである。なお、グラドス本星との繋がりが絶たれた今、SPT開発の本家でどのキャノピータイプが主流となったのかは知る由もないが、(コストなどを考慮しなければ)恐らくは実用上の利便性などから後者が優位に立つであろうことは想像に難くない。



SPT-BB-02U ベイブル

SPT-BB-02U BAYBULL



胴部

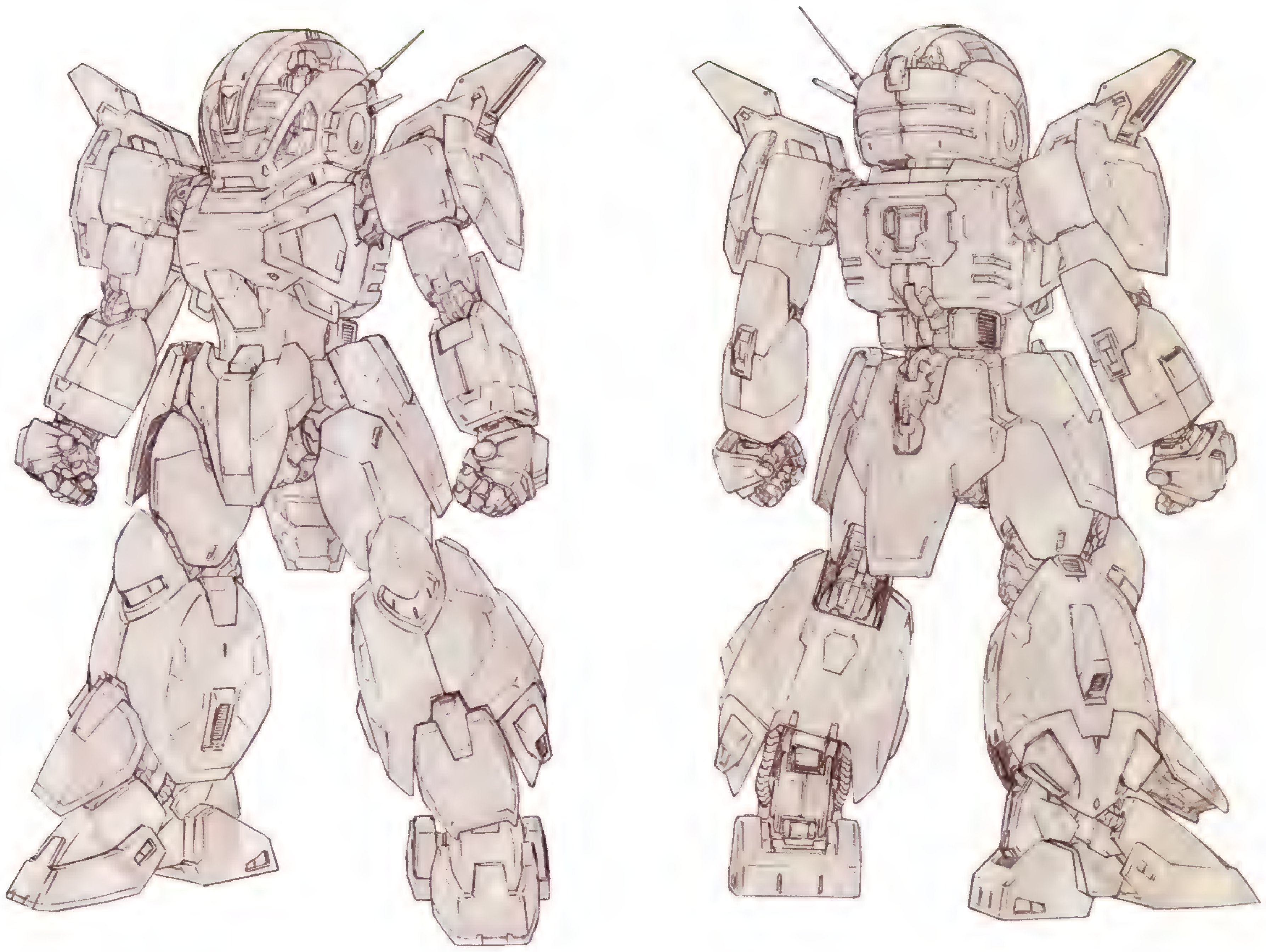
高機動仕様の実験機である〈レイズナー〉と異なり中央のスラスターを持たないが、胸部の構造はほぼ共通である。〈レイズナー〉や〈バルディ〉に見られる側面の排熱ダクトが見られず、それを理由としてV-MAX機能を持たないとされるが、むろんそれだけでは断定できない。とはいえ、〈バルディ〉同様本機にもV-MAXシステムは搭載されていなかった、という説が現在では有力である。一説によれば、近接格闘戦のための機体ということもあって排熱ダクトを廃止し、構造の強化を図ったのではないかといわれる。

腰部の前部サスペンディッドアーマーは〈レイズナー〉のものに準じるが、若干形状が異なる。両脇のサスペンディッドアーマーにはエネルギーカートリッジが装着されていない状態で運用されているが、これがエネルギーカートリッジ·ホルダーのないタイプの装甲を装備したものか、それともホルダー部分にカバーを被せてあっただけなのかははっきりとしない。

腰部は系列機と共通の分離機構となっており、それぞれの仕様の異なる下半身を換装し、作戦や行動目的に合わせて機能を切り替えることが設計段階から仕様として盛り込まれている。そのため制御プログラムを共通化しているが、このプログラムはまさに地球侵攻作戦の際にチューニングされる予定であったようで、当時はそれぞれの機体仕様に適した形でのみ完成していた。したがって、系列3機の同時運用中に下半身を相互に入れ替えた事例は確認されていない。

腕部

腕部は系列機とほぼ同等の仕様である。〈バルディ〉と比べ〈レイズナー〉にごく近い外観であり、違いといえばスラスターに同系列の別タイプを採用しているところくらいであろう。肩アーマーも〈レイズナー〉のものに準じるが、排気のための機構が省略されており、パネルの開閉機構はそのままで内部はプロペラントタンクに置き換



えられていた。

腕部はモーターの出力ゲインなどの向上が図られており、パワーレシオは系列機の中で最も高い。その分、パーツの交換サイクルが短く設定されていたようだ。前腕部は〈レイズナー〉と同じくナックルショットのテスト用ケーブルソケットを持つ。ナックルショットは〈レイズナー〉のような高出力タイプではなく、同じく試作型ではあるが〈バルディ〉と同等のものが装備されていた。

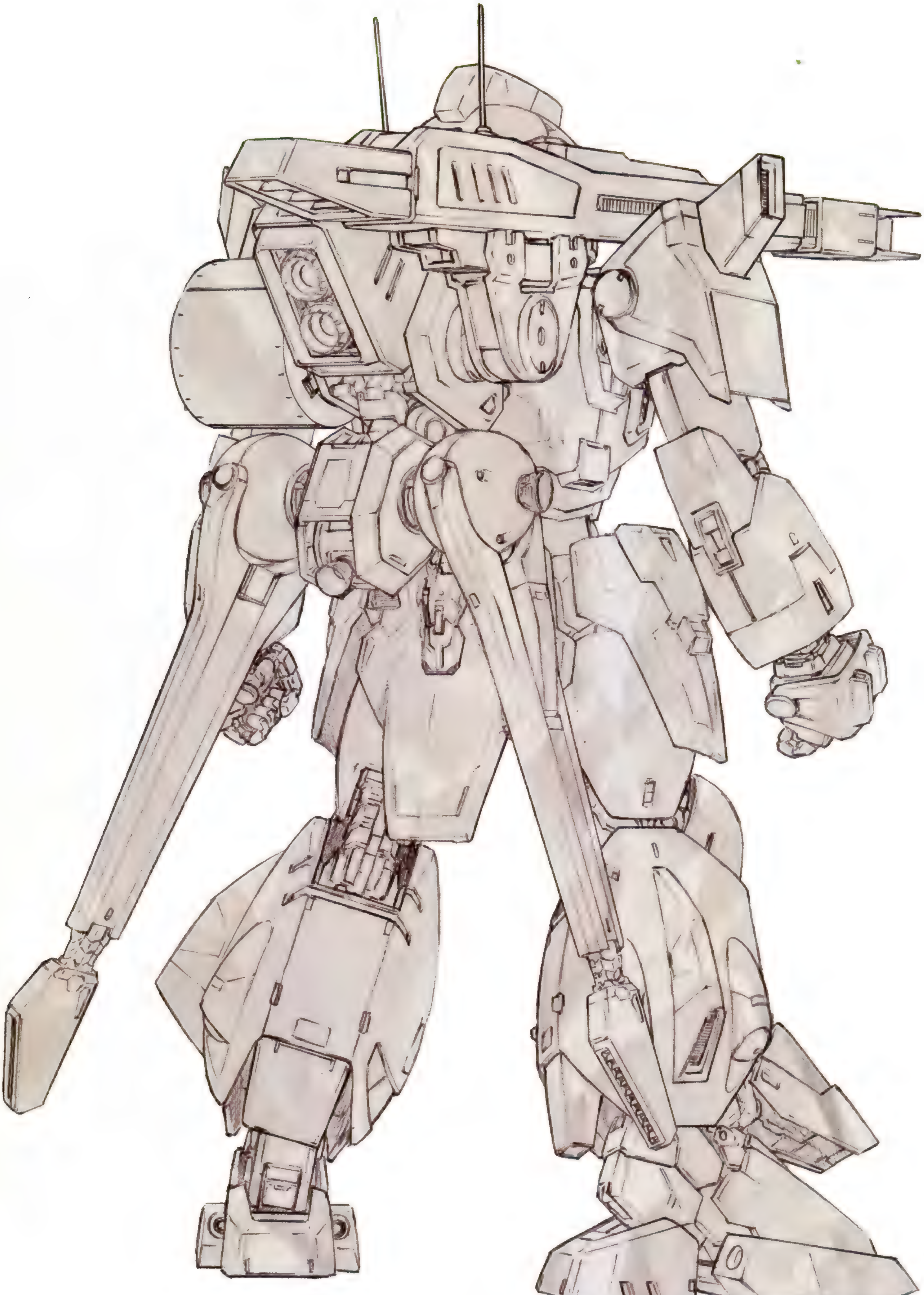
脚部

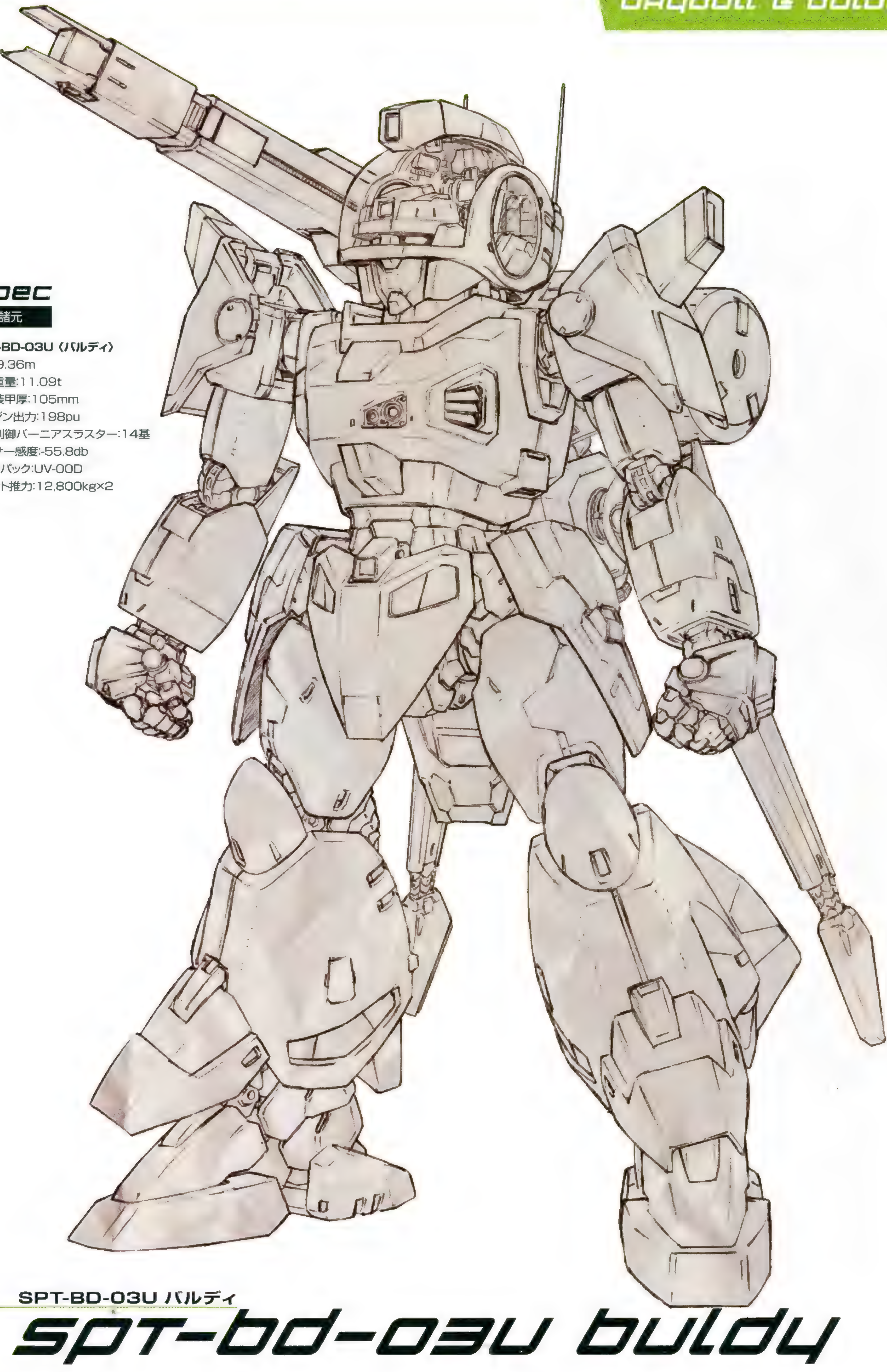
脚部の構造は基本的に系列機で共通である。脛後部は〈レイズナー〉と異なり武装のマウントが存在せず、機動用のバーニアスラスターとプロペラントタンクを装備した。小型の二次元スラスターを8基（片足4基）を有する。特徴的なのは脛内側にもスラスターバーニアを装備している点で、近接格闘戦時の機動性向上に一役買っている。

バックパック

太陽系で運用された〈ベイブル〉は球状の大型の高機動用バーニアが装備されたLDR-02Rバックパックを装備したが、このLDR-02Rの基本ブロックは〈レイズナー〉が運用したLDR-00Rと共通である。このほか、エンジンブロックを大型化したSP-02Eも用意され、大量のプロペラントを消費してさらなる高機動による作戦行動を行うための試験メニューが存在したようである。

どちらの高機動用バックパックも、左右への機敏な動きを実現するためスラスターを機体側面方向に向けレイアウトする。このスラスターはボールジョイント状の構造を持つ基部を任意に回転させることができ、大型のスラスター6基（片側3基）から噴射される強力な推進力により、相手の懐に潜り込んでナックルショットなどを叩き込む、といった戦法を可能にしたのである。また、スラスターは個別に噴射制御することが可能で、素早く機体の向きを変えるなど、格闘戦に有利な機動を実現する。





spec

諸元

SPT-BD-03U〈バルディ〉

全高:9.36m
全備重量:11.09t
胸部装甲厚:105mm
エンジン出力:198pu
姿勢制御バーニアスラスター:14基
センサー感度:-55.8db
バックパック:UV-00D
ロケット推力:12,800kg×2

SPT-BD-03U バルディ

spt-bd-03u buldy



■SPT-BD-03U〈バルディ〉

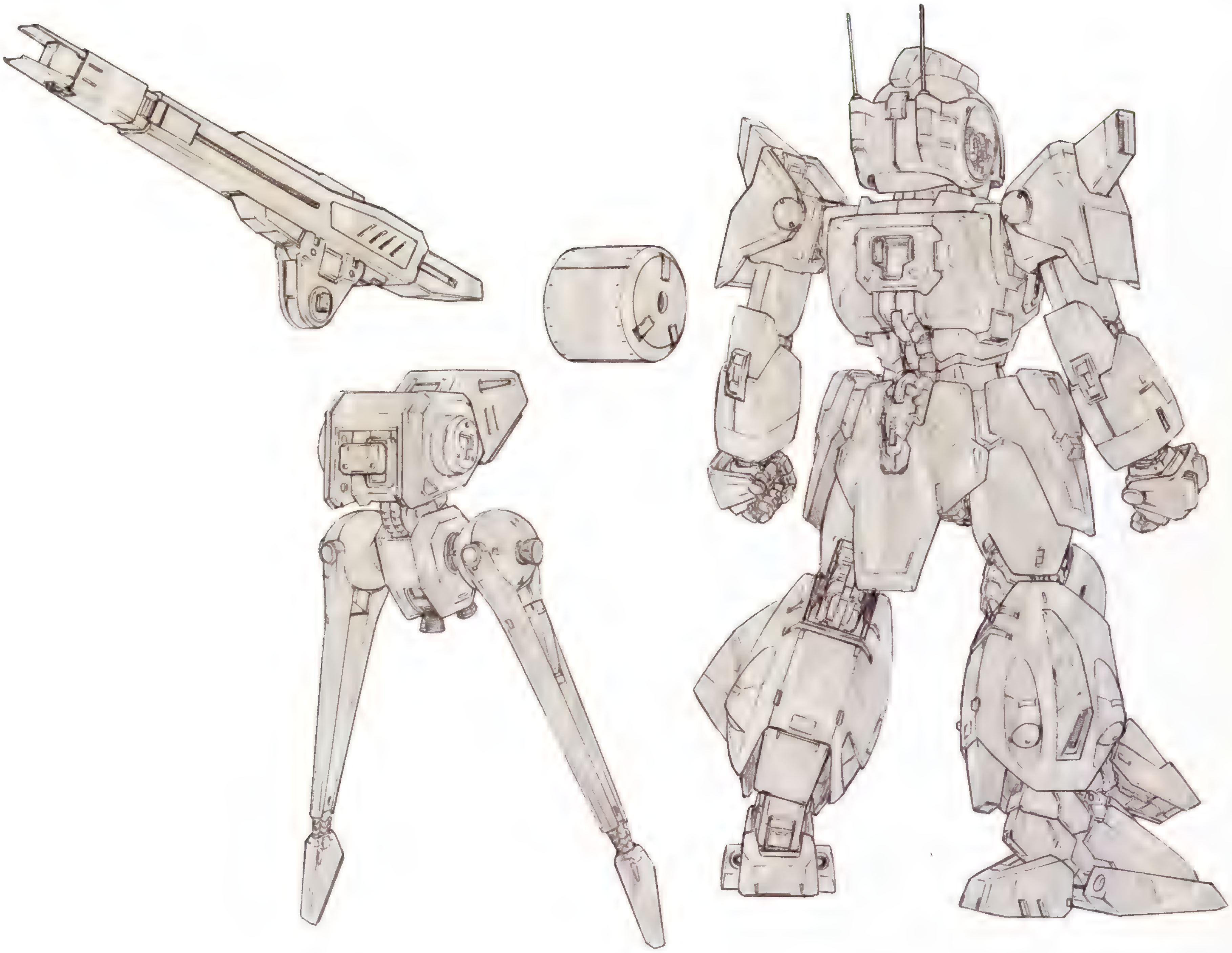
レイズナー系列機は次世代汎用SPTとしての性能評価を目的とし、多くの構造や機器を共通としながら設計思想を異にしている。〈バルディ〉は運動性を向上させる目的で外装などを中心として軽量化されていることが特徴で、その上で太陽系に搬入された際にはBPP-10Cショルダーキャノンを有するバックパックを搭載し、支援用装備のテスト機に仕上げられていた。

BPP-10Cショルダーキャノンは高密度エネルギー砲で、中長距離砲撃が可能である。この装備の運用にあたっては専用の射撃管制プログラムが用意され、30目標の自動追尾、及び10目標に対する自動攻撃が可能だった。機体からの直接エネルギーチャージのほか、バックパックに専用の大型エネルギーカートリッジを装備し、連続攻撃に対応する。

なお、本装備は〈レイズナー〉や〈ベイブル〉、またはほかのSPTでも運用することが可能であり、本機の専用装備というわけではない。したがって、本機は必ずしも中長距離支援型に分類されるSPTであるとは限らない。本機がこの装備のテストベッドに選ばれたのは、支援目的であれば軽量化によって低下した耐久性が不利に働かないだろうと考えられたためであるが、むろんその組み合わせによる運用が適切であると評価されれば、本装備を標準化したいわゆる「支援機」の仕様が策定された可能性はある。

本機は後方支援というよりも、〈レイズナー〉など数機のSPTで小隊を組み、最前列で敵の前衛を狙撃して味方機の突入を支援する運用が想定され、それに見合う性能を持つ機体が割り当てられたと考えるべきである。運動性能が追求された本機は打ってつけであったろう。逆に、本機の仕様では、後方で長距離支援任務を行うにはセンサーやFCSの処理能力が不足で、満足にショルダーキャノンの性能を引き出せなかったようである。本星における開発プランにはオプションとしてレーダーシステムのパッケージが用意される旨の計画があったとされる。

大出力のショルダーキャノンのほか、連射特性に優れた試作型のLDG-03Mレーザードガンを装備する。LDG-03Mのエネルギーカートリッジは〈レイズナー〉と共通のUV-00を採用している。



頭部

頭部は視野角の広いフロントキャノピーとし、ほかの〈レイズナー〉系試作機同様、人間でいう目のようなセンサーアイを持つフロントパネルを装備する。パイロットの搭乗は側面にある円形の搭乗口から行う。シートやそのほかの装備や機器はすべて系列機と共通である。

胴部

胸部前方には射撃用のセンサーがレイアウトされているが、これは試験テスト用の機材であり、標準として採用されたものではないと考えられている。内部機器などは系列機と共通で、胸部左右には〈レイズナー〉と同じダクト状のパーツがレイアウトされているが、〈レイズナー〉ではこれがV-MAX用の熱排気ダクトとして機能する。このことから〈バルディ〉にもV-MAXが搭載されていたのではないか、とする説もあったが、現在ではほぼ否定されている。

脇の下にはSPTでは一般的な補助スラスターが設置されているが、〈レイズナー〉とはレイアウトの位置、角度が異なっている。

腕部

腕部は肩部装甲が異なる以外、駆動系などは系列機とほぼ同じ構造である。〈レイズナー〉とはナックルショット部分に追加試験用のケーブル基部が用意されていない点で異なるほか、〈バルディ〉には手首までカバーする装甲板が用意されていた。

脚部

脚部の構造も基本的には系列機で共通である。脛後部は〈ベイブル〉と同様、武装のマウントが存在せず、姿勢制御用のバーニアスラスターとプロペラントタンクを装備した。また、側面には従来のSPTにはない新開発の球体可動式の低出力バーニアスラスターが左右に2基づつ計4基が内蔵された。従来のものに比べ、可動して噴射方向を大きく偏向できることに加え、システムを構成する部品点数の削減、また機体から余計な張り出しをなくして空気抵抗を低減できるなどのメリットがあったといわれる。



■1999年、一時行方不明となっていたエイジ・アスカと〈レイズナー〉は再び人々の前に姿を現した。グラドス地球占領軍の支配からの解放を目指し、彼はレジスタンスと協力しながら反抗活動を続け、やがてその戦いは写真の後継機〈ニューレイズナー〉へバトンタッチされることになる。



EARTH LIBERATION PLAN

地球解放計画

1996年に開始されたグラドスによる地球占領作戦であるが、この計画はかなり早い時期から妨害、あるいはこの頓挫を目論んだ計画が密かに進行していた。早い時期から、とは、少なくともグレスコ提督率いる地球侵攻艦隊が派遣される十数年前と考えられる。あるいは、アルバトロ·ナル·エイジ·アスカの父ケン·アスカの身柄がグラドス本星に送致された段階から、と捉えることもできよう。ケン·アスカは自身が地球と地球人類を研究する一種のサンプルであることを充分に自覚しており、自らの存在を通じてグラドス人が得る情報が、やがて地球に危機を招くことも理解していたと考えられる。

彼が具体的にいかなる行動を取り、どの時期から阻止工作を実行していたかは知る由もないが、恐らくは彼の地に暮らして内情を観察するうち、そしてグラドス内の反体制派からの接触といったきっかけによって、彼ら異星人たちが地球人類の滅亡を画策していることを知るに及んだのであろう。そこで表向きは恭順を示しながら、状況の打開を模索するようになったと思われる。やがて彼は（あくまで地球側から見て、という但し書きが付くが）いわゆる反体制派の中核と見なされる人物になっていく。その後、彼の考えや意志が、地球に渡ってきた彼らのメンバーであるグラドス人を通じて断片的にではあるが我々地球人類に伝えられることになった。本項では、彼らから得た証言などを元に、ケン·アスカから反体制派がいかにして地球を救おうとしていたかについて考察する。

ケン・アスカと反体制派

ケン・アスカは1960年代の初頭、アポロX-0計画によって造られた原始的な有人宇宙船に乗り、月軌道を目指した。その際、発生した事故により漂流中、グラドスの先遣部隊に“救助”されて本星に送致されるという運命を辿る。この事故そのものがあくまでも偶発的なものであったのか、グラドス先遣部隊によって人為的に引き起こされたものかは判然としないが、ともかく彼はグラドスの手がすでに地球圏に及んでいることを知った。まったくの外宇宙から軍事力を送り込めるほどの超科学力は当時も今も地球には存在せず、彼がその時実感として得た驚きは想像するに余りある。

グラドスに渡ったばかりの時期、彼は比較的穏やかに暮らしていたようである。自身が“地球人”のサンプルであり、グラドス人たちが自分を通じて地球の情報を得ようとしていることはむろん察せられたが、彼らの真意にまでは気づかなかった。彼のような境遇の異星人はほかにもいたようであるし、まさか地球侵攻が検討されているなどとは思いもかけなかったのだ。だが、その頃のグラドスは激動の時代でもあった。やがて彼は、グラドスが外宇宙に軍事的に侵攻を行い、数多の惑星を実際に滅ぼしていることを知る。そこに接触してきたのが、いわゆる反体制派であったのだ。

グラドス人は神聖マザーコンピュータに保存されていた知識を利用して今の繁栄を築いたが、それは逆にいえば努力なしに得た強大な権力であり、自らを宇宙全体の選民であると無意識に自負しているようなところが見受けられる。このグラドス人が元来持つ貴族的な意識は、それなりの科学力を持ち、宇宙に進出しようとする地球人という新興人類を、我らこそが律するべきという思想へと繋がっており、ケン・アスカはいかなる手段を使ってもこれを阻止しなければならないと考えるようになった。しかし、計画を妨害するこ



■ニューヨーク市街、ビル街の谷間を飛翔する〈ニューレイズナー〉。速度の高すぎるV-MAXは別として、機敏な機動が可能なSPTはこうした狭い空間の中でも地球の戦闘機などと異なり、制約を受けずに戦うことが可能である。

とは容易なことではない。

ケン･アスカはこれまで通りの生活を続け、技術者としてグラドスで得た地位を維持するよう努める。まず、これが第一段階であり、やがて彼とそのグループは地球占領阻止のための具体的な行動に入っていく。

ケン･アスカたちのグループを、ここでは仮に「グラドス反体制派」または単に「反体制派」としておく（正確にはグラドス反政府戦線と呼ばれていたようだ）。彼らは結果からいえばグラドス本星の主流を占める地球侵攻を未然に防ぐことはできなかった。彼らの当初の勢力はいわばほとんど草の根といってもいいほどに弱小であり、ごく一部の政府高官が辛うじて味方に付いている、といった程度のものに過ぎなかった。その頃、ネメイン星への侵攻が行われ、惑星上の生物の多くを死に至らしめるオゾン層破壊兵器が大々的に使用されたことで、情勢は変化を見せる。強引な外宇宙侵攻に対して、内からも疑問の声が多く上がるようになったのである。これをきっかけとして、より多くの実力者から協力を取り付けることに成功した彼らは、当然のごとく一気に地球侵攻計画を白紙に戻すようあらゆる工作を行った。



だが、反体制派の一部のメンバーが暴発し、強硬策を唱える政府高官（相当に高い地位にいた者のようである）を暗殺するという事件が起こる。反体制派はあくまで慎重に、平和的な手段を模索していたが、この事件の捜査で数人のメンバーが当局に拘束されてしまった。ケン･アスカへ累が及ぶ事態にこそならなかったものの、彼らの活動はより制限を受けることになる。強硬派はむしろ勢いづき、反体制派は弾圧の対象となって勢力がじわじわと削がれることになっていったのであった。

創世の秘密と刻印

もはや地球侵攻計画が止められないと悟った反体制派は、複数のプランを考案して密かに地球人を支援することにした。ほとんどの手段が失敗しても、たった1つ残った支援策が成功すればよし、という多段構えの計画である。その最も根幹を成すものが、地球の奥深くに眠っている「グラドスの刻印」と呼ばれる存在を用いる、というプランである。

グラドスの地球占領軍が最終的にこの刻印の発動によって本国からの支援･連絡のすべてを絶たれ、孤立したことは知っての通りである。だが、最近の研究によって、地球とグラドスの共通の祖先がいわば最終手段として遺したこの遺跡について、反体制派が単に偶発を期していただけではないことが明らかになってきている。つまり、恐らくは防ぎようのない両陣営の戦いを唯一停める手段が刻印であり、反体制派はこれを発動させることを最終目標としてすべてのプランを構築していたと考えるべきだ、とする研究である。

刻印にまつわる情報が、どの段階でケン･アスカらの知るところとなったのか、一切が不明である。以下は憶測を交えての記述となるが、刻印の存在に加え、グラドス創世の秘密、つまり両陣営にとって同根の祖先についても、同じソースによって判明したと考えるのが自然であるため、ここではまとめて扱うものとする。

これらの秘事のすべては、先述の暗殺計画時に発覚したと推測される。暗殺された政府高官が、この重大な秘密を反体制派に渡さぬよう処分しようとしたところ、逆に発見のきっかけを与えてしまったのかもしれない。いずれにしても、実行犯は逃走の過程でそれを文書、あるいは封印された記録メディアの形で仲間に渡した。秘密の内容を知った反体制派は歓喜に沸いたことであろうと察する。なぜならば、グラドス人が地球人よりも優れた人種であり、かの人類は我らによって統治されて当然、といった主流の考え方にとって、両者が同根であるという事実は致命の反論となり得るからだ。

だが、発表のタイミングを誤ればこの刃はなんの役にも立たないどころか、自らを滅ぼす凶刃と化すことも充分に理解された。若者の暴発による暗殺実行は、切り札ともいえる秘密の入手には繋がったものの、暴力的な手段による安易な解決を目指したこの選択は、むろんのこと内外からの反発を誘っていた。そのため、仮に秘密を公表したところで、社会の混乱を狙った荒唐無稽な法螺話として闇に葬り去られるだけだろうと予測できたのである。

この創世の秘密がグラドス人にどのように扱われていたのかについては謎が多い。グラドスの権力者たちに代々“申し送り”のような形でマザーコンピュータから伝えられてきたものなのか、それさえもよく判っていない。あるいは彼らの外宇宙侵攻の根源には、はるか空間を隔てた地球への興味が動機として存在したのかもしれない。この秘密を知っていたグレスコ提督が自ら地球圏へとやって来たのも、また当初は“地球人類の殲滅”を掲げて行動していたはずの侵攻艦隊が、いつの間にか占領政策に転じていたこととも、あるいは関係があるやもしれぬ。今となっては、それを確かめる術はない。

ともかく、以後の反体制派の計画はこのグラドス創世の秘密と刻印を前提として進められた。問題は、いかにして刻印を発動させるか、である。そのキーとなるのは、ケン・アスカ自身ではなかった。だが、その時すでに彼は自分が最も重要な役割を果たしていたことに気づいていた。すなわち、グラドスと地球の間に生まれた子供である。

宿命の姉弟

長男であるアルバトロ・ナル・エイジ・アスカは、刻印発動のキーマンとなるべく、計画に組み込まれていた。エイジ・アスカ自身がどの時期に自らの役割に対して自覚を持ったかは不明だが、彼はSPT操縦者となるためグラドス宇宙軍に入って訓練を開始する。グラドスの支配階級では子弟を軍に入れることは当然の義務と考えられており（これは地球文化とも共通している点であり興味深い）、さらに外惑星からの“移民”でもあるケン・アスカの家族にとっては、グラドスへの忠誠を示す格好のカムフラージュでもあった。さらにエイジに先んじて、彼が年齢的に未達である段階で地球侵攻作戦が発動した場合のことを考慮し、長女でありエイジの姉であるアルバトロ・ミル・ジュリア・アスカもまた軍でSPTの搭乗訓練を受けていた。ジュリア・アスカの場合は、父親の計画を知るに及んで自らの人生を優先した結果、家族と袂を分かっていたが、軍には引き続き在籍しており、侵攻作戦で地球圏に来た士官アーマス・ゲイル中尉との親交を温めていた。

なお、ジュリアはこのゲイル中尉の死亡後、エイジの乗るレイズナー討伐のため地球圏に送り込まれた。戦闘により彼女の乗機は戦闘力を失って地球に降下、やがて彼女は“クスコの聖女”として歴史の表舞台に突如現れる。実のところ、彼女が使命に目覚め、平和を掲げてニューヨークを目指した理由は、反体制派との接触がきっかけであろうといわれている。ケン・アスカから反体制派は刻印発動のもう一人のキーパーソンであるジュリアに、弟エイジと同様の宿命を背負わせたのである。地球降下以前の彼女であれば聞く耳を持たなかったであろう。だが、地球の自然と、恐らく彼女を救助したであろう善良な地球人たちとの接触によって彼女の心は開かれ、やがて聖女とまで呼ばれるまでになった。結果として、エイジではなく彼女が刻印を発動させることとなったが、そこまではケン・アスカたちも完全に予想していたわけではないだろう。

なお、ジュリアは反逆者と見なされた弟エイジを処分させるため、地球侵攻艦隊司令部によりグラドス本星から呼び出されたが、もしゲイル中尉の件がなかったとしても、なんらかの形で反体制派が彼女を地球圏へ送り込む算段をしていた可能性は高い。彼らにしてみれば、エイジが直接地球でなく火星に降り立ったこともいわばイレギュラーな事態であった。当時、地球圏で発生していたすべての事象が本星の反体制派に逐一伝わっていたとは考えにくいが、エイジが地球人と接触を果たす前に命を落とすといった最悪の事態も当然想定されていたはずである。ジュリアの恋人であったゲイル中尉の命をレイズナーが奪ったことで（エイジの意思に反して、ではあるが）、期せずしてそれが実現したことは運命の皮肉としかいいようのない出来事であったろう。

レイズナーと〈フォロン〉

やがて地球侵攻作戦が本格化し、グレスコ提督の侵攻艦隊が編成されると、エイジ・アスカはこの艦隊に同行して地球人類との接触を図る。前後の経緯については別項で詳述するが、この時彼が奪取したSPTレイズナーこそ、ケン・アスカたち反体制派によって様々な“仕掛け”が施された計画支援のために用意されたユニットのひとつであり、必要欠くべからざる存在であったのだ。

刻印の発動にはエイジとレイズナーが欠かせないが、これはあくまでも最終手段である。反体制派にしても、グラドスと地球が戦うことなく和平にこぎ着けるのが最良で、そうでなくともなんらかの理由でグラドスが地球侵攻を断念すれば全目的は達せられるわけであるから、まずはそのために最善を尽くすべきだと考えられたからだ。

グラドス人の性格からいって、彼らが交渉に応じる条件は、相手が拮抗以上の軍事力を持っている場合に限ったことだ。レイズナー単独で優位に立てればいいのだが、さすがにそれは難しいため、地球人が対抗手段としてのSPTを入手し、あわよくば量産体制を確立できるよう計らうことが画策された。

この段階の試案でも、惑星制圧用のオゾン層破壊兵器の全面使用がむろんのこと想定されていたが、実際にそのような事態になれば地球人類は最悪の場合、すぐさま全滅する。この場合はSPT量産などと悠長なことをいっていられないため、なんとしても大量殺戮兵器の使用は阻止しなければならない。そのための苦肉の策が、前述の「グラドス創世の秘密」であった。秘密の公表を盾にグレスコ提督を脅すことで、この虐殺兵器の発動を停止させようというのである。また、この脅迫は、エイジとレイズナーがグラドス軍SPTの攻撃に遭い、直接的な危機に陥った場合でも身を守る最終手段になり得る。

なお、当初エイジにこの秘密が直接明かされていなかった理由は、レイズナー奪取に失敗して早々に身柄を拘束された場合のことを考えてのことと推測できる。この秘密の取り扱いについては、その影響も含めて反体制派でも多分に迷いが見えるところであり、その開



■当時、ニューヨークはグラドス地球占領軍の拠点であり、統治の中心的位置づけにあった。街並みなどはほかの地域に比べても比較的原形を留めており、また人々も地球独自の文化をできる限り保全しようと抵抗を続けていた。そんな中で、民間人によってもこのように〈ニューレイズナー〉の戦う姿が多く写真に収められたのである。

封は“機を見て”といった偶発的な要素を考慮する以外になかったようである。要するに状況次第、またエイジの現場判断に任せる、ということでもある。ともかく、この秘密を秘匿するにあたって最も堅牢であろうと考えられたのが、当時最強の戦闘力を持っていたSPTレイズナーの電子頭脳中に仕込むというアイデアであったことは疑いのないところである。

レイズナーの搭載コンピュータでありAI〈フォロン〉に関しては、別項で詳しく述べているのでここでは省くが、この機体の最大の切り札である〈フォロン〉とV-MAXの存在もまた、創世の秘密と同様エイジに知らされなかった。その理由は、争いを好まない少年の性格を、父親であるケン・アスカが知悉していたからだと考えられる。エイジは、純粋な使命感をもって地球に危機を知らせに来たに過ぎない。しかし、追われる身になった時、抵抗するを良しとせず彼が討ち果たされてしまう可能性もまた大きかったのだ。そうした事態打開のための奥の手が〈フォロン〉とV-MAXだったが、果たしてこれらのシステムの存在をあらかじめ知ってなお、エイジがレイズナーに乗ることを承知したかどうか。恐らく、否であろう。

ケン・アスカは、自身が地球侵攻艦隊に同乗を願い出ても却下されることをよく知っていた。自分の息子とはいえ、年若いエイジにすべての命運を託さなければならなかった彼の心中はいかばかりであったか。なお、息子の反逆が発覚した後、彼とその妻がその責を問われる事態になったであろうと容易に想像はつくが、どうもそうとは限らないようである。詳細は不明だが、謹慎となり監視こそ強化されたものの、極刑に処されるなどといった極端な処遇にはならなかった。個人の不祥事による責を家族にまで負わせるという意識がグラドス人に希薄なのか、はたまた権力者と彼との友好的な関係性のゆえんか、いずれにしろ地球人の感覚からすれば多少なりとも不思議に感じるところではある。

協力者たち

エイジ・アスカといった重要人物のほかにも、地球侵攻艦隊に紛れてやってきたグラドス人の中に、様々な形で協力者がいたことが知られている。反体制派は、グラドス軍への抵抗中あるいは支配下に置かれた状態の中でも地球人たちがSPT技術を吸収できるよう、支援手段を複合的に用意することを考えた。その一環として、多くの同志たちが本来の目的を隠して兵士、あるいはSPT整備員などの形でやって来たのである。彼らは多くの役割を帯びていたが、むろんのことそのすべてを実現させようと目論んでいたわけではない。彼らは、まずエイジによるSPTレイズナーの奪取を成功させ、地球人との接触を果たすにあたり、これを支援することを第一の目的とした。その後は、地球人にグラドスに対する抵抗勢力を形作らせるため、同様に彼らの支援を続ける。

地球侵攻艦隊改め、地球占領軍のグレスコ提督は、地球に拠点を築く中で地球文化と人類に対する調査を行ったが、その調査員にも反体制派の息がかかった者は含まれていた。彼らはギルバート博士によって各地を結ぶネットワークが確立する中で工作員として接触を果たし、技術情報を提供するほか、SPT生産に欠かせないパーツや原材料の"横流し"も行っていたのである。彼らがいたからこそ、レイズナーの修復やニューレイズナーの開発が短時間で行えたのだ。

なお、もしレイズナーがSPT量産のために遣わされたものだとするなら、SPTに関する技術情報や設計図そのものが機体に隠されていた可能性はないのか、といった当然浮かぶ疑問に行き当たる。むろん、入っていたと考えるのが自然だ。ただし、仮にパーツの製造法や加工機械の設計図が入っていたとしても、占領下の地球では満足に機材や物資が揃えられるものではない。また、設計図だけがあったとしても、実用に耐えるSPTを製造することは実際には難しい。基礎技術がない状態で完成型だけを見せられても、それは形だけの模倣になってしまい、期待される性能はとうてい発揮できないのだ。別項で述べた通り、人類はまずSPTを分解するための工具を作ることから始めなければならなかった。それほど技術格差がある場合、教導役の技術者というのはなにを置いても必要である。その教導役を、地球占領軍に紛れてやって来た技術者たちが担ったのである。

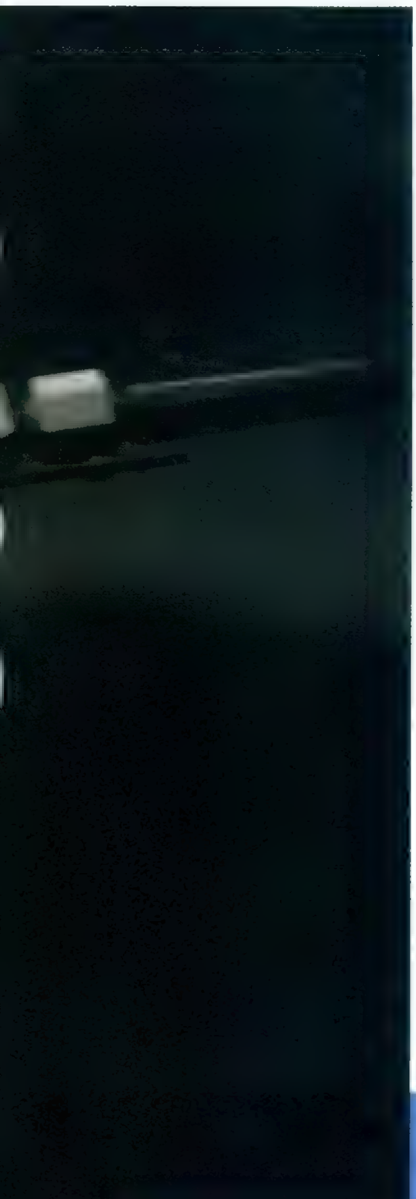
ところで、地球占領軍による支配体制が着々と築かれようとしていた1997年から1999年にかけての3年近くの期間は、グラドス本星の反体制派からすれば、ひとまず地球人類滅亡の危機を回避できた安堵の時期でもあった。むろんその間にも裏側から地球人たちに支援の手を差し伸べる活動は脈々と実施されていたわけであるが、やがて彼らを震撼させるひとつのニュースが飛び込



■強靭な装甲とフレームを持つSPTは、市街地における戦闘で機体がビルなどの壁面に叩きつけられても、ほとんど損傷を受けることなく戦闘を続行することができたという。



んでくる。グレスコ提督の息子であり、タカ派の筆頭としての将来を嘱望されるル・カインが地球へ派遣される決定がなされたのだ。



地球で進むレジスタンスの反攻態勢の確立にとって、最大の障害となることは明らかだった。事ここに至って、反体制派の動きは活発化した。エイジ、そしてジュリアが再び地球人たちの前に姿を現すのも、これがきっかけだったといっていいだろう。

かくして、協力者たちの助力を得て、地球人類はやがて独自のSPTを設計するに至る。この“ドール”あるいは〈ロードテイラー〉と呼ばれた地球産SPTは、地球の現状に合わせて生産可能なように様々な部分に独自の設計を盛り込んだ機体であった。用いられた技術も、使用された構造材や機材の材質も、グラドス製のSPTとは比較にならないくらい劣悪なものであったろう。しかし、抑圧や支配といった歪んだ形の平穏に甘んじることなく、地球人が持つ抵抗の意志を“表現する”といった意味で、この機体の果たした役割は大きい。結果、この抗争はかつて先史文明を築いた両者の祖先が“最終手段”として想定し、用意していた刻印の発動へと結びつくのである。

エイジとレイズナーをキーとした反体制派の地球解放計画とは、およそ以上のようなものであった。彼らの計画には確かに穴もあった。周到とはとても呼べない偶然に任せた部分がなきにしもあらず、ということも否定しない。だが、当時の彼らが思いつくすべての手段が込められていたこともまた事実である。この計画には、さらにグラドス本星の強硬派、反体制派のパワーゲームといったような要素も絡んでいたはずである。もっとも、現在の地球からその全貌を窺い知ることは不可能になってしまった。地球とグラドス星が刻印によって完全に分かたれ、まったく接触ができなくなって久しい。望んだ結末ではなかったにしろ、それ以外に方策はなかったというのも確かだ。

いつの日か、地球が外宇宙に進出し時空を超える超空間航法を得た時、隔絶した両者が再びまみえることになるのかもしれないが、それは恐らく遠い先のことだろう。それまでに両者が成長し、争いなく互いを受け入れることができるようになっているかどうか。地球に取り残されて、逆に地球人からの迫害に遭っているグラドス地球占領軍の残党たちを保護するため、両者の間に立って争いを鎮めようと今なお活動し続けるエイジ・アスカの姿を、我々はもっと自省を込めて見つめなければならないのではないか。その姿勢を持ち続けることこそ、両者の争いを停めるために尽力してくれた心ある“仲間”たちへの、我々にできる唯一の報恩だと思うのである。



AI"FOLON"

AI〈フォロン〉

SPT〈レイズナー〉、及び後に同〈ニューレイズナー〉に搭載された中枢ユニットは、パーソナルネームを〈レイ〉といい、他のSPTのシステムと同様、SPTの制御を司る重要部位かつパイロットの補佐をするインターフェースシステムとして開発された。しかし、〈レイ〉が他のシステムと決定的に異なるのは、その裏に〈フォロン〉と呼ばれる真の姿が隠されていた点である。〈フォロン〉は単なるプログラムではなく、人工知能(AI)の一種であった。いったい、〈フォロン〉が果たしていた役割とはなにか。

操縦者にとって、〈レイ〉のような補助システムの存在は、SPTに人格の存在を感じさせるものでもある。しかし、正確にいえばこれらに人格と呼べるものは存在せず、パイロットの音声による命令入力を解釈し、また状況判断に必要と思われる情報を選別してパイロットに伝える、あるいは適切な助言を行う、単なるインターフェースに過ぎない。重要度や緊急性といった要素についての判断も、プログラムによって算定基準が定められているだけで、傍目には人間のような振る舞いに感じられることがあっても、そこに彼らの"意思"といったものは内在しない。〈レイズナー〉のパイロットとなったエイジ·アスカもそのように信じていたし、実際に〈レイ〉は〈レイ〉である限り、その範疇を逸脱する言動を見せることはなかった。

しかし、〈フォロン〉はこれらとはまったく異なる存在である。それは、地球で生み出された用語で表現するなら、人工知能(AI)と呼ぶべきものであろう。機体の持つセンサーなどから得た外部情報を元に、自己の判断で行動を決定できる。時には自らの存在を保護することを優先し、パイロットの意志に反する決断を行うことさえある。あまつさえ地球の軍隊に拘束された際、〈フォロン〉はパイロットが不在であるにも関わらず自らの"肉体"である〈レイズナー〉を起動させ、持てる戦闘力を駆使して解体調査しようとする地球人たちの作業に抵抗したのである。

そこまでの権限を与えたのは、グラドス本星の開発者たち、より正確にいえば反体制派たちの意志によるものであるが、その目的は〈フォロン〉のメモリーに隠された「グラドス創世の秘密」、あるいは地球人類支援のために添付したSPT技術関係書類、設計図といった類いの機密を保護するためであった。ただし、〈フォロン〉自体に与えられているのは、これらを「保護せよ」といった内容ではなく、「自己を保存せよ」という絶対的な命令のみである。

ケン·アスカを含む反体制派は、グラドスによる地球侵攻に対抗するために先行実戦投入される〈レイズナー〉を利用したのであり、当時技術が確立しつつあったV-MAXの制御、及び発動の判断をも"彼"に託すという重要な決断を下した。ただのプログラムでは複雑な状況判断には対応し切れないからだ。パイロットとして想定されていたエイジ·アスカにすべてを委ねることが難しいと判断されていた当時の状況において(このあたりの経緯については本書「地球解放計画」の項を参照のこと)、この決定は必然ではあった。だが、実はグラドス人たちにとって、AIの搭載という選択が、我々地球人が想像する以上に特異なことであり、異例中の異例であったことが最近の研究で判ってきた。

グラドス星にはそれまで、AIというものが存在しなかった。否、唯一AIと呼べる存在があった。それが、彼らが「神聖マザーコンピュータ」と呼ぶ、先史文明の遺産である。グラドス人ははるかな過去からこのAIを神のように崇め、自らを発展させてきた。彼らの技術はマザーコンピュータにインプットされた情報を元に構築されていったが、このAIは彼らに与える知識をコントロールしていたようで、AIに関する技術は一切が下賜されなかった。それだけでなく、その"神託"はAIをタブー視する方向に働いていたのである。反体制派は、地球侵攻計画を阻止するためのプランを様々に考案する中で〈レイズナー〉に搭載する"自己判断可能な"コン



ピュータの必要性を感じたが、タブーを冒すことには躊躇いがあった。反体制派であり、時の政府の打倒を標榜していた彼らにとって、マザーコンピュータの築いた体制や価値観への反抗はむしろ積極的に行うべき行動であったはずだが、それでもなお根強く無意識の拒否反応が見られたのである。これに対し、こうした抵抗がほとんどなかったのが地球人のケン・アスカであり、恐らくは彼が中心となって〈フォロン〉の開発が進められたものであろう。

〈フォロン〉はマザーコンピュータのハードを参考に開発・設計されている。コンピュータの立体構造そのものが人間の脳を模したものともいえ、その判断の正確さや早さは〈レイズナー〉の性能を副次的に高める役にも立った。こと生存性に関していえば、同時代に生産された他のSPTの追随を許さない。〈フォロン〉がマザーコンピュータのコピーである、との言い方をされる場合があるが、ある意味ではこれも当たっている。ただし、メモリーの内容までが移植されたとは考えられず、両者は本質的にも別物である。設計を参考にした、と述べたが、ケン・アスカらがマザーコンピュータそのものを直接観察し得たのかどうかについては不明である。あるいは、エイジが〈フォロン〉との対話によって相互理解を果たしたのと同様、"説得"によってマザーコンピュータ自身の協力を取り付けた可能性もある。反体制派の計画は、グラドス人と地球人の争いを防ぐためのものであり、マザーコンピュータが予測されるこうした未来を憂えていたと考えてもなんの不思議もないからだ。事実、地球に遺されていたやはり先史文明の遺産であるところの「刻印」は、彼らの意志に沿う形で用意されていたものだった。

ともかく、表向き〈レイズナー〉は単なる先行試作のSPTとして開発が進められた。〈フォロン〉こと〈レイ〉は、反体制派以外の技術者や整備員たちにとって、まったく普通のSPT（とそのインターフェース）にしか見えなかったろう。

〈フォロン〉がただのプログラムではなかったことは、その後のエイジとの関係性にも表れている。隠された秘密のゆえに自己を保存するという"使命"を与えられた彼（あるいは彼女）だが、それを実現するために必要なパートナーとして、エイジを認めた。単に使命を果たす際に必要な要素だと判断した、というのも事実であろうし、当初はそれだけに過ぎなかったかもしれない。だが、ともに手を取り合って数々の戦いを乗り越えるうち、両者は運命共同体として互いを認識し合うに至る。〈レイズナー〉の機体が修復不能な損傷を受けた際、〈ニューレイズナー〉へ自らを移し替えることに同意したのは、エイジの説得に納得し受け入れたからだが、それこそが両者の築き上げた信頼関係を示す強力な証拠といえるのだ。少なくとも、利害に関する判断を他者の言葉によって変じる、といった高度な振る舞いは、人間に近い柔軟さを持つAIのみがなせる業であろう。これは推測に過ぎないが、地球人とグラドス人の争いについて、〈フォロン〉自身がなんらかの思想や感想といったものを抱くに至っていたことさえあり得るかもしれない。その上で、戦いを選択したエイジに自らの意志で協力していたのではと考えるのは、あまりに突拍子もなさ過ぎる妄想だろうか。

なお、〈フォロン〉の実体はコンピュータのハードそのものに宿っている。これは観念的な話ではなく、変化していくハードの構造そのものが〈フォロン〉の存在を確立しているのだ。そのため、データやプログラムをコピーし移し替える、といった手段での移植は不可能だった。したがって、〈ニューレイズナー〉の機体へは、〈レイズナー〉中枢部のコンピュータユニットを外して〈フォロン〉ごとそっくり移動させている。〈フォロン〉のコピーは存在しない。独立したデータ（彼の記憶、と言い換えられる）については参照、またはバックアップも可能だが、〈フォロン〉そのものの待避はできない。

戦いという役目をまっとうした〈フォロン〉は、今も〈ニューレイズナー〉の機体の奥底で休んでいるはずである。



SPT development

■専用武装であるLDR-00Rレーザードライフルを左右の腕に1挺ずつ、さらにバックパックにも2挺を架装した"フル装備"状態の〈ニューレイズナー〉。LDR-00R自体は予備も含めてエイジ・アスカがトライポッドキャリアで複数を持ち込んでいたと考えられる。なお、バックパックに装備した状態でもレーザードライフルの射撃は可能で、〈レイ／フォロン〉による自動管制攻撃もできた。

PREHISTORY

SPT 開発前史

グラドス社会における科学技術の発展は、非常に緩やかなものであったようである。その黎明期に「先住グラドス人」から文明のすべてを——記録した神聖マザーコンピュータを——与えられたグラドス人にとって、必要な知識は偉大なる始祖が遺したデータベースから、コンピュータネットワークを通じて手に入れるものであり、自ら発明するものではなかったのだ。

約4万年※にも渡るグラドス社会の科学史は、つまるところ過去の遺産の再現実験の繰り返しであり、競争原理を通じて科学技術を発展させてきた地球とは、まったく状況が異なっていた。苦悶することなく与えられる知識を身につけ、利用するだけの状況は、科学の発展をほとんど停滞させていたとさえいえるのではないか。

だが、それでも技術利用の習熟という面では、それなりの前進はあったと考えられる。例えば、宇宙空間における「超光速航法」の再現は、約300年前になってようやく達成されたものであった。グラドス人たちは、この技術を用いて約100年前より周辺星域の探査に着手※。その過程において、地球侵攻の主戦力となった機動兵器「SPT」を開発することとなったという。

本項では、知られざるグラドスの辿ったSPT開発の歴史について考察する。これらは地球製SPTの開発時には、直接の技術的資料とならなかったことからほとんど顧みられなかったものだが、個人的に興味を持った地球側技術者のひとりが収集し、体系立ててまとめていた「O・Dメモ（O・Dはイニシャルと考えられる）」の発見によって日の目を見た。このメモを元に、編集部が地球侵攻艦隊の同乗して地球にやって来たグラドス人技術者たちから得た証言、持参した開発資料や参考データを総合して記述した。

なお、本書のすべての記述にいえることだが、公式記録に基づく年号などにはある程度の信憑性はあろうが、グラドス政府が秘匿した内部事情などについては憶測の域を出ず、正確さを欠く。また、グラドス本星における地球歴2000年以降のSPT開発、発展、運用に関する情報は当然のごとく途絶えているので、現在の状況についてはまったく触れることはできない。

※[illegible]

[illegible]

※周辺星域の探査

「超光速航法」の実用化から探査開始までに200年もの歳月を要している点については、グラドス社会の停滞ぶりを表す事例として取り沙汰されることが多い。これより解説する「SPT開発」においても、我々、地球人類からすると信じがたいほどの足踏みが繰り返されることになるが、それもこれもグラドス社会の特徴と理解すべきである。



■〈レイズナー〉系SPTが装備したUV-00Dバックパックの後方に長く伸びる白いスラスターアームは、機体やバックパックからのプロペラント供給は受けず、独立したタンクでまかなっている（あくまでも姿勢制御用であるため、プロペラントを大量には必要としない）。なお、このスラスターアームはその表面においてプラズマによるエアの能動制御も行っている。

■プロジェクトSPT

グラドス暦4520年、グラドス政府は「探査省」と呼ばれる新組織を設立した。グラドス本星の周辺星域を調査することを目的とする組織であり、これに必要となる宇宙艦艇や各種装備の開発をも一手に担う、極めて大規模な組織である。

宇宙進出という新たな使命を帯びた彼らは、広域の調査に必要となる「超光速航法」の実用化に取り組むと同時に、宇宙空間や異星での探査活動に必要となる宇宙服の開発にも着手。結果として、「パワード・トレース・スーツ（以下、PTS）」※と呼ばれる装備を完成させた。

PTSとは、全高5mほどのサイズの大型宇宙服である。関節部に内蔵されたアクチュエーターにより、着用者の動きを正確に模倣（トレース）しつつ、機械的にそのパワーを増幅するシステムを搭載。これにより、高重力惑星での探査任務や、基地設営時の重作業にも対応していた。さらに全身に姿勢制御用ロケットモーターを配置することで、無重力環境での船外活動も行うことが可能という汎用性に優れた装備である。

彼らは、PTSを用いることで、グラドス本星が含まれる星系の探査に着手。これを終えると、グラドス暦4746年、グラドス探査省は「大航海時代宣言」を発表し、周辺星域への探査範囲拡大を決定した。そして、この計画と双璧をなすものとして、探査省は新型兵器開発計画「プロジェクトSPT」に着手する。

SPTとは、「スーパー・パワード・トレーサー」の略称である。PTSがあくまでも、着用者の動作を模倣、増幅する大型宇宙服であったのに対し、SPTはあらゆる環境下で運用可能な機動兵器であり、「超宇宙強化機能服」と定義された。

調査機関である探査省が、この戦術兵器の開発に乗り出した背景には、軍部による強烈な政治工作が存在していたという。「宇宙軍」は探査省設立以前から存在した軍事組織であり、グラドス本星の防衛と治安維持を任務としていた。彼ら軍部は、「大航海時代」によってグラドス人が銀河へと拡大することで、「好戦的な異星文明との遭遇」も充分に発生し得ると主張し、対抗手段たり得る戦術兵器の配備を求めたのだった。かくして、グラドス政府は、探査省に対し軍部と共同で新機軸の戦術兵器の開発に当たるべしとの号令を発したのであった。これが、「プロジェクトSPT」の発足経緯である。

※パワード・トレース・スーツ
この種の機器を示すカテゴリとして、「パワード・トレース・マシン（PTM）」という名称が用いられることもある。







■SPTはプラズマを使用した能動的な空力制御により、腕や脚をほとんど動かさずに姿勢を転換できた。そのため、空中で目標のいる方向へ素早く向きを変え、即座に照準・攻撃が可能なことから、地球の既存兵器に対して極めて優位に戦闘を展開することができた。

■探査省と宇宙軍の対立

プロジェクトSPTの発足にあたり、探査省と軍部は関係者を招集して徹底的な討議を行った。しかし、議場は紛糾する。探査省側は、あくまでも探査行動に対する警護以上の戦闘能力を求めなかったが、宇宙軍は「同レベルの敵性文明との星間戦争」に耐え得る戦術兵器を望んでおり、両者の思惑がかけ離れていたためである。

最終的にはグラドス政府が仲裁に入り、軍部側の意向を受け入れる形で、「異星文明との接触に際して起こり得る戦闘において、最小の戦力で最大の戦果を挙げる戦術兵器」という指針を提示。どうにか開発計画をスタートさせたものの、探査省と軍部の対立の火種はくすぶり続けた。

元来、探査省と軍部の技術レベルは、総体としては大差なかった。前者は、コスト性や安全性に優れたロケットエンジンや、PTMで培われた機体制御システム、探査用の超遠距離センサー類などにおいて高い技術力を保持していた。一方、後者は高出力ロケットエンジンや、装甲材に最適な新複合材、レーザー兵器やミサイルなどの各種火器システムの点で勝っていた。それぞれ得意分野が異なる組織が、その力を結集して新兵器の開発に臨む……とい

※マニピュレータ・スーツ
グラドス暦4700年代初頭、軍部は独自にMSを発展させた兵器の開発を行っている。エスコート・ファイターと呼ばれるこの兵器は、宇宙艦艇の護衛用戦闘機として開発されたもので、単座の小型ポットに1対のマニピュレータを配する設計を踏襲。武装アタッチメントとして、高出力「レーザードガン」が開発されるなど、一定の成果はあったものの、全体としては決して既存兵器の域を出るものではなかったようだ。



SPT 開発前史

えば聞こえは良いが、現実はそうそう甘いものではなかったのである。

政府主導で「軍部が提供する技術を用いて、探査省側が実際の開発作業を行う」という体制が組まれたものの、政治力の強い軍部が開発の主導権を握ったことでプロジェクトは迷走を深めてゆく。口を出す軍部、反発しながら手を動かす探査省という構図が、端々で見られるようになるのである。

プロジェクトSPTがスタートした当初、開発陣に提示された要求仕様は、概ね以下のようなものであったという。

第一に、宇宙空間、及び惑星大気圏内の双方で運用が可能なこと。
第二に、機体サイズを全高5m以内にすること。
第三に、作業用マニピュレータと、移動脚を装備すること。

これを要約するなら、「コンパクトな汎用マシン」といったところだろうか。いつの時代であっても、宇宙船のペイロードには限りがあるもの。積載する装備のサイズと質量は、常に小さいものが歓迎された。用途の異なる複数の機種を積むくらいなら、汎用性の高い装備を多数揃えた方が良いという思想もまた然り。ここでいう汎用性とは、大気や重力の有無を考慮することなく全領域で運用可能なことに加え、調査や工事に用いる作業性と、異星文明との交戦を視野に入れた戦闘能力を両立した多用途性を有することを指す。

これに対し、当時の軍部が運用していた主力兵器「マニピュレータ・スーツ（MS）」は、まったくもって条件に満たない代物であった。MSとは、小型宇宙ポッドに1対の作業用マニピュレータを装備しただけの極めて簡素な兵器であったのだ※。

そこで探査省の設計士たちは、すでに技術的に完成の域に達していた大型宇宙服「PTS」を開発母体とすることを決定。計画開始から6年後となるグラドス暦4752年に、SEMS-23タイプを完成させた。しかし、この試作機は着用者の肉体的負担が大きい点が問題視され、結局のところ制式採用には至らなかったのである。

■初期BPS構想の失敗

SEMS-23タイプは、図らずも筋肉の動きをトレースして増幅するフィードバック式の操縦システムの限界を示す結果に終わった。かくして、プロジェクトSPTに参加する設計士たちは、探査省の伝統的スタイルであったPTSを母体とすることを諦め、操縦システムの変更を決断する。パイロットの操縦にしたがい、動作プログラムが最適な挙動をアウトプットする、コンピュータ·フル制御式の導入に踏み切ったのである。

グラドス暦4756年にSEMS-30として完成したこの試作機は、探査省出身者にとっては、決して満足のいくものではなかった。機能の一部を機体背面に装着するオプションユニット「バックパック（BP）」に移すことで、どうにか軍部が指定する全高5mという機体サイズを維持することに成功してはいた。しかしながら、その技術は未熟であり、問題点も多かったのである。特に機体サイズの都合上、バッテリーや推進剤の容量が足りず、航続距離や活動限界時間が極めて短いものとなった点は致命的と考えられた。

このように探査省にとっては失敗作とされたSEMS-30であったが、宇宙軍側の評価は異なっていた。オプションユニットを変更することで、多種多様な戦場や任務に対応し得るバックパックに大きな可能性を感じていたのである。

そこで軍部は、以後の試作機開発においてバックパックを標準装備とすることを要求。さらに機体サイズを、全高10m級に変更し、一挙に問題解決を図るよう指示した。この仕様変更でさえ大事——そもそも探査省側は宇宙船のペイロードを圧迫する機体大型化に反対であった——であるにも関わらず、さらに「1.5G環境の惑星に対する、大気圏突入·離脱能力の付与」という新たな仕様が盛り込まれることになり、開発は徐々に迷走していく。宇宙軍側から下される方針が次々と変わる状況で、探査省側の設計士たちは右往左往するばかりである。こうして開発計画は、成果を得られぬまま停滞することになる。

ようやく10m級試作機、PT-40Eタイプがロールアウトしたのは、実に27年もの歳月が経過したグラドス暦4783年のことであった。

頭部をキャノピー式にした初のモデルであるPT-40Eは、外見上、現在のSPTによく似た特徴を持っている。長い時間を費やしただけあって、いよいよバックパック（BP）関連技術も成熟。本体と合わせたパッケージとしての完成度も極めて高く、一時はこのモデルの量産化が決定しかけたほどであった。

しかし、軍部がさらなるバックパック·バリエーションの開発を念頭にした新戦術構想「バックパック·システム（BPS）」案と、そのための特別開発予算を求める上申書を、政府側に提出したことで状況が一変する。これに対し、探査省側が猛反発したのだ。軍部がぶち上げたBPS構想は、探査省側の了承を得たものではなく、なんら技術的な裏付けのないものであったためである。

結果的に、PT-40EタイプのBPS構想は、探査省側の反対によりペーパープランに終わった。そればかりか、BPSなきPT-40Eは、戦術兵器としての運動性と火力の点で問題があるとして、軍部が不満を表明したことで、量産計画そのものが白紙撤回されたのだった。

■SPTの誕生

PT-40Eタイプの採用見送りは、探査省と軍部の亀裂を決定的なものとした。

翌年のグラドス暦4784年より、BPSを包括した「SPT」の開発が改めてスタートしたものの、その後の数年間は、ほとんど成果らしい成果が挙がることはなかった。度重なる軍部の横暴に、開発の実務を担当する探査省が反発した結果、プロジェクトSPTは事実上、中断に等しい状態に陥っていたので

※K-SPT-02
K-SPT-02タイプについては、失敗作の烙印が押されたものの、部分的には光る設計も見られた。例えば頭部モジュールの基礎構造、特にキャノピー周りの設計は秀逸であり、後のSPT-GK-10U〈グライムカイザル〉に、ほぼそのままの形状で流用されている。

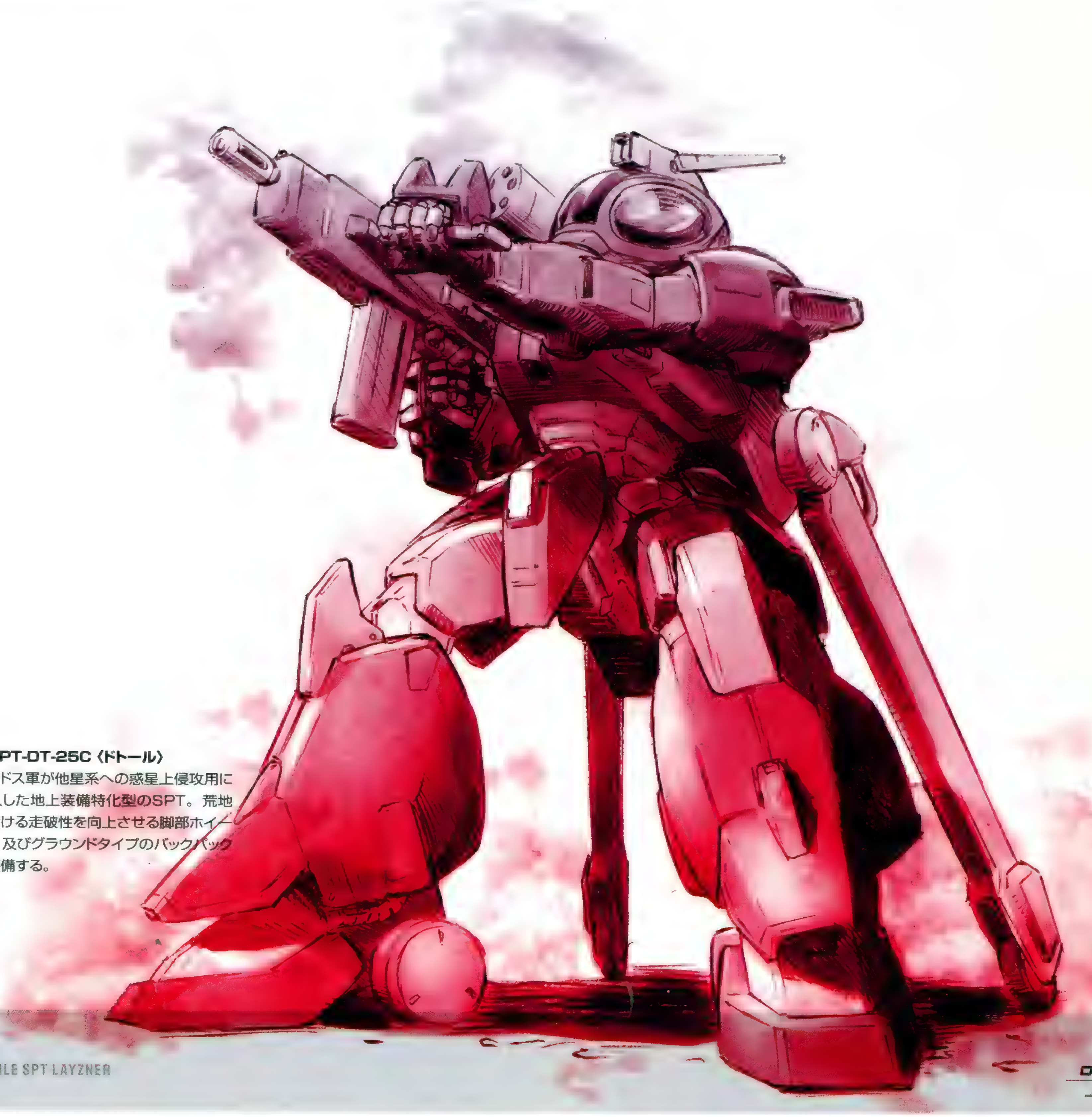
ある。政府の仲裁により両者が和解し、本格的な共同開発を再開したのは、グラドス暦4795年のことであった。

このプロジェクト再開以降、計画に関わるようになった技術者たちの多くが地球にも来ている。したがって、この前後の経緯についてはそれなりに裏付けの取れた確度の高い情報であると考えていいだろう。

プロジェクト再開後の最初の成果として、「スーパー・パワード・トレーサー」の名に相応しい試作機が登場したのは、グラドス暦4799年のことである。かつての名機PT-40Eタイプを発展させた試作機、SPT-05タイプがロールアウトしたのだ。BPUを基礎設計段階から盛り込んだこの機体は、本体に併せてUV（汎用タイプ）、AR（大気圏内用タイプ）、GR（地上戦タイプ）、AM（重火力タイプ）といった各種BPを試作。試験結果も上場で、開発陣はBPUの実用化に向けて確かな手ごたえを得た。

しかし、節目の年である4800年に完成した、全高12m級の試作機、K-SPT-02タイプについては、芳しくなかった。BPの大型化と、姿勢制御スラスターエンジンの強化によって、軍部が求める運動性の確保には成功していたが、探査能力の向上を念頭にセンサー類を増強した結果、操縦系統が複雑化。最終的にK-SPT-02は、メインパイロットに加えてオペレータが必要な複座機として完成していた。

結局のところ、K-SPT-02とは、軍部の要求仕様を探査省側が丸呑みした結果に生まれた「妥協の産物」であったのだ。確かに軍



■SPT-DT-25C〈ドトール〉
グラドス軍が他星系への惑星上侵攻用に投入した地上装備特化型のSPT。荒地における走破性を向上させる脚部ホイール、及びグラウンドタイプのバックパックを装備する。

部が求める運動性は確保されたが、操縦性は極めて劣悪で製造コストも高いという失敗作となったのである※。

こうした成功と失敗を経て、軍部と探査省は徐々に歩み寄りを見せていく。軍部もいささか反省したとみえ、宇宙軍の兵器工廠から人員を割き、バックパック開発に乗り出したのである。これに対して探査省側も組織体制を変更し、1チームあたりの人員定数を少なくする代わりに、チーム数を増強。軍部側2チーム、探査省側5チームという新体制で、BPを含むSPTの競合試作に臨んだのであった。

以後、一定の成果を挙げた、10m級試作機、SPT-05タイプを軸に開発が加速する。

グラドス暦4802年、軍側の開発チームが、SPT-05に地上走行用の改良を加えた試作機を開発。この機体がSPT-06として承認されたわずか2週間後には、探査省側の開発チームが同様に地上走行に重点を置いたSPT-07を完成させるなど、競合試作体制もうまく機能した。

動力ボックス方式を採用したSPT-06は地上走行能力で勝り、飛行能力を含めた総合性能では、シャフトアーム方式を採ったSPT-07が上回る、といった具合に次々と新機軸の装備が生み出されたのである。なお、SPT-07のシャフトアーム方式は、後に地上走行型の制式採用機、SPT-DT-25C〈ドトール〉に採用されている。

これ以降、4807年には大口径レーザー砲を2門搭載した重火力型のSPT-10タイプが、4809年には大気圏飛行型のSPT-12タイプが、次々とロールアウト。そして、4810年に充実した武装とバランスの良い総合性能を兼ね備えたSPT-13タイプが完成したことで、ようやく試作段階が終了する。かくして、プロジェクトSPTは、実用化に向けて次のステップへと進んだのだった。

■第一期量産型SPTの登場

グラドス暦4811年、プロジェクトSPTは大規模な体制変更を断行した。

SPT-13をもって、試作機がほぼ実用レベルに達したことに加え、既存のものとは一線を画す高性能スラスター・ロケットエンジンが開発されたことで、目標性能の基準を見直す必要が生じたためである。以降、SPTは、大量生産を前提とした汎用機種「コモンタイプ(Common-Type)」と、少数生産の高性能機種「ユニークタイプ(Unique-Type)」に大別することで、それぞれに求められる要求仕様を細分化し、開発することとなった。

また、これに伴い開発チームの体制も一新された。試作機開発において有望な機体を生み出していたチームは存続したが、それ以外のチームは解体され、新たな人員を追加した上で再編成されたのである。

かくして再編された新体制の下、制式採用機の誕生ラッシュが到来する。この時期、開発承認されたプロジェクトだけでも、コモンタイプ4機種、ユニークタイプ2機種の総計6機種に渡っており、一挙にSPTという新兵器体系が花開いた感がある。

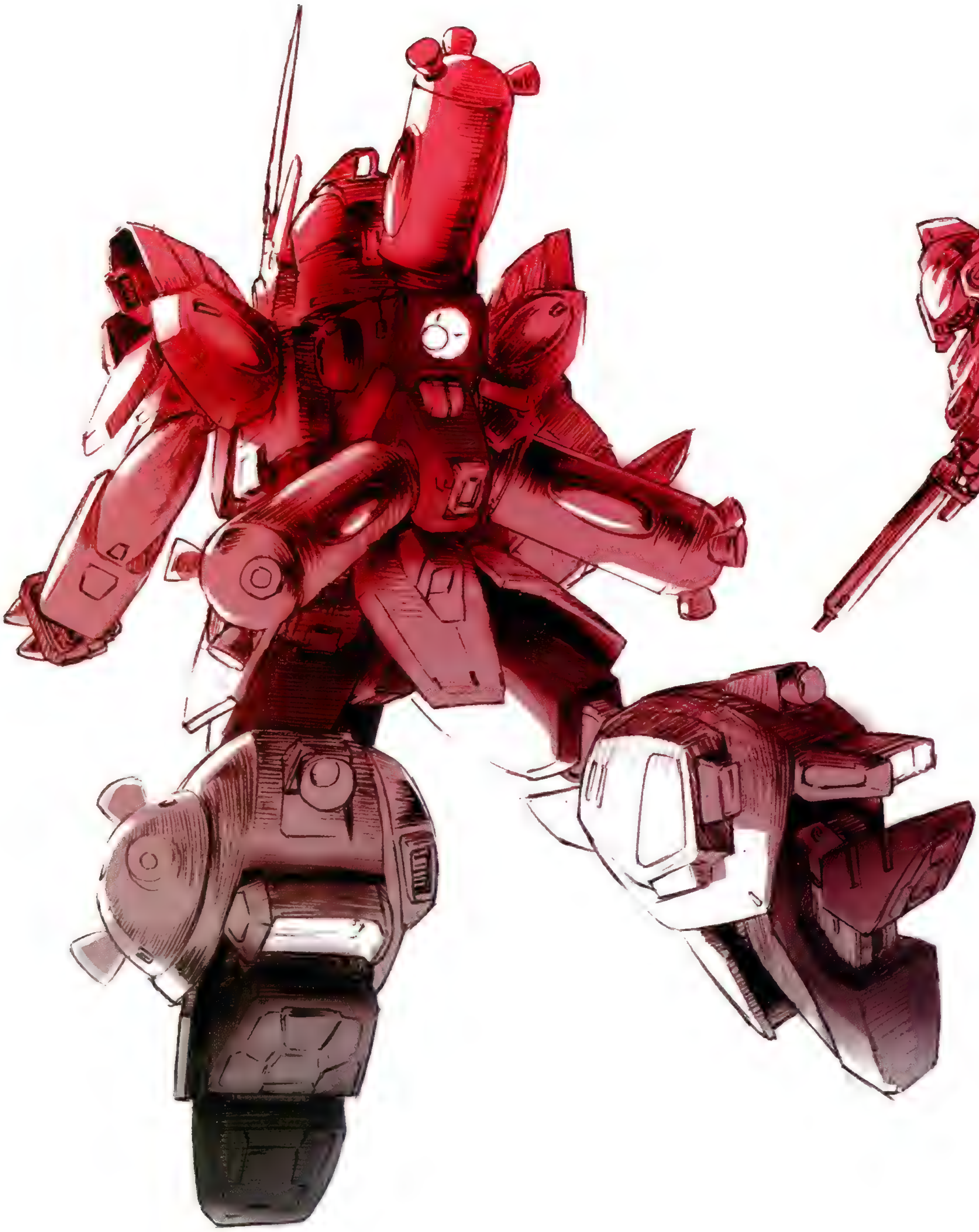
中でも突出して成功した機種といえば、コモンタイプに属するSPT-BV-15C〈ブレイバー〉であろう。グラドス暦4812年に最初のモデルであるA型が完成すると、その翌年にはB型、C型と立て続けに改良モデルを提示。良好な操作性を示した上、細かな改修の末にコストパフォーマンスの面でも向上し、高い評価を集めた。制式採用されたC型は、第一期量産型SPTとしては、最も生産台数の多いベストセラー機へと成長したのである。

ただし、失敗作の烙印を押される機体も存在した。“ザーブル”というコードネームで呼ばれた機体は、生産性の高い汎用機という〈ブレイバー〉と同一のコンセプトの下で設計されたが開発作業は難航。グラドス暦4818年に試作1号機がロールアウトしたものの、性能的に見るべきところはなく、形式番号さえ与えられることなく開発計画の中止を宣言された。

この失敗の後、グラドス政府はコモンタイプにおいては、同じコンセプトを持つ機体の複数並行開発を認めず、競作は行わない方針を打ち出した。政府側としてはSPT開発は、すでに用途別の細分化と最適化のフェーズに移行したと考えており、無駄に終わるかもしれない並行開発に、これ以上リソースを割くことを嫌ったようだ。事実、これ以降、制式採用されたコモンタイプの2機種については、SPT-DM-20C〈ディマージュ〉が宇宙空間戦を、SPT-DT-25C〈ドトール〉が地上戦を重視した設計となっている。

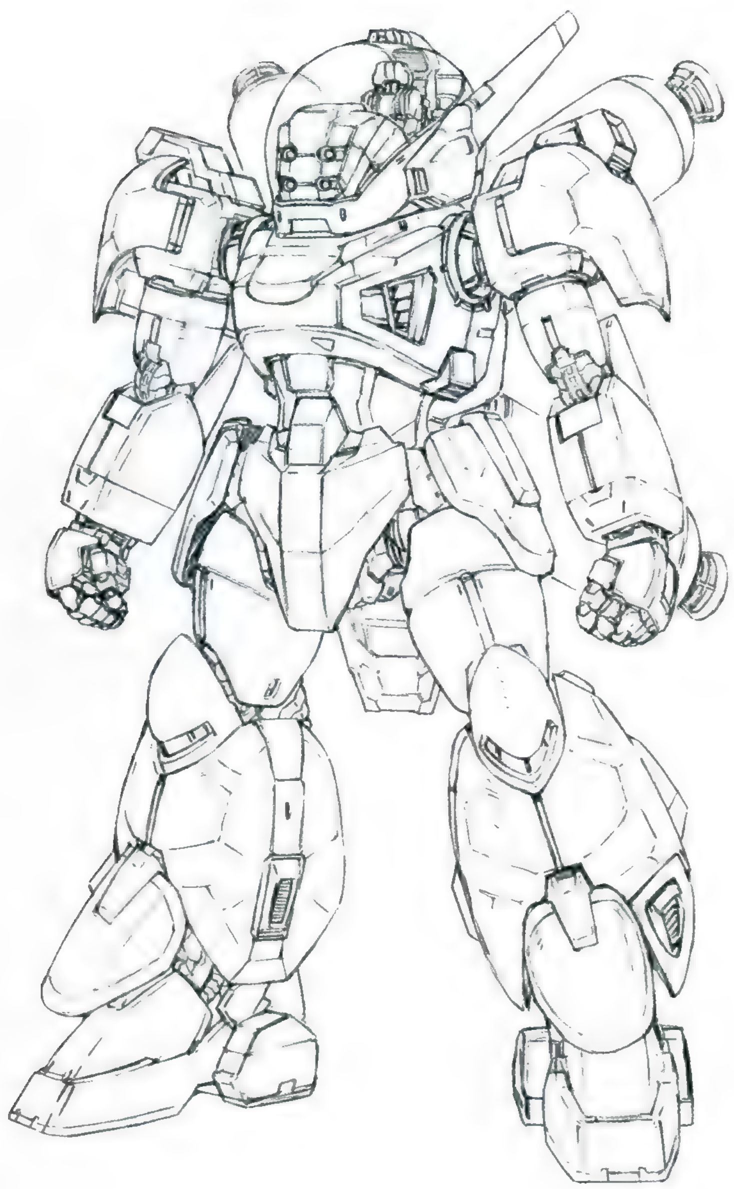
前者の〈ディマージュ〉は、全領域に対応した文字通りの汎用機種として、グラドス暦4815年に試作1号機(A型)がロールアウト。しかしながら、〈ブレイバー〉との明確な差を打ち出すことができず、制式採用には至らなかった。そして、4818年の“ザーブル”開発中止に伴うSPT開発計画の見直しに伴い、設計の大幅変更を要求されることとなる。大容量の推進剤タンクを有すという強みを活かしつつ、大出力BPの装備を前提とすることで、宇宙戦に特化するよう求められたのである。かくして幾たびもの改修が行われ、最終的には4823年にJ型が制式採用の通達を受け、量産体制に移行することとなった。

一方の〈ドトール〉も開発が難航した。こちらは地上戦特化型へ





■SPT-BV-15C〈ブレイバー〉
グラドス軍の汎用SPT。地球侵攻以前にも数々の星系における制圧作戦に参加し、一定の成功を収めた機体である。特にC型と呼ばれる生産型は第一世代型に属するSPTの中でも随一の生産数を誇る。



■〈レイズナー〉ベース機と考えられるSPTのひとつ
〈レイズナー〉は新装備などの試験のために従来型SPTのひとつをベースとして開発された機体であると考えられている。図は地球に渡ってきた技術者が参考資料として持ち込んだデータの中にあったとされるSPTで、現在では〈レイズナー〉の設計ベース機と目されている最も有力な機体である(形式など詳細は不明。持ち込まれた記録にも記述がほとんど見られないことから、グラドス軍の制式採用機ではなかった可能性もある)。このベース機で確立済みの信頼性を基礎とし、その上でそれぞれ環境の異なる侵攻対象惑星において一定の性能を発揮できるよう、新機能を追加したものが〈レイズナー〉であり、〈ベイブル〉や〈バルディ〉であった。
地球は数々のSPTの実験場という側面があり、グラドス史上でも稀に見る多種類のSPTが投入されたという。本来は〈レイズナー〉もまた、そうした目的のために送り込まれたSPTの1つであったのだろう。なお、グレスコ提督に与えられた地球占領の目的のひとつには、他星系へのさらなる侵攻にあたり、地球をSPTの一大生産拠点とする考えがあったのではないかとする説もある。

の改修が命じられたが、多くの技術的蓄積があったにも関わらず、地上装甲ユニットと重力下飛行用スラスター・ロケットを併せ持つBPの開発に手間取り、スケジュールの遅延を繰り返した。最初のモデル、A型が4819年、B型が4822年に完成したものの、いずれも欠点を抱えており、4824年に入って完成したC型によって、ようやく制式採用を掴むに至った。

主に上級仕官用の高性能機としての役割が求められていたユニークタイプは、野心的な設計を導入した試作機群(形式番号の末尾に「X」がつけられた)から、特に優れたものを採用する方式で、開発が進められた。そんな中、最初に制式採用され、XナンバーからUナンバーへと昇格したのが、SPT-GK-10U〈グライムカイザル〉である。高度な戦略·戦術コンピュータの搭載と、視界の広いキャノピーを持つこの機体は、誘導兵器へのジャミングを警戒して、有視界戦闘を重視するという設計思想の下、生み出された。4823年にA型がロールアウトすると、同年末には細部を改修したB型が完成。これをもって制式採用の認可が下り、初のユニークタイプ機となった。

続く2機種目のユニークタイプ、SPT-BG-91U〈ブルグレン〉は、〈ディマージュ〉や〈ドトール〉と同様に、“ザーブル”ショックの煽りを受けた機体といえる。設計段階では汎用型として検討されていたが、政府側の意向で同一コンセプト機の並行開発が禁じられたことを受け、〈グライムカイザル〉との差を明確化するために大気圏内戦闘を重視する方向へ舵を切ることとなったのだ。初期試作機のA型は4824年に汎用型として完成していたが、大気圏内飛行用BP、AR-90Tの装備と、これに伴う対地センサーの増強という改修を経て、翌4825年にB型をロールアウトさせた。

以上のような経緯を経て、対異星文明用戦術兵器SPTの第一世代機が出揃うこととなったのである。



■SPT-LZ-00X〈レイズナー〉



■SPT-BD-03U〈バルディ〉



■SPT-BB-02U〈ベイブル〉

■次世代型SPTの開発

第一期量産型SPTが次々と実用化を迎え宇宙軍への配備が進む中、グラドス政府はひとつの重要な決断を行う。元老院において「地球侵攻」が承認されたのである。数度に渡る太陽系調査により、地球文明の危険性――二大大国による対立を抱えたままの宇宙進出、及び、驚異的な科学技術の発展スピード――を認識していた彼らは、地球人たちが他星系への進出を図る前に、武力によって制圧すべしと結論づけたのであった。

しかし、武力遠征の手法については、様々な意見が噴出することとなる。グラドス宇宙軍は、「戦略ギラン衛星」というオゾン層を破壊する対惑星兵器を保有していたが、これを用いたネメイン星での大虐殺は史上最大の蛮行として記憶されており、その使用は厳に慎むべしとの論調が根強かった。そのため代替案として計画されたのが、地球を二分する勢力、すなわちアメリカ合衆国をはじめとする西側諸国と、ソ連を中核とした東側諸国との疑心暗鬼を利用し、核戦争を勃発させて文明レベルを100年ほど後退させた後、SPTを投入して一挙に制圧するという戦略であった。

ただし、この手法には不確定要素も多かった。地球文明の社会や歴史については、ケン・アスカ(明日香健)という地球人サンプルからの事情聴取などである程度判明していたが、異星文明への情報工作が成功するか否かは不透明であり、最悪の場合、対立する両勢力を結束させることになりかねない。

いかにSPTが優れた戦術兵器であるとはいっても、想定されていた主戦場は星々の彼方にある太陽系である。超光速艦艇を用いても、数ヶ月を要する長旅が必要な「大遠征」だ。当地に第一陣を送り出した上で制宙権を確保し、地球の衛星軌道上に超空間航法用プラットフォームである「ステーション衛星」を設置するまでは、安定的な物資補給もままならない。万一、東西両陣営が結束して

グラドス側に抵抗することで、戦局が膠着状態に陥ったとしたらどうなるか。当然、地球側がSPTへの対抗兵器を完成させる事も想定しなければならない。

　こうした議論が宇宙軍内部で繰り広げられた結果、さらなるカウンター足り得る存在、つまり第二世代SPTの開発が進められることとなったのであった。かくして第二世代SPTの開発計画が元老院で諮られ、認められることとなる。

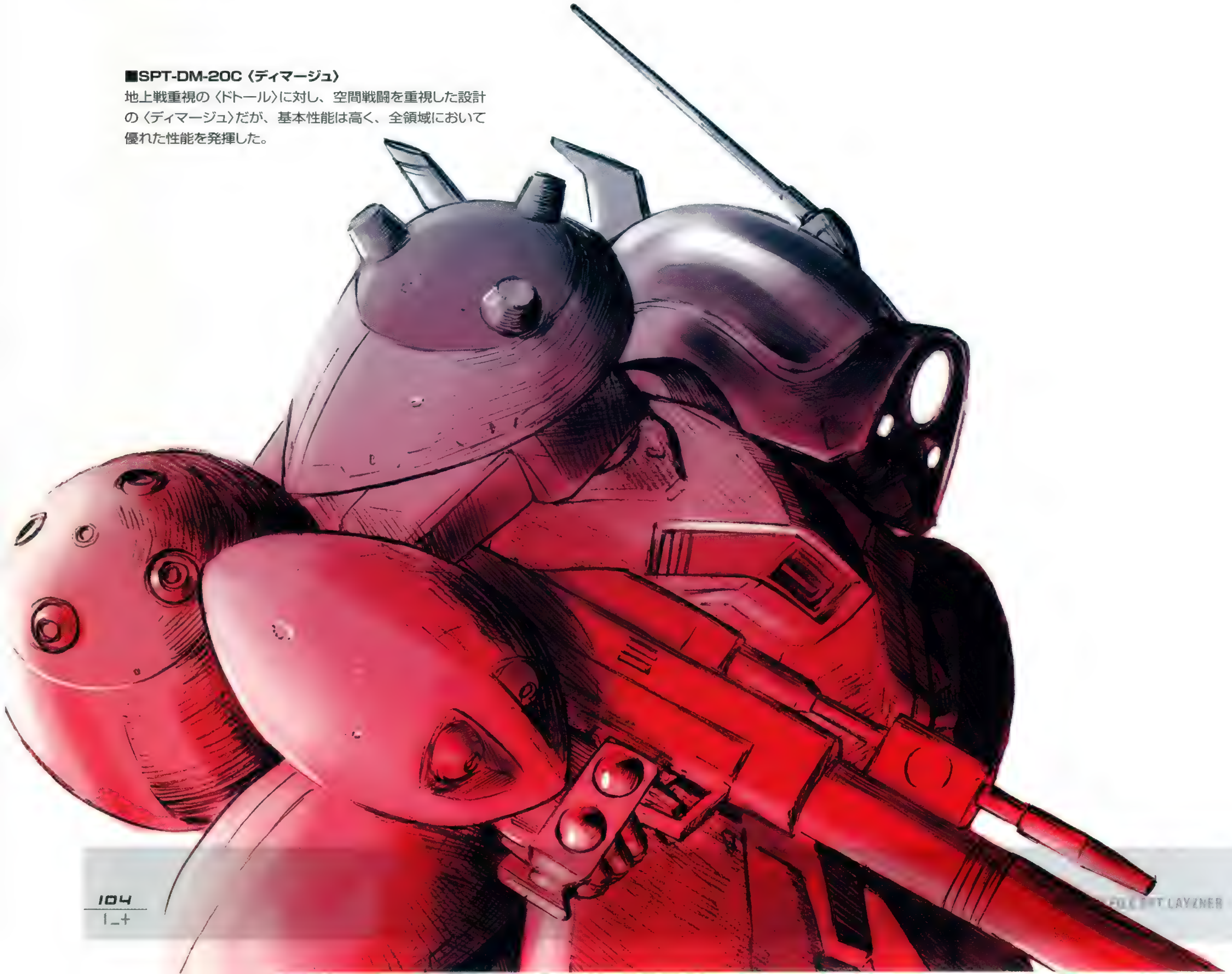
■第二世代SPTの雛形たち

　それでは、第二世代SPTの定義とはなんなのであろうか。開発チームの技術陣は、その命題に対して2つの回答を用意した。

　ひとつは「環境分類から用途分類への転換」。第一世代SPT、すなわち第一期量産型SPTは、いずれも投入される環境に適応させた機種を開発するというコンセプトが採られていた。コモンタイプを例に取ると、汎用型のSPT-BV-15C〈ブレイバー〉、宇宙空間戦型のSPT-DM-20C〈ディマージュ〉、陸戦型のSPT-DT-25C〈ドトール〉といった具合である。これに対し、第二世代SPTでは、大気圏の内外を問わず安定した性能を発揮する一方で、ある程度の局地戦能力を持ち得る機体を生み出すことを目指していた。地球侵攻艦隊とともに地球に送られた第二世代試作機の一群が、SPT-LZ-00X〈レイズナー〉、SPT-BB-02U〈ベイブル〉、SPT-BD-03U〈バルディ〉の3機種である。

　この3機種を例に取れば、ウェポンラックを追加した新型BPが用意され、多彩なオプション兵装を使い分けることで多目的な運用が可能になるというSPTの特性を伸ばしながらも、それを装備する本体側にも用途別に手が加えられたという特徴を持つ。それぞれがベースとなった機体を再設計したものであるが、これらはあくまでも試作機であり、ゆくゆくは1つの制式機へと煮詰められていくのか、または個別の機種としてさらに突き詰めていくのか、そうしたことも含めての実用試験任務が与えられていたようである。

■SPT-DM-20C〈ディマージュ〉
地上戦重視の〈ドトール〉に対し、空間戦闘を重視した設計の〈ディマージュ〉だが、基本性能は高く、全領域において優れた性能を発揮した。



2つ目のコンセプトは、「ユニークタイプSPTの戦術性向上」である。これは、遠征先の惑星環境に合わせた局地戦用のSPTを多数投入するよりも、汎用性がある程度確保された少数の機体にいわば“一騎当千”の戦闘力を与えることにより、作戦遂行の効率化を図るというコンセプトである。そのための方式として考案されたシステムが「V-MAX」である（V-MAXについては本書別項を参照のこと）。

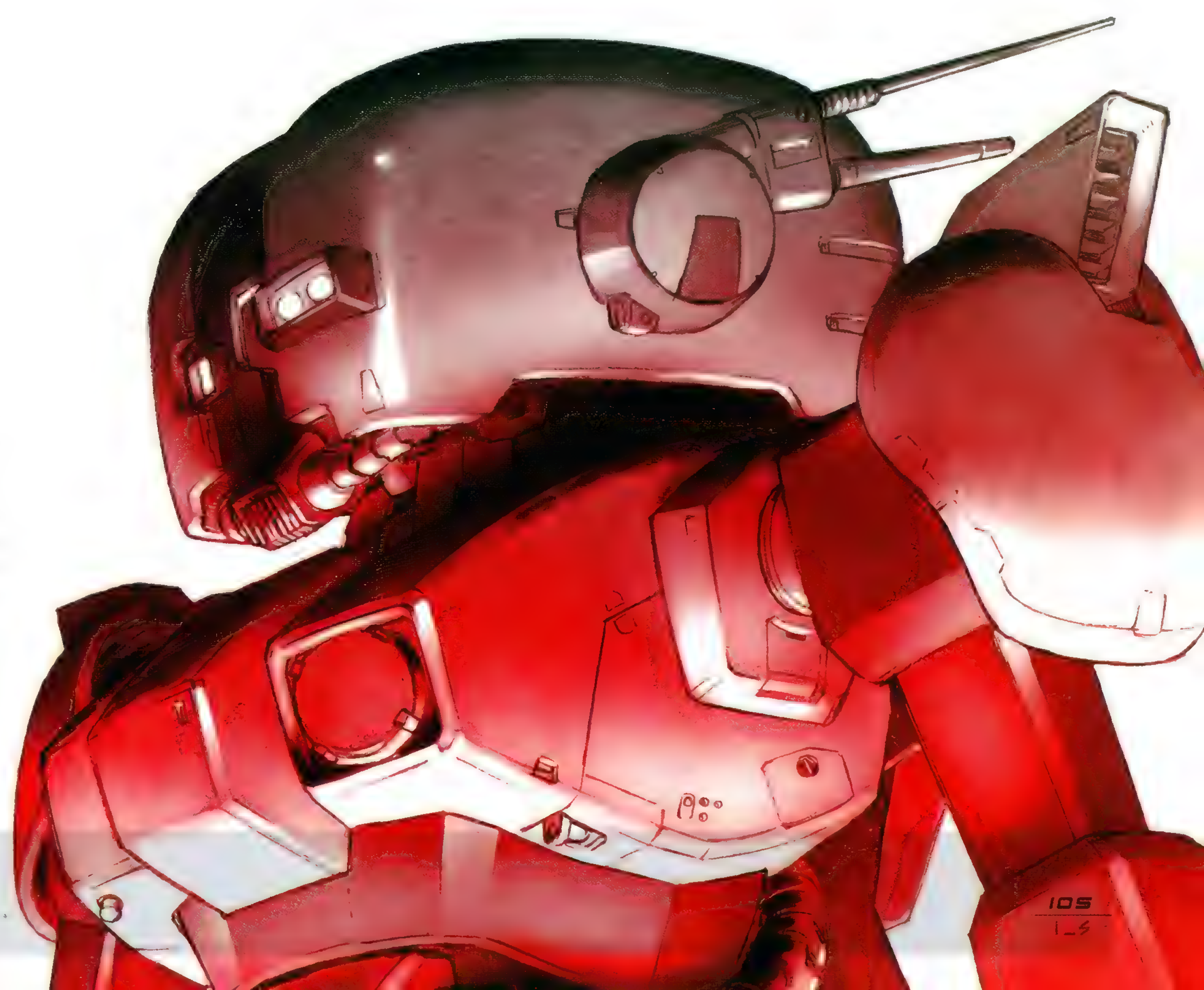
グラドス宇宙軍の上層部としては、このシステムの有用性を認めつつも、使用時にパイロットにかかる負荷も無視できないものであったことから、制式採用を見送り、一時的に第二世代SPTの開発はペンディングとすることを決定したという。

その代替として急浮上したのが、探査省側の開発陣が推進していた次世代兵器群である。この計画の骨子は、BPを廃止して汎用性を低下させる一方で、特殊な用途への対応能力を高めるという真逆の案で、複数案が提案されていた。

探査省がBPの廃止を訴えたのにはわけがある。これまでの第一世代SPTの開発過程において、BPS（バックパック・システム）が、宇宙軍側が喧伝するような万能性を有していないことが明らかとなっていた。当初はBPの換装により、単一機種の多用途性を確保する計画だったにも関わらず、本体が同一では個別のBPが有する性能をフルに発揮できないと判明するや、SPT自体を複数機種開発する方向へとシフトしていたのである。まさに本末転倒といわざるを得ない事態であり、探査省としては早々にBPに見切りをつけていたのだ。

結果として、探査省の意向を汲んで開発されたのが、完全自動操縦を実現した無人兵器「テラーストライカー（TS）」※と、BPを廃止して生産性を高めた簡易SPT「マルチフォーム（MF）」である。地球侵攻作戦の序盤においては第一世代SPTが主力となったが、その後の地球本星の制圧や太陽系の占領当地においてTSとMFが有用であることも証明され、恐らく今後のグラドス本星が実施する外惑星遠征ではこれらが次第に存在感を強めていくことになるであろうと予測される。

■TS-SG-50C〈スカルガンナー〉
掃討用無人機として開発された〈スカルガンナー〉は、プログラムによって動作する完全自動化機である。自律動作はするがAIのような柔軟な状況判断はできず、与えられた目標を追尾・破壊することにのみ特化したいわば“殺戮マシーン”として機能した。



※テラーストライカー
探査省主導の無人機開発計画に基づき、グラドス暦4805年に最初のプロトタイプであるTS-SG-50Xがロールアウト。その開発期間はわずか1年という短期間であり、SPT関連技術の蓄積をうまく活かした事例として評価されている。この機体は、後にTS-SG-50C〈スカルガンナー〉として採用。また、制圧後の火星に送り込まれたTS-MB-50E〈マースバード〉や、地球の占領当地に用いられたTS-TP-50D〈ターミネーター・ポリス〉などのバリエーション機種を生み出した。

■第二世代SPTのその後

SPT-LZ-00X〈レイズナー〉の優秀性は、奇しくも反体制派に利用され、アルバトロ・ナル・エイジ・アスカが地球における反抗活動のために運用したことにより証明された。エイジ・アスカという比較的錬度の低いパイロットが運用したにも関わらず、メインシステム〈レイ〉の適切なアシストもあって、〈レイズナー〉は次々と戦果を挙げていった。特に、その特殊機構V-MAXが利用可能な状態となるや否や、第一世代SPTの傑作機と名高いSPT-GK-10U〈グライムカイザル〉でさえ、太刀打ちできぬ存在として戦場に君臨することとなる。

グレスコ艦隊は、地球を制圧という初期目標を成し遂げはした。しかしながら、その占領当地においてゲリラ的な襲撃を繰り返す〈レイズナー〉の存在は、"目の上のたんこぶ"であり続けた。

このような事態に対し、グラドス宇宙軍が中断状態にあったV-MAXの再開発を申請したのは自然の成り行きといえよう。もちろん宇宙軍のこれ以上の権限拡大を望まない探査省や、政府内の良識派勢力は反対の姿勢を鮮明にした。だが、それでも地球での戦況を盾として宇宙軍は頑なに譲らず、最終的にはゴーサインが下されることとなる。

かくして生み出されたのが、SPT-ZK-53X/U、後に〈ザカール〉と呼ばれることになる機体である。本機の開発にあたり、宇宙軍は以下の5点を要求仕様に盛り込んだ。

第一に、〈レイズナー〉を上回る機動性の確保。

第二に、最高出力において〈レイズナー〉を2000kg以上、上回ること。

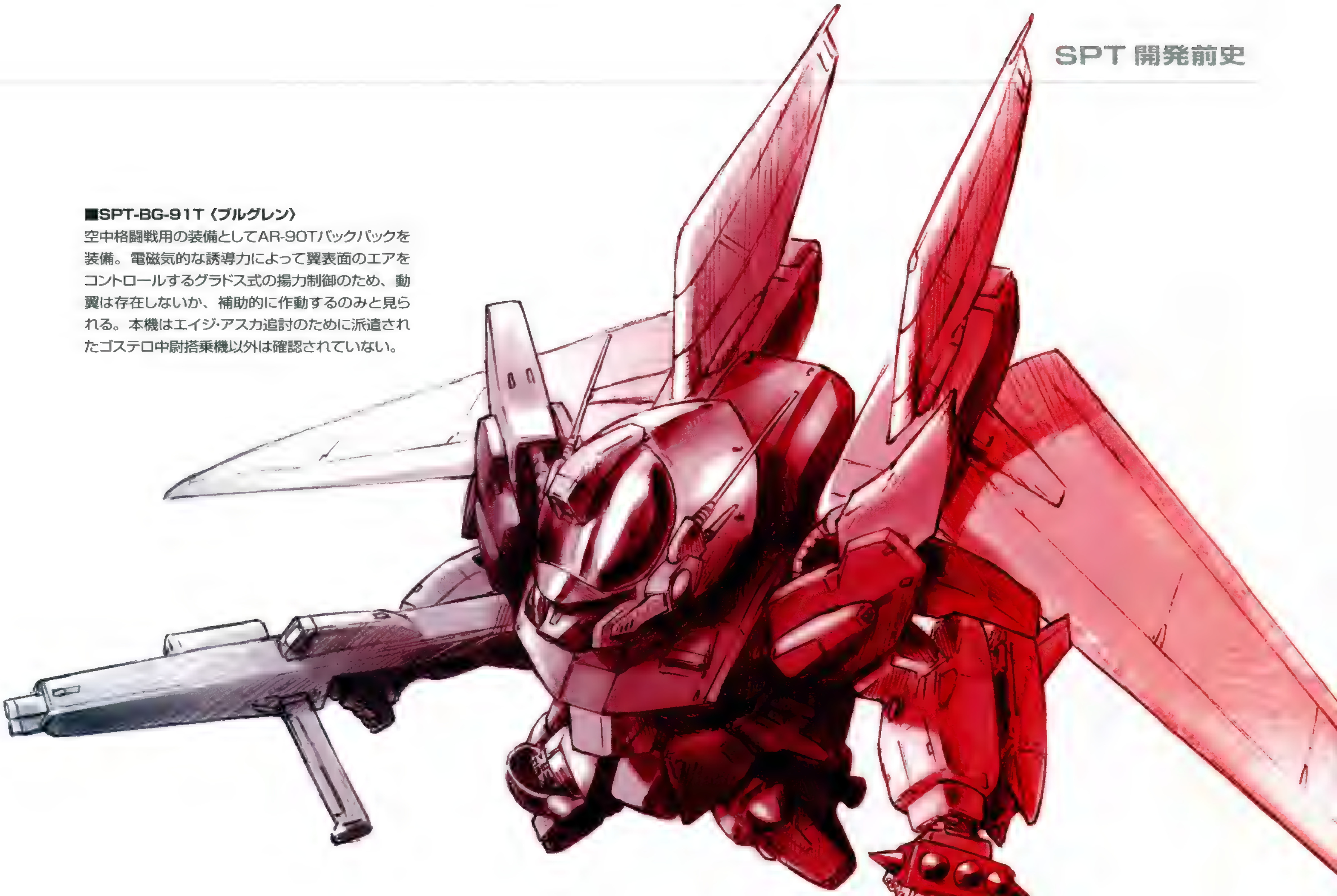
第三に、コンピュータ性能の向上。

第四に、V-MAX発動時のパイロットへの肉体的・精神的負荷を低減させること。

第五に、手持ち式火器の火力向上。



■SPT-GK-10U〈グライムカイザル〉
戦術支援に優れた能力を発揮する中枢コンピュータを搭載し、指揮管制機として運用されることの多い機体である。同型機としてSPT-BK-10U〈ブラッディカイザル〉が存在する。図の機体は分隊支援用のバズーカ架装UV-10Tバックパックを装備している。



■SPT-BG-91T〈ブルグレン〉
空中格闘戦用の装備としてAR-90Tバックパックを装備。電磁気的な誘導力によって翼表面のエアをコントロールするグラドス式の揚力制御のため、動翼は存在しないか、補助的に作動するのみと見られる。本機はエイジ・アスカ追討のために派遣されたゴステロ中尉搭乗機以外は確認されていない。

上記の要件は、一見すると無謀のようにも思える。しかしながら、宇宙軍側はSPT-LZ-00X〈レイズナー〉の設計図面を入手しており、これをトレースしつつ改良を加えることができたため、比較的スムーズに開発は進行していった。なんと設計着手から試作1号機のロールアウトまで、わずか二ヶ月間という短期間であったというから驚きだ。

〈ザカール〉の開発陣は、〈レイズナー〉をベースとしながらも、展開式冷却機構など構造を複雑化する設計を排除することで、生産性と保守性を向上させる一方、特にV-MAXの強化に力を注いだという。本来は緊急回避システムであったそれを、対SPT格闘戦における機動性向上機構として再設計。15%の推力向上を実現した。この強化型V-MAX、通称「レッドパワー」を搭載したことで、本機は類を見ない機動性を有する機体として完成することとなる。

一部で耐熱ゴム製のパッキンがV-MAX発動時の発熱により溶け出すなどの不具合があったものの、これもすぐさま修正され、大きな問題にはならなかった。試作2号機には、当初こそ耐熱ゴム製のパッキンが取り付けられていたが、後に極薄のセラミック材に変更し仕様を確定。形式番号の末尾も、XからUへと変更され、制式採用されるに至っている。

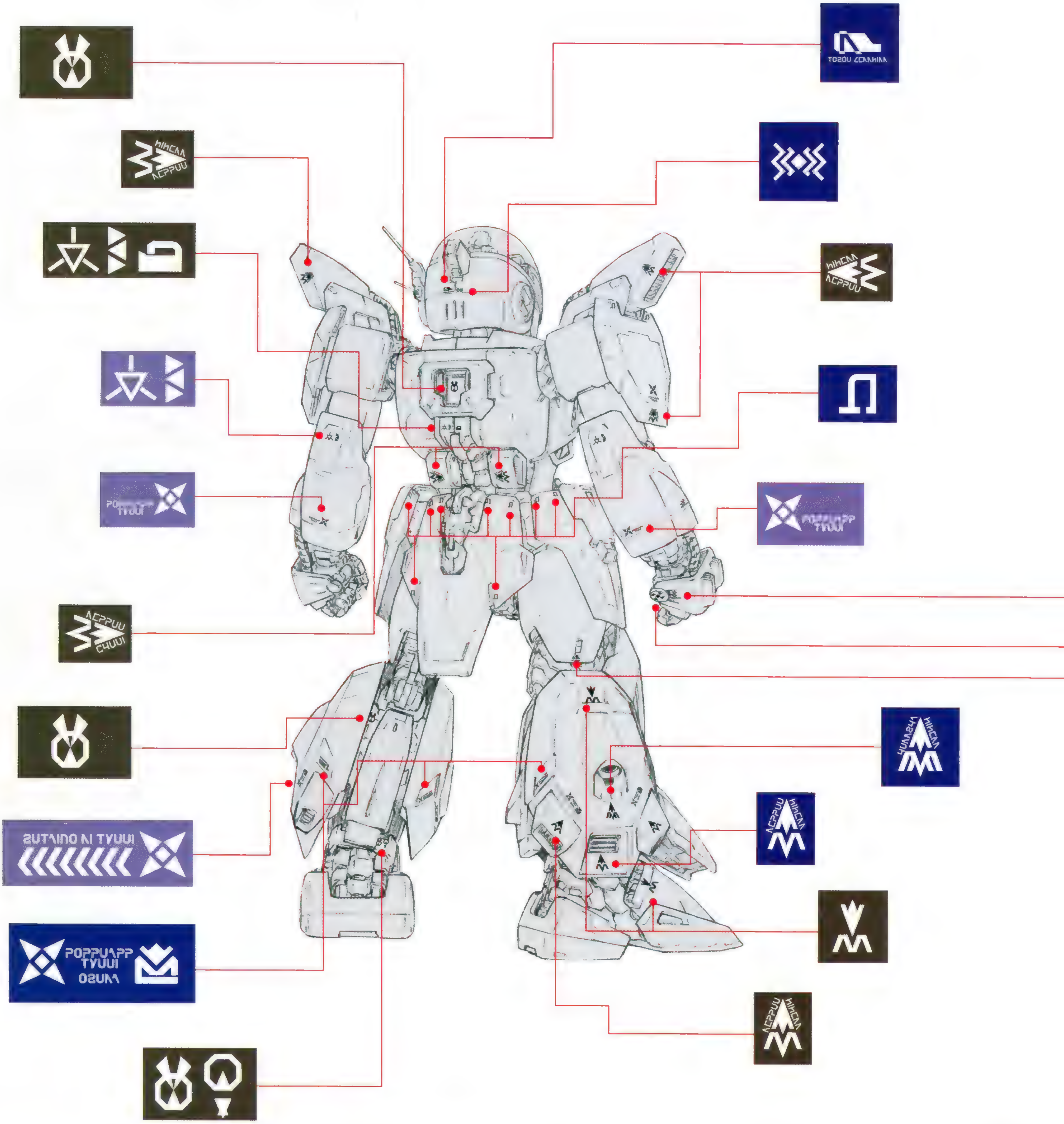
この時点で、試作2号機はテストパイロットを務めたル・カインの手に渡り、彼自身により〈ザカール〉というペットネームが与えられている。なお、SPT-ZK-53Uは、第一次計画として150機の生産が決定されたという情報がある。

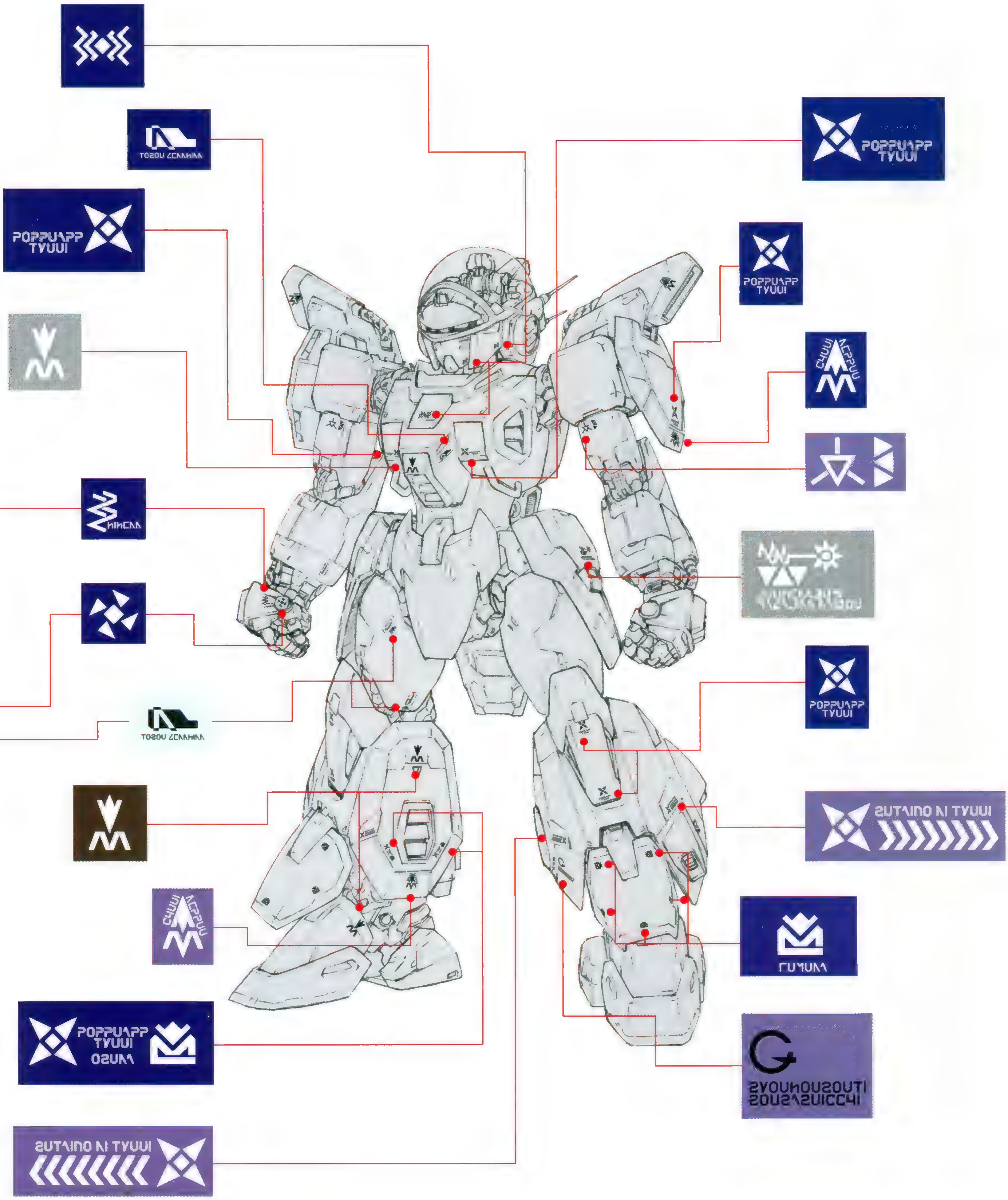
これ以降、追加生産された機体は、グラドス暦4826年の地球制圧戦勝式典のグレスコ准将凱旋パレード用に用意されたカスタムメイド機、ただ1機のみである。機体全面に悪趣味な装飾を施したこの機体は、軍部からの制式受注を受けたものではなく、あくまでグレスコ准将からの私的な発注で製造されたものであったようだ。したがって、本機が実戦で用いられることはなく、この式典での利用を最後にグラドス軍事博物館に寄贈されている。

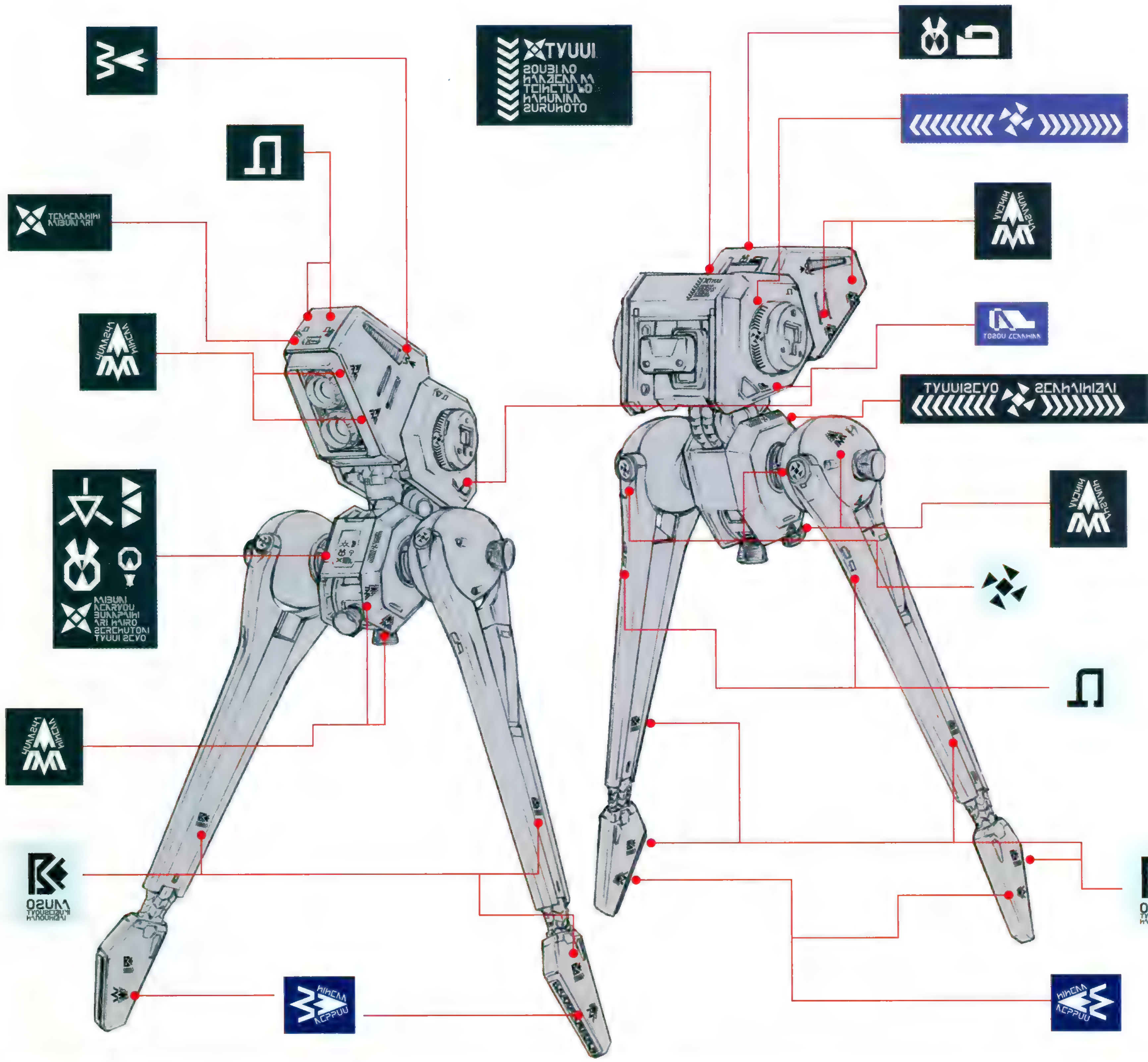
余談だが、本機は軍の制式採用機ではなかったものの、博物館への寄贈の時点で、SPT-KG-53Kの型式番号を与えられたといわれている。当初は〈ザカールII〉と呼ばれていた本機だったが、グレスコ、ル・カイン父子の微妙な関係性を考慮し、軍部からの申し入れにより〈キング・グラドス〉に改名した上での登録承認であったという逸話も残されている。

CAUTION SIGN : LAYZNER

SPT-LZ-00X〈レイズナー〉の機体表面には、メンテナンスなど取り扱いのために整備員に示すコーション（注意書き）が描かれている。試験運用の機体らしく〈ブレイバー〉などと比べてもコーションそのものの数は多い傾向にある。異星系の機体であることから、文字はむろんのこと描かれる記号も地球のものとは大きく異なっている。なお、記号の一覧を110頁下部にまとめた。





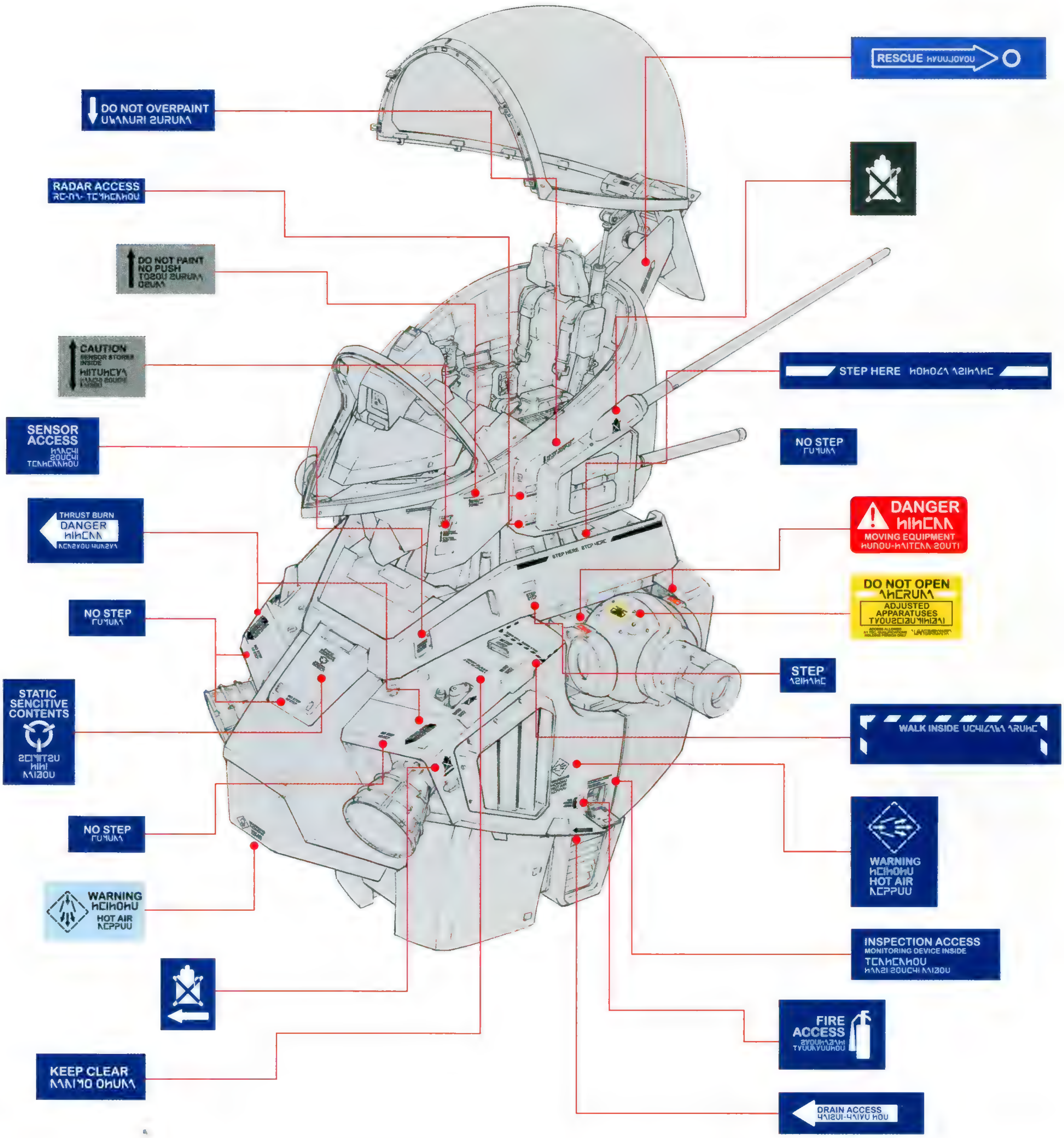

TYUUI

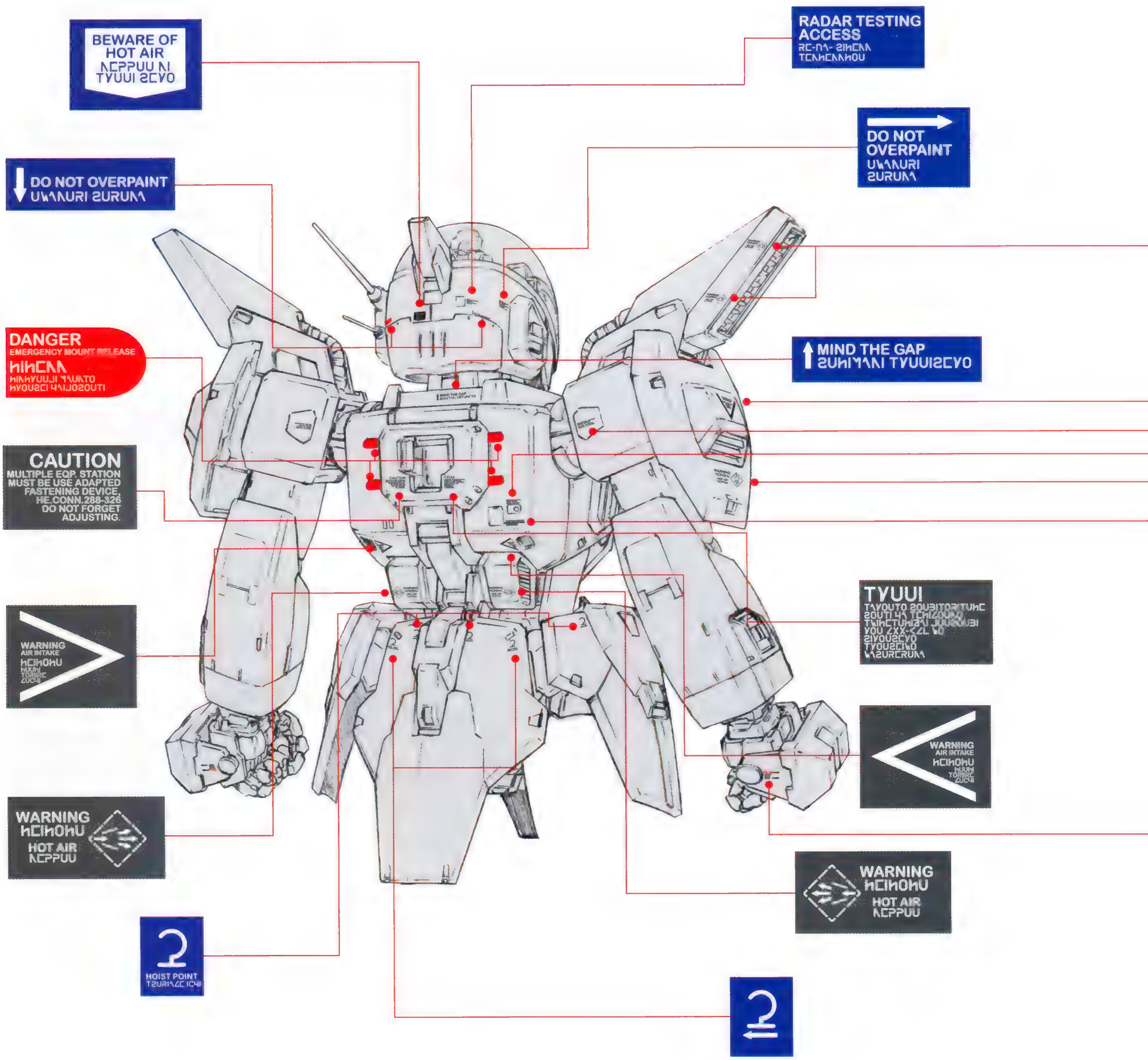

注意喚起
燃料タンクアクセス表示
踏むな、押すな
ホイスト位置
旋回・回転
熱風噴射口
推進燃焼噴射
インテーク表示
ドレーン位置
燃料補給口接続位置
バッテリー位置
モーターアクセス表示
爆発物内蔵
高電圧注意喚起
電磁波放射源
塗装無用

CAUTION SIGN : NEW LAYZNER

NEW LAYZNER

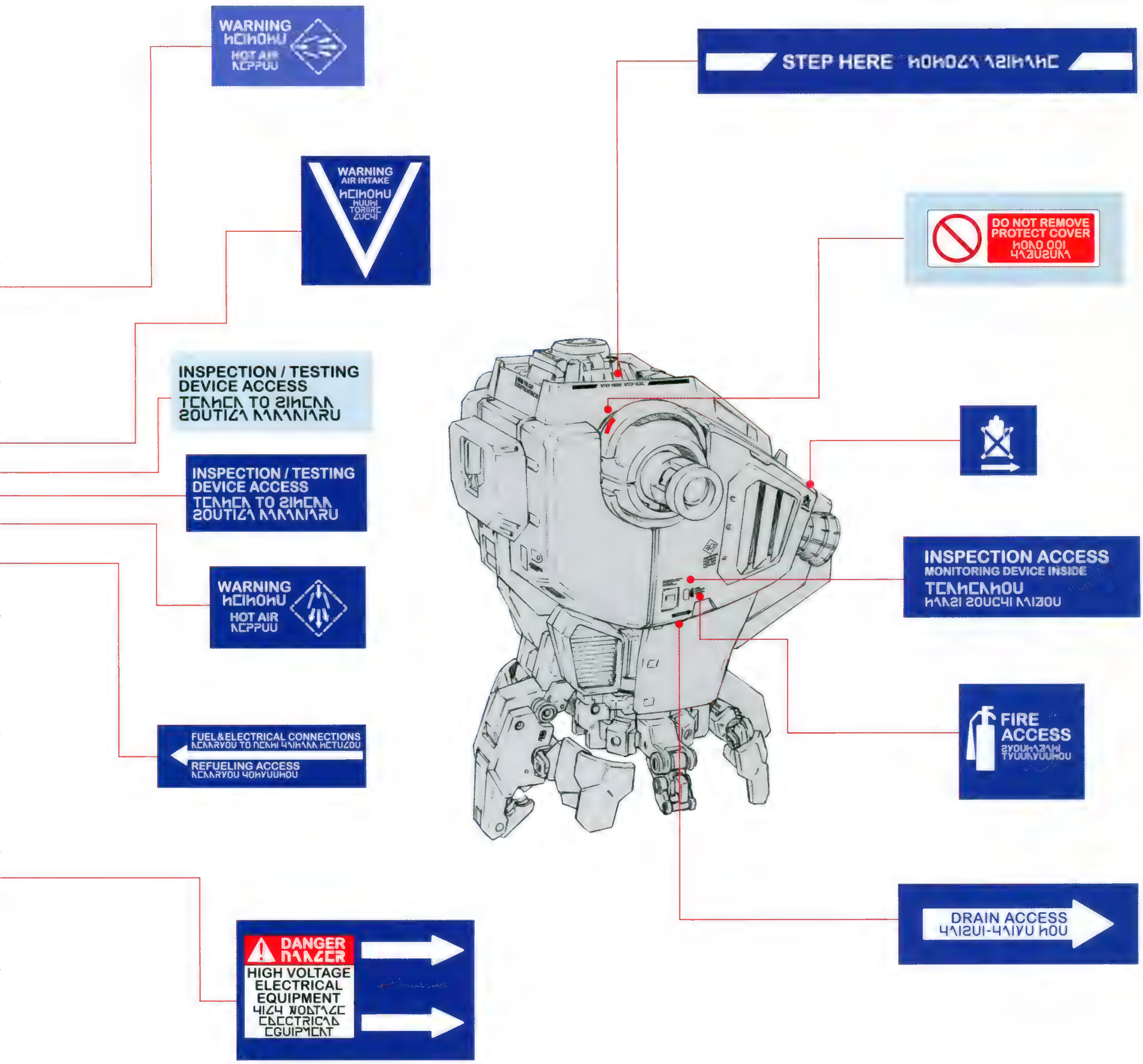
地球で造られた初のSPTとなったE･SPT-LZ-00X-B〈ニューレイズナー〉のコーションを、解明されている範囲で可能な限り詳細に記す。〈ニューレイズナー〉の場合、整備員がSPTを見るのも触るのも初めて、といったケースが多く想定されるため、こちらもコーションの数や種類は想像以上に多い。表記の言語は、整備担当者にグラドス人技術者が混じることも考慮され、英語とグラドス語の併記となっている。なお、一覧による解説は117頁にまとめた。

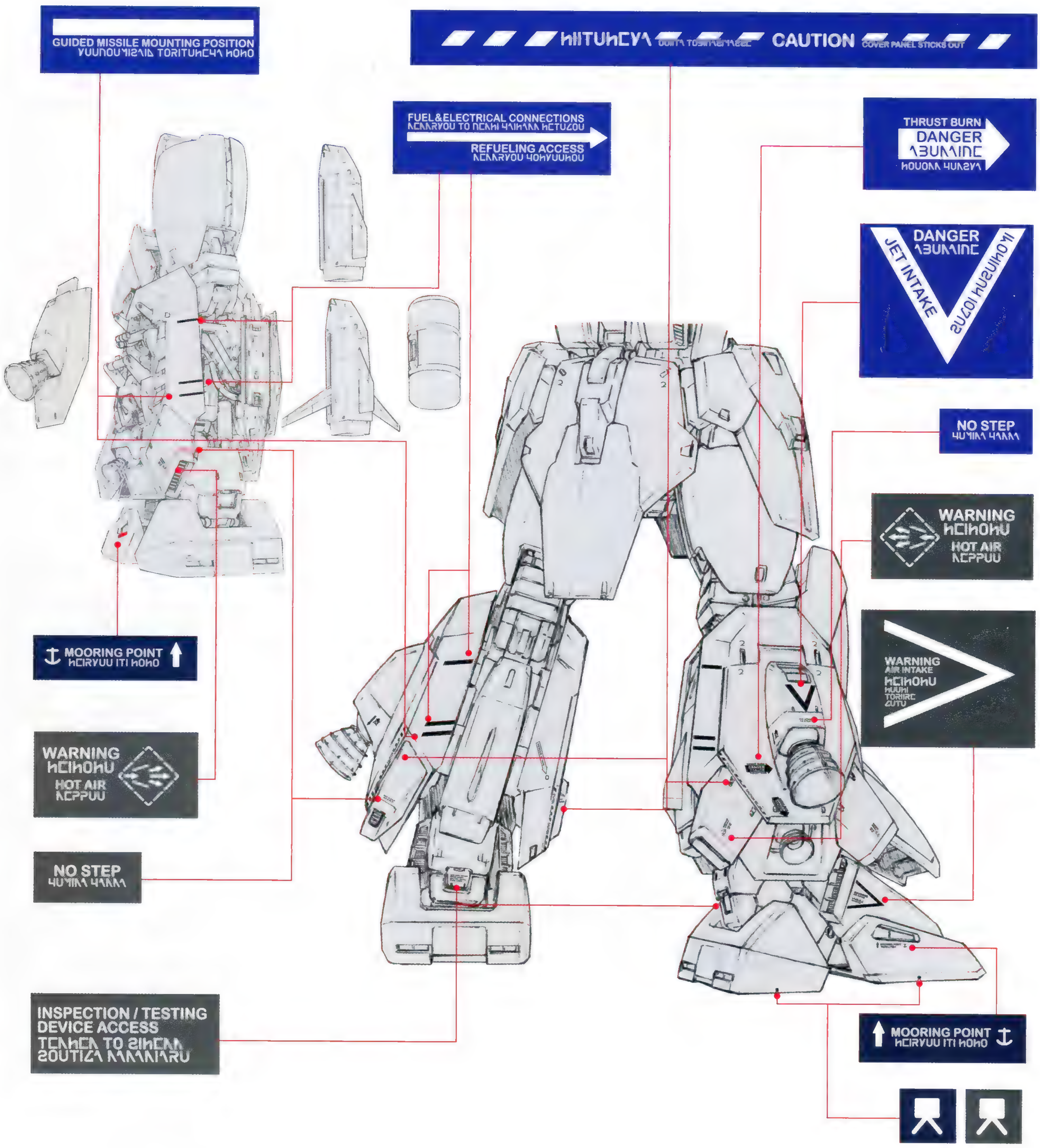




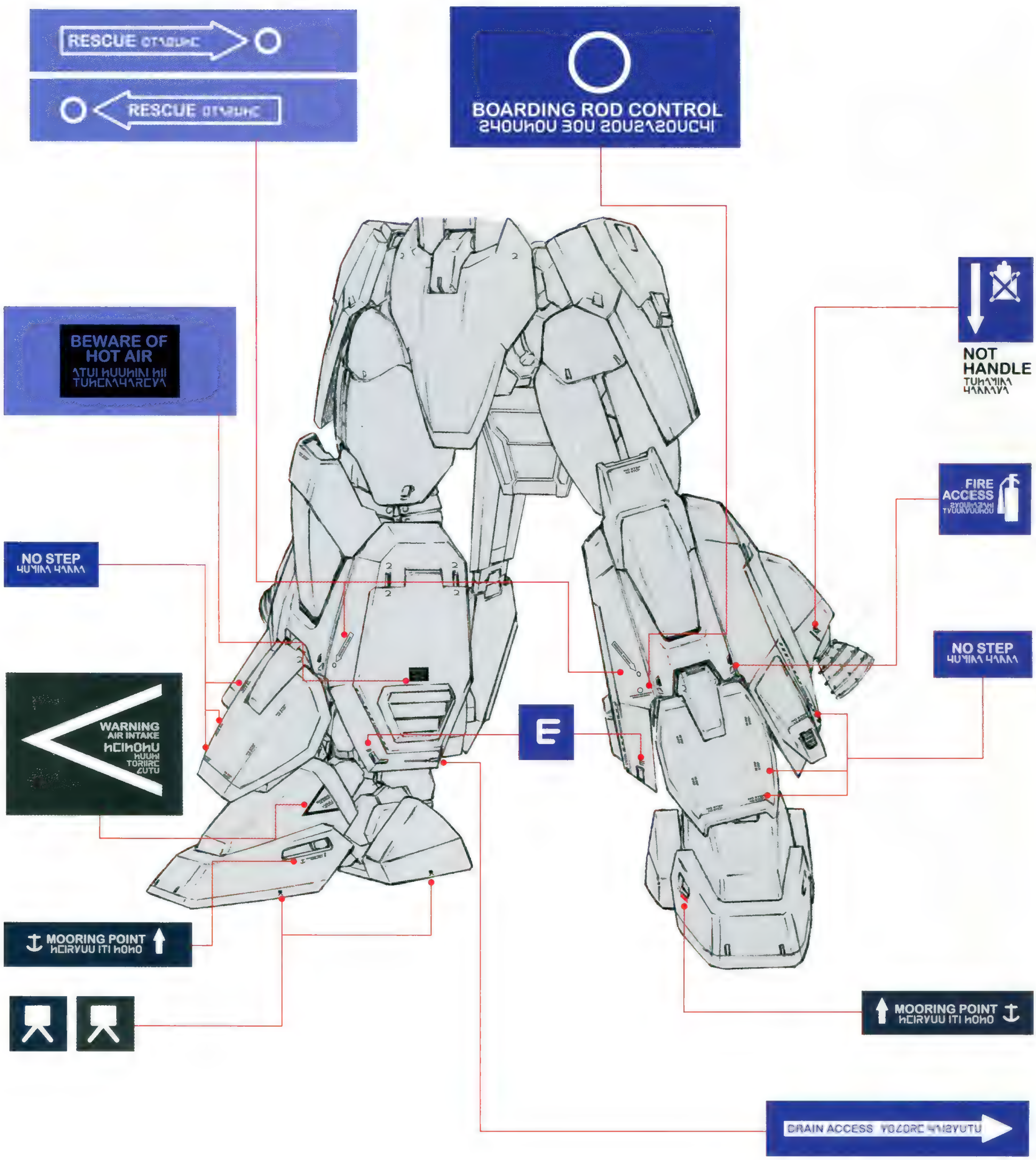
BEWARE OF HOT AIR
RADAR TESTING ACCESS
DO NOT OVERPAINT
DO NOT OVERPAINT
DANGER
EMERGENCY MOUNT RELEASE
MIND THE GAP
CAUTION
MULTIPLE EQP. STATION MUST BE USE ADAPTED FASTENING DEVICE. HE.CONN.288-326 DO NOT FORGET ADJUSTING.
TYUUI
WARNING AIR INTAKE
WARNING AIR INTAKE
WARNING HOT AIR
WARNING HOT AIR
HOIST POINT

CAUTION SIGN
NEW LAYZNER

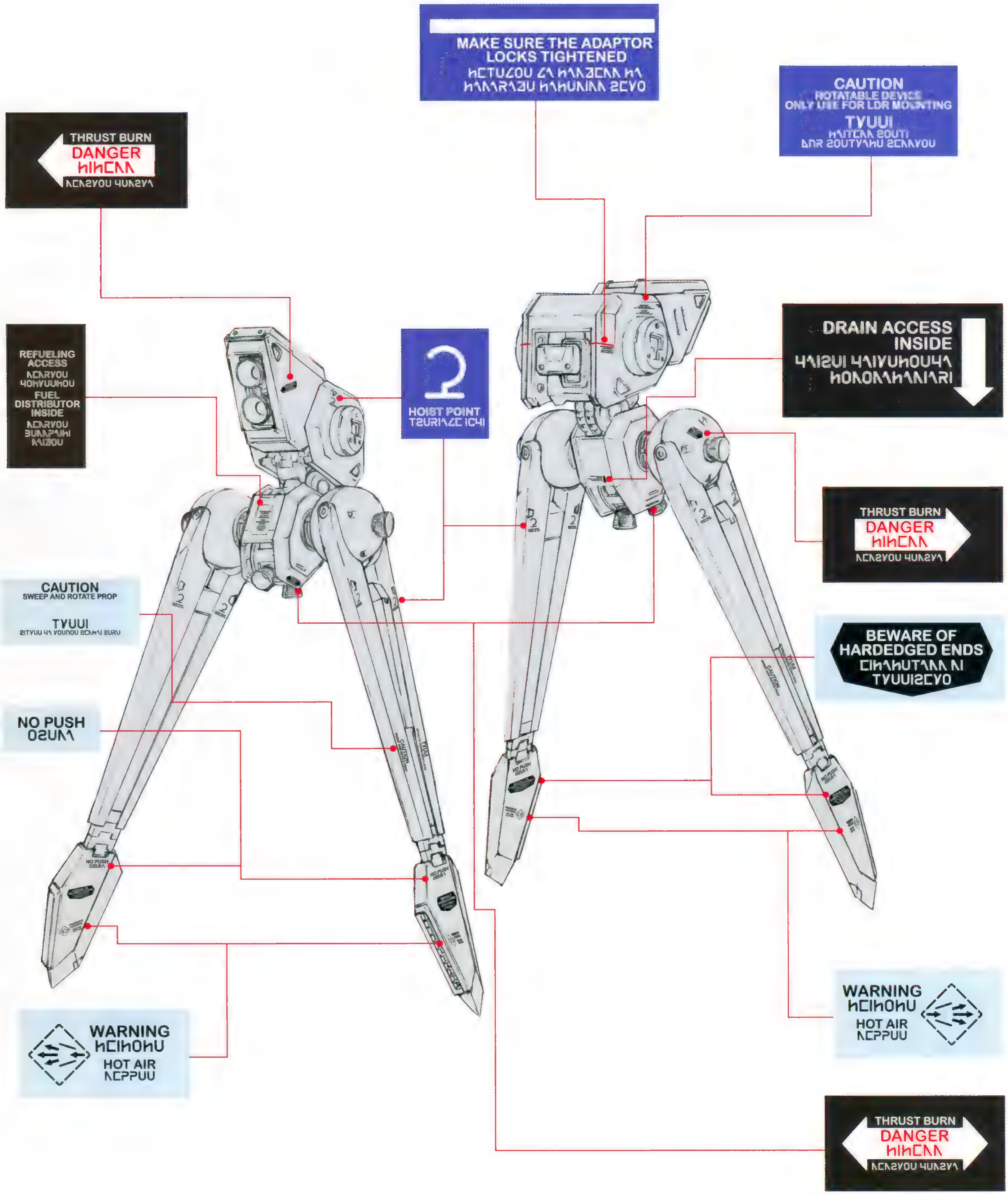



GUIDED MISSILE MOUNTING POSITION
CAUTION
COVER PANEL STICKS OUT
FUEL&ELECTRICAL CONNECTIONS
REFUELING ACCESS
THRUST BURN
DANGER
DANGER
JET INTAKE
NO STEP
WARNING
HOT AIR
WARNING
AIR INTAKE
MOORING POINT
WARNING
HOT AIR
NO STEP
INSPECTION / TESTING
DEVICE ACCESS
MOORING POINT

CAUTION SIGN
NEW LAYZNER



CAUTION SIGN
NEW LAYZNER



FUEL&ELECTRICAL CONNECTIONS / REFUELING ACCESS
燃料および電気系統接合部燃料再補給接続部

GUIDED MISSILE MOUNTING POSITION
誘導ミサイル取り付け位置

MIND THE GAP
隙間に気を付けること

INSPECTION / TESTING DEVICE ACCESS
点検および試験装置接続部

ADAPTOR LOCKING INDICATOR
点検および試験装置

WARNING / HOT AIR
警告：熱風噴出位置

MOORING POINT
地上繋留位置

NO STEP
踏むな

WARNING / AIR INTAKE
警告：空気取り入れ口

DANGER / HIGH VOLTAGE ELECTRICAL EQUIPMENT
危険：高電圧電子機材

CAUTION / COVER PANEL STICKS OUT
カバー・パネルのせり出しに注意

STEP HERE
ここは踏面（足掛け可）

THRUST BURN / DANGER
危険：推進装置噴射

DANGER / JET INTAKE
危険：高速流空気取り入れ口

CAUTION / MULTIPLE EQP. STATION MUST BE USE ADAPTED FASTENING DEVICE HE.CONN.288-326 DO NOT FORGET ADJUSTING.
注意：多目的装備取り付け装置
取り付けは接続機材HE（重装備）
288から326を使用のこと
調整を忘れないこと

CHARGED ENERGY PACK INSIDE / FOR LDR USE ONLY
注意：装填（充填）済み
エネルギー・パック内蔵
LDRでの使用のみ可

DANGER / MOVING EQUIPMENT
危険：駆動機材

DANGER / EMERGENCY MOUNT RELEASE
危険
緊急時締結機材放棄機構

DO NOT OPEN / ADJUSTED APPARATUSES
開けるな
調整済み機器
A1技術有資格者のみ
触れることを許可

BEWARE OF HOT AIR
熱風に気を付けること

DO NOT REMOVE PROTECT COVER
保護カバーを外すな

BEWARE OF HARDEDGED ENDS
鋭角端部に気を付けること

STEP
足掛け

E
電源

ジャッキポイント

WALK INSIDE
内側を歩け

BOARDING ROD CONTROL
搭乗用ロッド操作装置

DRAIN ACCESS INSIDE
排水・排油口は内側にある

RESCUE
救助用

REFUELING ACCESS / FUEL DISTRIBUTOR INSIDE
燃料再補給
接続部
燃料分配器
内蔵

MAKE SURE THE ADAPTOR LOCKS TIGHTENED
締結が十分であることを確認せよ

FIRE ACCESS
消火剤噴入口

NOT HANDLE
持つな

触れるな

STATIC SENCITIVE CONTENTS
内容物は
静電気に感受性
あり

KEEP CLEAR
何も置くな

DO NOT OVERPAINT
上塗りするな

CAUTION / NOTATABLE DEVICE / ONLY USE FOR LDR MOUNTING
注意：回転機材
LDRへの使用のみ可

DO NOT PAINT / NO PUSH
塗装するな
押すな

CAUTION / SENSOR STORES INSIDE
注意：センサー内蔵

CAUTION / SWEEP AND ROTATE PROP
注意：支柱は揺動、旋回する

HOIST POINT
吊り上げ位置

吊り上げ位置

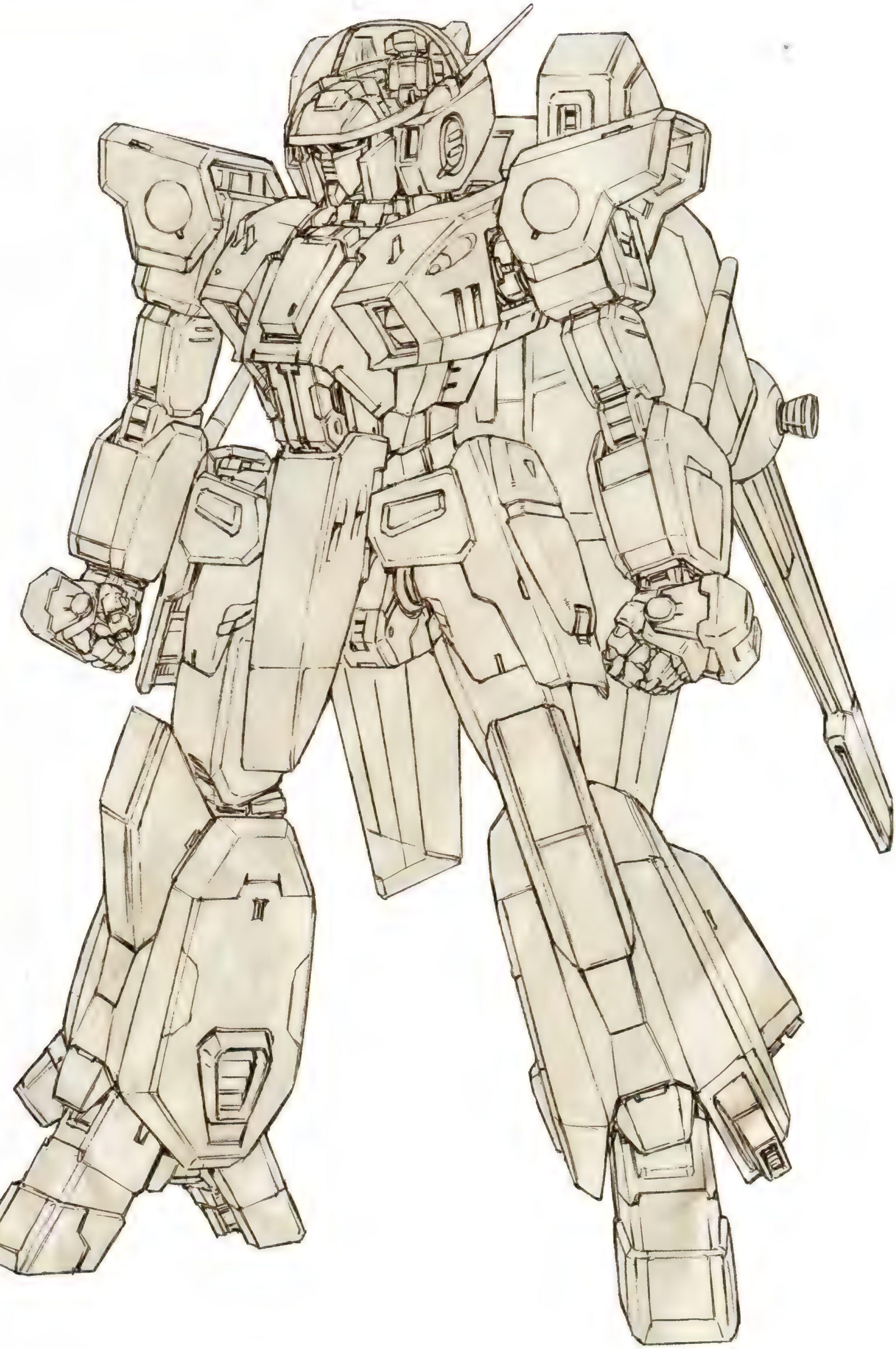
NO PUSH
押すな

RADAR TESTING ACCESS
レーダー試験接続部

RADAR ACCESS
レーダー機材接続位置

AGREE WITH BOTH LINES
両方の線をそろえること


■グラドス文字レタリング

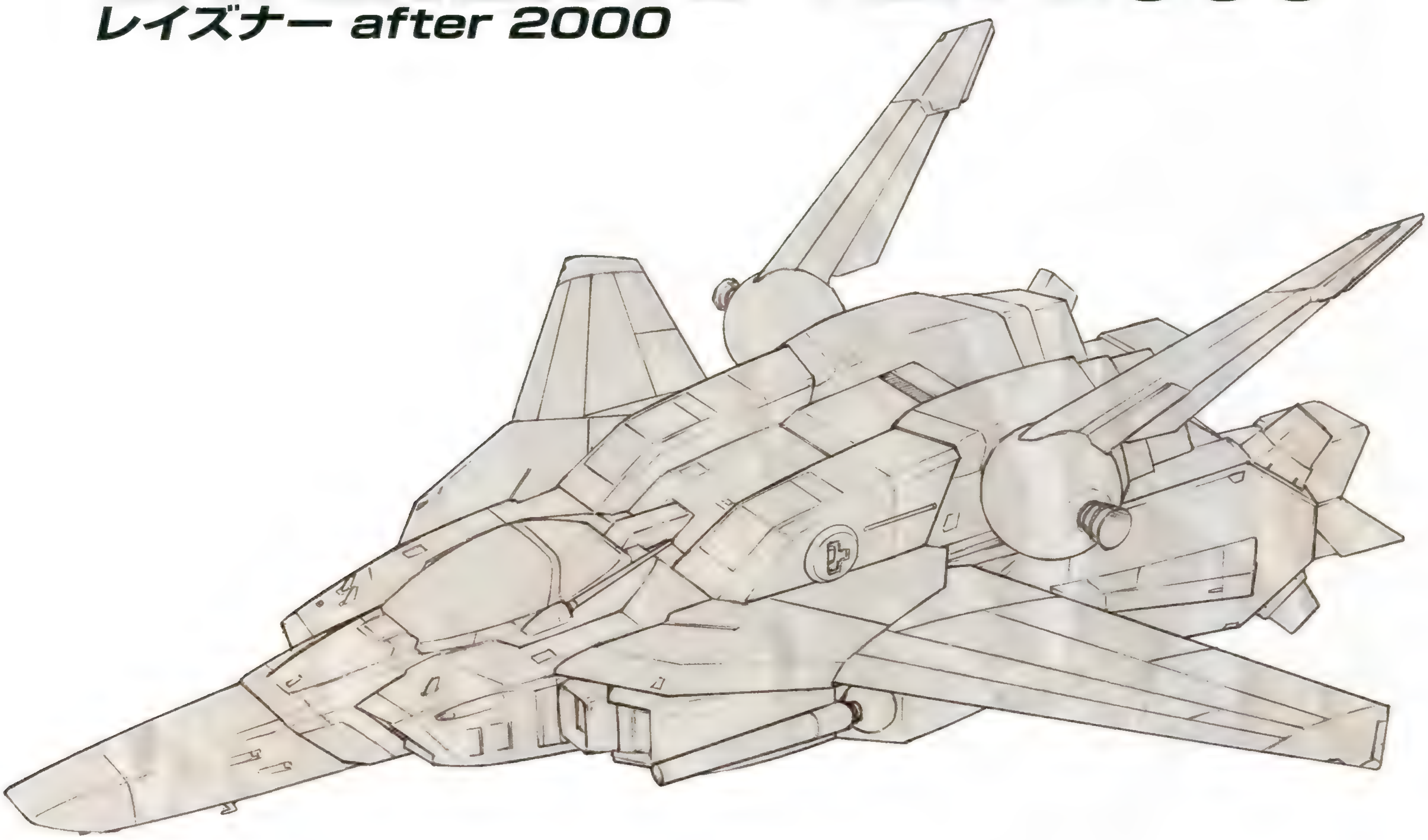


E·MF-LZ-00X-2 レイズナーMk-II

E·MF-LZ-00X-2 LAYZNER MK-II

LAYZNER AFTER 2000

レイズナー after 2000



レイズナーMK-II

2000年初頭、地球は"刻印"の発動によりグラドスの占領体制から脱し、地球の"自治"を取り戻した。だが、再び地球外へと探査の手を伸ばし、刻印の効果を確認し証明するまでの間は、誰も不意に訪れた平穏がこのまま永続するのか、確かなことはいえなかった。実際には、刻印の効果やその影響の及ぶ範囲について、現在でも詳細は解っておらず、いってみればいつまたグラドス本星からの艦隊が地球に押し寄せても不思議はない状態にある。

そのため、地球側としては備えを怠るわけにはいかず、現状で最も費用対効果の面で有望な戦略兵器であるところのSPTを、独自に改良・発展していくことが求められている。

こうした中、次世代の地球製SPT(EARTH Super Powered Tracer=E-SPT)として提唱されたのが、〈ニューレイズナー〉に代わる新しいレイズナー系SPT、〈レイズナーMk-II〉である。

ここに掲載したものはそのコンセプトデザインとされる画稿であり、SPTとして充分に成熟・確立していた戦術兵器と、地球における兵器の概念がさらなる融合を遂げたいくつもの興味深いポイントが見て取れる。

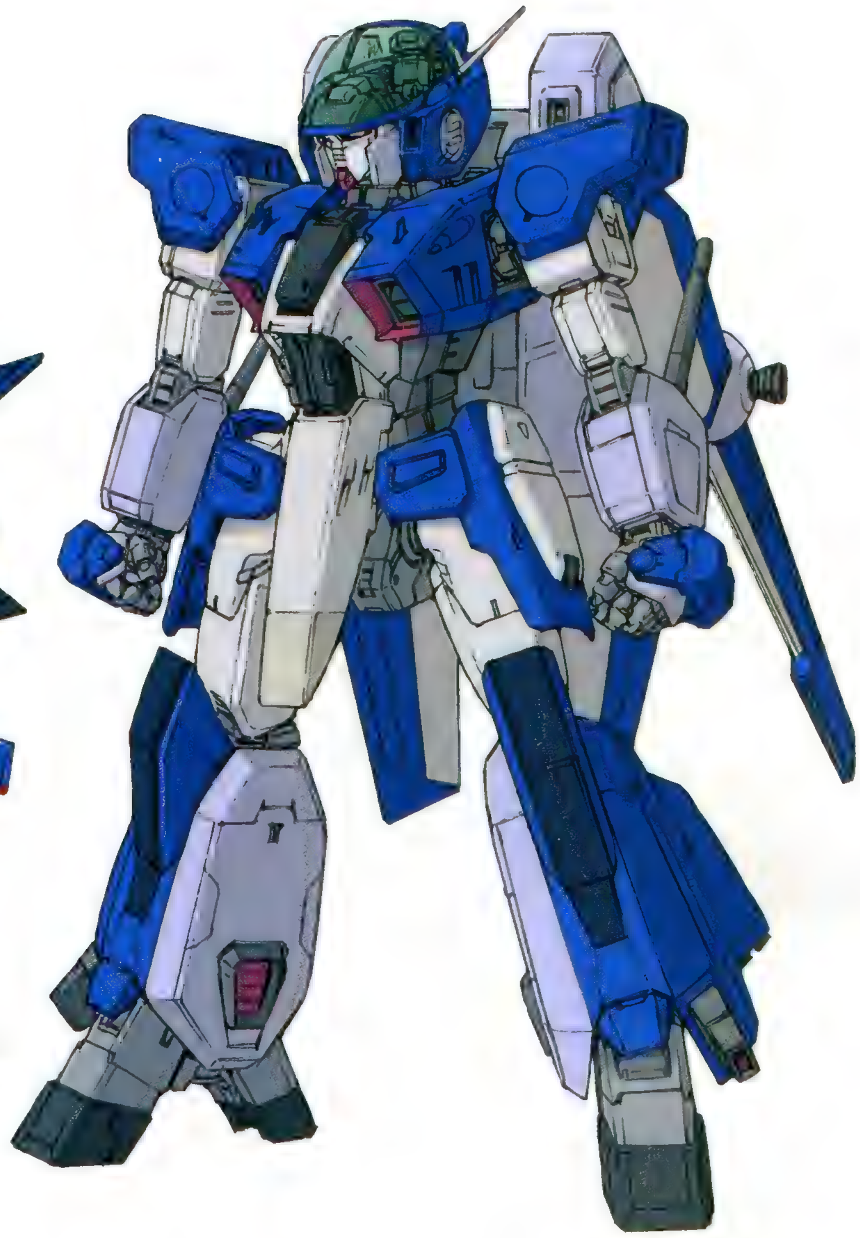
侵略用局地兵器として考えた場合の〈レイズナー〉は、地球に現れた時点ですでに完成の域に達していたといっても過言ではない。だが、地球上でグラドスの再侵攻に"備え"つつ、普段は治安維持などのために活動することを想定すると、大気圏内における巡航をより経済的に行う必要も出てくる。そこで考えられたのが、グラドスが地球に持ち込んだ数々のSPT群の中でも異彩を放つ機体、MF-SL-52C〈ソロムコ〉に着想を得た、可変機構を盛り込んだ〈ニューレイズナー〉再設計プランであった。

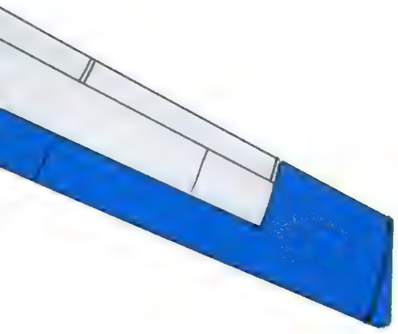
元来、飛行能力を有し、かつ整備された滑走路などを必要とせず活動できるSPTの長所は、キャリアなどの支援装備を充実させる構想とは別個に、単独での展開能力をさらに向上させることでも活かすことができるだろうと考えられたのだ。だが、MF(マルチフォーム)に分類される〈ソロムコ〉をベースとするには難があった。



■〈ニューレイズナー〉with BPP-04Aウィングユニット
BPP-04Aは〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉が一時運用したとされるウィングユニットである。詳細は不明だが地球の技術である動翼による揚力制御が副次的に採り入れられており、グラドス本星から反体制派が送り込んだパーツなどを応用して地球で設計し、実用化したものではないかと考えられる。航続距離を延伸して展開能力を向上させる目的で装備するユニットであるためか、〈レイズナー〉が多く目撃されたニューヨーク市付近での局地戦闘で使用する場面は見られなかった。







LAYZNER Mk-II

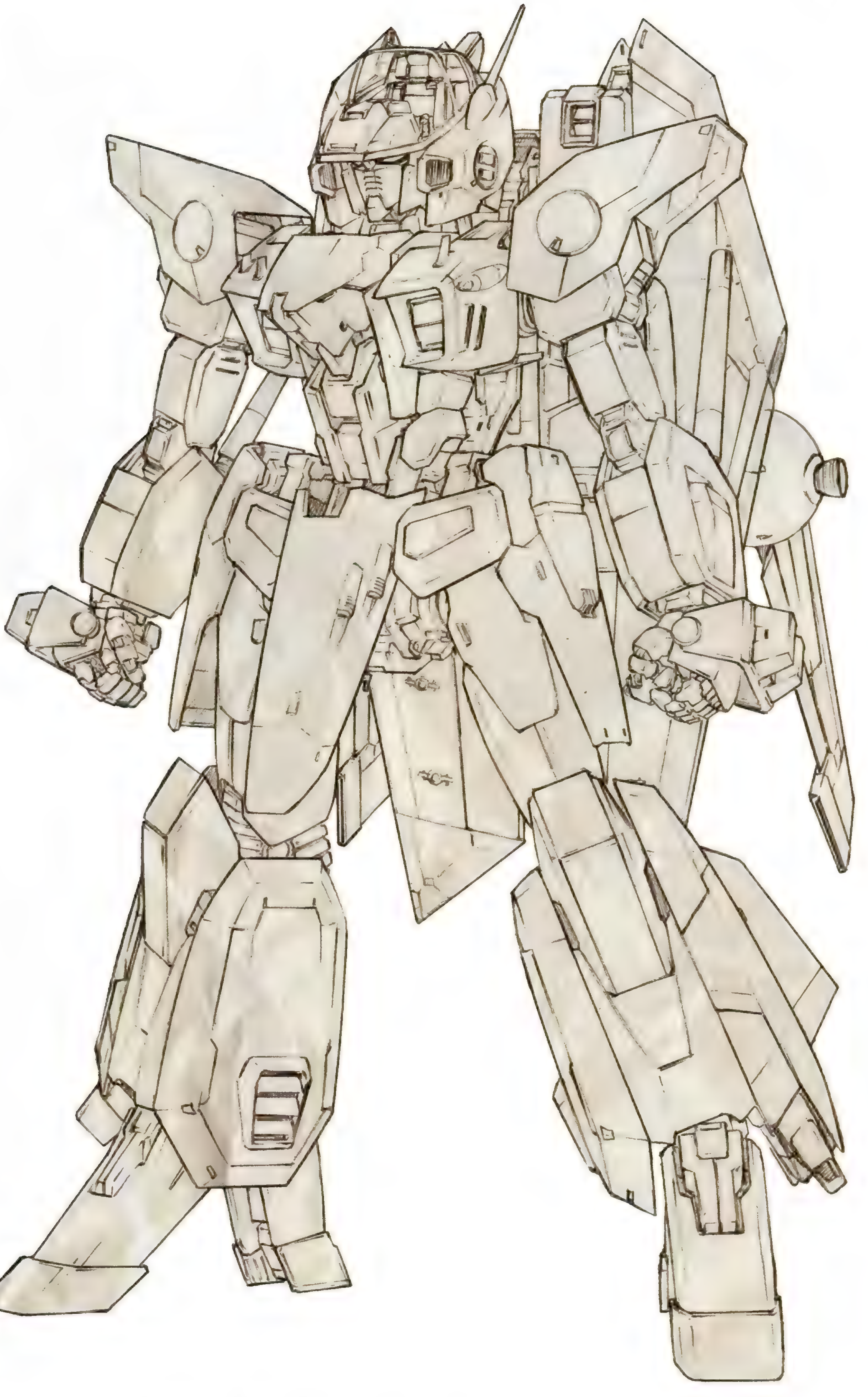
レイズナーMk-II
E・SPT-LZ-00X-B〈V-MAX強化型レイズナー〉完成と前後して、地球解放戦線機構(レジスタンスの一派)はSPTに長距離経済飛行能力を与える研究に着手した。計画の名残は〈レイズナーMk-II〉と呼ばれるこれらの機体概念図の形で残されている。

この機体は格闘戦用のナックルショットなどの武装を持たないほか、汎用性を与えるバックパックシステムなどが省略されていたからだ。そこで、占領下において物資も設備、さらには開発力も満足なものがなかった〈ニューレイズナー〉運用時には、上述のプランが検討されつつも、実際にはバックパックによって遠距離展開能力を持たせることでその代わりとする案が実行に移されたという。

このフライトユニット的な装備に関する情報はほとんど残っていないのは、〈ニューレイズナー〉の活動が集中していたニューヨーク市近辺で使用された例が皆無であったからだが、運用された事実のみは確認されていて、細部の写真などはないものの飛行中を捉えた不鮮明な写真が何枚か見つかっている。また、〈レイズナー〉及び〈ニューレイズナー〉双方において運用されたとする証言もあるが、確たる証拠はない。

なお、〈ニューレイズナー〉の可変型プランについて、一説によるとレジスタンスのリーダー的存在であったジョン・ギルバート博士らは、単なる航続力の延伸以上の役割をこの機体に与えようとしていたのではないかと指摘する技術者がいる。博士はグラドスへの反攻をプロジェクトのあくまでも通過点と認識しており、その後のあらゆる可能性について想定を巡らせていた。それによると、根本的な地球侵略行動の解決策として、グラドス本星への介入をも視野に入れていたらしい。要するに〈ニューレイズナー〉を含む地球製SPT部隊を相手方へ送り込み、その力でもって和平交渉の糸口を掴む、といったものだ。地球人がグラドスと同等の科学力、軍事力を持ち得ることを示せれば、状況を変えられると睨んだのであろう。あたかも太平洋戦争で日本がアメリカ本土への攻撃により相手国民の厭戦気分を蔓延させ、戦争の早期終結を目標としたのと似ている。

しかし、結局のところ状況がそこに至ることはなかった。〈レイズナーMk-II〉は永遠にペーパープランとしてこれらの概念図に痕跡を留めるのみである。



E・MF-LZ-00X-5 レイズナーMk-V

E-MF-LZ-00X-5 LAYZNER Mk-V



E•MF-LZ-00X-5 レイズナーMk-V 飛行形態

E-MF-LZ-00X-5 LAYZNER MK-V FLIGHT FORM

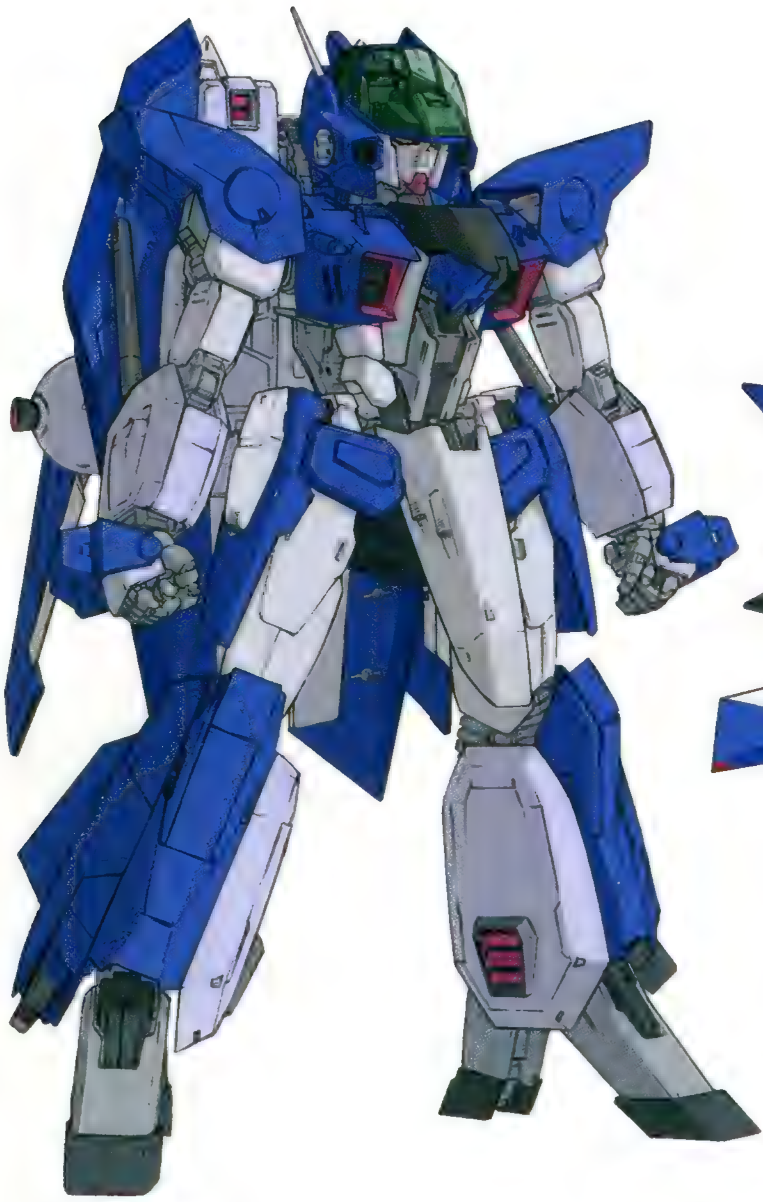
レイズナーMk-V

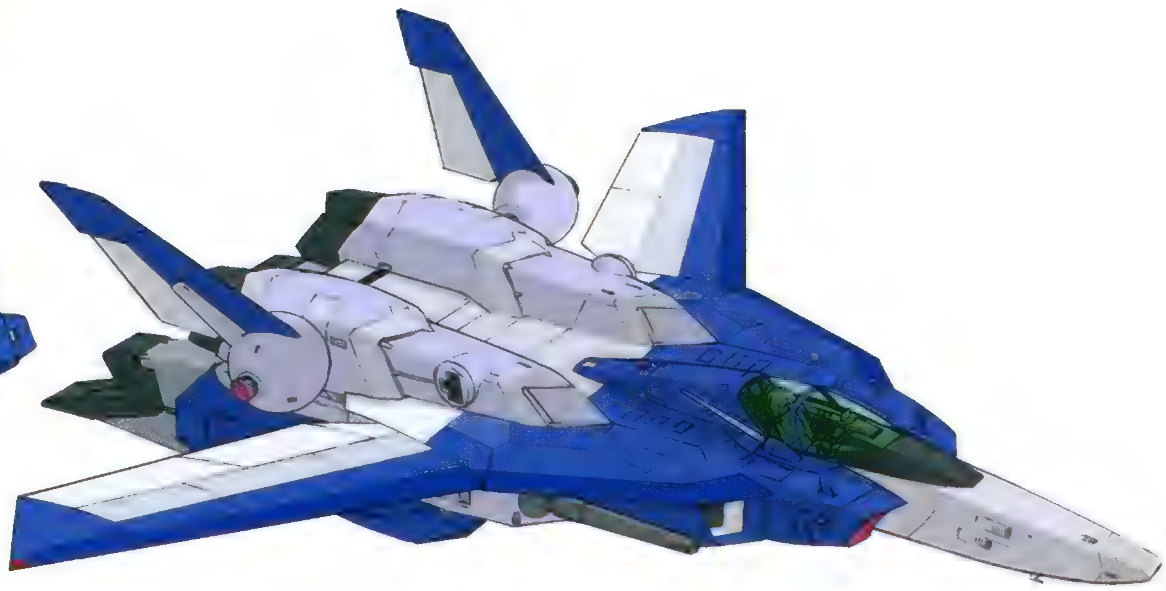
グラドスからの支配を脱した地球であったが、その後も混乱は続いた。前述のように、再び起こり得るグラドスの侵攻に備え、地球解放戦線機構を中心とした組織はSPTにMF（マルチフォーム）機の概念を取り込んだ地球型SPTの設計を本格化させた。

研究のため幾多の機体が試作されたが、主として技術的な問題が解決できずに量産化にこぎ着けることができなかった。グラドス側で当たり前のように使用されている電磁気力を利用した揚力制御（地球にもプラズマアクチュエータなどと呼ばれる同様の技術は存在する）について、物理的実装も制御理論も、地球人が完全に理解し、これを応用するにはまだまだ時間が必要だったからだ。その後10余年にわたり現れた試作機たちは、このグラドス式揚力制御に、地球で長く培われてきた動翼などの機械的動作による揚力制御を組み合わせるなど、様々な実験を繰り返したのであった。

地球の持つ工業力や機構の信頼性などを考慮すれば、従来の可動翼式とする方がはるかに開発効率は良い。だが、SPTの圧倒的な機動力はむろんグラドス式揚力制御あってこそ、といった面があることも確かで、どのようにそれを採り入れるか、どのような組み合わせが最適か、といった研究が長く行われたのだった。

やがて、ペーパープランに終わった〈レイズナーMk-II〉の構想から13年。満を持して開発されたトランスフォーメーション機構を持つSPTが、ここに実用化に至ろうとしている。〈レイズナーMk-II〉の後、何代もの試作機を経てついに量産仕様が策定された〈レイズナーMk-V〉が現在、配備に向けた準備の最終段階に入っている。





LAYZNER Mk-V

レイズナーMk-V
グラドス由来の電磁気力を利用した揚力制御、そして地球産の動翼による揚力制御を組み合わせて設計された〈レイズナーMk-V〉は、飛行特性も従来のSPTとかなり異なっているという。機械的な信頼性のほか、地球人パイロットが持つ飛行感覚へのフィットなどが考慮されたまったく新しい機体であり、地球で今後進化していくSPTのひとつの柱となる存在といえるだろう。

〈レイズナーMk-V〉は従来の〈レイズナー〉系列機やほかのSPTと同様、グラドス式の揚力制御機構が多く用いられているものの、一部には地球式の動翼などが採用されており、〈レイズナーMk-II〉の頃、すでに構想されていた地球ならではの設計がようやく実現したといえるのではないだろうか。外観からも、かつて地球で連綿と培われてきた航空機技術由来と思しき設計を端々に感じることができ、地球人技術者の"意地"を感じさせる。

〈レイズナーMk-V〉は前述のように可変機構を持つ機体ゆえ、本来であればMFに分類するのが正しいとする研究者もいるが、そもそもこうした分類そのものがグラドス由来のものであるため、固執する意味はなく、母体となった初代〈レイズナー〉の系統機ということで、そのままSPTと広く認識されているようだ。なお、グラドス占領下では彼我を区別するため、地球製のものをE・SPTとして型式が与えられていた時期もあるが、現在ではわざわざ「E」を冠さない場合も多く、またグラドス表記に準じた型式がすでに過去のものとなりつつあることも付記しておく。現在のところ〈レイズナーMk-V〉の正式な型式は不明である。なお、「SPT」という語自体にも一時期は排斥の動きがあったようであるが、あまりにも定着しすぎており、恐らくは今後も使用され続けるだろう。

未確認ではあるが、〈レイズナーMk-V〉にはV-MAXシステムが搭載されているという情報がある。このV-MAXシステムがどれほど以前のものと比べて性能向上しているかについては諸説あってはっきりしない。また量産機であるため〈レイズナーMk-V〉は複数の稼働が確認されているが、そのいずれにもV-MAXシステムが搭載されているかどうかについても不明である。



■新たに開発されている〈レイズナーMk-V〉や〈ドール〉後継機など、すべては〈レイズナー〉とこの〈ニューレイズナー〉から始まった。グラドス軍の地球侵攻とそれに伴う人口激減、文化の復興、SPTが与えた軍事ドクトリンの転換など、激動の時代は今も続いている。



RESOURSE

瀧川虚至 Kyoshi Takigawa
Mechanical illustrations; LAYZNER & NEW LAYZNER (include inner structure),
LAYZNER Mark-V, BAYBULL, BULDY
Illustrations; p099-101, p104-107

しらゆき Shirayuki
Mechanical illustrations; LAYZNER Mark-II, LAYZNER Variations
illustrations; p058 Pilot Suit

ハギハラシンイチ Shinichi Hagihara (number4 graphics)
CG Modeling finishing work

河津潔範 Kiyonori Kawatsu (number4 graphics)
CG Modelings; NEW LAYZNER

佐藤 始 Hajime Sato
SFX photo retouch
CG pre-modelings NEW LAYZNER

大脇千尋 Chihiro Owaki
Text; p093-107

二宮茂幸 Shigeyuki Ninomiya (NYASA)
Text; p034-056, p065-070
Technical Drawings; p040-043

大里 元 Gen Osato
CG pre-modelings LAYZNER
Caution & marking design
Mechanical captions; p046-057, p067

橋村 空 Kuu Hashimura
Text; p001, p009-033, p058-063, p072-091 & captions



MASTERFILE SPT LAYZNER

STAFF

Mechanical Illustrations

瀧川虚至	Kyoshi Takigawa
しらゆき	Shirayuki

Writers

大脇千尋	Chihiro Owaki
二宮茂幸	Shigeyuki Ninomiya(NYASA)
大里 元	Gen Osato
橋村 空	Kuu Hashimura

3D CG Modeling Works

ハギハラシンイチ	Shinichi Hagihara(number4 graphics)
河津潔範	Kiyonori Kawatsu(number4 graphics)
大里 元	Gen Osato
佐藤 始	Hajime Sato

Technical Drawing

二宮茂幸	Shigeyuki Ninomiya(NYASA)

Caution & Marking Design

大里 元	Gen Osato

Photographer

GA Graphic編集部	GA Graphic

SFX Works

ハギハラシンイチ	Shinichi Hagihara(number4 graphics)
GA Graphic編集部	GA Graphic

Cover & Design Works

ハギハラシンイチ	Shinichi Hagihara(number4 graphics)
河津潔範	Kiyonori Kawatsu(number4 graphics)
吉野英武	Emu Yoshino(number4 graphics)

Editors

佐藤 元	Hajime Sato
村上 元	Hajime Murakami
小芝龍馬	Ryoma Koshiba

Special Thanks

株式会社サンライズ	SUNRISE Inc.
井上幸一（サンライズ）	Koichi Inoue
塚田廷式（サンライズ）	Takanori Tsukada
渋谷 誠（サンライズ）	Makoto Shibuya
木内拓馬（サンライズ）	Takuma Kiuchi
宮村 航（サンライズ）	Wataru Miyamura
株式会社ウェーブ	WAVE CORPORATION

Cooperator

※考証協力

榊 征人	Masahito Sakaki

※図版彩色協力

小芝龍馬	Ryoma Koshiba

※写真背景素材提供

sammy	sammy
佐藤 充	Mitsuru Sato
長瀬奈津子	Natsuko Nagase

※製作補佐

奥村英明	Hideaki Okumura

■マスターファイル SPTレイズナー

2015年9月15日　初版発行
編集　ホビー編集部
製作　GA Graphic
発行人　小川 淳
印刷　共立印刷株式会社
発行　SBクリエイティブ株式会社
〒106-0032 東京都港区六本木2-4-5
営業部　TEL 03-5549-1201

© サンライズ
© SB Creative Corp.

ISBN 978-4-7973-8002-6
Printed in Japan

http://masterfileblog.jp/
本書をお読み頂いた感想、ご意見を上記URLからお寄せください。

本書の無断複製・複写・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されています。

※本書「マスターファイル SPTレイズナー」は、「公式設定」ではなく、「蒼き流星SPTレイズナー」作品中に登場するSPTについての歴史・技術研究書であり、作中のエピソード後（約15年後）に刊行された書籍、という想定に基づいて執筆されています。したがって作中及び関連作品等と異なる事実解釈が含まれる場合がありますがご了承ください。

SB Creative　GA Graphic　4 www.n4g.jp

マスターファイル SPTレイズナー

MASTER FILE SPT LAYZNER



刻印発動より"15年"目の刊行!

蒼き流星となって

グラドス占領下の地球において反攻の象徴となったレイズナー及びニューレイズナーに関する調査報告!
開発経緯やメカニズムを徹底解説する一冊

ISBN978-4-7973-8002-6
C0076 ¥2750E

9784797380026

定価 本体2,750円 +税

1920076027505

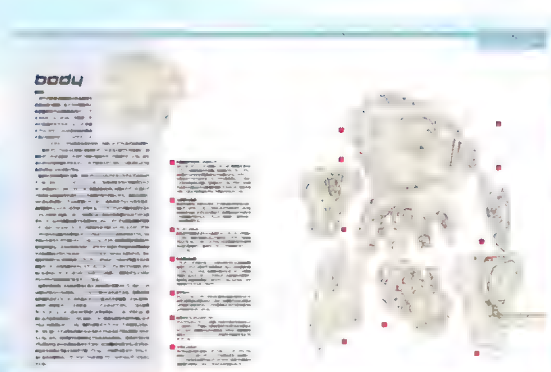
©サンライズ

SB Creative

MASTER FILE
SPT LAYZNER

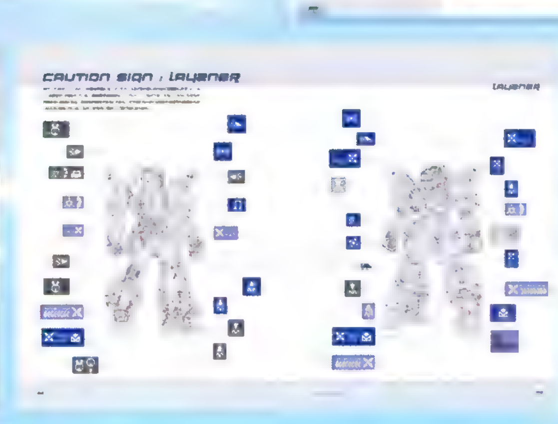


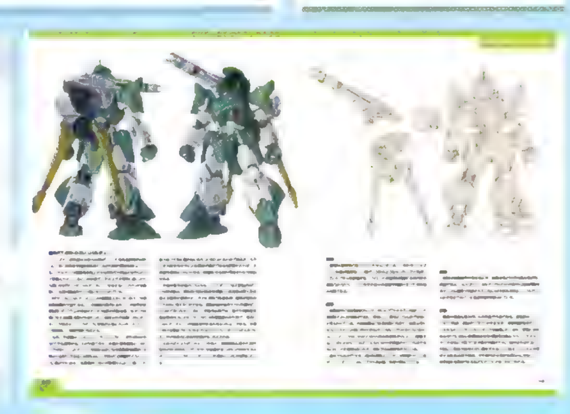
異星人のテクノロジーが産んだ未知の兵器SPT〈レイズナー〉。
地球人類はこれを解析して新たな機体〈ニューレイズナー〉を造り上げた。
“蒼き流星”はいかにして伝説となったのか——!?











マスターファイル SPTレイズナー

MASTER FILE SPT LAYZNER



ISBN978-4-7973-8002-6
C0076 ¥2750E
9784797380026
定価 本体2,750円 +税
1920076027505

©サンライズ

SB Creative

MASTER FILE
SPT LAYZNER



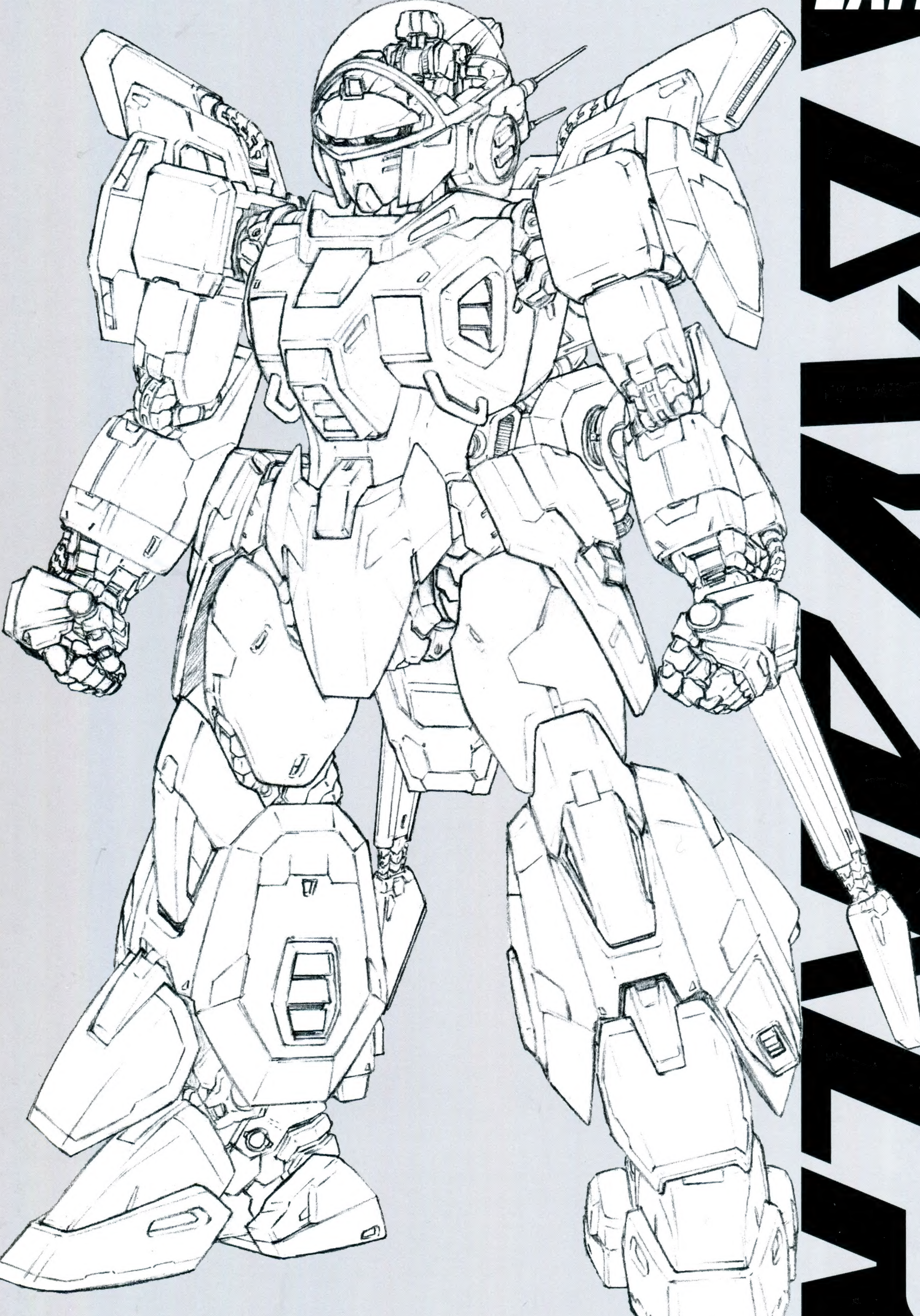
MASTER FILE SPT LAYZNER

マスターファイル　SPTレイズナー

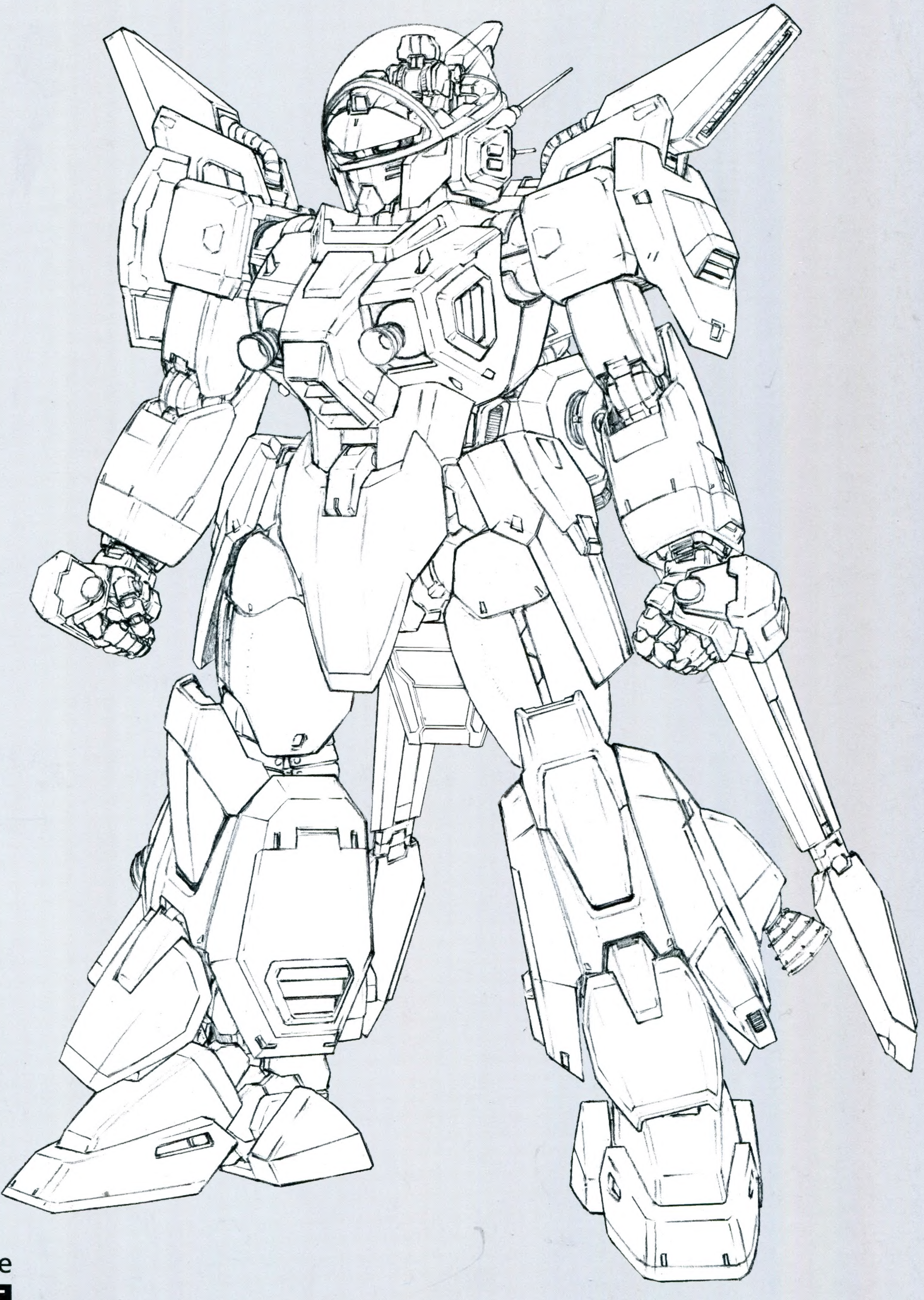
SB Creative

マスターファイル SPT レイズナー

MASTER FILE SPT LAYZNER



MASTER FILE SPT LAYZNER



©サンライズ

SB Creative

MASTER FILE SPT LAYZNER

マスターファイル SPT レイズナー

SB Creative